

旅は道連れ、世は情け

女性ライフサイクル研究所、二十周年を迎える

前夜 ①

村本 邦子

立命館大学・女性ライフサイクル研究所

生まれてくるときも、死ぬときも、人は一人だ。子どもの頃から、そう自分に言い聞かせていたことを記憶している。どうしてそんなことを考えていたのか。決して孤立していたわけではなかったし、いつも人には恵まれてきたと思うけれど、振り返れば、アンバランスに早熟な女の子が、一所懸命、自分の人生を自分で背負う覚悟をしていたのだと思う。

この命題に若干の変更が加えられたのは、女たちのつながりのなかで子どもを産んだときだ。あの世とこの世をつなぐ道がどれほど暖かく慈愛に満ちたものかを知って、「生まれてくるときも、死ぬときも、人は一人だけれど、私たちは決してひとりぼっちじゃない」と安心した。生きることに緊張しなくなった。リラックスして人生に向かえるようになったと言えるだろうか。

人生は旅のようなものだと思っている。終点はもちろん、個としての生命が終わるところなのだけど、それがどんなところであって欲しいというようなものは、私にはない。どのようなところに行き着いたとしても、自分の歩んできた旅路こそが重要であり、終点において振り返ることができるとしたら(死に方によっては、できないかもしれないけれど)、「これが自分の旅だったんだなあ」と、格別の愛着を持って、しみじみ思い返せるものであって欲しい。

今、ちょうど旅の折り返し地点に近いところまで来て(私は自分の人生を百年と置いている)、来し方を振り返り、眺めてみるならば、いまだにとても不思議なことだと思っていたのが、女性ライフサイクル研究所という組織を立ち上げ、二十年も経営してきたという事実だ。これは、そもそもの自分の人生シナリオにはなかった。一人で開業するようなことは十

分あり得たけれど、組織を作って誰かと一緒に仕事を展開していくなどということは想像だにできなかった。

子どもの頃から、人と一緒に何かをやることは多かった。どういうわけか、いつも私の周囲には人が集まってくるので、たとえば、小学校の頃なら、休日、女の子たちで集まって、お料理を作って一緒に食べるとか、女の子と男の子が一緒に集まって、バトミントンをするとかいった会を作ったり、中学の頃なら、休日、近所の山に登るとか、試験前の勉強会をやったりとか、オカルト研究会を作って活動していたこともあった。それなりに、リーダーシップはあったのだと思う。人を集めて、楽しいことを一緒にするのは得意だった。

けれど、真剣に何かに取り組まなければならないとき、人と一緒にやるのは、苦手だったような気がする。たとえば、大学院時代、研究会というのが嫌だった。マイケル・バリントの『治療論からみた退行～基底欠損の精神分析』(金剛出版)なんて本を読んでいたのだけど、「いったいなぜ人と一緒に本を読まなければならないのか。自分でとことん納得いくようにじっくり読む方がいいに決まってる!」と反発していた。自分のペースを保てることが絶対条件だったし、いい加減な人たちに振り回されるのはごめんだと思っていた(これは、この研究会のことを言っているのではない。何をするにしても一般的に)。

加えて、組織というものに対する根本的不信のようなものがあったように思う。これがいつの頃から、どのような形で芽生えていったのか、定かではない。子ども時代は無関心で、アカデミックに入ってから形成されたものだったかもしれない。あ

るいは、思春期特有の辛辣な大人社会への批判に由来するものだったかもしれない。巨大なシステムはいとも簡単に個を殺すし、そこに呑み込まれてしまうと、何か大切なものを見失ってしまうと感じていた。「命の命らしさ」とでも言おうか。

要するに、それは、警戒の手を緩めてはいけない相手だった。決して、自分が人生の裏街道を歩いてきたとも思わないけれど(むしろ、外からは逆に見られると思う)、世の中に表舞台と裏舞台があるとすれば、表舞台に立って大切なものを失うより、裏舞台で何か大切なものを探し続けたいと考えていた。思えば、子どもの頃、こよなく愛していたのはアルセーヌ・ルパンだった。

その昔、「組織と女性」(1996、『人間性心理学研究』14巻2号、162-170)というペーパーを書くために、女性たちのインタビューを行ったことがある。そのときに印象的だったのは、若い女性が就職するとき、組織に対する関わり方は、父親との関係を反映するのだということだった(ちなみに、私の父は組織と無縁な自由人だった)。もうひとつ、彼女たちは、「組織イコール男社会」と口を揃えて言ったのだ。大沢真理さんよれば(1993、『企業中心社会を超えて』時事通信社)、現代日本社会の特徴は、たんなる企業中心社会ではなく、家父長制を基盤とする企業中心社会なのだという。ここで、「家父長制」とは、女が「内助・補助・底辺」であり、男が「主人・基幹・トップ」であるというように、女と男が、職場、家庭、地域で直接・間接に結んでいる関係、すなわちジェンダー関係を示す。

子どもを産んでジェンダーの視点を得るまで、私は、女性問題に関心を持ったことがなかった。女であることにあまりに満足していたため(女で損なのはヒッチハイクができないことだけだと思っていたし、結婚して子どももできてからだけど、必要に迫られて、一度だけヒッチハイクもやってしまったので、今ではこれも消滅した)、深く考えたことはなかったが、世の中の表舞台とは、半分だけの価値観が支配する欠けたところで、そこに自分を位置づけることは、自分を十分に生かせられないという予感を持っていたのだろう。アルセーヌ・ルパンとは、男性的であると同時に女性的でもあり、憧れの対象ではなく、同一化の対象だった。

そんな私が、大阪と京都にオフィスを構え、今や、総勢十三人の女性からなる組織を二十年も維持してきたというのは、

まったくもって人生の不思議である。今、大学で教えていることにさほど不思議はないが、立命館大学というマンモス組織のなかで、(今のところという限定つきだが)意外にもおもしろがりながら、組織の役割を果たして働いているという不思議も、この延長線上にあるだろう。「どうやったら、二十年間もうまくやってこれたんですか?」と尋ねられると、いつも答えに窮してしまう。たいして何も考えず、まったくの素人が、なりゆきでスタートさせた事業である。身近にモデルやノウハウがあったわけでもない。たしか、当時、「社会的起業」という言葉が出始めていたが、取り立てて、起業という意識を持っていたわけでもなかった。ただ、現在あるものが、要所要所で立ち止まり、よく考え、よく選択してきた結果であることは間違いない。

このあたりで一度、二十年を振り返ってみるのもいいかもしれない。事業として、本当にうまくやってきたのかどうかはわからない。ただ、研究所が私たちスタッフにとって良い職場であり続けてきたこと、そして、それなりに長く社会に貢献してきたことには胸を張れると思う。そう考えれば、たしかに、まんざらでもないのかもしれない。これから、この連載で何を書いていくことになるのか、自分自身もまだよくわかっていない。今のところ、こんな私と女性ライフサイクル研究所の変遷をたどることで、武骨ながら叩き上げの組織論のようなものを書けるのかもしれないなどと思っている。経営学的に言って、それなりに根拠があることが浮き上がってくるのかもしれないし、逆に、偶然と幸運の連続だったということが見えてくるのかもしれない。少なくとも、今回、ここまで書いてわかったことは、それがジェンダー論を絡ませたものになるだろうということだ。

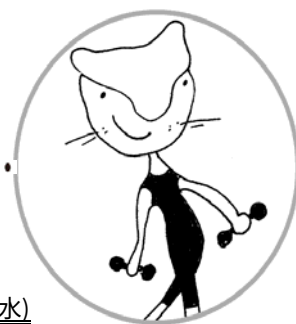
ある意味で、これは、二十年を振り返る旅日記のようなものだ。





講座＆グループのご案内

講座・グループは全て予約制です。大阪本社にお電話をいただくか、メールでお問い合わせ、お申し込みくださいませ。



◆子育てのコツを学ぶママのためのやさしい心理学講座

京都支所：毎月第2水曜、10:30～12:00

大阪本社：毎月第2水曜、14:00～15:30

料金：1回 1,000円 担当：津村 薫

次回は6月9日(水)

◆女性心理学フリートーク（大阪本社）

『母は娘がわからない』を読む：毎月第4月曜、10:30～12:00

料金：1回 1,000円 担当：津村 薫、下地久美子 次回は6月28日(月)

◆女性心理学フリートーク（京都支所）

※日時変更しています。ご注意ください。

『心的外傷と回復』を読む：毎月第3火曜、10:00～11:30

料金：1回 1,000円 担当：渡邊佳代、村本邦子 次回は6月15日(火)

◆2010年度キッズ・サポーター・スキルアップ講座（大阪・京都）

保護者対応、ストレス対処、困った場面での対応、聴く技術、援助者の思考・行動パターンを見直すなどをテーマとした子育て支援者対象スキルアップ講座。受講料：10,000円（2日間8講・前納制・教材費込）

会場：【京都】8月5日(木)・6日(金) 9:30～16:50 「女性ライフサイクル研究所京都支所」

【大阪】8月19日(木)・20日(金) 9:30～16:50 「エル・おおさが(大阪府立労働センター)」

★★★ 女性ライフサイクル研究所20周年記念イベント ★★★

女性ライフサイクル研究所 20年の歩みとこれから

～人生の楽しみ、事業の歓び～

日時：2010年10月31日(日) 13時～

場所：クレオ大阪中央・音楽ホール(地下鉄谷町線四天王寺夕陽丘下車/徒歩5分)

参加費：予約 500円/当日 600円 (電話・メール・ファックスでお申し込みください。)

お支払いは当日、受付にて)

内容：【第一部】13:00-15:30

◆ 20年の活動報告

◆ 鼎談 村本 邦子 (女性ライフサイクル研究所所長/立命館大学教授)

ゲスト：多田 千尋さん(芸術教育研究所所長/東京こども美術館館長)

乳幼児教育、子ども文化、高齢者福祉、世代間交流について研究・実践。早稲田大学で「福祉文化論」を教える。「日本の社会起業家30人」の一人に選出。

上田 理恵子さん(株式会社マザーネット代表)

ワーキングマザーが、仕事と家事・子育ての両立をしていくうえでの問題点を解決し「仕事を続けてきてよかった」と実感できる社会を創造することを理念とし、起業。

【第二部】16:00-16:40

◆ ピアノ・コンサート 演奏：パールノート(長川歩美+村本邦子)

曲目：♪ ショパン「プレリュード」から

♪ ラフマニノフ前奏曲「鐘」

♪ ガーシュイン「プレリュード」ほか



Tel : 06-6354-8014

ホームページ : <http://www.flcflc.com>

E-mail : jyoseilife@flcflc.com



〔援助者向け〕〔女性・家族〕〔子育て～乳幼児から思春期まで〕〔ジェンダー・セクシャルハラスメント・性〕〔コミュニケーション・生き方・ストレス〕などをテーマに、講師派遣をいたしております。何なりと、お問い合わせください。

旅は道連れ、世は情け

～女性ライフサイクル研究所、二十周年を迎える

前夜②～女であること

村本 邦子

前回、女であることにあまりに満足していたため、女性問題に関心を持ったことがなかったと書いた。それが、「女性の視点で女性のサポートを！」と、女性ライフサイクル研究所を立ち上げることになるのだから、やはり、スタートラインは、女であることへの気づきであったと思う。今回は、女であることについて書いてみよう。

個人的に私を知っている人は笑うだろうが、私はそれまで、自分を女らしいと信じていた。女の子らしいピンクのリボンやヒラヒラしたワンピースが大好きだったし、女の子がやりそうな手作りも好きだった。ひと冬で十枚もセーターを編んだり、自分でデザインしたセーターの写真を撮りためて、出版社に送ろうと目論んだりもした。私にとって、「女らしさ」とは完全なもの

であり、そこから一般に言われる女の子の属性を差し引いたものが「男らしさ」だと考えていたような気がする。だから、女が弱く馬鹿なものだとは知らなかった。研究所を始めて以後の話だが、女であることが自己否定と結びついて苦しんできたというフェミニストから、「この社会で自己肯定している女と、自己否定している女とでは、どちらが病的と言えるのか？」という問いを突き付けられて唖ってしまったことがある。たしかに、ある意味で、私はこの社会から遊離していたし、ある側面を否認して見ないようにしてきたのだろう。

そんな私が女であることの意味を理解するようになったきっかけは、アドリエンヌ・リッチの『女から生まれる』（晶文社）との出会いである。男性中心の父権社会のなかで、どんなふうに

お産が医療に組み込まれ、女たちの力が奪われていったのか、制度化された母性によって、いかに女たちの自由が奪われ、母性が理想化されると同時に闇を抱えることになったのか、緻密に歴史をたどりながらも、さすがに詩人らしく、実に生き生きとリアルに描かれていた。眼からウロコが落ちるとはまさにこのことだろう。一挙に視野がクリアになって、それまで断片的に不思議に思っていた謎が解けたように感じたものだ。

ちょうど、私は、息子を自宅で産んだところだった。もともと、お産の仕方について、強い主張があったわけではない。たまたま、母と妹が自宅出産し、「楽でいいよ」と勧めてくれたので、「それなら」ということになっただけである。私は4人きょうだいの長女だが、母は、私を含む3人の娘を病院で産んだ後、「もう4回目慣れてるし、どうせ医者は何もしてくれないから」と、末の弟を自宅で産んだ。当時、僅かではあったが、まだ自宅出産を選ぶ人もあって、お産婆さんなる人がいた。「家で産む方がずっと楽だわ」というのが母の感想だった。そして、6つ年下の妹が一足早く子どもを産んだ時、たまたま弟を取り上げてくれたお産婆さんが現役でいたものだから、妹も自宅で子どもを産んだ。さすがにその頃には、「自宅で取り上げるのは実に十年ぶり」ということだったが。

そんなわけで、自宅出産を経験し、その後、子育て仲間とお産の体験を語り合ううちに、いかに自分が恵まれたお産をしたかが、ひしひしと感じられるようになった。陣痛促進剤が盛んに使われていた時代である。「お産のことは2度と思い出したくないし、2度と産みたくな

い」という声もあった。自宅出産では、日常的なかにお産があり、お産婆さんや母や妹などお産を体験している身近な先輩女性たちの経験と知恵、まだ体験していない妹や姪など後輩女性たちの応援など、女たちの暖かいつながりのなかで、しかし、産まされるのではなく、産むのは自分で、最終的には、男も女も心を合わせ生まれてくる命の力を信じ、あとは天命を待つしかないということを受け入れ、腹を括るプロセスが必要とされた。これは、母となるためのイニシエーション（通過儀礼）であり、女としてのエンパワメントであり、それを経たからこそ子どもとの幸福な出会いがあった。

当時、私は、精神科外来での非常勤カウンセラーをやっていた。すっかり仕事をやめてしまおうかという思いもあったのだけど、夫が「家の中で家事や子育てをする大変さと、外で働く大変さはきっと種類の違うものだから、完全に役割分担するよりも、少しずつでも分かち合う方が、互いの大変さを理解できて良いのではないか」と言うので、なるほどと感心して、細々ながら仕事を続けることにした。もともと、私は、経済的自立や社会的地位のようなものにこだわりがなかった。大学生の頃から自活していたので、必要があれば食べていける程度に稼げるだろうこと、収入に合わせた生活をする自信もあった。とは言え、今はなかなか厳しい時代になったと思うし、お金についての考え方は事業を始めて変わっていくので、これについてはまたいずれ改めて取り上げるつもりである。

私はもともと子どもに興味があって、おもに子どもの臨床をやっており、勤めていたクリニックは思春期外来が中心だった。やるからに

は全力投球するタイプである。心理テストでは相当数のケースに当たり、ロールシャッハだけでも 3 年で数百例はやった。当時は、「登校拒否」と呼ばれていた思春期ケースのうち、あまりしゃべらないタイプの子どもたちが私のところに回ってきたので、とにかくたくさんケースをこなすなかで、時代精神と臨床という視点を持つようになった。この時期に考えていたこと、つまり、「何不自由なく育てたのになぜ？」と親たちが嘆く子どもの問題の背後にある与えられすぎた子ども時代の弊害、そこには、戦後のまだ貧しかった時代には、白ご飯とか新しい文房具とかが幸せの象徴であり、子どもの幸せを願う親心が子どもの欲求とずれてしまっているという世代間のギャップが見え隠れしていた。

あまり大きな声では言えないが、(子ども時代をのぞけば、) 私の人生の中で一番暇だったのが、子育て中心のこの時期だった。プライベートで子育て仲間が増えていったので、毎週、自宅に仲間を招いて、一緒に子どもを遊ばせながら、ワイワイガヤガヤやるような会を始めた。一緒に編み物をする会とか、子どもの発達を学ぶ会など、思いつきで設定して、今の生活からはもはや想像しにくいけど、お客さんがいつでも来れるほどに家が片づいていて、お昼、大きなお鍋でカレーやシチューを作っ
てふるまうなどしていた(本来、私はそういうことが好きなのだ)。

また、もともと勉強好きなので、公民館の託児付き講座に足を運んだり、たまたま引越して駐車場が当たったからと教習所に通って免許を取ったり、赤ちゃん連れでも受け入れてくれる英会話レッスンを受けに行ったりと、

暇にまかせ(じっとしていれない性格だからとも言えるかもしれない)、この時とばかり、やり損ねていたことをあれこれやった。何しろ学生時代は勉強とアルバイトばかりやっていたので(いや、考えてみると、お茶やお花や和裁などお稽古ごとくもやってたな…)、ふつうの人たちが学生時代にやることを子育て中にしていたのかもしれない。いずれにしても、大きな副産物があった。あちこち子連れで出回っていたので、英会話の先生たちが、まだ 1 歳にもならない息子を、「かわいい、かわいい」と引っ張りだこでかわいがってくれたり、子育て仲間とわいわいがやがや集まって話し込んでいたのは、振り返って意味づければ、間違いなく、自分自身の子育て支援になっていたはずだ。

百貨店で開かれる子育てサロンにも出入りしたりするようになった。このあたりの子育て仲間の拡がり方については、メセナなど当時の時代の動きを反映しているので、次回、取り上げてみたいと思っている。いずれにしても、こうしてごくふつうの女たちとつながるなかで、現代の子育て事情がよく見えるようになった。当時の日本社会は、まだ認識していなかったけれど、核家族での子育て、母性神話、子育て体験のなさや不安、個が確立してしまった女性にとって、母役割、妻役割だけでは生きていけるはずがないのに、それをしようとするものだから、ストレスがたまって、子どもの操作や支配になりかねないことなど、いろんなことが見えるようになった。そんな状況のなかで、リッチと出会ったのである。個人的なことは政治的なこと。

それから 2 人目を妊娠し、出産の 3 カ月前にクリニックのクビを言い渡された。考えてみ

れば、ひどい話である。同僚たちもとても気の毒がってくれて、「もう一度話をしてみても。自分からも頼んでみる」などと言ってくれたり、「訴えたらいいのに」と怒ってくれたりする人もいた。ただ、自分にも非があると思ったし、そこまでして是非ともそこで働きたいというほどのコミットメントが欠けていたのだと思う。本当のところ、そのクリニックで働くのは楽しかった。開設時に雇われたので、創り上げていく面白さがあつたし、かなり癖のある院長ではあつたけれど、私の働きぶりを評価してくれて、好きにやらせてもらっていた。箱庭が欲しいと言えば買ってくれたし、給料もどんどん上げてもらったような気がする。アットホームな雰囲気、手のあいた者がお昼を作って皆で食べ（作るのは女たちだったが、院長もよくお手製の漬物を作ってくれたものだ）、息子がどんなにかわいいかという私の自慢話を、からかいながらも皆よく聞いてくれた。

私の非とは、1人目の出産のときには、3カ月の産休をもらったので、2回目も同じように行くとばかり思い込んでいて、その時のクリニックの外的状況も影響しているが、十分なコミュニケーションをとる努力を怠ったということである。その時は、急にクビを言い渡されて腹が立ったので、売り言葉に買い言葉みたいなこともあり、とにかくやめることになった。人に経過を説明するうえで、詳しく説明するのが面倒なので、「クビになった」とは言ってきたが、経営者の立場を考えれば理解できることなので、自分の中に被害感が残っていない。それに、ここでクビにならなければ、間違いなく女性ライフサイクル研究所が誕生することはなかったはずである。

急に職を失ってどうしようかなと考えたときに、ふと思い浮かんだのが、家でやっている子育てグループをもう少し公的な形でやるのはどうだろうかということだった。その頃には、クリニックで見てきた子どもたちの抱える時代的な課題と、子育て仲間たちから見えてくる母親たちの抱える時代的な課題がはっきりとつながって見えていたので、自分で勝手に「予防臨床心理学」という命名をして、子どもが問題を抱えてから関わるよりも、もっと一般の母子への支援をすることの方が話は早いのではないかと思うようになっていた。おそらく、当時、関わっていた子育てサロンのイメージもあつたし、クリニックでの経験から開業臨床のイメージも形成されつつあつたのだと思う。とにかく、子育てしながら自分のペースで働くには、ワンルームでも借りて自分でやるのが一番便利なのではないかと思ったのである。子育てグループなら自分も子連れでできるし、クリニックに勤めていた週1くらいは、子どもを夫に見てもらって個人のカウンセリングをするのも良かろうと思った。

こんな経過から、研究所をスタートさせることになったのは、娘が3カ月の時である。今回、女であることを取り上げたのは、それが、「心」や「個」への関心から、外から人を規定するシステムや社会という次元へと自分の眼が開かれることになった重要なテーマだからである。そうは言っても、研究所をスタートさせた頃の私の女であることの理解は、まだまだ浅薄なものだった。むしろ、その後、耳を傾けることになる女たちの物語に圧倒される中で、それまで自分には見えていなかったものが見えるようになっていった。

旅は道連れ、世は情け

～女性ライフサイクル研究所、二十周年を迎える

前夜③～メセナの時代に

村本 邦子

前夜、世はバブルの只中にあった。息子が生まれた 1988 年、京都国際会館で日仏文化サミットが開かれ、「企業の文化的責任」が熱く論じられ、以後、メセナの語が広まった。メセナとはローマ時代に遡る文化擁護を指すが、今では広く企業の社会貢献の意味を含む。当時はバブリーで品のないメセナも目立っていたが、企業が文化に貢献しようとするようになるには、ある種の文化的成熟が必要だろう。逆の言い方をするなら、少なくとも市民が文化的貢献をしようとする企業を支持する社会になるということだ。世の中に疎い私が当時そんなことを深く認識していたわけではないが、自覚されぬまま、嫌が応にも人は時代の影響を受けるものだ。

当時、本を通じて、たまたま、マザーリング研究所を主宰するたけながかずこさんとお会った。今野由梨さん(はや 1969 年に株式会社ダイヤル・サービスを設立、日本初の電話相談「赤ちゃん 110 番」を開設したという著名

な女性企業家である)の影響を受け、たけながさんは、「育児支援は母親支援」、「仕事・家庭・ボランティアからなる“マザーリング3つの輪”の生き方」を提案され、複数の企業と提携して、子育て中の女性を社会につなげる活動をされていた。オフィスは東京にあったが、月 1 回、尼崎にある「つかしん」のベビーコーナーでマタニティサロンをやっているというので、暇を持て余していた私は大きなお腹を抱えて通い始めた。そこで知り合った人たちとは、ちょうど同じ時期に出産することになり、その後も子育て仲間としていろいろなことを語り合うことになった。息子出産後は車の免許も取ったので、運転の練習を兼ねて、娘が生まれる直前まで「つかしん」に足を運んでいた。

同じ時期、ネピアをスポンサーに、たけながさんが「ネピア赤ちゃん学」というのをやっていたので、私も 3 期生として応募した(何しろ暇だった)。これは、1985 年に始まり、1 期生から順番に、「マイお産ストーリー」「赤ちゃん 100 日戦記」「あんしん母乳育児」…と続い

て、93年第7期「ゆとりある育児」まで、毎年、テーマに添った作文を応募して選ばれたママたちが、1年間、東京と大阪で「赤ちゃん学」研究生になるというものである。たとえば、3期生の私だったら、母乳体験記を書いて(私の悩みは母乳の出すぎだった。妊娠中、12キロも体重が増えたせいなのか、母乳が出すぎて困ったものだ。十分双子が育つだろう。昔は母乳が足りない赤ちゃんにあげる「もらい乳」というしくみがあったそう。たぶん、子どもが私有化されている現代人には抵抗があるだろうが、私には良いしくみだと思える)、正確には覚えていないが、年に何回か堂島のロイヤルホテルに集まり(当時、私はそのあたりに住んでいた)、豪華にお食事をして(お茶だったかも…)、託児付きで、テーマごとのグループに分かれ、研究発表をして、きれいなクレヨンとネピアの紙おむつをおみやげにもらって帰るといようなものだった。

百貨店のマタニティ・サービスやマタニティ便利グッズなど、街へ調査に出かけ、ママ目線で商品開発やサービス向上を提言するのである。1年後には研究成果を冊子にした。振り返れば、これはグッド・アイディアの企画だったと思う。なにしろ、子育て中の母親はバブル時代マーケットのターゲットだった。当事者たちをうまくマーケティングのリサーチャーとして使いながら、一方で、知的好奇心や能力がありながら妊娠・出産で家庭に入ってしまったはいいが、「こんなはずじゃなかった」と閉塞状況に苦しんでいた母親たちを拾い上げ、社会参加する機会を提供したのだから。実際のところ、ここで拾い上げられた女性たちは、貴重な人材バンクであり、私を含め、うちの研究所のスタッフ3人はここの出身なのだ。

研究期間は1年だったが、卒業生たちはそ

れぞれ自主的に活動が続けた場合が多かったし、ここから複数、子育てに関わる社会的起業が誕生した。私たち3期生も、その後、ずいぶん長く活動が続けた。母親たちの集まりであると同時に、女性たちの集まりでもある育児サークルとして(これは案外、珍しかった)、イベントを企画しては集まり、どのくらいの頻度だったか忘れてしまったが、その後、何年も同人誌を発行し続けた。私が編集長をしていたような気もするが(今となっては遠い昔のことで、記憶が定かでない)、私自身は、妹にかわいいイラストを描いてもらって、「子どもウォッチングクラブ」という連載をしていた(こうして考えてみると、私はきっとウォッチングが好きなのだろう。最近では、ひそかに「おじさんウォッチング」をやっている)。

そういうわけで、私の子育て仲間には、ここで出会った人たちが多かったし、自宅で始めた子育てグループにも、この仲間たちが遠くから子連れでやってきてくれたりもした。この仲間たちと語り合ったこと、お産の話、女性の置かれた社会的状態(多くの女性たちが子どもを産むまで騙されてきたような感覚を持っていた)、女性の生き方、パートナーとの関係性、実家やパートナーの家族との関わり、そして、子育ての苦労と喜びの共有は、後に研究所を作るうえでの土台となった。前回書いたような経過で、第二子出産のおり、勤めていたクリニックをやめることになり、こうして積んできた土台の上に研究所設立の思いつきが乗ったのだと思う。

ここにもうひとつだけ付け加えておくと、私が仕事を続けていく覚悟を決めたのは、娘を産んだからだ。それまで、私は仕事にこだわっていたわけではなかった。前回も書いたように、

経済的自立や社会的地位とかいうものにもとくに執着はなかった。とにかく、最低限、食べていけて、自分にとって面白いこと、意義を見いだせることができさえすれば、それで満足だった。これは基本的に今も変わらない。今では大学生となった子どもたちにも、「あくせく就活なんか振り回されるより、若いうちにおもしろい体験をいっぱい積みなさい。とにかく食べていけたらいいんだから」と言い渡してある。子どもたちは、「そんなこと言ってる人、お母さんぐらいやで」と、なかばあきれながらも、(きっと自分なりに悩みながらも)それぞれに人生をエンジョイしている。私としては、子どもたちに有名企業に就職して欲しいとも思わないし、安定した職業を得て欲しいとも思わない。野垂れ死には困るが、ワーキングプアでもいいから、自分の力で満足できる人生を創り上げて欲しいのだ。

娘が生まれた時、とてもおもしろい体験をした。母親は、同性である娘について自分の人生を託してしまうのだということを、身をもって学んだのである。息子が生まれた時、私は、息子の人生を勝手に夢見ることはなかった。「とにかく、なんでもいいから、自分の責任で、納得できる人生を生きておくれ」と祈っていただけだ。ところが、娘が生まれた途端、私は、娘に「女性として仕事を持って、社会で活躍しておくれ」と願った自分にびっくり仰天することになった。自分自身は、女性として仕事を持ってやっていきたいという願望の自覚はなかった。どちらかと言えば、夫の方が専業主婦との結婚生活を望んでいなかったの、細々と仕事を続けていた感じである(もちろん、やるからには、一生懸命やっていたつもりだけど)。もしも専業主婦が好きな人と結婚したら、たぶん、地域活動やPTA活動なんかを一生懸命

やっていたのではないかしらと思うことがある。

それなのに、娘に社会的活躍を願うなんて、これはまずい。それが本当に私の望みなのだったら、それは、娘に託すべきではなく、自分が生きねばならないのだ。この時、私は、きっぱりと働いていく覚悟を決めたのだ。娘が専業主婦になって、地域活動やPTA活動に打ち込む人生を生きたとしても、それは娘の自由だ。もったも、そうはなりそうもないけど。私の姿を見て育った娘は、ある時(それは、きっと社会が見えるようになった時なのだろう)、「ねえ、世の中には、お仕事するお母さんとお仕事しないお母さんがいるんだね」と言い、それから、もう少し大きくなってから、「ねえ、専業主婦って金魚鉢のなかの金魚みたいだね」と言った。私は、あわてて娘の口をふさいだが、これは、私が主婦としていかに何もしていなかったかを表しているだけのエピソードである(念のため)。以後、娘は、素敵なカフェやブティックに行くたびに、「うち、高校生になったら、ここでバイトしよう」と言い、「いったいいくつバイトするつもりなの!?!」と心配になるほど働くことに夢を抱き、実際に高校生になったら、USJで立派に働くようになった。母親の姿を見て、働くことが良いことだと感じ取ってくれたことは喜ばしいことではある。

ずいぶん脱線してしまった。とにかく、私は、娘を産んで、「しっかり働くぞ!」と決意し、開業することにした。娘が生まれたのが1990年の7月7日で、研究所開設が10月1日だから、9月頃には、つまり、娘が2カ月の頃には、アイディアを得るために関係者に会いに行ったり、部屋探しをしたりなど、活発に動き始めていたはずである。赤ちゃん学で仕入れた情報から「スナグリ」という抱っこバンドを愛

用していて(これは首が据わる前から使えて、成長とともにダーツを開いていって、かなり大きくなるまで使えるというすぐれものだった)、カンガルーのポケットのようなスナグリの中で娘はスヤスヤ眠り、2歳になったばかりの息子の手を引いて、私はあちこち元気に出かけていた(まだ20代で元気だったし…)。

東京に行って、たけながかずさんのオフィスを見せてもらったり、鉄道弘済会「お母さんのカウンセリング・ルーム」をやっていた三沢直子さんに会ったりもした。何を話したか私の記憶は曖昧だが、三沢さんは、のちに、「まだ、子育て支援という言葉さえない時代だったので、全国から相談が殺到して四苦八苦しており、幼い子どもを抱えての開設はとても無理なのではないかと言った覚えがあるけれど、さすがはエネルギッシュな邦子さん、あっぱれだ」と言ってくれていたのも、きっと無理だと言われたのに、私があまりそのことを気にとめなかったということなのだろう。結局のところ、それからずいぶん長い間、子育て支援をしている臨床心理士は、関東の三沢さん、関西の私しかいなかったのだ。

この時、三沢さんから、関西だと「赤ちゃん本舗」に話をもちかけてはと助言を受けた記憶だけは残っている。そう、その頃、考えられる可能性は、スポンサー企業を見つけることだった。企業家に言われて、某有名企業の黒幕的存在という人に会いに行ったこともある。でも、私には、スポンサーを探すというのが何だか面倒だった。どこかがお金を出してくれるというならとくに拒否するつもりはないけれど、わざわざ自分で見つけたり頼んだりする労力と時間があれば、今、自分の持っているもの、自分にできることを資本に、さっさとやれることから始めるという方が私らしいのである。実際

のところ、バブルの時期に企業に頼って事業を始め、バブルがはじけた途端に事務所を畳まねばならなかったケースは少なくなかったから、それはそれで懸命だったのではないかとも思っている。ただし、最近、芸術教育研究所・東京おもちゃ美術館の多田千尋さんが、「これからは市民創造の時代。社会貢献したい企業があって、アイディアにあふれた市民NPOもあるのに、今はまだお見合いの場がない」と言っているのを聞いて、本物の企業家ならば、スポンサーにマネージされるのではなく、逆にスポンサーたちをマネージするのだろうと思うようになった。

必ずしも景気の良くない時代にメセナを考える企業は立派である。そんな企業を支持する市民社会は成熟を反映するのだろう。これから私たちの社会はどんな方向を目指していくのか。



旅は道連れ、世は情け

～女性ライフサイクル研究所、二十周年を迎える

④幕開け～最初の1年目

村本 邦子

走りながら考えるタイプの私である。研究所開設にあたって事業計画のようなものはほとんどなかったの、最初の1年目、どんなふうに事業を展開したのか、記憶は不確かである。何となく覚えているのは、1990年のおそらく9月だったのだろう、生後3カ月に満たない娘をスナグリ（抱っこバンド）に入れて、近所の不動産に行き、ワンルームマンションを借りる契約をしたこと。学生時代、不動産物件を借りることは何度か経験してきたが、私は、いつも迷わずその場で決めてきた。だいたいのあたりさえつけば、何事もご縁、住めば都と思っているからだ。それではずれたことはない。

この時、ひとつだけ学んだことがある。考えてみれば当然なのかもしれないが、賃貸契約にあたって、現在無職であると言うと不動産屋は警戒し、夫の有無と職業を聞かれて、夫が大学の先生とわかると、途端に安心した様子で相手にしてくれた。離婚

してこれから新しい地で仕事を探そうとしている女性には厳しい状況だろう。「そうか、私はこの社会にあって夫の庇護下にいるのだ」と知り、なんだか軽く侮辱のような、それでいてこそばゆいような変な気分を味わった。何しろ、私は早くから自活しており、自分の健康保険証だって持っていたのだ（この時期は「扶養」だったけど）。

資本金は百万（当時はバブルで敷金も家賃も高かった）。新しく部屋を借り、カーテンや絨毯を選び、家具をコーディネートして自分の空間を創り上げていくプロセスは、いつもワクワク楽しい経験である。今もそうだが、部屋はピンクを基調にした可愛くお洒落な雰囲気。赤ちゃん連れが多いので、絨毯敷きにして、玄関で靴を脱ぐようにした。開業のカウンセリングルームとしてはちょっと変わっているが、今なおこの形で続いている。必然的にアットホームな雰囲気となる。開設パーティもしたはずだが、あまり覚えていない。

記憶は不確かなものの、手掛かりとして年報の活動記録が残されている。急な思いつきで、毎年、年報なるものを発刊することに決め、開設後1年した1991年秋に『女性ライフサイクル研究』創刊号を出版した。雑誌の発行を思いついたのも、趣味で同人誌を出したりしていたからだろう。どんな経験が後にどんな形で役立つかわからないものだ。そして、誰かが言ってくれたのだと思うが、ISSNを取り、国会図書館へも入れるようにした。創刊号の扉にはこんなふうを書いてある。

「とらわれず、こだわらず、かたよらず」
気負わずに自然体で伸びゆく女性を目指したい。FLC研究所はそんな女性を支持します。

という言葉掲げて、FLC研究所を始め、1年が過ぎました。「女の人って大変だなあ。女の人って頑張ってるなあ」と実感するようになってから、女性のために何かしたいという漠然とした思いで、思わず行動が先走りしたようないきさつでした。目に見えない力が女性を縛り、型にはめようとし、また、女性自身もそんな圧力を内に取り込んで自分を押しこめている様子は、あまり幸福そうには見えませんでした。女性が不幸だとすれば、当然男性も不幸なはずでしょう。

開設当初はとりあえず、女性のワークショップ、無料電話相談、個人カウンセリングから始めてみました。やっていくうちに、少しずつやりたいことが見えてきて、スタッフである仲間も増え、できることも広がりました。ニューズレターの発行、グルー

プカウンセリング、講演企画、産前産後の心の訪問ケア、etc.。仲間が増えて力を合わせると、できることに何倍もの広さと深みが増し、そのことに刺激されて、また新たに力が湧きおこるという喜びを知りました。それと同時に、複数でやっていくことの難しさ、傷つけあったり、すれ違ったりという苦い経験もありました。それでも、やっぱり、仲間っていいなあと感じています。…

末尾の活動報告によれば、開設した1990年10月から、「お母さんのための無料電話相談」と各種ワークショップ（女性学コース、発達心理学0歳・1歳・2歳児コース、マタニティコース）、個人カウンセリング、グループカウンセリング、トークルームを始めている。参加者数の多い企画は、近くにある北区民センターの貸し部屋を借りた。各種ワークショップの参加費は、開設当初から現在に至るまで一人千円である。収益にはならないが、これは、参加者とスタッフの垣根を低くする効果を生んできたと思うし、眼に見えない守りとしての枠組みをいかに作るかというスタッフの訓練に役立ってきたと思う。

客層としては、子育て仲間呼びかけ（前号で紹介したように、ネピア赤ちゃん学の卒業生ネットワークは大きいものだった）、各種企画を毎週のように新聞の広報欄に載せてもらい、ぼつりぼつりとさまざまな企画への参加者は増えていった。そして、趣旨に賛同した参加者から、口コミでカウンセリングにつながる人たちが出てきた。カウンセリングルームが孤立して存在するのではなく、地域へと拡がりをもつ同心円状

に設定された事業の中心にあるという構造は、今なお維持されている形である。

一番楽しかったのは、たぶん女性学のグループだったんじゃないかと思う。前にも紹介したアドリエヌ・リッチ『女から生まれる』（晶文社）を皆で読み合わせ、語り合うという形のグループだったが（この形式のグループは今も続いている）、ほとんどCRグループとして機能していた。CRとはConsciousness Raising（意識覚醒）の略で、定期的に女たちが集まって、毎回、テーマを決め、女として生きてきた自分たちの体験を語り共有しあうグループのことである。1960年代後半、第二波フェミニズム運動が巻き起こるが、CRグループは、この運動の重要なツールとして役割を果たした。女同士の親密で安全なグループのなかで、それまでひとりひとりが胸に秘めてきた体験を明かし、痛み、苦しみ、哀しみ、怒り、喜びを分かち合うなかで、女たちのさまざまな体験が、決して個人的な問題ではなく、社会的・政治的な問題であることに気づく。"The personal is political."だ。

ちなみに、このCRグループのなかで、子ども時代の虐待やインセスト、夫からの暴力やレイプなどの問題が初めて明らかにされ、その結果として、ホットラインやシェルターなど女たちの救援組織が次々と立ち上がり、法律の改善を求めるアドボカシーが盛んに行われるようになったという経緯があった。

リッチの本に添う形で、女であること、産むこと、母であること、妻であること、夫との関係、性、体、セクシャリティなど、さまざまなテーマで自分たちの体験を語り

合い、分かち合い、それぞれに個性的な互いの人生に敬意を払い、女であることの誇りや力を確認し合った。まるで何かに取り憑かれてもしたように、私たちは飽きもせず、毎週、毎週、自分たちの体験を語り合ったような気がする。第二波フェミニズム運動のキーワードであるシスターフッドとエンパワメントの体験だった。もちろん、参加者にはお客さんもいたのだが、現在のスタッフでもある4人のスタッフが最初の1年目にはもう揃っていたので、研究所の最初期にスタッフたちがこのプロセスを経たことは、その後の研究所の基盤づくりとして何物にも代えがたい重要な意味を持っていたのだと思う。

もうひとつ懐かしく思い出すのは、毎週土曜にやっていたスタッフ会議だ。保育所に通っている子どもも、そうでない子どももいたが、土曜はスタッフが全員子連れで集まって、ミーティングを持っていた。0歳から2歳までの子どもたちが総勢6人集まっていたのだから、それはにぎやかなものだった。電話をかけてきた人から、「そちらは保育所なんですか？」と問われたこともあった。お泊りもしたし、キャンプもしたし、学会や遠方のイベントに一緒に行って、必要な時には子どもを見合いっこしながら、旅行もした。毎年クリスマスにはクリスマス会があつて、子どもたちは大人全員からひとつずつプレゼントをもらえたものだ。こんなふう to 育ってきたので、私たちの子どもたちは、まるで大家族のような特別な関係にある。今だってそう。たとえば、うちの子どもたちはヒップホップ・ラッパーだが、CDを出せばスタッフや子どもたちが買ってくれ、都合のつ

くライブがあれば、大人も子どもも応援に駆けつけてくれる。

振り返れば、意図せずも、子育てネットワークという大きな力を持っていたためだろう、とくに営業のようなことはしたことがなかったが、口コミで私たちの活動はちょっとした話題を集め、マスコミに取り上げられ、子育てサークルや公的機関の講師として、また、大丸梅田の赤ちゃん展のゲストとして呼ばれ、女性センターのビデオ出演まですることになった。たとえば、1991年1月3日の読売新聞家庭欄には、「子育ての悩みカウンセリング、母3人スタート」というタイトルで大きな写真入りで女性ライフサイクル研究所のことが取り上げられている。私の膝の上には、まだ半年に満たない娘がちょこんと座っている。ビデオ出演というのは、大阪市婦人対策課による『主婦の再就職』という田上時子さんによる作品だった。このビデオには、可愛い子どもたちが登場するし、私たち自身もまだ20代の可愛い盛り(!?)だった。「女性の視点で女性のサポートを」というスタンスは女性たちの共感を生み、子連れで仕事を始めるということにも話題性があったのだと思う。「アグネス・チャンの赤ちゃん論争」というのがあった頃の話だ。

1991年1月に翻訳出版したユング派フェミニストの精神科医ジーン・シノダ・ボーレン『女はみんな女神』（新水社）は、私たちの活動とともに、9月に創刊された『フラウ』という講談社の女性雑誌に数頁にわたって大きく取り上げられた。この本もまた、女性学ワークショップのテキストとして取り上げられ、このグループは現在も続

いているものである。

1月からは季刊でニュースレターを発行するようになり、4月には研究所のパンフレットを作った。この頃の私の構想としては、週1日、開業のカウンセリングをして（始めた頃は開業の方には別の看板を立てていた）、そっちが仕事、子連れでやるのはサークルの延長のようなイメージだったと思う。そちらの方は人手がある方がいいから、一緒にやりたいというスタッフたちを受け入れ、他のスタッフたちも何か仕事をしたければ、この場を利用して、自分の責任の範囲でやってくれたらいいと考えていた。そもそも、私は人と一緒に仕事をするつもりではなかったのだ。一緒に子育てし、学びながら、それぞれに仕事をしたければ助け合っていけばいいんじゃないのというくらいの意識だった。そんな安易さが仇となることは誰の目にも明らかである。すぐに問題として浮かび上がってきたのが、お金と責任の問題である。「そんなことも考えずに始めたの!？」という声があちこちから飛んできそうだが、これが私の愚かしさである。が、愚かだからこそできることだってあるのだ。この問題は、繰り返し、繰り返し、話し合うことを通じて、その都度一番良いと思われる形を模索してきたのだが、この話題は次回にしよう。今、ここまで書きながら、研究所の基本的理念やスタンス、構造といったものは、最初の1年目には、ほぼすでに出来上がっていたのだなあと感じている。



旅は道連れ、世は情け

～女性ライフサイクル研究所、二十周年を迎える

⑤お金と責任

村本 邦子

人生において、私がもっとも愛するものは自由である。自由を妨害するものは憎むべきものということになるが、その代表として、所有と依存の欲望を挙げることができる。人間はあまりに弱く小さな存在であり、その誘惑はあまりに大きいので、ややもすると、自由を諦めるか（いわゆる「自由からの逃走」である）、もしくは、もっとも手っ取り早い方法として、自分自身をそれらと無関係なところに置くと決めてしまうことになる。少数派かもしれないが、私自身は後者の選択の方が好きである。基本的に1人で生きるという選択である。もちろん、孤立して生きるというのは別のことだ。

人と一緒に仕事をする、所有と依存の欲望が頭をもたげる。所有の欲望とは、自分の思うようなペースで自分の思うように事が運ばれてほしいと願う欲望、依存の欲望とは、全面的に人をあてにしてしまうという欲望である。どちらも支配の裏表だ。一人ひとりが違う人間である以上、どちら

も完全に適うことはあり得ないし、本当のところ、どちらが適ったとしても満足は得られない。なぜならば、それは孤独の証しになるだけだから。思うに、DVの加害者やカルトの教祖は、全面的に人をあてにし、すべてを自分の思い通りにしたいと望んでいるが、実際には、人間は完全なロボットになりきれないからこそ、飽きることなくその役割を続けていけるのではないだろうか。

組織で仕事をするうえで大切なのは、目的の共有、役割の分担と合意、責任と遂行であろう。しかしながら、複数の成員からなる組織において、成員すべてが自律的で成熟しているということはあり得ないから、結局のところ、誰かが誰かのフォローをすることで辻褄を合わせつつ、組織は回っていくものである。その時に、所有と依存の欲望が少しでも頭をもたげると、フラストレーションを抱えることになる。自分という人間の器を鍛えていけば、それは乗り越えられるものなのかもしれないが、それは

途方もなく労力を要するプロセスだと思える。できれば、そんなものとは無縁でいたかった。

だから、人を雇うというようなことは思ってもみななかったし、組織として仕事をするつもりはなかった。女性ライフサイクル研究所は、個人事業主の集合体であり、やりたければ、それぞれが自分の責任で仕事すればいい、お互い、子育て中の身だから、場を共有していれば、困った時に助け合えていいんじゃないのという意識があった。だからこそ、次々と「私も何かやりたい！」という人が現れた時、「給料も交通費も払わないけど、やりたいことがあったら、自分でやってね」と受け入れた。もともと、来るもの拒まず、去るもの追わずの私である。

こうして加わった人たちは、何かをやりたくてたまらない人たちだった。子どもを保育所に預けるとい人まで出てきたのには内心驚いた。そこまで気合いを入れて働くのか。繰り返すが、開設当初、私自身が仕事と位置づけていたのは週 1 日の開業カウンセリングだけで、あとは、それまでプライベートでやっていた活動をもう少し公的なニュアンスでやってみようと思ったにすぎなかった。それに比べると、他の人たちは熱い想いを抱いて何ものかに突き動かされるように動いていた。あれやこれやとアイディアをひねりだしては行動を起こしていくので、私はただただ圧倒されていた。

最初に、待ったをかけなければならなかったのは、活動の請求がこちらに回ってきたときだった。もともと場所代や維持費

は私が持っていたし、1 回千円でグループに参加していたお客さんたちが次々、スタッフになっていくのであるから、人手は増えたとは言え、収益は下がる一方である。これではたまらないと思って、何度も話し合いの場を持ち、基本的にそれぞれの事業収益はその人のものであるから、収益が出れば一部を運営費に入れ、個人の経費は自分で賄うというルールを決めた。

お金の問題は、いろいろな側面から、繰り返し私たちに突きつけられた課題だった。ある時、ひとりのスタッフがシンポジウムに出て、年配の男性から「あなたたち、そんなによいことをしているのだったら、どうして有料にするの？お金なんかとらず、ボランティアでやりなさい」と言われ、憤慨して帰ってきた。私自身が経験したのは、「有閑マダムの趣味」という陰口だ。なんたる侮辱！有閑マダムの趣味で女性問題がやれるものか。何しろ、私たちは、あの時代に子どもの虐待や性暴力の告発をしていたのだ。私たちは歯ぎしりして、自分たちのやっていることの意味を確認しあった。たとえ高額でなくても、有料でプロとして責任をもってサービスを提供したい。

たぶん、こんなふうにして、私はだんだんと、皆の想いに巻き込まれていったのだろう。夫との関係もあった。子どものことは、基本的に私が何とかする。私に予定が入るときは、夫が融通する。だけど、仕事が増えた時には、夫の仕事が優先される。夫の給料をあてにして生活しているのだからやむを得ないとも思う一方で、何だか寂然としない思いも残った。彼は決して経済

を持ち出して権力をふるうタイプの人ではないが、自分のなかにわだかまりができたので、翌年からは、定収入を得るために非常勤講師に出ることにした。最初は1ヶ所だったが、1番多い時は4ヶ所で半期に7コマほど教えていた時代もあったから、今よりたくさん教えていたことになる。もとより、教えるのは嫌いな仕事ではない。この時代の教え子たちのなかにも、対人援助職者として頑張っている人たちが結構いるのだ。

大学への誘いはコンスタントにあったし、仕事はまだまだたくさんあった時代だった。周囲からは「もったいないね」と言われたものだが、少なくとも子育てを終えるまでは、フルタイムで働くつもりはなかったし、何がもったいないのか不思議だった。本当のところ、フルタイムで働くより、24時間営業の自営の方が忙しいと言えなくもないのだけど、私にとっては、自由度の感覚がまったく違ったのである。とは言え、子どもたちはどんどん大きくなり、親の手を離れていく。私個人に関して言えば、外で定収入を得ながら、開業カウンセリングの方もトントン拍子に増え、講師や執筆の依頼も結構あって、95年にはそれなりの安定した事業収入が見込めたので、96年には、年数回のオムニバス形式のものをのぞいて、非常勤講師は全部やめてしまった。

そんななかで、他のスタッフたちもそれぞれに事情を抱え、勉強を始めたり、資格を取ったり、家計を助けるために就職したりもした。正直なところ、自分で事業を起こすと言っても、最初の5年、私以外の人

は、たいして稼ぐことはできなかったのだ。だからと言って、誰も女性ライフサイクル研究所をやめる気はなく、それぞれ、いずれはここで立てるようになりたいという野望を持っていた。いったん始めた事業を放り出すわけにもいかなかった。誰かが始めたことも、やむなく残るスタッフで引き受けたが、実務的な仕事量は半端でなく、少しずつ内部での仕事にもお金をつけることにしていった。

私としては対等な立場で仕事をしたいと思っていたものの、どうやら経済的に対等にやるのは無理であるから、いずれはそれを目指して無理のない範囲でという妥協策だった。何とも複雑な気持ちにさせられるのは、夫たちの経済格差である。いくら熱い思いがあっても、家計を助けなければならぬ人は外で働かなければならなかった。自分にそこまで責任はないと思いつつ、内心、他のスタッフの家計の心配までしている始末だった。日本の女性史にはいわゆる「主婦論争」というのがあるが、この時代、そこに登場する複数の論理をほとんどひとめぐり実体験したような気がする。結論は出ない。

そして、事件が起こった。1人のスタッフが社会的問題を引き起こしたのだ。それまで、「それぞれが自分の責任で」と言ってきたものの、いざとなったら、私には関係ないと割り切ることなどできなかった。人と人との関わることである以上、お金ですむ話ではない。何より私は代表として名前を出していたし、専門家として一番責任の重い立場にあった。結局、これについては、

その後 10 年フォローすることで責任を果たしたが、長く続けていれば、遅かれ早かれ事件は起こるものである。この時に思い知ったことは、結局のところ、社会的に言えば、私が責任者であることは否定できず、何か起こった時には逃げも隠れもできないのだということである。それならば、いっそ潔くリーダーであることを受け入れるしかないじゃないかと腹を括った。

結論を言ってしまうと、意外にも、私は馬鹿なお人好しということになる。何であれ好きなことを一生懸命やるのは絶対的善であるという信念を持っているために、どうしてもやりたいという熱意とガッツを感じると、つい応援したくなってしまうのだ。こうして、1 年も経つ頃には、私が経済的にも、実質的にもリーダーとして責任を負う体制が作られた。

私の希望は、それに皆の希望も、いつの日にか、ここで一人前に立つことだった。それぞれ日々、勉強を積んで、誠実によい仕事を重ねること、狭い世界に閉じこもらず、どんどん外へ出て視野を拓けることを皆に言い続けた。自分自身に言い聞かせたことは、所有と依存の欲望に負けないこと、女性ライフサイクル研究所は私のものではないし、私は私として常にそこから自律しているということである。社会的に見過ごせないギリギリの線までは、たとえ私の思いと違ったことが起こったとしても、メンバーの自由と責任に任せ、失敗を受け入れた。関係性としては、いつも変わらず助け合う共に生きる仲間であったが、仕事上は相当程度、私が皆の面倒を見てきたことに

なる。私には試練の連続だった。あまりの重荷に、2〜3 度、解散宣言をしたことがあったが、解散させてはもらえなかったし、やり始めたことの社会的責任を途中で放り投げることは、やっぱりできなかった。

果たして、私は自由に生きてきたと言えるのだろうか。どうひいき目に見ても、肯定してもらえそうにない。それでも、自分としては、自由を放棄しないよう常に努力を重ねてきたし、それなりの成果をあげてきたと思っている。女性ライフサイクル研究所という組織は、役割のアンバランスさこそあったものの、目的の共有、役割の分担と合意、責任と遂行をそれぞれが自律的に請け負うよう促しながら回してきたのだ。リーダーとして鍛えられたし、何より、私たちがこれまで社会で果たしてきた役割を考えれば、「よくもまあ、ここまで私をフル活用して、社会に役立たせてくれたもんじゃないの!？」と感心するばかりである。初期のメンバーの粘り強さ、あるいは執念深さなしに、女性ライフサイクル研究所はあり得なかった。そして、皆が皆、大きく成長した。自分自身をも含めてだが、それは本当に感動的なプロセスだった。

それぞれのメンバーが成長し、ようやく皆が将来有望な同僚になるかもしれないと思えた 2002 年、私たちはついに経済的に対等になって、研究所を法人化した。その時、私は、「皆のここまでの成長を認め、これからの成長を待って、もう 10 年だけリーダーとしての責任を負うから。でもその後は私を解放してね」と言い渡した。それがちょうど来年にあたる。

旅は道連れ、世は情け

～女性ライフサイクル研究所、二十周年を迎える

⑥ マスコミとのつきあい

村本 邦子

ごく最近、久し振りに TV 番組への撮影協力をした。現在では、よほど真面目に準備して制作しているもの以外は、まず断ることにしている。忙しいというものもあるが、それによって出ていくものと、入ってくるものを考慮すると、それがいちばん懸命であると学んできたからだ。今回は、虐待をテーマにする NHK の番組だったが、制作担当の方がとても熱心に勉強されており、ずいぶん前に番組作成への助言をした。最近、送られてきた番組の DVD を見る限り、言ったことを理解しようと努力して作成してくれたことが伝わってきたからだ。

当日の打ち合わせでは、関係者の理解度に濃淡はあったが、おもに性的虐待をめぐる時代の変化を痛感すると同時に、時代の変わりなさをも痛感することになった。まずは、変化の方だが、今回の番組では、

取り上げられた虐待サバイバー3 人全員が性的虐待を含んでいた。以前であれば、性的虐待はタブー視され、避けられていたことだろう。3 人中 1 人でも取り上げられたら上出来だった。時代の変わりなさの方は、「家庭内に性的虐待が存在するなんて」という今更ながらの声だ。「もう 20 年も前から、このことについては情報発信してきたし、NHK にも何度か撮影協力してきましたよ!」と言ったが、番組製作にあたって先輩から後輩への受け継ぎはなされていないらしい。

振り返ってみれば、マスコミとのつきあいは案外あった。積極的に宣伝したことはなかったが、何となく話題性があったのか、時々、マイナーに取り上げてもらっては、そこから関係を広げてきた（基本的に、い

つも時代を先に行きすぎて、なかなか理解してもらえないという感じを持ってきたが、今では、時代は後から連いてくると言うことにしている)。初期の頃におつきあいしてきたマスコミ関係者は、女性の生き方に関心を持つ若い女性たちと、子どもの問題に関心を持つ若い男性たちだった。同じ目線で、長い間、親しくしていたように思うが、たぶん、業界では一定の年齢を超えると管理職ポジションになるからだろう、今は多くが現場を離れ、違うことをしている。

開設当初、女たちが子連れで心理支援をする研究所を立ち上げましたよという紹介が続いた後、1992年に発行した年報2号(性的虐待の特集号)が全国各地の新聞で広く紹介され、通信物を中心にしていたFLCネットワークにつながってくれた市民や専門家たちが結構あった。これは、NPO 法人FLC安心とつながりのコミュニティづくりネットワークに引き継がれ、今なお会員でいてくれる人もある。また、この頃、力を入れていた虐待防止教育は新聞やTVで紹介され、CAP養成講座の前身となった。

この時期に発表した「女性3人に1人が性被害経験あり」という調査については、新聞やラジオで何度も報じられた。とくに、写真入りで大きく掲載されたひとつの記事については、思い出すと面白いエピソードがいくつかある。その1。この時、関西で某学会が開催されたが、人が集まらないので、一部を市民に開放して宣伝したいということで、誰か紹介して欲しいと頼まれた。親切心から紹介して、新聞紙上に学会の告知をしてもらったのだが、この記者さんが私の報告を聞きに来て、記事にしてくれた。

ところが、なんとびっくり、このことで、私は、後々、「売名行為」と非難されることになった。当時の私は、とても不愉快に思い、腹を立てていたが、年を取った今なら、日本の学会で期待される行動様式とともに理解できる。たぶん、あの頃は、理解できなくて良かったのだろう。若いうちから、いろんなことがわかりすぎると、臆病になってしまうものだ。

その2。どうやら、この時の私の顔写真は、「闘う女」のイメージだったらしい。今、思い出しても愉快で笑えるが、この写真を見た知り合いたちがひどくショックを受けた。身近な仲間たちには笑われ、若い男性たちには、「村本さん、どうしてこんなふうになってしまったの!？」と嘆かれ、先輩女性には、「予めちゃんと良い写真を撮っておいて、それを提供しなきゃダメよ」とたしなめられた。彼女自身はフィルム1本使って自分の写真を撮り、一番映りの良いものを取材の際に使ってもらっているのだという。へえ！ところが、自分では、その写真を見ても、さほど違和感はなかったし、試しに夫や子どもたちに聞いてみたが、当たり前のように、いつもの私だと言われた。私は当時、家で闘っていたのだろうか。ちなみに、最近、外向けの写真に関する家族のコメントは老けているというもの。このギャップは、いったい何を意味するのやら!?

その3。この記事を見て、立て続けに数人のサバイバーたちが来てくれた。なかには、「この話は決して誰にも言わず、墓場まで持っていくつもりだった。でも、この記事を見て、時代は変わったんだ、今はこの問題に取り組んでくれている人たちがいる

んだ、自分だけではなかったのだと勇気づけられた。一度、会って話したいと思って来た」と言う年輩の方々がいた。この声は、きっと氷山の一角だろう。直接、反応を知ることができなくても、報じられることで、隠れた被害者たちに密かな応援のメッセージを送ることができるのだというのは大きな発見だった。これは、パワフルなコミュニティ介入のひとつだと思う。もちろん、逆効果もしかり。

その 4。後に弁護団に加わることになる『蘇る魂』（高文研）の穂積純さんもその 1 人だった。ちょうど、弁護団に臨床心理士が必要だから探すようにと言われて探していた時、彼女はこの記事を見た。とくに写真を見て、「この人なら信頼できるかもしれない」と、思い切ってコンタクトする決意を固めたそうだ。何がどんなふう to 作用するかわからない。いずれにしても、この記事がなかったらこの出会いはなかったということがある。それは単なる偶然ではなく、ある程度まで報道の設定によるので、最初にした「出ていくものと入ってくるもの」のバランスを予測して選択する方が良いと思う。

その 5。最後のエピソードは、この記事に限らないが、マスコミは一見、科学的に見えるデータに弱いという話だ。この時のデータは、若い女性の性行動に関する調査に付加したスチューデント・サンプルの単純な数値にすぎなかったが、「3 人に 1 人」となるとマスコミは飛びついてくる。それは驚きでもあり、怖ろしくもあった。私は、これを「数字マジック」と呼んでいる。学生時代、私は統計が大嫌いだった。当時は、臨床心理学の研究法は統計というのが

お決まりで、誰も統計など信じていないのに、あたかもそれが世渡り術のように語られることに強く反発していた（これも、年を取った今となつては、日本における臨床心理学の歴史とともに、了解可能である）。この時初めて、統計調査は、社会啓発の手段として、とても有効なものなのだと知った。後に、社会学者の石川義之先生と本邦初のランダム・サンプリングによる大規模な性被害調査をすることになったのも、この学びゆえである。そして、この調査を通じて、私は、コミュニティ支援という重要なテーマに行き着くことになる。

それから、子育てや家族関係についての雑誌記事。夫婦関係では「セックスレスカップル」が話題になっていた。あの頃は、妻の側が理由のセックスレスが話題だったが、最近では、夫の側が理由のセックスレスの方が耳に入ってくる。ちなみに、日本家族計画協会の調査によれば、セックスレスカップルは増加する一方、2010 年には 4 割を越えたというから驚きだ。もはや話題に上らないほど普通のことなのかもしれない。そして、父娘関係と母娘関係。多くのライターや編集者と関わったが、ここには、とても優秀な人たち（女性の方が多かった）がいた。人の話をスポンジが水を吸うようにそのまま吸収して、新たな形で語り出すのは新鮮だったし、優秀な編集者が木の中の仏を見るようにエッセンスを掘り出していくのには感心させられた。ただし、TV の編集は事前に確認できないうえ、どうにでも編集可能なので要注意だ。

そして、新聞の連載。94 年 3 月～95 年 9

月にかけて読売に連載したリレーエッセイ「女から吹く風」(全8回)や、97年7月～10月の「子育て最前線」(全17回)など。中村(正)さんを最初に知ったのは、このコーナーで一緒したことからのだったような気がする。その他、ちょっとした雑誌や公的機関のニュースなどにもエッセイを書く機会があった。赤ちゃん和妈妈社には、「お母さんのカウンセリングルーム」(『赤ちゃん和妈妈1・2・3歳』、1998年～2000年)、「ママのホットステーション」(『赤ちゃん和妈妈』2000年～2004年)と、長年にわたって毎月書いていた。これらは、伝えたいことを一般の人にわかりやすく語る訓練になったと思うし、コンパクトなので、印刷して配ると、講座の資料に使えた。

時々、カウンセリングの情報が女性雑誌で紹介されることもあったが、女性雑誌を見てカウンセリングに来るケースは、あまりカウンセリングに向かない層で、継続しない傾向があった。もちろん、継続するばかりが能でなく、シングルセッションで十分に有効な援助は可能だが、要するに手応えを感じられない層という意味である。他方、著書等を読んで訪れる層は、内容的にフィットするため、カウンセリングにつながりやすい。もっとも、最近ではネット検索で訪れる層が急増し、そもそも間口が広がっているの、一概に言えないかもしれない。

母娘に関しては、今なおコンスタントに女性週刊誌から取材の依頼があるように思うが、今は引きうけておらず、2000年代に入ると、幼児から小学生をターゲットとし、男性をも巻き込んだ子育て雑誌が登場し、

執筆や取材の依頼も増えたが、他のスタッフに回すようにしている。今さら私が言うべきことはないような気がするし、これらがどのような効果をもたらしているのか、手応えを感じたことがないのだ。それから、ポップサイコロジーのジャンルに入るようなテーマの雑誌やTVの依頼。時間に余裕があった頃は、ちょっと面白くて、気が向いたら引きうけていたこともあるが、今はやめた。一貫して断ってきたのは、その場限りの事件のコメント(事件の背後にあるテーマを追った特集は別)。これはまったく無意味だし、無責任だと思う。思い入れのあるテーマを追ったものであっても、担当者が勉強していない場合も断る。なぜ、いちいち時間を割いて初歩的なことをレクチャーしなければならないのか腹が立つてくるからだ。

そんなわけで、最近ではマスコミとのつき合いはめっきり減った。時代の変化もある。かつては、もっとも手堅いクチコミを除けば、マスコミがある意味で社会につながる窓口であったものが、これだけ情報が大衆化されると、必ずしもマスコミを介さなくても情報発信は十分に可能になった。2002年以降は、研究所のホームページを充実させて、さまざまな角度から情報発信している。ネット上に立ちあがる世界は、意外なことに関係者のコミュニティを形成する。ごく小さな例外を除いて、一方的な情報発信が中心であるが、ここに人が集ってくる。ネットを通じて私たちのことを知ってアクセスしてくれる人々もいれば、しばらくそこでじっと観察を続け、少しずつ接近してくる人々もいる。カウンセリングを

終了した人々が、私たちが相変わらず存在していることを確認しては、安心の基盤としている場合もある。講師活動で全国に赴くが、エッセイやブログを通じて、つながり続けている人々もいる。最近では、ツイッターやフェイスブックが主流になりつつあるが、個人的には、今のところ、これ以上、手を出さないことにしている。

マスコミに入るかどうかかわからないが、このところまったくできなくなってしまったのが自分自身の本を書くこと。書きたいことはいろいろあるが、今の生活をしている限り、どう考えても無理だ。やりたいのにできないと思っているとストレスなので、潔くあきらめて、また、その時が来たらと考えることにした。いずれにしても、もう十年一生懸命働いたら、半分引退して自分のことをしようと考えている。そこから十年は、せっせと書くのだ。マスコミとのつきあいは、情報をめぐる時代の変化と自分のライフスタイルによって選択していかざるを得ない。拒否するでなく、振り回されるでなく、賢明におつきあいしていきたいものである。

旅は道連れ、世は情け

～女性ライフサイクル研究所、二十周年を迎える

⑦パワー、あるいは権力について

村本 邦子

パワー、あるいは権力は、自由を保証するものだろうか？それとも、自由を妨げるものだろうか？お金と責任についてはすでに書いたが、今回は、パワー、あるいは権力について書いてみたい。

パワーという言葉日本語に訳せば、「力」となる。それは物理的な力かもしれないし、もっと抽象的な力かもしれない。潜在的な力を表すこともあるだろう。そこに価値観は含まれないが、パワーを「権力」と訳す時、どちらかと言えば、否定的ニュアンスが浮上してくる。権力とは、一般に他人を強制し服従させる力だと考えられているからである。

女性ライフサイクル研究所を始めた頃、幼児期の虐待や性的虐待が中心的テーマだったことから、パワーはひとつの重要なキーワードだった。虐待とは構造的力関係を背景にした人権侵害であり、権力の濫用であり、パワーの使い方を間違えると大変なことになる。男が暴力をふるいやすいのは、相対的に女よりパワーを持ちやすいからで

あり、女もパワーを持たされれば、（たとえば子どもとの関係において）いとも容易く濫用してしまう。人は弱い存在であるのに、一人の人間に一人の命を預けてしまうような権力構造を作るから虐待が起こるのだ。

インターネットが未発達だった 90 年代初頭、唯一の情報源だったサンフランシスコから送られてくる「ヒーリング・ウーマン」というニューズレターには、「情報はパワーなり」というコーナーがあって、本や講演が紹介されていた。パワーという言葉が肯定的に使用されていることが新鮮だったし、情報や知識が力を支える一部であることに納得し、研究所の活動においても、情報発信を大きな柱のひとつにした。

女性運動のなかで使われてきた「エンパワメント」という概念がある。エンパワメントとは、パワーを与えること、持てるパワーを引き出すことであり、個人や集団が自らの生活への統御感を獲得し、社会的環境に影響を及ぼす力を獲得することを言う。これもパワーの肯定的な側面である。おそらく、パワーとは本来、中立的な言葉であ

り、その使用法によって、肯定的結果をもたらしたり、否定的結果をもたらしたりするのだろう。権力の方はどうだろう。

ずっと、権力から自由でありたいと思っていた。1994年に発行した研究所の年報4号では『表現と自由』の特集を編み、「表現と力」という原稿を書いている。今から二十歳ほども若かった自分の文章であるが、読み返してみれば、「なんだ、あの頃とあまり変わってないんだな」と思う。次のような内容だ。

誰かとの関係で非対称な「力」、一方的な「力」、責任を担いきれない「力」を持たされることは脅威である。「力」を持つと、その周りに虚構が多くなって、「本当のこと」が見えなくなったり、「大切なもの」を失ったりしやすい。「力」がその人から離れて存在するようになると、人々がその「人」ではなく「力」に群がってくるようになるからだ。そうすると、その人は否応なく、個人として存在するよりも、「力」の象徴として存在させられるようになる。虚構が大きくなればなるほど、つまり「人」と「力」のズレが大きくなればなるほど、「力」の責任は個人で担いきれないものとなる。「力」を持たされた者が、そのズレに気づき、それを修正していくことができるのかどうか、私は懐疑的である。

「力」に喜びが伴うことがある。それは、たとえば、私の知らないところで誰かが私の表現を受け取り、それを育ててくれたことを知った時。自分の思いを誰かが受けとめてくれて、まったく思いもよらない形で展開してくれるとすれば、自分の思いが自

分から離れて新しい生命を持ったことになる。一人でできることを越えて、思いが拡がりを持つのは心躍ることだ。

「力」にはたくさんの次元が交錯している。客観的に言って、社会的「力」を持つ者がその「力」を認識しない時、意図せぬ抑圧が起こる。たとえば若い頃には批判精神旺盛で権力に反発し続けてきた者が徐々に評価され、社会的「力」を持たされているのに、それに気づかず、相も変わらず自分は一匹狼だ、マイノリティだとしか認識できない時。筒井康隆の一件では、彼が自分を「ブラック・ユーモアの作家」と認識しながら、その作品が教科書に載るというギャップなどは、こういう例だろう（彼が差別表現をしたか否かということよりも、その後の姿勢を指す）。

ちょうど時は、筒井康隆の断筆宣言が話題になっていた頃だった。この時の学びは、私の心に深く刻まれている。いかにも同様のことが、将来、我が身にも起こりそうに思ったからだ。どんなに自分自身がパワーを拒否していても、外側からパワーを附与されることを免れない。この時点でしぶしぶ受け入れざるを得なかったことは、たとえば学歴や誰かの弟子など勝手にレッテルを貼られて賦与されるパワー、編集者であることのパワー（執筆料も払えないような自費出版の雑誌であっても、「雑誌を持っているということ自体が権力」なのだそう。そんなものか？）、そして「声大きい」というパワー（これは、自分への確信や説得力、自己主張の強さのようなもの）だったように記憶している。

とは言え、実際のところは、この時期、

社会的にも経済的にも強者と言うよりは弱者の立場であったから、権力者から搾取されそうになった体験が、そう多くはないが何度かある。「ああ、世の中の偉そうな人は、こんなふうに現場の人を利用するんだな」とその手口を知ったし、だからこそ、それだけは絶対にしたくないと今も心に誓っている。人を搾取するようなことは決してしたくないし、人から搾取されるようなことも決してしたくないと思う私は、そういう相手には情け容赦なく噛みついていたので、みな尻尾を巻いて逃げて行ったものである。そんな力が自分にはあった。

どんなに権力と無縁でいたいと思っても、自分の意志だけでコントロールできるものではない。私たちが他者とともに生きていくしかない以上、外側から賦与されるものから逃れようがないのだ。だとすれば、それに無自覚でいるより、自覚的に注意深く扱った方がいいに決まっている。こうして、パワーを持つことを少しずつ受け入れるようになった。すでに書いてきたように、研究所の基盤固めの時期、私は、じたばたしながらも、リーダーとしての責任を引き受け始めていた。とにかく気をつけてきたことは、研究所のメンバーたちがリーダーに盲目的に従うようなあり方を回避すること、自分たちの目的や活動にそれぞれが個人的な思いでもって責任を感じられるようにすること、自分を含め、スタッフ同士の関係性を権力関係ではなく、親密な関係として維持することだった。

1995年の阪神淡路大震災に関するシンポジウムで、中井久夫さんが、「私の持てるささやかな権力を使って」、世の中にとって良いだろうことをしたと話すのを聞いた。

具体的にそれが何だったのか内容は覚えていないのだが、そんな権力の使い方はさらに新鮮だった。権力者が持てるパワーを意図的、積極的に使うということである。「これは大人な発想だ」と思った。若者は批判し壊すのが仕事であるが、いくつになっても批判して壊すばかりの姿は醜い。不十分なものであれ、最善と思われるものを作っていくことが大人の仕事である。そして、それは後から来る人たちによって壊され、改善されていけばいいのだ。そう思って、仕事を続けてきた。仕事は人を大人にしてくれる。

当時と比べ、私も年を取り、経験を重ね、学び、たくさんものを身につけてきた。たとえば、「女性ライフサイクル研究所を立ち上げ、二十年維持してきました」と言うだけで、その内容如何に関わらず、発言にがぜん説得力が増す。本当のところ、これはインチキだと思うが、何かを長く続けてきたこと、もっと言えば、年を取って人生経験を増すということ自体が、良くも悪くもパワーを補強する。だからこそ、人は年輩者に敬意を表してきたのだろう。

知らず知らずに増すパワーには要注意である。たとえば、私の場合、人を判断するときに、時々見間違いが起こるようになった。若かった頃、権力者に媚びへつらう人が大嫌いだったから、パワーを持つ人に物事をはっきり言う私は、権力主義者からは嫌われていた。必然的に、そんな私を受け入れ、おもしろがってくれる人は、権力主義とは遠い人たちだった。だからある意味で私は安全だった。勝手に「私のことが好きな人は良い人だ」と思っていたのだが、

年を取った今となつては、そうはいかない。私のことが好きなわけではなく、私が持っているものが好きで近づいてくる人たちがいるからだ。これを見分けるのは難しい。それに、事態はもっと複雑で、どうやら、見る眼もないが悪意もないという人々が大半なのだ。

こうなってくると、あとはきわめて個人的な価値観の問題になってくるので、私の思考についてこれない人たちもいるだろうが、私は人として信頼できて、心を開いてつきあえる人とだけ一緒に仕事をするつもりだった。と言うか、連載の初めに書いたように、一人で仕事をするつもりだったところから、絆を結びつつ共に働くという形を身につけてきたところだった。私にとって仕事は神聖なものであり（仕事は個を越え出るスピリチュアルな行為であると思っている）、仕事は世俗のなかでやっていくものであるけれども、世俗にまみれさせてはいけないものなのだ。しかし、大きな組織で働くようになると、必ずしもそうはいかない。絆を結ばずとも、人として好きでなくとも、一緒に働かなければならないこともある。親密な関係になれない人と近い距離で一緒に働くということに私はまだ慣れない。

それに、大学の先生をやっているということは、それだけで十分に権力的である。権力を支える基盤として、しばしば、①報酬を与える力、②強制力（脅しや罰）、③法的力（警察など）、④参照にされる力（同一化、魅力、尊敬など）、⑤専門家の力（特別の能力や技術）、⑥情報の力（理性的な議論やデータなど情報に基づく力）という6つの要因が挙げられるが、大学に勤めて

いると、多くの要因を満たしてしまう。ハラスメントの温床になるゆえんだ。権力と追従に関する有名なミルグラムの実験者は、これらすべての要因を持っていた。イエール大学の研究者というだけで人々から信頼され尊敬されていたので、被験者となった一般の人々は、たとえ多少人に危害を与えようと、これは意味のある重要な実験で、従っておけば間違いないはずだと考えたのである。ちなみに、大学で実験するのをやめ、民間の会社の実験ということにで、ショッピングセンターの一角でこの実験をしたところ、最後まで追従し続けた人は二割減少している。恐ろしい話だ。

正直に言えば、私がパワーや権力に対して極度に警戒してきた理由は、昔々から、下手すると自分はミニカルトの教祖くらいになるかもしれないと密かに恐れてきたからである。だから、自分で扱える以上のパワーは持たない、たとえ自分のパワーであっても、自分で扱える以上のパワーは使わないと決めてきた。パワーに翻弄されて、方向性を見失うのでは本末転倒である。年とともに人として成長することができれば、器が大きくなって扱えるパワーは大きくなるのかもしれない。詳しく知っているわけではないが、『ハリー・ポッター』は、自分のパワーを持て余す者が自分のパワーを扱えるようになっていく成長の物語であるような気がしている。パワー、あるいは権力が自由を妨げるのではなく、真の自由をもたらすためには、それを扱えるだけの器が必要で、人間を鍛えるしかない。大人であること、自由であることは疲れることだ。

旅は道連れ、世は情け

～女性ライフサイクル研究所、二十周年を迎える

⑧ネットワーク

村本 邦子

先日、神戸で、臨床心理士会の「定例職能研修会」というのがあり、私設心理相談部門の「他機関連携～その実際」というセッションの話題提供を頼まれた。この種の研修会に自主的に参加することはまずないが、誘われたらできるだけ参加するようにしている。そうでもない、一生、参加しそうでないような気もするし、何事もご縁だと思ふからだ。そして、そんなふうにネットワークはできてきたのだと思う。もしかすると意外に思われるかもしれないが、私はある特定のことにとても能動的であるが、多くのことに関してはきわめて受動的である。「旅は道連れ」というタイトルには、そんなニュアンスが込められている。

話題を準備するにあたり、企画者である信田さよ子さん（原宿カウンセリングセンター）から、「私設心理相談の実践においては、緊急の介入やリファールの必要性が生じることは珍しくありません。そのような場合、開業臨床心理士は社会的リソースを常持っている必要があるでしょう。医療機関から福祉事務所、さらに弁護士や保健師、女性センターの被害者支援員などは欠かすことのできない連携先です。本分科会では虐待・DVや性暴力といった緊急性の高い場合に、開業臨床心理士として必要な手順や優先順位の決定、クライアントへの対応のノウハウといったものまで踏み込んでみたいと思っています。モデル事例など

を挙げながら参加者のみなさまと意見交換しながら進められたらと希望します」という企画案をもらった。

あらためて女性ライフサイクル研究所の連携について考えてみた。私設心理相談の実践において（今回、初めて知ったが、「開業」という表現にはクレームが付きやすいため、政治的理由から「私設心理相談」という表現を使用するのだそうだ）、緊急の介入やリファールの必要性が生じることは珍しくないと言えるだろうか？ うちに関して言えば、必ずしもそうではない。確かに、ごく一部、緊急の介入やリファールが必要になる事例はあるが、多くの場合において、開業（それでも無視する私・・・）のカウンセリングサービスはそれだけで完結している。というより、基本的に、そのようなケースしか開業カウンセリングの枠に入っていない。

女性や子どもの被害を社会が否認していた時代、困難を抱える多くの女性たちの引き受け先はなかったし、開業カウンセリングの枠内で支援することなど不可能だったから、それ以外のこともやるしかなかった。時代が変わり、専門機関による役割分担が可能になったからこそ、研究所を法人化し、開業カウンセリングの枠で彼女たちと関わるようになったのだ。この枠に入ることでできない困難を抱える層が多くあることを承知していたからこそ、市民サービスとしての NPO を同

時に立ち上げ、支援者支援の枠組みを拡大した。できるだけ多くの女性たちがアクセスしやすい支援機関の質向上が重要だと考えたからだ。

というわけで、少なくともうちの研究所に関して言えば、カウンセリングはかなり独立した形で存在している。連携ということを考えるならば、福祉現場や学校現場での方がはるかにそれは日常的であると思う。開業の形では、個々人との契約性が強いため、いわゆる治療契約はより厳格である。もちろんクライアントの利益が最優先されることに違いはないが、たとえば福祉現場や学校現場においては、契約の主体（いわゆるステークホルダー）は様ではない。もちろん、連携がないのかと言えば、そういうわけではなく、必要に応じて、医療機関や弁護士、公的サービスなどの情報提供を行うが、基本的には情報提供に留め、より積極的に相手先と直接コンタクトを取るようなことは稀である。例外としては、たとえば、クライアントが何らかの被害者の場合、繰り返し被害体験を語る負担を避けるために、本人の同意を得たうえで連携先とやりとりをするようなことはあるし、裁判がらみのケースでは弁護士と直接やり取りをすることはある。

では女性ライフサイクル研究所における連携はどうなっているのか。個

別のケースを通じてというより、カウンセリングの前提にすでに機関としてのネットワークがある。研究所の事業は、「回復支援（いわゆる治療）」「予防啓発」「研究」の三本柱から成る。「回復支援」としては、研究所内における個人カウンセリングを中心に、カップルカウンセリング、家族療法、グループカウンセリングがあるが、その他、地域の複数の相談機関へスタッフ派遣を行っている。公式に研究所として契約を結んでスタッフを派遣しているものもあれば、スタッフが個人で契約しているものもあるが、いずれにしても、スタッフが働いている先は直接的な連携機関となり得る。たとえば、女性センターや市町村における女性相談、病院、児童相談所、学校・幼稚園、シェルター、母子寮などなど。

また、「予防啓発」の事業として行っている市民や専門家を対象にした講演や研修への講師派遣は、関西エリアを中心に全国で年間四百件を超える。行政では多くの事業がその場限りのイベントとして終わりがちで、ネットワーク構築にまで至らないことが多い、それでも、研究所の講師派遣事業のうち一割は、五年、十年と毎年、継続的な講師派遣を行い、依頼機関と安定した協力関係を維持している。担当者の交替は頻繁に起こるが、たとえ担当者が替っても、機関同士の信頼関係を維持してこれたのは、一貫して質の高いサービスを提供してきたからに他ならないと自負している。加えて、自治体や専門機関の委員の派遣など

も行ってきた。

これらすべてが研究所のネットワークであるが、一番の連携はスタッフ同士に見られる。たとえば、自分のケースに関わって、何か情報が欲しい時、スタッフに呼びかければ、瞬く間に情報が集まってくる。それぞれのスタッフが持っているネットワークは、そのまま研究所の共有財産であるという関係性があるのだ。当たり前のことではあるが、援助者が互いにサポーター的な関係性を持つことができれば、ネットワークを構築することなどできるはずもない。アウトリーチとも言える予防啓発の講演から研究所内のグループやカウンセリングにクライアントがつながってくるケースは少なくないが、これも、スタッフ間の信頼があるからだろう。何年も前に講演会でもらったという研究所のパンフレットを大事にとってあったご近所さんから勧められて相談に来たという人もいれば、緊急度の高い状況を抱えた方が、講演終了後に講師に話しかけ、思い切って相談に来たという人もいる。

また、自分たちの仕事を通じて、様々な社会資源を知っているので、直接的な連携を取らなくても、情報提供をすることができる。たとえば、厚生労働省のやっているファミリーサポート事業には、あちこちの自治体でその養成事業に関わっているため、地域の情報を含めた情報提供をすること

ができる。もっと言えば、スタッフたちは関西のあちこちの住民でもあるから、市民目線からの情報も加えられる。自分たちでやっている NPO のプロジェクトも重要なリソースである。たとえば、離婚がらみのケースにおいて、「Vi プロジェクト」(子どものための面会交流サポートプロジェクト) のサービスへとつなぐこともできる。私も立命館で教えるようになって十年以上経つが、教え子たちとのネットワークも広がった。研究所のスタッフたちがあちこちに講師として招かれていくと、その先にたまたま立命館の修了生がいたという話が頻繁に聞こえてくる。それだけたくさんの修了生たちが対人援助の現場で活躍してくれているということなのだろう。ロースクールとの協働でやってきた「司法臨床」の受講生が弁護士となって、今や女性支援の最先端で活躍してくれているというような状況もある。何より、うちのスタッフ4名は立命館の修了生である。

このように、カウンセリングの個別ケースについて、直接、動いてどこかと連携することは少なくとも、いざとなったらさまざまな情報提供が可能であるというところに最大の安心感があるだろう。ネットワークは、本当のところ、私たち自身が安心して相談活動を行えるためにあると言えるかもしれない。「最初の1年」で紹介した季刊のニュースレターは、「FLC ネットワーク」と名付けられた活動のな

かに位置づけられていた。はっきりと記憶していないが、設立当初からネットワークということを意識していたことになる。そして、このアイディアは、10 年前に立ち上げた NPO 法人「FLC 安心とつながりのコミュニティづくりネットワーク」に引き継がれた。NPO は、次のような挨拶で始められた。

十数年、女性や子どもの問題に取り組むなかで、私自身が到達した結論は、暴力は、基本的信頼感、安全感を損ない、人々のつながりを破壊し、希望を奪うものだということです。暴力は孤立感と絶望を生み、孤立感と絶望は、また暴力を生むでしょう。暴力に抵抗するには、私たちが希望をもって、同じ世界を共有するものとして手をつないでいかなければなりません。安心やつながりの感覚を強化し、コミュニティをエンパワーすることが大切なのだと思います。

私たち一人ひとりが自分の属するコミュニティに安心とつながりを感じられる関係を築き、同心円を広げていくこと、そんな同心円が仲間との関係において幾重にも重なり合っていくこと、そんなイメージを持っていた。

あらためて振り返れば、この二十年で、いつのまにか、そんなことが実現できてきたのだなあとと思う。

最後に、どのようにしてそんなネットワークを作ってきたのかについて触れておきたい。シンプルに、目の前にある人との関係を大切にし、なんでも長く続けていくこと。はっきり言って、私は、交換した名刺や年賀状の数を誇るような考えが好きではない。学会の懇親会のような場面で、たまたま意気投合して関係を結ぶというような経験もないわけではないが、それよりも、たとえばひとつのケースにじっくり関わるなかで、ネットワークができていくことの方が多い。研究所の初期、ケースを通じて、一緒に仕事をしてきた弁護士さんたちとの関係は、今なお信頼できるネットワークとして存在している。まずは顔の見える関係である。その延長線上に、機関としての関係がある。

たまたま、吉川悟さんが『システム論からみた援助組織の協働』（金剛出版）という本のなかで「組織のメタ・アセスメント」という表現を使っているのを見つけた。臨床家にはクライアント個人のアセスメントと同時に、既存のさまざまな職種、機関の特性をアセスメントし、クライアントの治療に結び付ける「即時的な援助組織」構築の専門性・技量が求められているというのだ。少し角度は違っているが、私自身は、教育の場で、「場のアセスメ

ント」という表現を使ってきた。自分とクライアントの出会いの場はどのような特徴を持つ場なのか、クライアントが生活しているのは、どのような場なのか。「場のアセスメント」とは、文脈を読む力のことを指す。

関連機関の情報がどれだけたくさんあっても、それぞれが点でしかなければ、ネットワークを形成しない。点と点が結ばれ線になり、線と線とが結ばれ面をなし、広がりを与えられるなかで網状になっていく。そのようなネットのなかに自らを位置づけること、そんな視点が必要なのだ。開業カウンセリングにおける他機関連携は、他機関との直接的なやり取りというよりもむしろ、クライアントがより生きやすい生活上のネットワークを構築していけるような視点を持ち、方向づけをしていくこと、そのためには、時に、援助者である自分たちの持っているネットワークをクライアントの生活場面に重ね合わせてみるのが有用かもしれない。今回の研修セッションを引き受けたことで、新たな出会いがあっただけでなく、数々の懐かしい再会があった。長く続けることの醍醐味はこんなところにもあるのだろう。

旅は道連れ、世は情け

～女性ライフサイクル研究所、二十周年を迎える

⑨組織

村本 邦子

「女性ライフサイクル研究所 20 周年を迎える」と題する連載を始めてしまったが、次号では研究所も、はや 23 年目を迎える。とりあえず十回あたりでいったん終えることにしよう。最終回は本タイトルに戻りたいので、今回は組織について書くことにする。初回では、組織に対する不信や嫌悪について書いた。一人で仕事をするつもりが、成り行きで仲間が増え、女性ライフサイクル研究所は少しずつ組織となっていくたのだった。

基本的に私は高度な文明を好んでいない。本心を言えば、自分でそのしくみがわからないような機械は使いたくないし、生きるために自給自足をして、せいぜい物々交換をする程度でいいのではないか

しらと思っている。だから、スローライフを選択する人たちの気持ちはよくわかる。そうは言っても、投げ込まれたところは文明社会で、今のところそれなりに適応して便利さを謳歌しているが、選択肢がなくなれば、喜んで原始的な生活に飛び込んで構わないと思っている。シンプル・イズ・ベストである。

私にとって、大きな組織は複雑な機械のようなものだった。女性ライフサイクル研究所は、1 人から始めて、2 人、3 人…と何とか私の理解が追いつく形でスタッフが増え、少しずつ組織になっていった。そして、十年経って振り返った時、自分ひとりでは成し遂げられないことをやってきたことに感動した。一人ひとり異な

る人間が複数集まるからこそ、自分だけでは決してできないこと、もっと言えば、たとえ自分が何人いてもできないことができるのだ。量の問題ではない、質の問題である。月並みな表現だが、「1+1は2ではない」という一種の化学反応のようなものだ。ひょっとすると、文明も良いのかもしれない。私も年を取り、今や車に乗り、コンピューターさえ使っている。

仕事がよくできて、よく働く人ばかりが集まったからと言って、総体として良い仕事ができるわけではない。ずいぶん昔、リクルートが伸び盛りだった頃に聞いた話だが、彼らは採用試験にユングのタイプ論テストを使っていたが、会社にとって好都合な人材ばかりを採用しているとどうも組織としては何かに欠けることがわかったので、ごくわずかの割合で、わざわざ会社に不都合な人員を採用することにしているということだった。トリックスター的な触媒があって初めてクリエイティブな反応が起こるのだろう。妙に感心して聞いた覚えがある。あちこち欠けたる人間が集まって相補いあうからこそ、面白いものができるのだ。

そんなわけで、十年経って初めて事業の面白さを知ったので、せっかくだから、もう十年だけやってみようと思った。とは言え、私には、メンバーそれぞれが主体的な組織であることへのこだわりがあった。その実現のために、それぞれが自分のやりたいことを考え、実現し、お金であれ充実感であれ、そこから報酬を得るというしくみを維持してきた。いわば

一人一人が事業主であり、その総体が女性ライフサイクル研究所というわけである。次の十年では、最初の十年で少しずつ発展させてきたこのシステムをさらに洗練させることにした。この時点でも、まだ、私と他のスタッフとの間には力の差があつたが、次の十年はそれを極力なくすこと、同時に、新しい人材を入れることにした。EAPの広がりとは無関係ではないが、会社の契約に基づく組織的な仕事も増えつつあった。

2002年に、まず有限会社を立ち上げたが、小規模組織とは言え、いわゆるオーナー会社ではない。最初は七百万の予定だったが、結果的に一千万の出資をしまい、女たちの取締役会も作った。驚くなかれ、定款も自分たちで作った。公証人役場や法務局へも行ったのだ。余談ではあるが、定款を作るために会社設立の勉強をしたが、「設立後3年は年中無休と思え」「まずは家族の理解を取り付けること。それもできないようでは、会社を回せない」というような教えがあつて、「ほう」と思ったものだ（なんていうのか、世の中のおじさま方は、そんなことを考えて会社を立ち上げるのかと・・・）。

もっとも、この作業に疲れ果て、NPO法人を立ち上げる時には司法書士を頼んだ。こうして組織の発想が出てくる。自分で何もかもやるより、得手不得手を役割分担する方が世の中はずっと機能的に回るのだ。多くの人にとっては自明のことなのかもしれないが、これぞ文明の第一歩かもしれない。大阪と京都に新しく

事務所を借り、建築家（と言っても義兄だが）におしゃれで機能的な内装をお願いし、パンフレットはデザイナーを頼み・・・と多くの専門家たちの力を活用した。文明万歳。

新しい経営システムは大まかにはこういったものだ。正社員である事業主たちは、会社運営の資金を繰り出す責任を負っており、給料を自分で決めることにする。つまり、自分が稼がなければならぬ金額を逆算して、それを稼ぎ出す。非常勤である契約社員たちは、資金繰りの責任を負わず、その代わりいわば出来高払いとなる。だから、誰かに働かされているという人はいない。どんな時間帯にどれだけ働こうと自由である。稼ぎの多い少ないは、それぞれの選択である。もちろん、本人が望めば、誰でも正社員である事業主になることができる。

ただし、事務作業はペイしないので別枠で考える。会社がらみで入ってくる仕事、チームでやる仕事については、事前に責任と報酬の割合を明確にし、計算式を決める。ものの考え方についてもその都度話し合い、見直しを続けてきたが、十年もやっていると、その手間を省くためにシンプルなルールができていく。結果的に納得したことは、大きな組織が給料の固定制を取るのはきわめて合理的だということである。完全なる公平性などない。互いの合意があるのみだ。

これで、それぞれにとって、主体的な選択としての仕事という意味付けはでき

た。あとは、良い仕事をする努力を惜しまないこと、勤勉であること、仕事を通じて社会に貢献するという意識などなど、プロフェッショナルとしての規範や姿勢は、リーダーが率先して模範となることを常に意識してきた。「子どもができたらいけないことはできない」というのに近いものかもしれない。人としての不誠実さは自分を信頼してくれる仲間たちへの裏切りとなる。これは一人で働くより強みになるだろう。突き詰めれば、人は自分のためにではなく、大切に思う人のために頑張ることができるのみである。それから、互いに支え合うことや人生を楽しむこと。こういった空気は伝染する。うちの研究所の人たちは本当によく働く。身近な人を大事にして、人生を楽しもうとする。残念ながら、まだ伝染しきっていないのは「締め切りを守る」で、いまだにもっとも厳格なのは所長だけである。

それから、スタッフ間のコミュニケーション。スタッフの数が少なかった頃は、しょっちゅう会って話し合うことができたが、オフィスが大阪と京都に分かれ、人数も増えて、働き方もバラバラになったので、以前のようにコミュニケーションがスムーズにいくとは限らなくなった。そこで、ネット上でコミュニケーションをはかれるシステムを導入した。月 1 回集まって会議をもつ、テーマを決めて定期的に研究会を持ち、年 1 回は年報に原稿を書く、年 1 回は研修旅行で一緒に勉強し楽しいひと時を過ごす、クリスマスランチなどの年中行事や、NPO の定期的なイベントはスタッフの凝集性を高める

のに役立ってきた。大変でも結果的に充実感の得られる取り組みは組織メンバーのコミットメントを高める。

スタッフが良い仕事をするという目的を共有し、組織を好きであれば、自ら貢献しようとするモチベーションは高まるだろう。女性ライフサイクル研究所はスタッフ一人ひとりの総計である。20周年記念の時に、芸術教育研究所の多田千尋さんが、スタッフのそれぞれが自分の得意分野で研究所に貢献したいと努力工夫するところが研究所の素晴らしいところだと言ってくれたが、まさにそういうふうに組織を作ってきた。たまに、「研究所にとって自分は必要なの？」という問いが浮上することはあったが、研究所が誰かを必要とするのではなく、あなたが研究所を必要とするのなら、上手に使いなさいというスタンスである。誰かが抜ければ、そこに関わる事業はなくなる。誰かが加われば、そこに関わる事業が増える。スタッフの総計が女性ライフサイクル研究所という意味はそういうことである。もとより、来る者拒まず、去る者追わずのポリシーでやってきたものだ。別の言い方をすれば、誰か一人がいなければ研究所は別のものだった。

こうして少しずつ組織の力を理解するようになる一方で、私は立命館に勤めるようになり、年々、ここでも少しずつ組織に対するコミットメントは増していった。今では、この大きな組織のれっきとした一員となっている。そして、ここでも、組織という生き物を観察し学んでき

た。最初に知ったことは、組織では必ずしも常に全力をあげて仕事をする必然性はないということだ。自営で仕事をしていると、ひとつひとつの仕事を大切に行うことが次の仕事に結びつく。私の実感としてスタッフに言ってきたことは、「ひとつ良い仕事をすれば3倍になって返ってくる。ひとつ仕事を断れば、3つの仕事を失う」ということだった。そうすれば、仕事はネズミ算式に増えていくので、仕事がなく困るということはない。自営では常に全力で良い仕事をする努力が必要だが、大きな組織の仕事のなかには、たとえばあまり中身のない形式的な会議など、全力をあげて仕事をするよりも、多少なりとも気を抜いて力を蓄える方が良いものもある。選別が必要なのだ。

同じ理由で、自営でやっていると、ほとんどが自分にしかできない仕事ということになるが、組織的な仕事となると、他の人で代替可能ということになる。その人がその人でなければならぬ理由はない。むしろ、一定の均質性が保証されたものが量産される必要がある。これは気楽なことでもある。自慢することではないが（むしろ、批判されることかもしれないが）、私はこれまでの人生において仕事を休んだことがほとんどない。皆無とは言わないが、高熱が出ても、けがをしても、子どもが病気になっても、入院しても、地震や台風がきても、とにかくどうあっても何とかやりくりして、休まず働いてきた。それが職業人の責任だと思ってきたからだ。ところが、大きな組織になれば、そこまで思いつめて働かな

い方がいい。自分がいなくても組織は回るだろう。そうでなければならないのである。この考えにはまだ慣れないが、それでも少しずつ馴染む努力をしている。

のふたつの課題は、他のスタッフたちに委ねるとしよう。

さて、研究所の今後であるが、この 4 月で、私が責任を持つ「あと十年」という約束の期限が切れた。もうほとんど私の力なしで回るようになっている。スタッフたちの心の中にはどこかで、なんだかんだ言って最後は私が何とかしてくれるだろうという期待があって、それがある限り組織は自律できないと思ったので、この 2 年ほどは本気で手を引く覚悟を示してきた。正直なところ、私の力が不要になったら、その時こそ、私が研究所をやめる必然性はなくなる。それがシステムとしての完成を意味するからだ。あといくばくか残っている課題は、当面の現状維持はできても、長期的な展望をもって事業展開ができるかどうか、次世代への引き渡しがうまくできるかどうかである。後者については、経営システムに関する私の誤算があった。正社員になったら運営の責任も負わなければならないが、稼ぎが多くなればなるほど契約社員でいるより正社員になる方が得をするシステムを作っておいたので、新しい人材が育成され力をつければおのずと事業主が増えるだろうと読んでいた。が、結果的に、多くの人は選択肢があれば、リスクを負って自営で働くより固定給で安定する方を好むのかもしれないということがわかった。そうであれば、研究所の存在の意味を書き換える方が良いのかもしれない。いずれにしても、残されたこ

旅は道連れ、世は情け

～女性ライフサイクル研究所、二十周年を迎える

⑩旅は続く

村本 邦子

設立から毎年発行している研究所年報 22 号の編集が終わった。今年の特集テーマは珍しく「家族」だ。大学では、「家族クラスター」に所属しているので、家族は中心的なテーマではあるが、私自身は、あまり「家族」という切り口で物を語ったことがない。たぶん、私にとっては、家族の境界はかなり緩くて、それがあまり明確な概念ではないからだと思う。家族の仲が悪いわけではないが（どちらかと言えば、むしろ仲が良い方ではないかと思うけれど）、家族のかたまりに対するこだわりは薄い。

幼稚園の初めてのお泊り遠足の時のことを思い出しては、母から、「みんなはお母さんと別れたくないって泣いてるのに、あんただけは目をキラキラ輝かせてねえ。薄情

なんだから」と冗談交じりに何度か言われたことがある。高校生の頃、一ヶ月アメリカへ派遣される時も同様だった。でも、それを言うなら「こちらも同じ言葉を返しましょう」という感じで、どの家族も涙ながらに空港で別れを惜しんでいるのに、うちの家族だけは、みんなニコニコしていた。田舎だったから、「女の子は家から出てはいけません」というお嬢さんが多いなかで、そんなことを言う人は家族に誰もいなかった。

逆に言えば、それだけオープンでもあり、関係のない人がひょんなことでしばらく一緒に住んだというようなこともあったと思う。詳しい経過は知らないが、父の友達の奥さんが赤ちゃんを置いていなくなってし

まったので、うちで面倒を見ていたようなこともあった。ついでながら、一緒にしてよいのかどうかかわからないけれど、父がどれだけ多くの鳥や動物たちを我が家で育ててきたか、とても数えきれない。

私自身も、学生時代、一年間、先生のお宅のお留守番をしていた時代があったが、夏休みの一ヶ月、妹や弟たちがやってきて（私は4人きょうだいの長女だ）、食事やら洗濯やら受験勉強まで面倒をみていたことがあったし、まだ子どもたちが小さい頃、従兄弟の面倒をみてやってくれないだろうかと頼まれたこともある（さすがに都会の狭いマンション暮らしなので断ったけど）。何かの事情で誰かがうまくはまるころがなくなれば、縁のあった誰かの家で面倒をみる・・・昔の家族はそんなふうではなかったのか。

思い出してもおかしいのだけれど、息子がまだ小さな頃、ふと気づくと、ファミリーレストランなんかで、よその家族の輪の中に入ってちょこんと座っているような場面があった。今なお、子どもたちはよそのお宅で大事にしてもらっているが、よその家族に自然と溶け込んでしまう性格では、ずいぶん得をしていると思う。よくよく考えてみると、夫にもそんなところがある。そして、そういう性格は、かえって人からつけこまれたり裏切られたりしないようだ。

子育てをしていると、「我が子が一番」的な親馬鹿なところもなかったわけではないが、それでも、よその子でも、よその大人でも、すぐに我が子のような気持ちになる。

そんな気持ちは必ずしも相手に伝わるわけではないし、余計なお世話だろうから、失礼にならないよう、わきまえはしているつもりだが。だから、昔から、いつかは孤児院（今は児童養護施設ですね）を開きたいなと漠然と思っていた。そしたら、下の妹が就職して手伝ってくれることになっている。

そんなわけで、私にとっては、旅の道連れは家族かもしれないし、赤の他人かもしれない。少なくとも言えることは、長く一緒に時間を共有してきた人たちは、情が刷り込まれてしまい、私にとって、ほとんど家族であるということだ。女性ライフサイクル研究所の仲間たちは、明らかに家族（すでに子孫も繁栄しているので、むしろ拡大家族）の感覚だし、家族クラスターの同僚や卒業生たちもそれに近い。とは言え、こんな感覚は一般的ではなさそうだし、今年は、急に「家族心理学研究」という授業科目を担当することになり、「東日本・家族応援プロジェクト」も立ち上げたことだし、一度、「家族」を客観的に考えてみようと思って特集を組んだのだった。

研究所の年報は、毎年、特集のテーマを決め、月一回の会議でそれぞれのテーマを議論しながら、原稿を練り上げ、皆が書き上げてから私が序文を書き、お盆前に原稿を入れるというスケジュールになっている。一応、所長として編集責任の自覚があるので、皆が締め切りを守れなかったり、うまく原稿をまとめられなかったりしても、最終的には面倒を見てきた。私が研究所から身を引くにあたって、これをどうしていく

かが、実は、検討事項のひとつとして残っている。少なくとも現時点では、私が手を引けば、継続して年報を発行していくことは難しいし、できたとしても、所長として名前を残してよいという内容のものにはならないと思う。

それで、今年は限界設定をし、4月の宿泊研修までに第一稿を仕上げる約束にしていたが、結局、これは実現せずだった（個別には守ったスタッフもいるが）。それで、後はもう面倒を見ないことにして、年報会議にも出ず、知らん顔をすることにした。どうするつもりなのか横目では見ていたが、みんな最後まで協力し合って頑張った。それで、最後の一回だけは面倒を見ることにして、結局、8月頭までかかって仕上がった。発行の締切に間に合わすには、私が序文を2日で書かなければならないという。そんな馬鹿な。みんな、どこかで私が魔法使いのように辻褄を合わせてくれるだろうと思っているような気がする。実際には、このために、一週間、休暇を返上した。結果的には、それなりに良いものができたかなと思っている。来年、もう一回だけは面倒を見てもいいかなと思っている。ただし、来年は本当に4月で終わりにしよう。

この連載で、女性ライフサイクル研究所の設立前から20年を振り返ってきた。完全に所長を退いてバトンタッチしましたというところまでいって連載を終わるのが理想ではあったが、今のところ、まだ私は所長をやっているし、一定程度まで、その役割を果たし、自分自身の仕事も担当している。それでも、この1~2年、つまり、この連載

を始め、研究所が二十周年を迎えてから、相当程度身を引いてきたのは事実だ。次の事業展開についてはもう責任を持つつもりがないので、迷いが残っているのは、上記の年報とブログに月一で連載している「今月のトピック」。年報は、研究所のバックボーンとなっているので、もうしばらくは条件付きで面倒を見て、ブログはどこかで区切りをつけようかなと思っている。

私抜きにスタッフの皆がどんなふうに働いていくか、遠巻きに眺めているが、悪くない。リーダーシップを取ってくれているメンバーたちも、それぞれの限界だったところを越えて、さらに成長を続けている。人間の可能性はたいしたものだと感嘆させられるし、若い層もそれぞれなりに頑張ってくれている。すでに若手ではなく、立派に中堅どころであるが、自分のことだけでなく、次世代を育てることをしっかりと考えてくれている。こんなふうに世の中を眺められるのは幸せなことだと思う。

もとはと言えば、大学院での専門家集団に馴染むことができず、一人で現場に飛び込んだのが始まりだった。進路変更を考えてみたこともあったが、結局のところ、心理臨床の世界でやってきた。世慣れて擦れた大人にはなりたくなかったし、志を持つ専門家でありたいと願いつけてきた。女性と子どもが直面する問題を世に問うという仕事は、ある意味で厳しいものだった。年を取りつつある今となつては、そういうことも少なくなったが、どうしても譲れない一線があつて、闘い続けなければならないこともあった。それでもやってこられたの

は、仲間があったからだと思う。

これまでも書いてきたように、関係性から言えば、私が責任を取らなければならない部分が大きかった。それだけ荷は重かったとも言えるが、自分で責任を取る覚悟さえあれば何でもできたとも言える。女性ライフサイクル研究所は、ある意味で、私にとってのラボであり、サンクシュアリだった。理想主義をどこまで実現できるかという意味でのラボであり、つねにそれが可能であったという意味でサンクシュアリだったのだ。

キャサンリン・フィッシャーの『もっとうまく怒りたい～怒りとスピリチュアリティの心理学』（村本邦子訳、学陽書房）には、「場での離反」という概念が出てくる。これは、支配的な父権文化と、周辺部に現れつつある新しい文化の両方を表すものであり、留まりながら去るという両方を意味するメタファーだ。古い関係の仕方や考えから去り、まったく新しいやり方で、現在に留まる。抑圧的な権力関係は、私たちの中にも入り込む可能性があるが、小さなグループで集まることで、女性たちは、別の種類の力を経験し、洗練させていくことが可能になる。支配と抑圧とは違うこの力は、むしろ、愛に近いだろうとフィッシャーは言っている。互いに与え、受け取り、変化し、変化させられるような相互的結びつきのなかに見いだされる力である。このような力は、参加者たちの能力を解放し、行動へと力づける。

今、私がいるのは、もはやそんな場では

ない。もっと一般社会に近いだろう。子どもの頃、「世界中を全部つなげてひとつの大きな家を作ったらいいのに！」と空想していたことがあるが、世界がみんなでひとつの家族になることはないだろう。それでも、今や、地球がひとつの運命共同体であることは間違いない。ラボもサンクシュアリも現実の一部である。どこまで続くかわからない旅路ではあるが、まだまだ学ぶべきことは多く、人生日々修行と思って努力を続けている。

旅はどこまでも続く。もとよりパッケージ・ツアーは利用しない主義だ。楽で無難な旅はつまらない。パーソナルであることで、その時々気持ちやめぐりあわせを楽しむことに開かれていたい。一人旅が好きなのわけではない。でも、基本的に人生は一人旅だ。だからこそ、その時々で縁あって一緒になった人たちとの時間を大切にしたいと思う。たまたま同じ車両に乗り合わせたというだけの人もいれば、気が合ってしばらく同行する人もある。願わくばできるだけ長く一緒に旅ができたならと願う人もある。でも、それは自分で決められることではない。何しろ、自分でも行先のわからない旅である。いろんな偶然に左右される。そんな偶然を楽しみ、唯一の我が人生を愛おしいと思う。

おわり

周辺からの記憶

1. 東日本・家族応援プロジェクト立ち上がる

村本邦子（立命館大学）

東日本・家族応援プロジェクトが立ち上がってから、三度目の東北巡業を終えようとしている。時間は少しずつ動いている。今月は岩手に行ったが、花巻から遠野、釜石、大船渡と車を走らせていると、あちこちで津波浸水を示す標識を見かけ、3.11 が過去のものになりつつあることを感じる。古いナビに頼りながら走っていると、復興道路の工事が進んで、どうやら震災前より便利になっているところもある。三陸鉄道は「あまちゃん」ブームで活気づき、北リアス線（久慈・宮古間）、南リアス線（釜石・盛間）ともに復旧し、駅員さんたちは誇らしげに働いていた。

その一方で、鉄橋が流された JR 山田線の宮古・釜石間はまったく復旧の見通しが立たないという。三陸鉄道の北リアス線と南リアス線をつなぐ線だ。赤字路線だったこと、黒字企業の JR 東日本に国が補助金を出せないというのが理由らしい。「たぶんずっと無理でしょう」と地元の人たちは肩を落としていた。今後、ますます、表から見える復興とその陰に隠れた部分のギャップは大きくなっていくことだろう。ある支援者が、「復興に向かって行動することが、自分たちをさらに苦しめる結果にならないかと懸念している」と言われたことが耳に残っている。

早くも忘却の波が大きく押し寄せている。繰り返されていることの大半は、ほとぼりが冷めると忘れ去られてしまうものである。1964 年と 2010 年はどこか違うのだろうか。同じ過ちを繰り返さないために出来ることのひとつが忘れないことだ。そのために、周辺からの記憶を記録する。

（2013 年 11 月）

2011 年 3 月 衝撃

2011 年 3 月 11 日、衣笠のキャンパス内を歩いていて、軽い眩暈を感じた。過酷なスケジュールが続いており、海外出張から帰ったばかりで、もうひとつの海外出張が控えていた。要注意だと思った。間もなくして、それが地震で、東北が大変なことになっているらしいというニュースが耳に飛び込んできた。私たちは確かに同じ大地の上に立っている。翌日には立命館で日本集団精神療学会の大会が開催され、震災の影響で来られなかった講師があり、その影響を乗り越えて何とか京都までたどり着いたという参加者があった。大会長の藤信子先生より「歴史のトラウマ」をテーマにした招待ワークショップを頼まれていたので、新たな「歴史のトラウマ」が生まれようとしていることに圧倒される思いで、何とか役割を果たした。誰もが起こっていることをうまく呑み込めず、ある種の昂奮状態にあった。おそらく日本全国がそんな感じだったろう。

翌朝、成田経由でニューヨークへ飛ぶことになっていたが、飛行機が飛ぶのかどうかも覚束ない状況だった。欠航となれば、それはそれで仕方あるまいと、とりあえず成田まで行ったが、成田では激しい余震と同時に地震警報が飛び込んできた。いったいこれから日本はどうなってしまうのだろう。足元がグラグラ揺れ、世界にひびが入ってしまいそうな予感を胸に、それでも飛行機は飛び、日本を後にした。長いフライ

ト中、眠れぬままに何本か映画を観た。そのなかには、生々しくショッキングな「ヒアアフター」も含まれていた。日本では 2 月中旬から公開していたが、大津波のシーンが震災を連想させるということで、3 月 14 日に上映中止になったものだ。

ニューヨークから列車に乗ってニューヘブレンへ。イエール大学の先生方に暖かく迎えられたが、みな眼に涙を浮かべながらお見舞いの言葉を述べ、被害状況を尋ねてくれる。海外の友人たちからも安否を確かめるメールが入り続けていた。日本にいれば関西と東北は遠いが、小さな島国をひとたび遠く離れてしまえば、距離などないに等しい。自分や身近な者に直接的被害はなくても、アメリカではあたかも被災者であるかのように扱われた。口々に見舞いの言葉をかけられ、戸惑いつつ「私は大丈夫だったんです」と応えながらも、「ありがとう」と感謝を表する役割を取るようになった。

被害状況を十分に理解できないまま旅立ったが、あちこちで衝撃的な映像の断片が眼に飛び込んでくる。日に日に、そんな大変な状態にある「祖国」を捨て置いて、こんなところで仕事をしている場合だろうかという罪悪感に苛まれ始めた。自分の語彙に「祖国」という語が生まれて初めて加わった瞬間だった。多かれ少なかれ、国外にいる日本人は似たような状況にあったのではないだろうか。3 月 16 日、東海岸から西海岸へ飛び、サンフランシスコにある協定校 CIIS を訪れると、日本人留学生たちが大変な状態だからセルフヘルプグループを立ち上げるというので、行ってみることにした。

彼女たちは、日本の惨状が報じられてか

ら、テレビの前にくぎ付けで、飲まず食わずに近い状態で、「今すぐにも東北にボランティアに行くべきではないか」と思い詰めていた。心理的には、あきらかに被災状況にあった。国外に暮らしていた日本人についての状況を聞くと、この時期、たとえば関西や九州に暮らす人たちよりも、国外に暮らす日本人の方が、心情的にはずっと東北に近かったと言えるかもしれないと思う。一方的に入ってくる情報に圧倒され、家族や友人、大切な人々を置いて遠くに出てしまった自分を責め、無力感や孤立感もある。「今すぐ被災地に飛び込むこともできるが、今回は長期戦になる。よく考えてから動くこともできる」と助言しながら、自分自身のことを考えていた。

人をボランティアに駆り立てるのは、その問題と自分との距離感であろう。他人事だと思えなければ、人は動かざるを得ない気分になるものである。災害との距離は、物理的距離だけで測れるものではない。自分の暮らす土地で災害が起きれば、当然、距離は近くなるが、たとえその地に暮らしていなかったとしても、自分の故郷であったり、自分にとって大切な人が暮らしていたりすれば、心理的距離はぐっと近くなる。もっとも、事件や災害が起こるたびに、誰もが繰り返しマスメディアを通じてその悲惨な映像に晒されることになる昨今、報じられる出来事が大きければ大きいほど、その出来事との距離は近づいていくだろう。その一方で、時間経過に伴い報道に触れる機会が減っていけば、あっという間に忘却の彼方に沈んでいくことになる。

ふだん西日本で仕事をすることの多い私にとって、東日本は、それほど近い土地で

はなかったが、災害の前後ひと月、ほとんど日本にいなかった私は、遠く海外から日本を思い、いたたまれないほどの罪悪感とともに距離感覚は限りなく近づいていった。加えて、あろうことか、この時期、私は休暇を取ってハワイで過ごしていたのだ。3月21日にサンフランシスコから帰国し、22日に大学の卒業式に出席して、23日から家族で息子の留学先を訪ねる予定になっていた。キャンセルすることを何度も考えてみた。どう考えても、結論は見えていた。旅行を1週間キャンセルして自分が現地へ行ったとして、この状況では何の足しにもならないことはわかりきっていた。

私には、阪神淡路大震災の時の経験がある。あの時は、震災1週間後から半年間、毎週、現地に通ったが、自分の生活は半年で日常に戻った。被災の中核にいた人々にとっては、いつまで経っても拭い去ることのできないものが残るのに、周囲の者たちにとっては、いつしか遠い過去の出来事になり、次々と新たに起こる大きな事件や災害に関心が移っていくのだ。今回は自省の念をこめ、「衝動に流されて動くのはやめよう。責任を持って、細くとも長く自分のこととして関わり続けることのできる方法を考えよう」と思った。二十数年にわたってトラウマに関わってきた経験からも、災害直後のこの時期、心理面でできることはまったく限られている、わずかながら経験と年齢を重ねた者として、少しは賢明に動きたいと思った。

災害の中心部にいれば、選択の余地なく大きなエネルギーの渦に巻き込まれてしまう。災害との間に距離があれば、選択肢が増える。それは基本的に偶然によるが、意

図的選択によって変化もしていく。今回は遠いけれど、次回は真っ只中にいるかもしれない。選択肢があるのなら、自分に与えられた条件を最大限活かすことのできる選択をする方がいい。自ら中核に飛び込めば、否応なく距離感のないところに自分を置き、渦に呑み込まれてしまうだろう。そういう人たちも必要だ。現地に飛び込んで無我夢中で行動し、その場に漂う空気を全身で感じた若者たちのエネルギーは尊く、未来の力になっていくことだろう。でも、自分は今よりそれほど若くない。

ハワイ行きの飛行機に乗った人々は、みな明らかに言葉少なく、身を縮めていた。空港へ降り立って初めて、全体が「フー」と大きく息を吐き出した感じがした。いろんなことが自粛されていた時期である。ほとんどの人は、震災前に旅行を計画し、一度はやめるべきかどうか迷ったことだろう。楽しみに計画していたのに、選択の余地なく行くことができなかった人々、ひょっとすると永遠に不可能になってしまった人だっていたかもしれない。避難する人もいたようだし、あまりの重荷に早く逃げ出したかった人もいたかもしれない。

ハワイへ着くと、中学時代からラッパーをしていた息子が、初めて英語のラップ”Pray for Japan”を書き、現地の友人たちと、キャンパスやら街中のバーやらラジオにまで出て、チャリティーライブをしていた。素直に自分のいるところで自分にできることをするというシンプルな姿に、少し救われる思いがした。私にもきっと何かやれることがあるだろう。

2011 年 5 月 閃き

ラファエル（1995）によれば、地域社会を災害が襲うのは、池のなかに石を投げ込むようなものである。その波紋が地域社会全体に広がって、さまざまなところに時間的にずれて到着し、影響を及ぼす。この波紋はすでに影響を受けている部分をさらに揺さぶり、中心に近くてその力がまだ衰えていない場合には、大きな衝撃を生むことになる。地域社会という池の大きさ、それに投げ込まれた石の大きさとその衝撃の度合いによって、池のなかの状況は最終的に変化したり、しなかったりする。今回の災害の場合、投げ込まれた石は巨大であり、しかも投げ込まれた場所は 1 ヶ所だけではない。時間差をもって、あちこちに大きな石が投げ込まれ、ひょっとするとこれからもまだ投げ込まれないとは言い切れない。あちこちの中心から広がった波紋が互いに影響を及ぼし合い、増長し複雑化し続けている。

東日本大震災の特徴は、地震、津波、原発という三種類の複合的な災害がもたらされ、その影響は空間的にも時間的にも途方もなく大きな広がりを持ち、予測不能性を含んでいることにある。とくに原発に関わって、日本というシステムは、根源的なところで問い直しの必要を迫られている。戦後の復興が経済効率に照準を合わせてきたことの過ちは、バブル経済の崩壊で露呈し、今回の震災で完全に底をついた。ここから先は、単なる復興ではなく、長期的視点をもって、私たちの社会がこのシステムをど

のように立て直していくのが問われている。被害規模から言って、どれだけ多くのボランティアが長期に渡って支援に入ったところで、一人ひとりにケアが行き届くことは不可能である。大きな喪失と混乱を抱えながら、生き延びた人々は生き続けなければならない。家族は生活を営み、子どもは成長していくだろう。それぞれがそれぞれの場でできることをやっていくしかない。

そんなことを同僚の団士郎さんと話していたら、むつ市の児童相談所の杉浦裕子さんから、むつ市図書館で漫画展をやってももらえないだろうかというメールが届いたという。そうそう、確か、前に、むつ市図書館のギャラリーが素晴らしくて、「こんなところで漫画展ができたらいいなあ」と話していたと聞いたことがある。むつ市では津波の影響はほとんどなく、震災後も変わらない生活を送っているように見えるが、海上自衛隊で働くお父さんが多く、被災地に派遣されて、余震が続くなか、心細い日々を送った家族が多かったという。また、出稼ぎなど県外就労している家族も多く、東京電力福島第一原子力発電所で死亡が確認された社員 2 人のうちの 1 人はむつ市出身だったそうだ。下北半島には、東通り原発や建設中の大間原発、六ヶ所村の日本原燃再処理工場がある。マスコミに登場しはしないが、こんなところにも、すでに大きな波紋が複雑に影響を及ぼしあっているのではないか。

「それ、グッドアイデア！青森から東北を 1 県ずつ南下していこう。漫画展にちょっとプラスして、団さんや私がこれまであちこちで続けてきた支援者向けワークショップや子どもたちのための遊びワークシ

ョップなんかもやってみたらいいかも」と話が盛り上がり（というか、私が勝手に話を盛り上げ）、結局、この企画を立命館大学大学院応用人間科学研究科のプロジェクトにすることにした。今回の大きな災害に対して、多くの大学が自分たちの果たすべき役割や使命について考えていた。立命館大学はもちろん、私たちの所属している応用人間科学研究科は、「対人援助学の創造」を掲げて十年前にスタートした専門職大学院であり、「研究科として何かすべきではないか」という声が上がっていた。私はたまたま副研究科長をしており、中心になってお世話すべき立場にあった。研究科の理念である「連携と融合」にもばっちりフィットするではないか。

早速、同僚の中村正さんに持ちかけると、「いいじゃないですか。私も何かやりましょう」と賛同してくれ、研究科長の荒木穂積さんも「それはいい」と言ってくれた。他の先生方は「いいけど、どうもよくわからないなあ」という反応だったが、少なくとも反対の声はなかった。そして登場するのが、もう一人の重要人物、クレオテックの平田さなえさんである。イベントをやるなら誰か専門にやってくれる人が必要ではないかと考えた時、突然、頭に浮かんできたのが、8 年ほど前、コミュニティ心理学会を立命館でやった時にお手伝い頂いて、素晴らしいプロの仕事を見せてもらった人だった。その後、接点はなく、「さなえさん」しか覚えていなかったのだが、応用の事務を担当してくれていた長谷川敏子さんに聞いてみたら、「それなら、平田さなえさんでしょう。ちょうど今日来ますよ」ということで、とんとん拍子に平田さんと結びつ

き、「是非、お手伝いさせてください」という運びになった。

これまでいろんな企画を立てて実行してきたが、企画がうまく進む時というのは、面白いように不思議な偶然が重なるものである。私はこれを「天の導き」と呼んでいるが、これはきっと集合的無意識の次元で（単に社会的次元で言えば良いのかもしれないが）大きく何かが動いていることを表しているのだと思う。ここでも災害の影響が大きな波紋となって呼び合い、重なりあったのだ。きつとうまく行くだらう。後は、企画の具体的な詰めと予算だ。まあ、なんとかなるだろう。いや、なんとかするしかない。やるならば十年である。団さんと中村さんには、「万が一、予算がなくなったら、私たち3人で割り勘して、最低限の企画を十年続ける覚悟じゃないとダメだけど、いい？」と念のための確認をして、動き始めた。

2011年7月 準備

企画を詰めるにあたって、まずは、自分たちの持つ力を見定めることが重要だろう。今回の災害では、複数の機関が「こころのケア・チーム」を結成して、体系立てた危機介入を行っていた。玉石混交であったことは間違いないが、それでも、暗中模索するしかなかった阪神淡路大震災の時と比べると、格段に洗練された方法で介入が行われたと思う。でも、私たちのやろうとするプロジェクトは、「こころのケア」とはちょ

っと違う。距離や時間的条件を考慮すれば、細く長く関わりながら、遠くにいる私たちが何かをするのでなく、コミュニティに本来ある力を活性化できるようなきっかけを作ることができるといい。

私たちの弱みは遠方であることと、多忙な日常を送っていること。頻繁に長期で現地滞在することはできない。強みとしては、私たちの研究科は、心理、教育、福祉など対人援助に関わるさまざまな領域の専門家たちから成り立っており、支援対象は多岐にわたる。このリソースを活かして、情報提供や研修、コンサルテーションなど行えるかもしれない。大学ということで信頼を得やすいだろうし、研究費や実践プロジェクトに対する資金も得やすく、組織としてのネットワークもある。まずは、イベントという形で、定期的に東北を巡る舞台セットを作ることだ。その中心は団さんの漫画展。これは、今回、一番強力なリソースとなる。そこに週末のプログラムをセットし、毎年、定例でやってくるサーカスカメリーゴーランドのような地域のお楽しみにする。

これまでの実践から学んできたことは、コミュニティに働きかけようとする時、何か仕掛けを作るのがよいということだ。90年代、「子育て支援」という言葉がなかった頃、子育て支援の企画でよくご一緒していた人に、東京おもちゃ美術館の館長多田千尋さんがいる。多田さんは心理学者でも何でもないが、おもちゃや遊び、芸術教育を通じて、実にスマートに子育て支援の場を拓いていた。「子育て支援をしますから集まってください」と呼びかけるよりも、「おもちゃの修理をしますよ。壊れたおもちゃを持ってきてね」と呼びかける方が親子は集

まってくる。そうやって人と人との関わりが生まれる場があるとコミュニティは活気づく。

阪神淡路大震災の時もそうだった。震災直後より神戸に入り、あれこれ試して最終的に行き着いたのは、YMCA の子どもの遊びボランティアだった。避難所で子どもたちと遊び、スタッフミーティングに参加していたが、これはとても自分が機能するやり方だった。基本的には子どもと楽しく遊ぶのだが、子どもたちの何気ない遊びのなかに、時折「あれ？」と思うトラウマ反応や表現がある。必要に応じて専門的対応ができるし、ミーティングでボランティアの困惑に助言できる時、心理の専門家であることもまんざら無駄ではないなと思ったものだ。日常、専門家としての枠組みのなかで人と関わる時、どこか自分を切り売りしている気分になることがある。こんなふうに、一人の人としての自分と専門家としての自分が統合されたあり方で人と出会う方が好きだ。今回もそんな出会いができるといい。こういった出会い方は、その後、DV被害に遭った母子支援プログラムなどにも活かされてきた（村本、2008）。

多田さんのところでおもちゃや遊びのアイデアをもらおうと連絡を取ったところ、さすが東京おもちゃ美術館は、2 週間で 1 万個のおもちゃを集め、4 月 7 日から、陸前高田、気仙沼、宮古など被災地 70 か所に遊び支援隊を派遣し、遊びプログラムと遊び環境セットの寄贈を実施していた。救援物資のようにおもちゃを送るのでなく、おもちゃコンサルタントが遊びのコンテンツと環境を届ける活動をしているという。その多田さんからは、「私が知る限り、十年も

の長期スパンで被災地支援を打ち出しているのは、村本さんだけだと思います。さすが！」と誉めてもらい、遊びの環境セットのアイデアを頂いた。遊びの環境セットとは、4 畳半分の硬質段ボールで作った床材と赤いプラスチック段ボールの箱に入った 50 個ほどのおもちゃを合わせたもので、一流デザイナーによるものだという。夢は膨らむ。ところが大学の助成金申請結果が思うように行かず、遊びの環境セットを購入する予算がなくなってしまった。7 月に出会ってすっかりしょげている私を見て、多田さんが「お金はいいよ、村本さんに 2 セットあげましょう」と言ってくれた。

次は、各地の受け入れ機関を探すことだ。地域としては、もっとも被害の大きいところ、被災状況の深刻なところよりは、むしろ、逆に、イベントができるだけのコミュニティの機能が残っているところで、イベントに参加してみようかなとやってくる力の残っている人々のいるところを考えてみる。企画の趣旨自体が、人々やコミュニティのレジリエンスを高める予防的働きかけにある。イベントに参加してくれた人々が、ほんの少し元気になって、周囲の人たちをほんの少し力づけてもらえたら、コミュニティ全体がほんの少し元気になるはずだ。協力機関には負担もかけるが、それによって元気になるような企画にしたい。現地の支援者たちと絆を作り、そこを基軸に情報や応援のメッセージを送り続けることができるだろう。いわゆる後方支援である。これは、西日本を中心にした複数の地で婦人相談員の継続的支援を行ってきた体験に基づく（村本、2010）。

とは言うものの、私たちが被災地に入っ

てやるのが結果として支援的に働けば幸いだが、それは何の保証もない。ただひとつできるはずのこと、つまり私たちのミッションは、被災と復興の証人（witness）として存在することである。長くトラウマ・セラピストとして働いてきたが、他者にできることなど無力に等しいことを知っている。できることと言えば、不運や苦境を生き抜いてきた人の証人（witness）として存在することに尽きると思ってきた。

都会で便利な生活を営みながら、いつの間にか 54 基もの原発が作られていたことを認識していなかった自分は、無関心という形で加害者側にいた。たとえば、これまで研究してきたホロコーストを例にとると、犠牲になった人々の存在を忘れ去ることは犯罪者の意図に加担することを意味する。逆に、その存在を心に刻み、歴史の証人となることは抵抗を意味するのだ。距離があるから見えないこともあれば、距離があるからこそ見えることもある。時間が経っても忘れ去ることなく、コンスタントに関心を持ち続け、被災地の人々が、それぞれなりの復興の物語を創っていく過程を歴史の証人として見守ることができたら、遠くにいる私たちも私たちなりの復興の物語を創っていけそうな気がする。

夏休みをはさんで、9 月、いよいよむつでのプロジェクトがスタートする。

～続く～

文献

村本邦子（2008）「DV 被害を受けた母子への二次予防的介入」『コミュニティ心理学ハンドブック』（日本コミュニティ心理学会編）東京大学出版

村本邦子（2010）「支援者支援という対人援助の可能性～女性支援構築のための婦人相談員研修の実践から」『対人援助学の可能性―「助ける科学」の創造と展開』（望月昭、中村正、武藤崇、サトウタツヤ編）福村出版

村本邦子（2012）「東日本・家族応援プロジェクトを立ち上げて」『コミュニティ心理学研究』第 15 巻 2 号 55-65 頁

ラファエル, B.（1995）『災害の襲うとき』（石丸正訳）みすず書房

周辺からの記憶

2. 震災半年後の東北へ

村本邦子（立命館大学）

2014年2月18日、東日本大震災シンポジウム「災害後コミュニティのレジリエンスを引き出す支援とは」を開催した。被災地の支援者たちを招き、震災から3年を振り返って、どの時期にどのような支援が求められたのか、それに対して、外からやってきた支援がどのように役立ったのか、役立たなかったのか、今後のニーズはどう変化していくのかなどについて語ってもらった。ゲストは、ハーティ仙台の八幡悦子さん、ビーンズふくしまの中鉢博之さん、子どものエンパワメントいわての山本克彦さん、いわてGINGA-NETの八重樫綾子さん、臨床心理士の河野暁子さん、きょうとNPOセンターの野池雅人さん。詳細はまた別の形で報告するが、それぞれに異なる視点から、異なる地点において時間経過とともに実践の形が変化してきた様子がわかり、重層的で興味深い話題提供だったと思う。

とくに印象的だったことは、阪神淡路大震災やその他の被災・被害体験が原体験としてあって、そこから東日本大震災への向かい方が生まれてきたということである。今回の体験は、またそれぞれの原体験となって、来るべき未来の災害への向かい方へとつながっていくのだろう。過去から学ぶとよく言うが、私たちのプロジェクトが院生たちを巻き込む形で展開してきたことを良かったと思う。しっかり現在から学び、未来につなげて欲しい。もちろん私たち自身もだ。福島の中鉢さんから、証人としての価値は十年経って初めて少しわかるのかもしれないと言われたが、まったくもったもた。今回は、私が経験した震災半年後の東北について記述する。

2011年9月
旅支度

7月2日、応用人間科学研究科の十周年
記念シンポジウム「東日本大震災と大学の
役割～応用人間科学研究科に期待されるこ

と」を企画した (<http://www.ritsumeai.ac.jp/acd/gr/gsshs/10shunen2.html>)。中村正さんの基調講演「応用人間科学研究科がめざしてきたもの～対人援助学の創造とその可能性」(<http://www.ritsumeai.ac.jp/acd/gr/gsshs/10shunen/10shunen%20Professor%20Nakamura%20speech.pdf>) に続き、きょうと NPO センターの深尾昌峰さんが「東日本大震災とボランティア活動に期待されること」、徳田完二先生が「東日本大震災とボランティア活動に期待されること」、藤信子先生が「東日本大震災と対人援助職に期待されること～災害支援者のためのグループから考える」の話題提供を行い、佐藤敬二先生（学生部長）と荒木穂積先生（研究科長）がコメントをした。東日本大震災から3ヶ月の学生と教員の動きが紹介されるとともに、もっと根源的な、ボランティアとは何か、市民性と専門性、復興と新しい社会システムの構築へ向けた視点などが提示された。それらを繋ぐものとして、応用人間科学研究科と対人援助学がある。深尾さんは「東北から日本を変える」と言った。研究科が次の十年、このプロジェクトを抱えていくことには意味があるだろう。

8月は中国蘇州へ行き、屋久島へ行ったが、意図せず、このふたつの体験は、私にとって東北のコミュニティへ入るための一種のイニシエーションとなった。それはつまり、人々が互いに頼り合うなかでしか物事が回っていかないコミュニティのあり方について納得するということである。たとえば、どこかへ行きたいと思っても、誰かが車を出してくれない限り動けない。人とつながっていれば、情報は口伝えであって

いう間に届いてくるが、自分を閉ざしていれば、何もわからないし、何もできない。やりたいこと、したいことを主体的に明確に持っているのはストレスが溜まるばかりで、むしろ、ぼんやりと、ああだったらいいなあ、こうだったらいいかなあと思いつつ、時をやり過ごして、チャンスがあれば実現するもよし、しないもよし……という存在の仕方が適しているのである。ついでながら、9月初めはローマへ行き、石畳のアッピア街道をヒタヒタ限りなく歩き、カタコンベや骸骨寺を見て、歴史と文化の奥行にあらためて謙虚な気持ちになった。欲望の塊としての我が身には一種の禊のような旅だった。

震災半年後、初めて向かう東北はどんな様子だろうか。7月半ば、東京へ行った時、大阪と比べて暗いことに驚いた。節電のために街全体が文字通り暗いのだ。4月、鳴門へ渡るトンネルが節電で真っ暗だったことはあるが、関西に暮らしていると、節電はあっても日常に差し障るほどではない。東と西とではずいぶん空気が違う。少し緊張しながら、東京、宮城、岩手、青森と北上する旅に出る。最終目的地はプロジェクト開催地むつだが、道中、プロジェクト立ち上げのパートナーである平田さなえさんと一緒に、フィールドワークを兼ね、プロジェクトの協力者や協働機関を探して営業するのだ。

2011年9月19日
東京、

国境なき医師団

まずは、東京駅で下車して、古くからの友人で、国境なき医師団 (<http://www.msf.or.jp/>) に所属する河野暁子さん（臨床心理士）と落合い、11月に予定しているシンポジウムの打ち合わせを兼ねた情報交換。国境なき医師団については耳にしたことがあると思うが、1971年にフランスで設立された NGO で、ボスニア、ソマリアなどの紛争地、中国四川、ハイチなど自然災害の被災地でも緊急医療援助活動を行ってきた。世界に28の事務局があり、1992年には日本事務局が発足している。東日本大震災でも、発生の翌日、3月12日から医師や看護師を含む医療チームと臨床心理士で構成された心理ケアのチームが連携し、援助の届きにくい孤立被災地や避難所を移動診療しながら、高齢者や子どもなど弱い立場に置かれた人びとへの診療、医薬品・救援物資の配布などを行った。

河野さんは、国境なき医師団の心理士として、2006年からパレスチナやイエメンに派遣された経験を持つが、帰国中に震災が起こり、現地受け入れ窓口となった。医師団は定型メニューを持っており、窓口を中心に、現地の心理士を要請し、海外から心のケアチームを通訳とともに入れて、コーピングを強化する一時介入等を行う。しかし、今回は、外国人チームが通訳とともに入ることに対する現地からの抵抗が強く、現地のニーズに合わせ、現地のシステムの中に入って活動することが求められた。河野さんのこれまでの活動先では、外国人が支援に来たことで安心する様子が見られ、

パレスチナでは、彼らの置かれた状況を世界に知って欲しいと国際 NGO は歓迎され、イエメンでも、アフリカから逃げてきた難民は、外国人である自分たちを見て、ここは安全だとわかったと言ったという。たしかに、外国人の意味は状況によってずいぶん違うだろう。

宮古市田老では現地の医療機関や保健師と一緒に活動し、南三陸ではカフェという形で人々と話をしたり、子どもと工作したりしたそう。支援する側がアウトリーチするのと、相談室でクライアントとお会いするのでは全く違う。カウンセリング、心のケアというのは災害現場で支援に入る時、とても使いにくい言葉だったという。前号に書いたが、これは阪神淡路大震災の私自身の体験と合致する。あれから15年以上経ってカウンセリングがこれほど一般的になってさえそうなのだ。ケアは、非日常にではなく、日常のなかに組み込まれるべきだと思う。国境なき医師団が行うのは緊急支援なので、河野さんはしばらく医師団を離れ、東北に住んで支援を続けるそう。11月の再会を約束して別れる。

2011年9月20日 仙台

宮城でのプロジェクト開催可能性を探るため、東北新幹線で仙台まで出て1泊し、翌朝から営業回りに出る。これまで20年以上、女性ライフサイクル研究所で事業展開してきたが、営業というようなことは無

縁だった。ただ縁をつなぎながらニーズに応え、楽しく仕事を引き受けてただけだったが、ボランティアとなると売り込みが必要になるなんて、何だか皮肉な感じもする。ニーズがこちらにあるのだから仕方ないか。もともとこの手のことは好きではない。自分の思いを熱く語ることはできるし、それが結果的に他者にアピールすることはあっても、何かを売り込むというような目的を持った出会いがそもそも嫌いなのだ。営業というツールを介したフィールドワークと捉えることにする。

最初は、人のついででアポを入れてあった「せんだいメディアテーク」(<http://www.sendai-media-tek.jp/>)を訪ねる。メディアテークは、仙台駅前からまっすぐ延びた定禅寺通り沿いにある仙台市の複合文化施設で、全面ガラス張り、支柱のスケルトン構造が外から見え、中からは街路樹が見える。きわめて現代的、いや未来的と言った方が良いかもしれない。設計中に阪神大震災が起きたことから、数百年に一度の大震災を想定して作られ、震度6強の揺れに耐え、被害は最上階の天井や1・3階の一部のガラス、太陽光設備などに留まったことで話題になった。それでも被害額は130億を越えるという。5月3日より活動再開し、1階のオープンスクエアで交流広場や関連イベントを行っていた。

企画・活動支援室室長の甲斐賢治さんと話したが、こちらのアイディアを伝えると、「支援の棲み分けがあり、メディアテークはフィルムやアート系、どちらかと言えば、もう少し小さな女性団体や子育て支援機関などが適切なのではないか」とのことだった。アートや舞台関係の施設では機能するところが限られており、どこも施設が満杯

状態だという。会場だけでも借りることはできないかと予約を見てもらったが、今年度はすでに満杯、来年度さえわずかな空きがあるだけだった。

お昼を食べるところを探して三越に入ると、「せんだい男女共同参画財団エル・パーク仙台」(<http://www.sendai-l.jp/>)の看板を見かけたので、立ち寄ってみることにする。まずはこちらの趣旨を説明し、女性の状況について尋ねてみるが、「女性の問題はあまり上がってこない。DV相談もあるにはあるが、避難所では声も挙げにくく、仮設に入ってからだんだん増えるのではないかな。行政に比べ、民間の方がアクティブである」との話だった。企画は駅前にある「エル・ソーラ仙台」が担当しているということで、電話でつながってもらったが、やはり企画がすでにいっぱい、共催は難しいとのこと。

次に、「仙台市市民活動サポートセンター」(<http://www.sapo-sen.jp/>)へ行ってみる。「さまざまな団体がマッチングして活動しており、ここにはたくさんのニュースが集まってくる。ターゲットをピンポイントで特定してもらえと考えやすい。これまでないような内容かもしれない」と首を傾げられた。仙台市にこだわらないならニーズのあるところもあるかもしれないとのことで、今後も情報交換させてもらうことにする。

8月の段階で、児童館や市民センター等にもアクセスし、復興支援ということで多くの団体が押し寄せ大変なのだとは聞いていたが、実際、仙台は当面イベントラッシュで、会場はどこも満杯状態である。仙台はアクセスが良いため、関東から多くの企

画が持ち込まれ、イベントチラシや関連ニュースを見ても、ありとあらゆるイベントが予定されているような状態だった。本音は有難迷惑というところだろう。

9 月 20 日 宮城明泉学園

午後は、仙台駅から地下鉄で 20 分ほどのところにある宮城明泉学園 (<http://www.meysen.ac.jp/top.htm>) を訪れる。震災直後から活発な支援活動を展開していたキリスト教系の幼稚園である。団遊さんの紹介で 6 月より連絡を取っていた副園長、武浪忠さんに話を聴く。この園は、45 年前、日本に伝道をとというマッカーサーの政策でやってきたアメリカ人宣教師 2 人が、組織の思惑によって制限されるような働き方に満足できなくなり、自分たちの子どもの教育も考え、学校を創ろうと安い丘を買ったところから始まった。70 名の園児でスタートし、11 年目には大きな住宅地ができて 2 校目がスタート。英語教育を行い、通園バスを走らせ、地域のコミュニティセンター的な役割を果たすようになった。現在 700 名ほどの園児がいる。

仙台は東西に広いので、内陸部であるこのあたりは被害が小さく、現在はほとんど通常の生活に戻っている。保護者の中には失業や経営悪化があり、それがどれくらいのものなのか把握できていないし、身近な問題としては、原発による放射線量がどれくらいになっているのか、給食などに使用

している材料がどこの産地なのかという問い合わせもあり、新年度の園児募集に向けての対応がある。沿岸部では被害が大きく、犠牲者もたくさん出たので、幼稚園仲間の話を聞くと、大人が無事で子どもが亡くなった例も少なくなく、「なぜ」「その場にいたかった」と悩む大人の話がたくさんあって、これからそういう層に何らかの支援が必要かもしれないと思うと言う。

震災直後、校友より世界飢餓基金が受け入れ先を探していると打診があった。アメリカのジャンボ機で運ばれてきた支援物資が横須賀基地経由で入ってきたので、これも校友の運送会社からトラックや倉庫を提供してもらって物資を受け入れ始めた。日本国際飢餓対策機構 (<http://www.jifh.org/>)、CRASH JAPAN (<http://crashjapan.com/~crashwp/?lang=ja>)、サマリタンズ・パース (<http://www.samaritanspurse.jp/>) の 3 団体と協力した。サマリタンズ・パースは国際的な災害支援団体で、スマトラ地震やハイチ地震でも民間団体としていち早く現地に入って支援をした実績がある。常に災害用支援物資を世界数か所に保管しており、災害が発生すると災害場所から一番近い倉庫の物資を現地に届けるシステムになっているのだそうだ。今回は、震災 3 日後でチャーター便に物資を積み、米軍の協力を得て、震災 1 週間後、アメリカから横田基地、仙台空港を経て、仙台市内の倉庫に 93 トンの物資が運ばれてきた。物資は、生活用品キット (タオル・石鹸・歯ブラシ・シャンプー等)、毛布、バケツ、ブルーシートなど。

最初、どこに運べばいいのか、あちこちの災害対策本部に問い合わせたが、避難所に運ばれると、数が足りなければ不平等に

なるということに必要な物資が倉庫に積まれたままになっていることがわかった。たとえば、おにぎりが人数に1個足りなければ、誰かが分ければすむことだが、そういう融通ができない。これではだめだとスタッフとチームを作り、必要なところへ個別に届けることを始めた。ハワイからリュックひとつでやってきたマイケル・アンドリュースさんという人が大活躍した。まったくの個人で、世界のどこかで災害があると、すぐに駆けつけて一定期間、支援活動をして帰るのだそう。危機対応の国際NGOは知っているが、世の中にはそんな人もいるのだと初めて知った。

被災者のニーズと支援団体の供給のアンバランス、ミスマッチがニュースで何度も取り上げられたが、今回のような大震災では、自治体の対策本部でさえ機能していなかった。実際、庁舎が流された自治体もあったし、支援物資の仕分け、配達までとても手が回らない状態だった。支援物資が体育館に山積みされ、被災者に配布されない。配布する体制がやっと整っても、ニーズが変わっている。そんな中で、武浪さんたちは被災地を回り、直接、被災者のニーズを確認し、メールなどで倉庫と連絡をとりながら迅速に物資を届けるシステムを構築した。今回の支援にはスピードと情報共有が致命的だったと感じたそう。支援チームに女性がいるのも大事だと感じた。女性である被災者のニーズを聞き出すには女性が必要だった。

現在は、直接的な支援は少なくなり、被害を受けた幼稚園や保育園に教具を寄付したりしている。夏休みには、陸前高田で4～500人の炊き出しや、気仙沼の小学生8

0人を幼稚園に招待し、学園の小学生80人とペアを組ませてキャンプした。水遊びは津波を思い出すから良くないと言う人もあったが、子どもたちは園庭のプールで大はしゃぎだった。学園には卒園児を対象にした英語教室があり、今回、キャンプに参加したのは英語に来ている卒園児たちだそう。ペアリングを通じて、家からタオルケットを持って来るなど子どもたちも互いに思いやることを学んでいた。小学校卒業後、夏休みに3週間のアメリカ旅行、高校2年時には3週間のヨーロッパ旅行があつて、武浪さんも間もなく引率でヨーロッパに出かけるころだという。

45年の歴史を経て地域に根差した教育機関の機能がよく見えて興味深かった。アメリカでは教会がコミュニティセンターとしての役割を果たすが、ここでは幼稚園がその代わりを果たしていた。親子とも卒園児ということもあるそうで、さまざまな社会的背景を持つ校友が密に関わり合っていたからこそ、緊急時のさまざまなネットワークキングが可能となった。行政自体が甚大な被害を受けて機能不全になっている時、機能の残っているところが中心になって小回りのきく支援活動を展開するというのは、きわめて現実的である。緊急時には親子も教職員も一緒になって地域に貢献しながら、時間経過とともに、少しずつ自分たちの日常性を取り戻しつつあるのもいいなと感じた。

9月21日 遠野

仙台にもう 1 泊し、翌朝、遠野へ移動する。11 月のプロジェクトの詳細を詰めるためだ。立命館学園の復興支援室を通じて、とりあえず会場の確保だけはできていたが、協働してもらえそうなところがまだ見つかっていなかった。真っ先に訪ねたのは、遠野まごころネット(<http://tonomagokoro.net/>)。ここは、東日本大震災で被災した岩手県沿岸部の被災者支援のために結成されたボランティア団体で、複数の筋からその活躍ぶりを耳にしていた。遠野は、盛岡、花巻、一関などの内陸部と、宮古、山田、大槌、釜石、大船渡、陸前高田などの沿岸部の中間に位置し、昔から内陸と沿岸を結ぶハブとして機能し、災害があれば後方支援をするという文化的土壌があった。ライフラインや商店も通常どおりで、沿岸部各地まで日帰りが可能であるため、遠野の人たちが立ち上がり、全国のボランティアを受け入れる中継地となっていた。

7 月にここでボランティアをした友人によれば、毎晩 7 時に誰でも参加可能な会議があつて、その場で受容と供給のマッチングができれば、すぐ活動できる仕組みになっているらしい。とても民主的な団体で、上下関係がほとんどなく、誰が何をやってもよい。全国からボランティアが入れ替り立ち替わりやってきて、2 週間もいれば長期ボランティア、3 ヶ月だと完全に内部スタッフとして、どんどん大事な任務を任せられ、経験の浅い若い子たちも大事なプロジェクトのリーダーを複数やっているという。そういうわけで、人に聞いても、ウェブサイトをチェックしても、いったい組織としてどうなっていて、誰に会って話をすればよいのかよく見えない。とにかく行っ

てみるしかない、前夜に電話を入れ、責任者という人にアポを取ったが、約束の時間に訪ねてみると、そこにいた人たちは、約束した人の名前を誰も知らなかった。

結局、その時、その場のリーダー的な人が応対してくれる。まごころネットは、ほとんどの場合、個人のボランティアが単発でさまざまなところからやってきて成り立っている。この方は 7 月から滞在し、長期の方。こちらの趣旨を伝えると、「マッチングをするので、心のケアとか何とか、ピンポイントで要望を言ってもらえないと応えようがない、先の約束は何もできない」とのことだった。なるほど。よくよく理解したことは、半年経ってもここはまだ危機状況にあるのだということ。関西から出発して、東京、仙台と北上するにつれ緊迫感が増してはいたが、私自身はまだ沿岸部を見ていないので、あらためて相当な温度差があることを実感した。2 週間で長期ボランティアと見なされるということは、1 週間先のこともわからないということだ。いや、1 週間先どころか、前日のアポさえ消えてしまうのだ。とても 10 年先の話を持ち掛けるような状況ではない。

インフラと人手があつて後方支援をし、ある程度、時間経過を経た遠野でプロジェクトをやるのはよいのではないかと考えていたが、遠野に来ている人たちは、みな、毎日、沿岸部へ出ているので、まだまだ危機状態と闘っているような状態なのだ。「ピンポイントの要望でないと応えようがない」という意味もよくわかった。ここで行われていることは、ボランティアがやりたいことをピンポイントで自己申告し、それを受けたいところがあればマッチングが成

り立つという原理で動いている。ある意味では、品質保証まで責任は持たれない。ゲリラ的と言うのか、この臨機応変さと機動力ゆえに、ここはこれほど活気にあふれ、全国のボランティアを鼓舞し続けているのだ。

とにかく遠野に共催するような余力はないと思うが、広報の協力はできる。遠野の仮設 40 軒については放置しておいていいのかという声が上がりはじめているとのこと、趣旨に合わないと思うがと紹介してくれた「NPO 遠野山・里・暮らしネットワーク」(http://www.tonotv.com/members/yamasa_tonet/)をその足で訪問し、コーディネーターの方と話してみる。子育て関係ではあるが、里山など環境のことが中心なので、少し違うと思うが、良い活動だと思うので、代表に話してみる、広報の協力は OK と言ってもらう。

次に、遠野市図書館・博物館へ。会場の手配など是可以するが、現在、みな被災地の文化救出活動に出ているため人手を出すのは難しい。遠野ゆかりの作家企画などだと図書館・博物館ともに関わりやすいが、現状では無理だと思う。図書館の利用者は親子と高齢者男性が多く、博物館は観光客が多い。市民ギャラリーは親子のほか、高齢者のサークル活動によく使われている。広報協力はできるが、予定の 11 月 1 日に間に合わそうと思うと 10 月号に載せる必要があるので今週末が締め切りになるとのこと。間に合うようにチラシを準備することにする。

最後は、遠野市子育て総合支援センターを訪ね、子育て総合支援室主任、立花正行さんと話す。今回、協力できるのは広報の

み。民生委員、保育士協会などとは関係しているが、児童相談所はなく、ファミリーサポート事業もない。遠野の子育て支援に今必要なのは制度である。後方支援ということで被災者にこだわらないのであれば、自分たちの家族を置いて遠野にボランティアに来ている人達の支援は必要かもしれない。ニーズ調査が必要だろう。遠野の行政と組んでやりたいのであれば、もっと時間をかけて一緒に相談してやっていくべき。立命館の思いをもっと聞きたかったと言われた。もっともである。

結局のところ、半年経った遠野でも、まだ沿岸部への直接支援で手いっぱい状態で、一緒にイベントをやりたいというような状況ではないことがわかった。今年は、遠野で場所を借り、広報の協力をしてもらって自力でプロジェクトを行い、来年度につなげることにしようと決める。慌ただしい一日を終え、最大級の警戒が必要とされていた台風 15 号が接近するなか、列車と路線バスを乗り継ぎ、真っ暗になってから大沢温泉に辿りつく。大沢温泉の自炊部は震災後、たくさんの避難者を受け入れたそうだ。なかなかおつな支援ではないか。お風呂に入ってぐっすり眠っている間に台風は通り過ぎて行き、すがすがしい朝を迎える。この夜、実は、遠野が台風で大変なことになっていたようだ。

花巻、盛岡を経由して、はるばるむつまでたどり着く。三沢経由で京都からやってきた他のプロジェクトチームと合流するが、彼らは原燃 PR センターや東通村を見てきたとのことだった。いよいよ下北に来た。

周辺からの記憶

3. むつ、下北半島

村本邦子（立命館大学）

2014年5月、縁があつて、上海で開催された国際心理療学会のシンポジウムで、震災プロジェクトの報告をした。漫画パネルの英語版を作成し、学会期間中、パネル展示も行った。急な事情で一足遅れて中国入りした中村正さんが、布に焼いたパネルのはりつけをしてくれたのだが、手伝ってくれた中国人スタッフが、漫画の物語について話しているうちに、日中戦争のことについて議論を始めたのだそうだ。これまでやってきた南京プロジェクト（日中の三世代のための修復プロジェクトで、中村さんも昨年9月の南京ワークショップに参加してくれた。詳細は、立命館人間科学研究所のHPからダウンロードできる。『日中の戦後世代を対象にした新たな東アジア型歴史・平和教育プログラム開発』<http://www.ritsumeihuman.com/publications/read/id/104>）のことを紹介すると、態度を変えて、握手を求めてきたそうだ。しばしば無力感に苛まれつつ、それでも続けてきたことの意味を感じる瞬間である。戦争も震災も根底でつながっている。それが歴史というものだ。

学会には優に千人を超える参加者が集まったが、多くの人たちが漫画パネルの前で、ひとコマずつ携帯で写真を撮っていた。「日本の漫画セラピーとして売り出そうか!？」などと言っていたのだが、本当のところ、その内容がどこまで届いたかは不明である。投影法の逆で、ある種の刺激を自分のなかに受け入れることで、そのことがもたらす影響を享受することができるし、それを誰かと共有することができれば、また新しい波動も生まれる。どちらかと言えば、静かに一步引いて見る文化において意味を成すものかもしれない。力強く前へ前へと進んでいく今の中国では伝わりにくのではないかとも思ったが、少なくとも、漫画という形式は関心を惹いたようだった。来年の3月には、ニューヨークでも漫画展をするというから、団さんの漫画も今や国際的なものである。

日本と同じく、精神分析から認知行動療法、クリエイティブ・アートまで、ありとあらゆる技法の発表があつたうえで、最終日のまとめは、「心理療法には限りがあるが、人生には限りがない。難しく考えず、ユーモアを使って楽しくやろう!」だった。これには思わず笑ってしまったが、なかなかよいではないか。アジアン・パワーである。

（2014年5月）

1. むつ

むつ市は、本州最北端、青森県北東部の下北半島に位置し、南北約 35 キロ、東西約 55 キロにわたる。三方を海に面し、北は津軽海峡から北海道を望み、西に平館海峡、南に陸奥湾を抱える。恐山山系の外輪山を形成する釜臥山を中心に、東部はなだらかな地形が広がり、北部・西部は自然に溢れ、緑豊かな山地や台地が海岸近くまで迫る山岳地形である。広範にわたる地域が下北半島国定公園に指定され、恐山、川内川溪流などの景勝地や、湯野川、薬研などの温泉が点在するほか、陸奥湾のホタテ、津軽海峡のイカなどの海の幸が豊富で、豊かな自然の恵みを受けた地域となっている。(むつ市 HP 参照 <http://www.city.mutsu.lg.jp/index.cfm/1.html>)

平成 22 年（2010 年）の国勢調査によれば、人口 61,066 人、県人口の 4.4%で、平成 17 年国勢調査人口より約 2,900 人減。就業者総数に占める第 3 次産業就業者の比率は約 71.6%で、これは県平均 64.6%を上回り、サービス業、卸売業、公務員等を中心とした下北圏域の中核都市としての業務機能が集積していることを示す。就業者総数は平成 17 年から 2 万人台に減少しており、人口の減少や少子・高齢化の進行に伴い、さらに減少することが予想されている。特に、第 1 次産業の減少が顕著であり、将来の人口推計の動向を踏まえれば、後継者対策も課題になってくるということである（「おでかけ市長室」むつ商工会議所版）。

東日本大震災のプロジェクトなのに、「どうしてむつ!?!」と不思議がられることがある。そもそも、このプロジェクトのアイディアは、むつ市立図書館から生まれ、毎年、青森県から東北 4 県を南下していこうというものだった。私自身は、まったく、むつとは縁がなく、「一度、恐山に行ってみたな」というのと、「原子力船むつというのがあったな」と思い出す程度で、それとて詳しいことを知っていたわけではなかった。むつと関わるようになってわかったことだが、このプロジェクトがむつから生まれたのは、おそらく偶然ではない。前提として、立派な図書館、企画の少なさ、人々への思いという条件があったからだ。

この原稿を書くにあたって、むつ市の HP をチェックしていると、昨夜（2014 年 5 月 19 日）21 時 39 分に、宮下順一郎むつ市長が急逝したというニュースが眼に飛び込んできた。62 歳、くも膜下出血だったそうだ。むつ出身の市長は、初めから立命館のこのプロジェクトを歓迎してくれていると聞いていた。実は、前杉山市長も、平成 19 年（2007 年）に急逝していた。8 代市長として就任以来、6 期 22 年にわたってむつ、下北を牽引するリーダー的存在であり、原子力船むつとの「共存共栄」を図り、国内初の使用済燃料中間貯蔵施設の誘致、市本庁舎の旧大型商業施設への移転など、多くの政策に取り組み、これを受け継いだのが宮下市長だった。

HP むつ市概要にある「激動と苦難の 50 年」を見ると、たしかに、波乱万丈の歴史が実感される。むつ市は、昭和 34 年（1959 年）、下北地方の政治、経済、交通の中心地とし

て成長してきた田名部町と、海軍水雷団の設置から自衛隊の基地として発展を遂げた大湊町が、大湊田名部市として合併し、翌年、全国初のひらがなの市として誕生した。大きな財政赤字を抱え、「人口 10 万人の田園工業都市」を目指して、企業誘致に力を注いだ、夢を託した「むつ鉄鋼」も頓挫し、ほとんど成果を上げることができなかった。主要道路網と航路の整備、鉄道存続への闘い、昭和 40 年代から 50 年代初めにかけては相次いで大災害に見舞われ、市の財政をさらに圧迫と書かれている。昭和 43 年（1968 年）、下北半島国定公園に指定されてからは、観光地としての期待がかけられ、恐山への参拝観光コースが整備され、平成 17 年（2005 年）の新むつ誕生によって、自然満喫型観光のための面積が拡がり、現在は農林水産物のブランド化に努めているそうだ。さらに、「市の発展は人材育成から」と学校・社会教育の充実を図り、その一環として、最新の施設を備えたむつ市立図書館が平成 12 年（2000 年）にオープンしている。これが漫画展の会場となっている図書館である。

その後に、原子力船むつと使用済核燃料中間貯蔵施設の誘致のことが書かれている。日本最初の原子力船むつは、昭和 47 年（1972 年）に原子炉が完成、大湊港から出航するが、実験開始後まもなく放射線漏れを起こし、受け入れ先が見つからず長く漂泊した後、最終的にむつ市関根浜定係港に回航された。その後、解役となり、船体を 3 つに切断、原子炉部分を撤去し、大改修を施して、海洋地球研究船「みらい」に生まれ変わって活躍中とある。使用済核燃料中間貯蔵施設に関しては、「誘致までの軌跡と地域との共生」として、その経過が記されている。平成 12 年（2000 年）に調査依頼、平成 19 年（2007 年）に許可書申請、平成 24 年（2012 年）の開始を目指していること、誘致による交付金によって、赤字解消政策に添って、平成 23 年度での累積赤字からの脱却も見えていと書かれている。

現状がどうなっているのか調べてみると、東日本大震災以降、建設工事を中止していたが、平成 24 年（2012 年）3 月に貯蔵建屋工事を再開し、使用済燃料貯蔵施設のうち、貯蔵建屋が平成 25 年（2013 年）8 月に完成し、リサイクル燃料備蓄センターに関わる新規制基準への適合確認等の審査を受けるため、原子力規制委員会に対し、事業変更許可申請中、平成 27 年（2015 年）3 月に事業開始予定とある（青森県 HP 参照 <http://www.pref.aomori.lg.jp/sangyo/energy/0001tyuukan.html>）。

2. 原子力＝核のこと

正直なところ気の重い作業ではあるが、下北と原子力＝核について触れておくべきだろう。かつての私のように、下北に縁のない人々は、知っているべきことをほとんど何も知らないだろうと思うからである。初めてむつを訪れる時、鎌田慧・斉藤光政『ルポ下北半島～原発と基地と人々』を読んだ。衝撃的だった。著者は二人とも青森出身で、故郷への思いと憤りが滲み出ている。鎌田に言わせると、原子力船むつは建造に 73 億円、事故後

の受け入れのために、むつ市関根浜港が築港されるのに 340 億、そのほか附帯施設は 260 億円、総額 1500 億円を空費した「原子力行政に群れる欲望の象徴」である。むつ市は、これを実績として中間貯蔵施設の受け入れに名乗りを挙げた。港の裏山にあるコンクリートの建物には、34 体、ウラン換算でおよそ 4 トンの使用済み燃料が保管されており、2000 年をめどに東海村の再処理工場へ搬出される協定になっていたのに、約束は守られず、一部置き去りにされたままである。1999 年の補正予算では、市道整備事業として 1 億円が計上され、財源が「原子力船開発関連」となっており、むつの母港から、2800 メートルにおよぶ道路が計画されているという。

鎌田さんとは、20 年以上昔、世間を騒がせた少年事件をきっかけに新聞紙上で対談をしたことがある。時折、鋭い眼差しを見せるが、基本的に静かで控えめな紳士という印象だった。実は、もっとずっと前から、下北に関心を持って取材を続けていたわけだ。本当は、あの時、この話を聴いておくべきだったのだ。東日本大震災が起きるまで、54 基もの原発が日本に作られていたことを知らなかった自分を恥じ、悔いている。チェルノブイリは、はっきりと記憶しているし、広河隆一も読んだ。しかし、その関心を維持せず、正直に白状すると、それ以上考えることをどこかで敬遠してきたような気さえる。

それはなぜだったのか。田口ランディ『ヒロシマ、ナガサキ、フクシマ～原子力を受けた日本』を読んで納得するところがあった。田口は私とほぼ同世代であるが、反核運動に対してどうしても積極的になれなかったのは、反核運動が社会主義・共産主義と結びつけられ、うまく利用されていたためではないかと分析している。私たちが生まれた頃に第一次安保闘争があり、小学生の頃に学生運動が盛り上がっていた。あれは何だったのか、彼らはいったい何を革命しがっていたのか理解不能だった。団塊の世代は、大企業で高給を得ながら「24 時間闘えますか？」と歌っていた。反核も反原発も社会主義系、いわゆるアカ、原発推進は資本主義という雰囲気の中で、世間の雰囲気を読むことに敏感な世代が、「あの人たちの運動は何だか怖い」と感じ、原発に反対であっても、そのことを表明することに躊躇があったと告白している。たしかに、学生運動の後に現れた政治的に無色な世代にとって（私たちは、大学のクラス新聞の名前を「白旗」にしようと相談していたくらいだ）、それは、少なくとも「ダサイ」ものと感じられていたような気がする。

加納実紀代『ヒロシマとフクシマのあいだ～ジェンダーの視点から』を読むと、私たちが、どんなパワーポリティックスのなかに埋め込まれていたのかがよくわかる。広島・長崎への原爆投下から十年経った 1955 年、広島で原水爆禁止世界大会が開かれ、女性平和運動の中心である母親大会の第一回大会が開催された。その一方で、同じ年に、原子力基本法が成立、東京で原子力平和利用博覧会が開催されている。この博覧会は、その後、名古屋・大阪・広島など全国十か所を巡回したが、広島の会場は原爆資料館だった。考えてみると矛盾しているが、みな「原子力の平和利用」という表現に惑わされていたのだ。この表現は、1953 年、アイゼンハウアーが大統領就任時演説で、東西冷戦のなかで核戦争の危機と「原子力の平和利用 (Atoms for Peace)」を訴えたことに遡る。単なる核削減や廃絶だ

敗戦直後、昭和天皇は疎開先の皇太子に手紙を出し、敗因を「我が軍人は精神に重きをおきすぎて科学を忘れたことである」と綴った。「つくる会」元会長・西尾幹二は、学校の作文に、「・・・原子爆弾はすごい爆発力があって、その爆弾を使えば二、三日すると日本の本土の人員はなくなるそうです。・・・今、降伏しておいて又、敵と戦争し勝利をえるのだそうです。今度の戦争は科学戦だから、理数科をしっかりとやって発明するのです。その任務は僕たちです・・・」と書いた（高橋、2002）。そして、元主計中尉・中曽根康弘は1951年、日本を訪問したダレス特使に原子力研究の自由を認めるよう文書で依頼、1954年には原子力開発を国策として起動させる。戦争責任を問うことなく、科学力の掌握こそが目標となった。1952年～1968年、鉄腕アトムが雑誌連載され、1963年～1966年、テレビ・アニメ化された。「心やさし、ラララ科学の子」鉄腕アトムは、私の記憶にもはっきりと残っている。ちなみに、この歌詞は谷川俊太郎である。

『ルポ下北核半島〜原発と基地と人々』を参考に、下北半島の状況をまとめてみる。1969年、「新全国総合開発計画」が閣議決定され、そこに「むつ湾小川原湖開発」が含まれていた（後に、陸奥湾と小川原湖は開発から除外され、「むつ小川原開発」に改称された）。この「むつ湾小川原湖開発」は、当初、3万ヘクタールの用地買収、1万5千人の立ち退きという巨大開発計画で、むつ湾の太平洋側とその湾内、小川原湖周辺に、石油コンビナートや造船所などを配置しようとするものだった。国と県と財界150社が出資しあって、1971年、土地買収会社「むつ小川原開発株式会社」が創立された。『六ヶ所村史』年表によれば、

- 1970年 昨年来、県内外不動産業者による土地買占めが続き、その規模が1260人から870ヘクタールに及ぶ
- 1971年 土地ブームが続き、村内民有地の13%に当たる1780ヘクタールが売られ、長者番付にのる人も出てきたが、トラブルも目立ってきた
- 1973年 千歳地区は土地値上がりにより、この春、地価が3年前の200倍になる
開発地域内の弥栄平、幸畑など開拓地から他市町村へ移転する人が出始める

地価が3年で200倍である。六ヶ所村は、満州やシベリアから引き揚げてきた人たちが開拓し、畑や牧草が広がる土地だった。少なくとも、7つの集落、350戸が壊滅した。「むつ小川原開発株式会社」所有の時は、公有地を含めて5280ヘクタールに達したが、1973年のオイルショックで、会員会社の工場は一軒も姿を現さないまま、土地ブームは終わった。工業用地として造成した2800ヘクタールのうち、売却できたのが、日本原燃の750ヘクタールを含む1170ヘクタールだった。売れ残った膨大な土地を抱えるなか、「この頓挫したむつ小川原開発に救世主のごとく現れたのは、核燃料サイクル基地であった」「巨大開発の縮小で土地賠償などで膨大な借金を抱えており、核燃基地は、渡りに船だったのである」（『六ヶ所村史』）。1984年1月4日の東奥日報一面に、「むつ小川原 立地浮かぶ 核燃料サイクル基地」「ウラン濃縮 再処理 廃棄物貯蔵 電力業界中心に検討」の大ニュースが掲載された。

鎌田によれば、しかし、実は、それより15年も前から、六ヶ所村は「原子力産業のメッカ」と位置づけられていた。1969年3月、通産省の外郭団体「日本工業立地センター」が発表した「むつ小川原湖大規模工業開発調査報告書」は、「わが国で初めての原子力母港の建設を契機とし原子力産業のメッカになり得るべき条件をもっている。当地域は原子力発電の立地因子として重要なファクターである地盤および低人口地帯という条件を満足させる地点をもち、将来、大規模発電施設、核燃料の濃縮、成型加工、再処理等の一連の原子力産業地帯として十分な敷地の余力がある」としていた。「渡りに船」どころか、初めに目論見ありきだったということになる。1969年に六ヶ所村の村長となった寺下力三郎は、「開

発の内容が一切秘密にされていることは、明らかに民主主義の否定であるばかりでなく、開発そのものの危険性を物語っている」と批判、むつ小川原開発計画への反対を表明し、巨大開発反対運動の先頭に立ったが、1973年の選挙で開発推進派の古川伊勢松に敗れた。

日本原燃のウラン濃縮工場は1988年、低レベル放射性廃棄物埋設施設は1990年に着工され、1992年に操業開始。高レベル放射性廃棄物の貯蔵管理施設は1992年着工、1995年完成、核燃料再処理工場は1993年に着工、2006年に試運転を開始したが、事故続きで、MOX燃料工場は2010年に着工された。それぞれの状況は、青森県のHP「六ヶ所原子燃料サイクル施設の概要」で確認できる

(<http://www.pref.aomori.lg.jp/sangyo/energy/0001rokasyo.html>)。

六ヶ所村から泊街道を抜けると東通村がある。東通村議会が原発誘致を決めたのは1965年、1971年に原発用地の八割強を総額20億円で買収したが、8名が拒否したため、完全引き渡しがなされ、漁業交渉が終結するまでに20年もの歳月を必要とした。六ヶ所でも東通でも最後まで粘ったのが漁師たちだった。しかし、1988年から電源三法などによる交付金が入り始め、東北電力第1号は2005年に稼働した（現在停止中）。これについても、青森県のHP「東通原子力発電所」

(<https://www.pref.aomori.lg.jp/sangyo/energy/0002higasidoori.html>)で確認できる。

そして、大間。まぐろの一本釣りで有名な本州最北端の地である。大間に至る国道の左側にある鉄橋やトンネルの廃墟は、戦時中、連行された朝鮮人強制労働によって敷設工事が行われながら、ついに挫折した鉄道の名残だそうである。戦後、生き残った犠牲者たちが故郷に向かう途中、舞鶴沖で爆発事故を起こして沈没したのが浮島丸事件である。大間原発はプルトニウムを使うMOX燃料であり、プルトニウムを産み出す六ヶ所村の核燃料サイクル施設と一体化した原子炉だった。1984年に誘致決議するが、長く着工されなかったのは、大間や対岸の函館の市民グループが国と事業主の電源開発を相手取った訴訟を起こしたり、炉心建設予定地付近の土地を所有する地権者が最後まで買収に応じなかったりなど、粘り強い反対運動の結果だった。電源開発は2003年、用地買収を断念し、建設計画の見直しと原子炉設置許可申請の変更を強いられた。2008年ようやく着工、東日本大震災の影響で一時休止していたが、工事は再開されている。青森県HP「大間原子力発電所の概要」(<http://www.pref.aomori.lg.jp/sangyo/energy/0001oma.html>)。

下北のリスクは原子力に留まらない。陸・海・空の三自衛隊と米軍の「四軍」が揃っているのは、沖縄と青森だけである。三沢基地は、米空軍、空自、民間航空の三者が共同使用する全国唯一の飛行場で、米空軍が戦闘機F16を40機、空自がF2を40機運用し、「世界中のどこでも24時間以内に攻撃できる態勢を整える」グローバル・ストライクをコンセプトとする。2003年のイラク戦争でバグダッド空爆一番乗りを果たしたのは三沢のF16で、その往復の飛行時間はなんと11時間だったという。その隣に天ヶ森射撃場があり、戦闘爆撃機が模擬爆弾を投下する直下に六ヶ所村がある。東通村の海上自衛隊下北海洋観測所は地図に載らない秘密基地であり、米海軍が世界中の海底に張り巡らせている潜水艦探知用

のネットワークの一部として、中国、ロシア、北朝鮮の潜水艦を監視している。2010年には、むつ市釜臥山山頂、大湊分屯基地にミサイル防御用の最新鋭レーダーFPS-5（通称「カメラレーダー」）が建設された。高さは40メートル、8階建てビルに相当するが、建築物の定義に該当しないことから届出はされていない。3000キロ以上をカバーできると言われ、北朝鮮、中国を視野に収める。

これが下北半島である。東日本大震災後、米軍と自衛隊は「トモダチ作戦」と称して、救援物資を運び、大いに活躍した。大型揚陸艦がむつ市の海上自衛隊大湊基地で北海道の陸上自衛部隊を陸揚げして、そのまま三陸沖に陣取り、原子力空母が配備された。米軍三沢基地には横田、岩国などの各基地から救援物資を満載した輸送機がひっきりなしに着陸し、物資はトラックに積み替えられると、すぐさま岩手、宮城に南下した。斉藤は、有事の時には、まったく同じ形で軍事拠点として活用されるだろうと考える。

4. 私たちはどこから来て、 どこへ向かうのか？

「いったいどうしてこんなふうになったのだろう」と思っていたとき、「日本の近代国家建設における『東北』について」（篠田、2013）という論文に出会った。それによれば、明治政府が中央集権制を強化して近代化を急速に進めることができた背景には、戊辰戦争によって新政府への反对者が駆逐されていたことがある。東北は、戊辰戦争後、敗戦地と位置づけられ、薩長藩閥体制下で国家主導の産業化プロセスから見放されるという形で後背地の位置に追いやられていった。1874年の「府県物産表」によれば、東北の産業の生産額は全国平均だった。日本の軍国主義と高度経済成長の過程を通じて、東北は、資源と人材の供給地としての位置づけを梃子に、発展の道を見出した。今日に至る電力国家管理体制の仕組みの中で、電源地として国家システムに組み込まれることによって利益を享受するシステムを見出すようになったところの大震災だった。篠田（2013）は、中央集権制に過度に依存した復興は現代では限界があり、コミュニティの自立性だけを提唱することも現実的でない、日本における国民国家と地域社会との関係性の問い直しが求められていると提起している。

たしかに、靖国神社は戊辰戦争で設立されたものだったのではないか。そう言えば、またむつ市は会津若松市と姉妹都市の関係を結び、その絆は戊辰戦争に遡るとHPに書いてあった。戊辰戦争に敗れ、故郷を失った旧会津藩士とその家族1万7千人余が斗南の地に移住し、円通寺に藩庁を置き斗南藩を興した明治3年に遡る。その後、廃藩置県で藩士たちは全国に散りじりになってしまったが、今なお多くの子孫がここに住み、市政、経済ほか多くの分野においてむつ市発展の大きな力となっているのだそうだ。原発が東北だけにあ

るわけでないことを考えれば、戊辰戦争だけを理由にすることもできないが、東北に通っていると、都道府県の行政区分より、藩という概念に出会うことが多いような気がする。一種の文化区分と言えるかもしれない。東北のことを知るために、まずは、自然に触れ、土地の食べ物を食べ、温泉に入り、人々と出会いたいと思い、フィールドワークと称して旅して回っているが、県単位でなく、その土地土地に風土がある。

『ルポ下北半島』には、粘り強く反核運動を続けてきた人々の凜とした姿がある。鎌仲ひとみ監督『六ヶ所村ラブソディ』には、それぞれに個性的な普通の人々の姿が見える。故郷に帰り農業を続ける菊川恵子さんは、まずは生活を楽しみ、その一部で反核運動をするのだと、チューリップを育てて人々を招き、畑で採れた野菜を食べる。六ヶ所村の隣で無農薬の米を作る苫米地ヤス子さんは、お客さんたちから再処理工場が稼働したらもう買わないと言われても、「頑張れ、頑張れ」とお米に話しかけながら育て続ける。日本原燃の下請け建築会社で使用済み燃料の入ったキャスク搬入の仕事をする上野幸治さんは、3人の子どもを抱え、「仕事がないからね、子どもに飯食わせるために、なんでもやる」と言い、六ヶ所村でとりまクリーニングを経営する小笠原聡さんは、子孫の為にエネルギーを確保するには再処理工場が安全に稼働することが現実的だと訴え、岡山建設会長で六ヶ所村村会議員を務める岡山勝廣さんは、再処理工場の稼働にあらゆるビジネスチャンスを期待する一方で、酪農や風力発電にも力を注ぐ。

みな、それぞれ未来を模索している。中央集権的な国家システムに抵抗し得るしなやかで多様な草の根的な動きをどのようにつなげていけるのだろうか。答えは見えないが、一人ひとりと出会うこと、土地土地と出会うことを十年間続けるなかで何かが見えてくるのだろうか。

<文献>

鎌田慧・斉藤光政(2011)『ルポ下北核半島～原発と基地と人々』岩波書店

加納実紀代(2013)『ヒロシマとフクシマのあいだ～ジェンダーの視点から』インパクト出版会

篠田英郎(2013)「日本の近代国家建設における『東北』について」日本平和学会編『3・11後の平和学』早稲田大学出版

田口ランディ(2011)『ヒロシマ、ナガサキ、フクシマ～原子力を受け入れた日本』ちくまプリマー新書

高橋哲哉(2002)「『過去の克服』と日本」『中帰連～戦争の真実を語り継ぐ』20号。





周辺からの記憶

4. 東日本・家族応援プロジェクト3年を振り返って

村本邦子（立命館大学）

8月末、丸森（宮城県）で開催された「宮城民話の学校」という2泊3日の合宿に参加した。東北には語り部の伝統があり、語り継がれてきた民話は苦難や回復の物語を含む宝でもある。丸森はじめ被災地の民話、3.11とそれ以後のお話を聞いて、思うところがたくさんあった。とても良かった体験は、同室に遠野の語り部さんがいて、寝物語を聞かせてくれたこと。子どもになった気分で幸せに眠りについた。お話の力はすごい。語り部は、間違いなく東北の持つレジリエンスの大きな要素のひとつだろう。最終日はフィールドワークで、福島県新地町、宮城県山元町、名取市関上の様子を見たり聞いたりもした。

プロジェクト立ち上げから3年が過ぎ、いよいよ4回目の東北巡業が始まる。このあたりで、いったん立ち止まって振り返り、今後の方向性を考えてみよう、3つの企画を立てた。ひとつは出版企画、もうひとつは教育の観点からの報告書をまとめること、そうして、もうひとつが今回のマガジン企画で、中村正・団士郎・村本邦子による座談会。2001年4月に立命館大学大学院応用人間科学研究科ができた時から、このメンバーでいったいどのくらい話し続けてきたのだろう？ここからいろんなものが生まれてきた。今回も、7月24日、16時に集合して、延々5時間。結局、晩御飯も食べずにしゃべり続け、後日テープ起こしたのだが、自分たちのしゃべりを客観的に聞くのは生まれて初めてで、なかなかおもしろかった。そもそも、人がしゃべり終わるまで待つ人は誰もいなくて、次から次へと話はかぶさっていくので、完結しないまま流れてしまう。だからいいのかもしれないけど。今回は、テープ起こしたものに多少、加筆する形で、流れたものを取り戻して形をつけるようにした。

これから現地の方へのインタビューなども計画しているけれど、みなさんからのフィードバックもお待ちしています。

1. 十年実施する ということを支える理論が欲しい

村本：では、始めましょう。何からいきましょう？

中村：最初に質問だけど、十年やりましょうというのは、どのくらい最初から想定していたの？復興やトラウマケアに関する何らかのセオリーがあつてのプロジェクト提案だった？

村本：もちろん、最初からそうだよ。遠く離れてめったと行けないというこちらの条件と、空間的にも時間的にも大規模であるという東日本大震災の条件とを掛け合わせると、大きな視野で全体を捉えるために、一定の時間経過を見なければならない。自分たちの年齢を考えれば、まずは十年でしよう。

中村：それはそう。さらに複合的な人災も含んだ大災害だし、歴史とトラウマに取り組む村本さんなりのもっと別のセオリーがあるのかと思った。とくに諸外国での原発事故にかかわる地域のトラウマや回復のセオリーのようなものが背景にあるのかと思い質問したの。チェルノブイリ後のコミュニティのレジリエンスについての研究はどう？

村本：そういうのはほとんどなかった。ずいぶん前にチェルノブイリのトラウマに関する論文があつたけど、原子力事故に関するトラウマは PTSD モデルでは捉えられないと。ポスト・トラウマにはならないからね。むしろ、癌告知などのように、じわ〜っと不気味に持続していく。終わりが無い (van den Bout, J., Havenaar, J. M., & Mrijler-Iljina, L. I, 1995)。レジリエンスについては、心理学的研究より、ドキュメンタリーがいくつかあつたよね。「ナージャの村」とか「アレクセイと泉」とか。どちらも哀しみを含んでいたけれど。

中村：ここポイントだよ。出来事があつて心的外傷を受け、何らかの流行も含めてケアがあり、回復へと至るという筋書きは、そもそも後でつけたようなもので、すべてトラウマを主人公にして話がすすんでいる。それが PTSD モデルの意味だとすると、一般的にも曲解というか、心理化された外傷論になっていくよね。政治経済的、そして民衆もまた共犯関係にあるいろんな事件・事故の全体像がみえなくなっていく。何かというトラウマ話になる。ところで、癌に例えたけど、原発事故のケアが不治の病のケアに近いということは、最後は死に至るので、そのことを踏まえた慢性疾患モデルケアという意味？

村本：疾患ケアというより、体調不良の因果関係が曖昧ということ。たとえば、微熱やだるさ、鼻血が、放射能の影響なのかどうかというのはわからない。単なる風邪や疲労だったかもしれないけど、だんだん死

に近づいているのではないかと不安になったり、抑鬱的になったりする。だからと言って、「思い悩むことは健康に悪影響を与えます」などと心の問題にしてしまって、本来、考えるべきことなのに考えることを阻止しようとする動きは政治的で要注意だと思う。

加えて、情報の不確かさ、政府や社会に対する不信感がある。チェルノブイリから25年。あのときも被爆の恐怖が続いたけど、著者たちによれば、住民のストレスは、強制避難によってコミュニティの絆が破壊されたこと、安全基準の混乱（国によって基準が違ったこと、時間経過とともに基準が変わったこと）、社会階層の高い人々（医者を始めとした知的金持ち）が次々と街を去ったこと、生活変化、とくに子どもたちの生活変化（生活圏、遊び場、食べ物の制限など）、食べ物の安全性の不確かさからきていた。人々の反応は、信頼感の喪失、不信感の蔓延、不安と抑うつだった。放射能事故が与えるインパクトを個人ベースのモデルで捉えることはできない。むしろ、コミュニティや社会との関わりのなかにある。

中村：なるほど。何でこんな質問をしたか
というと、十年持続して実践しつつ、各地の人たちと協働していく過程で築かれていく理論があると思うから。村本さんの中にあらかじめ理論があって、それを検証するためにやっているのではないですよ。仮にあったとしてもそれは村本さんの関心なので、むしろ開かれた場で、しかしやり続けるなかで見えてくることを「復興の理論」というと大きいけど、何かのかたちで整序できればいいなと思う。それがこの3年で、

どのように修正されたのか、されなかったのか、あるいは何か付け加わったのかという意味での質問がセオリーはあったのという質問の意味です。

もうひとつ考慮すべきだと思う点は、時間軸が長いので、当初の出来事よりも、復興とか回復の過程で出てくるネガティブなもの、つまりそれまでの原発政策だったり、復興成金や復興産業だったりがある。しかも東北だけではないのですが原発立地地域に「ただ乗りしていた私たち」、つまりこの社会が持っている歪みが、復興過程自体に還流し、逆流してくるよね。そういうことは、安全を強調し、危険を過小評価する専門家の発言など事故の当日からもあったし、最近でもたとえば、甲状腺癌を否定するとかの「研究発表」があり、そういうこと自体が回復を悪化させるよね。それとの闘いがあるよね。もちろん逆のこともあり、最近では福島的女性が自殺をしてそれと原発事故の因果関係を認める判決が出されて東電に賠償金の支払いを命じました。プラスとマイナスのジグザグ道をたどりながらの復興なので、それらとともに訪れる地域の生活があり、そして私たちの日常をどうするのかが問われるということです。それらをどうするかも引き受けて、理論の構築が十年の証人の言語化として期待されているということだと私は思っている。私は村本さんの提案をそう受け取ったし、そう意味ではやりがいのあるプロジェクト提案だと思ったから参加している。この「ただ乗りしている私たち」は社会の病理性それ自身。もちろん、米軍基地もそうだし、これまで各地で経験した公害もそう。地域のもつ政治、地政学的な関心もあつての質問で

す。そういう点では、この3〜4年はどうだったのかな。

村本：もともと理論モデルがあったというよりは、直感レベルでやってきたことだけだ。

中村：それは村本流でいいと思うんだけど。ただ一緒にやっている者としては、どこかでセオリーというか、何をやってるのかというディレクションがあった方がいいかなと思って。証人になるということの結果として、こうして言語化していくことになるのだから、その指針みたいなものが参加している人たちと、そして地域と一緒に協働してくれる人たちと創造していければよいなと思って。出会い頭につくっていく仮説みたいなものでもいいのだけど。来年度にむけての中間的な成果を出版しようというに賛同したものもそういうことなんだけど。

村本：戦争のトラウマをやってきたことが大きいと思うけど、復興の途中で一部分だけ切り取って見ると気づかないことが多く、その背景にある大きな流れのなかに置いてみて、初めてその歪みがわかるということがある。たとえば731部隊から薬害エイズにつながる流れや、反核運動から原子力の平和利用、そして原発という流れ。人命よりも経済効率を重視する価値観。それは、今の政府、企業、大学のあり方にもつながっていて、まんまと騙されてしまう自分たちがある。

中村：そうなんですよ。私が社会病理学や社会臨床論とやっていることと同じです。放射線はレントゲンと武器の双方に、薬物は依存症と医療のそれぞれに、公害は産業

社会と裏腹に、病いは偏見と差別とともにという具合にきりが無いくらいのテーマがでできます。もちろん社会運動の側、左翼の運動の弱さもある。政府だけでなく批判勢力が対案を創りきれない弱さもある。

村本：それはそうだよ。反核運動のなかに原子力の平和利用があり、いつでも原子力が使えるような現状が作られてきたんだから。だから、3.11の復興においても同じことが起こり得るでしょう。その時に、なかに埋め込まれていたら気づきにくいけど、距離があるからこそ見える現実があるかもしれないと、とりあえず十年。人々の意識とか社会の温度とかマスコミの言説がどんなふうに変化していくのか、意識的に見張っておく必要があるのではないかと。

中村：これらの諸点は、応用人間科学研究科で一緒に取り組む教員たちの間でも、まだ十分共有されてないと思う。十年間やり続けて証人になるということの意味を質的にも理論進化という点でも高度にしていくべきだと思う。当面は、十年やるために予算どうするかという現実的なレベルでの意識が大きいし、現に課題があるんだけど、そのためにもこの実践の理論化、言語化をしていく必要がある。

村本：私としてはずっと言ってきたし、共有していないとしたら残念だけど。

2.

歴史とトラウマの経過に学ぶ

中村：もちろん基本的なことは共有しているんだって。下地は作りつつあると思うけど、もっと仕掛けを作っていく必要があるかなと。あえて可視化させたり共有したりしていくという課題として。村本さんの直感はいいんだけど、それがどう変化していったか。3.11 を忘れないということは基本だけど、復興過程論としても証人となるべき論点があり、それは醜い面も含めていくということだと思う。

村本：確かにね。人との出会いというミクロな層から、社会や政治のマクロな層まで、証人として多層的に関われる仕掛けになっているはずなんだけど、なかなか見えにくい。

中村：私にそうした層がみえてきたのは、南京に行ったからということがあります。面白かったのは、むこうでやっている人たちが三世代目で、被害はおじいさんやおばあさんの世代で、そこで日本語勉強している大学生が第三世代だったってこと。そこには文化的な交流があって、ゲーム、アニメ、ジャニーズなどの日本文化に関心があって、さらに我々の身近にはメイドインチャイナを支える中国の安い労働力を背景にした安い物があふれている。つまり、文化と経済はとっくに国境を越えているのに、なおも操作されている政治だけがハードル

のようにある。従軍慰安婦問題も、都合良く外交カードや政治に利用されていますよね。世代を越えてトラウマがあるとすると、過去の出来事があったと認めるということもそうだし、そのことを現時点でどう今の世代が引き受けるのかという責任が問われていることがわかりました。震災復興も同じで、その過程が問題となり、時間の経過とともにある復興過程のあり方でトラウマからの回復が変化していきます。そこには日本社会に生きる者としての責任があります。

つまり、復興に過去の反省や謝罪の具象が反映されたり、未来に向かう原発政策について、脱原発化として今の私たちが選択できるかどうかが問われます。文字通り「ただ乗りしている私たち」のあり方が日々のなかで問われてきます。こうした視点は、村本さんの取り組みである南京プロジェクトに参加して見えてきたことなのです。私なりに3年経過して、他の分野も含めて、そして自らの取り組む暴力問題にも反映させて、いろんなことが繋がっていると思えたことが大きいのです。その理論構築のあたりをフィードバックする必要があるんじゃないかな。

3.

通奏低音のように～ いつか誰かに届く、 継続と持続の大切さ

村本：そうだねえ、そういう意味では、無自覚なまま加害者ポジションにあった、つまり、中村さん言うところの「ただ乗り」組の私たちが、今回の震災によって露呈したものを引き受けていく覚悟をするというのか。いつの間にか、また元のポジションに戻ってしまうことのないよう、細くても長く被災地に関わり続け、証人として存在することが、結果的には、刻々と続いていく現在を自覚的に担っていくことにつながると思うのよ。それは、私たち自身のためでもあるけれど、めぐりめぐって被災地の人たちへの応援のメッセージになるんじゃないかな。

団さん、何か思うことある？

団：俺なんかは、この時間経過のなかで、わかりやすいところでは、漫画展をやってるやろ。それを材料にこちらが投げかけている物に対しては、具体的な反応がある。そしてもうひとつ冊子（木陰の物語文庫本）もあって、これは私がいなくても動いていく。3年の中でその意味とか、見てもらえる人とか、そこからのフィードバックが、どんなふうに変わってきたか、振り返れる事実がある。

冊子も最初は先ず、現地に残って子育てしている親たちに、保育所、幼稚園を通して届けばいいというのがあった。被災直後は、とにかく被災地の瓦礫の片付けに行きましょうという、わかりやすいところだった。しかし実は、被災は日本全体だった。世界の人々は日本が被災したと思っていたけど、日本では、関西は遠くて大丈夫だったと思っている感じがあった。でもそうで

はないことはだんだん私達に届くようになってきた。

ところが、あんなことがあったのに、鹿児島県の川内では、全国で一番最初に原発再稼働が決まったりする。関西は大丈夫、離れているから大丈夫という感覚と、こういう流れは相似形だ。

東北と私達は離れていると何となく思っていたのが、三年の関わりで、実はどこもつながっているなということが、ずいぶん見えてきた。さっき中村さんの話を聞きながら思ったのは、世の中のネガティブな動きの持つ自己弁護性みたいなモノもちゃんと見ていかなあかんと思った。逆に私には今、展覧会や冊子という具体的なものの動きで、届く人たちがたくさんいるんだなというのがよく見えてきたというのが自分の認識やな。

村本：私の側から言えば、世の中がネガティブに動いていくことに対する抵抗として、社会にメッセージを発していく力があるのだと思う。長く女性支援をやるなかで経験してきたことだけど、被害者にとっては社会から届くメッセージが大きな意味を持つんだよね。たとえば、誰にも言えず一人で苦しみを抱えている性暴力の被害者にとって、社会から、一般論として「被害者にも落ち度がある」というメッセージが届くのと、「性暴力は不正義であり、悪いのは加害者である」というメッセージが届くのでは雲泥の差。それは、性暴力によるトラウマというものが、加害者/被害者という二者関係で起こるものではなく、社会との関係のなかにあるということを示すものだと思う。

まだ社会の中でほとんど理解が得られない時代、性暴力の問題に取り込んでいる人がいますよという私たちの活動を紹介する新聞記事を見て励まされたという声が、時間経過を経て聞こえてくるという経験をずいぶんしました。ずいぶん上の世代の女性が、「このことは墓場まで持って行くつもりだったけれど、これを見て、時代は変わったんだなと希望が持て、直接会ってお礼を言いたかったんです」と1度だけカウンセリングに来られた方があった。その方がカウンセリングに求めたのは、心のケアではなく、直接会ってお礼を言うことだった。あるいは、5年とか10年とか経ってから、「実は、あの時、本当に励まされたんです。ありがとう」と言われるなど。そういう経験を重ねて、きっと、これは氷山の一角なんだろうと思うようになった。つまり、無言のままに何かを受け留めてくれる人たちがいるんだろうなど。だから、たとえば、こんな企画をやりますよという記事を書いてもらって、直接参加につながらなかったとしても、その記事が持つメッセージ性のもつ意味は大きいと考えてる。

だから、阪神淡路の時の反省もあるけれど、とにかく十年やっていますということが持つメッセージ。具体的にやっていること以上に、この問題を見失ったり、忘却したりせず、十年考え続けようという、そういう呼びかけをすることがどこかの誰かに届いていくんじゃないか。そういうことの積み重ねが抵抗につながるのではないかという予感があるわけ。

4. 回復する日常を みつめる

中村：同感です。十年の証人はその都度、ぎりぎりまで言えることを思い切って言うておくということが必要なんでしょうね。その際、援助らしくしていないところがいんじゃないのかな。ファースト・エイドであれば、緊急性が大事なので、援助そのものが要るのでしょう。このプロジェクトは間接支援がメインなので、むしろ時間が経つにつれ、日常になっていく経過を共有できればと思っています。団さんの漫画も、特段、被災を描いているわけではなく、家族の物語という日常をそこに持ち込んでいるだけだし、それらをトータルにみると、それぞれが自らを力づけていくという意味での家族支援と言っているわけだから。支援の意味はこういう地域や人々のレジリエンスに働きかけるという意味での支援なので、あえていえば回復する日常の声をたくさん集めておくということでもある。

村本：最初から言ってきたことだけど、日本的なのか、アジア的なのかわからないけど、文化的に言って、ストレートに「これを提供します」、「はい、ください」というような援助関係より、何か別なものを介らせて、そこから相互的に生まれてくるものが力になると思ってる。開業でカウンセ

リングやっている分には、ニーズがある人が来るわけで、西洋的な専門家モデルで何ら違和感を持たなかったけど、阪神淡路の時、ひとたびコミュニティに入っていくとなると、文化的に適合する仕掛けがいるんだなと思うようになった。明確な動機づけのない人たちには、目的性を持った働きかけをするより、ただ傍らに居ること。でも、関係性のないところで何もせずに傍らに居ることは難しいから、何かを一緒に作りながらとか、お茶を飲みながらとか、ボール投げをしながらとか、何でもいいんだけど、そうした枠組みを設定することで、自然な形で時間を共有できる。日常性を共有すると言えるのかな。そのなかで、話してもいいけど、話さなくてもいい、一緒に時間を過ごすことに意味がある。それは本当のところ何でもいいんだけど、団さんの漫画展というのはなかなかいいなと思ったわけ。

団：今年 4 年目になるやんか。2 年目、3 年目はそれほどなかったように思うけど、今年 4 年目に入ったら、「続けてやるんですね」という反応が耳に入ってくる。先日、家族心理学会でも、展示を見て、「立命はずっと続けてはるんですね」と。何をやっているかということより、ずっと続けているということの方に大学関係者の反応がある。やっぱり、みんなの中に、自分も含めて、ほどほどこれくらいかというのがあるのよ。何が起ころうと、良心の発露というのはあるわけだけど、人の噂じゃないけど、75 日とか、1 周忌とか 3 回忌とか、次は十周年とか。俺は続けると言えば続ける人間やから、そうも思わへんけど、続いているものに対して人が感じる意味っていうのを感じ

たというか、4 年目なんて中途半端やろ。そこに結構、みんな反応してたね。そやから面白かった。

中村：家族支援と言っていて、世代をとおして家族は続くし、記憶に残るし、持続する支援というのは地域の日常からすれば当たり前という気もするけれど。

村本：日常性を取り戻すことは回復の第一歩でもあるだよね。1 年目の福島の支援者支援セミナーでは、支援者たちが本当に厳しい状況のなかで頑張っておられたのだけど、話をしていくなかで、被災後も鉄道模型のグループを続けていること、クリスマスツリーを飾ること、干し柿をつるせることなどが力になっていること、つまり、去年やおととしと同じように今年もできるということが力になっていることがわかってきた。だから、私はあえて福島では、子どもたちと一緒に、毎年、クリスマスカレンダーを作るという同じプログラムをやることにしてるの。そうすると、毎年続けて来てくれる子どもたちがいるんだよね。この時期が来ると、このプロジェクトがやってくる、「ああ、1 年経ったんだな」と、私たちが行くことが、その地の日常の一部になったらいいなと。

今の社会、何も安定して続かないでしょう。政治家も政策もコロコロ変わるし、予算のつきかたも頻繁に変わる。そんななかでも、これまでの経験から、こちらに核があれば、どんな予算のつき方できても、切り口を工夫することで継続させていくことができると思ってきたし、移ろいやすい世の中であっても、細くても安定的に同じこ

とが続くということが安心とか信頼につながるのではないかなと。大学でも、基本的に予算は単年度ごとに変わっていくけれど、それでも、予算のつき方に関わらず、やっていきますという姿勢が必要だと思ったのよ。

5. 変わらないものを みつめ、大切にする

中村：それはわかります。時間とともにニーズのくみ取り方が変わって、支援にかかわる制度が科学的な根拠もなく変化していくことには注意が要ります。いじめや学校の事件があればスクールカウンセラーが制度化され、学校の教師もカウンセリングマインドとかいいだしました。その後はさらにスクールソーシャルワーカーが入りだしています。また、日本はとても発達障害というラベルが多くなりすぎていると思います。それに対応してコミュニケーション技術の講習とかが多くなっています。こうしてニーズが常に変化していき、中途半端に制度化された「仕事」が導入され、それぞれ何をしているのかわかりづらくなっています。肝心の教師は、本来の教育以外の事柄への対応で疲労がたまっているようにもみえます。補助金もそうですが、いろんなものが変わっていくじゃない、そういうのをもっと批判すべきなんだけどもね。コロコ

ロコロコロ変わって。

村本：そう、だから、それに対する反発があるのよ、十年十年と言うのには。それに、やっぱり原発がショックで、未来の子どもたちのことを考えたら、大人たちに責任があるし、気づかずにきた自分の責任があって、何か行動しなければというのもある。

中村：「ただ乗りしていた私」として自分に返ってくることの自覚、省察、反省とともにこのプロジェクトがあるということと重なります。私は、「きょうとNPOセンター」に長く関与してきました。地元でも保育、学童、PTA等にも関係してきました。コミュニティづくりをしています。地元の小学・中学でPTA会長してたことあるんだけど、小学校にある大きなクスノキだけが変わってないんですよ。130年の歴史があって。校舎も街も変わっていくけれど、変わらずあるというシンボリックな意味があって、そう考えると、福島には立ち入れなくなるじゃない。立ち入りのできない地域ができる、つまり地域を消してしまうという、これが犯罪的だよな。もちろん、アウシュビッツも負の街になっていくわけだけど。消し去ってしまうことのもつ衝撃は大きい。

村本：一人の命は短いけど、歴史を持ち続けてきたもの、たとえば、教会とかお寺とか、社会が変わっていても残っていくものがある。そういう意味で、大学にも一定の意味と責任があるよね。

中村：そうです。時々、運営の都合で変え

てはいけないものがある。その大学のミッションがそうですし、シンボルもそうですね。そして何よりも何百年と持続させる責任が現在を生きる人間にはある。コモンズだよね。

団：ぜんぜん関係ないけど、この前、仏光寺の中の小さなお寺のギャラリーで漫画展やってたんだけど、そこに祇園祭のゴミゼロ運動とかいうのやっていて、仏光寺さんに協力要請に来たとかで、きょうとNPOセンターの野池（家族応援プロジェクトと連携して、福島にも同行した応用人間科学研究科の第一期卒業生）が偶然やってきて。京都は狭いなと思ったわ。

中村：それは京都の環境NPO等と大規模にやってる、なかなか評判のいい活動なんだけど。

村本：それがコミュニティということだね。

中村：だから、ファースト・エイドは別にして、とにかく、支援とは何かというのが根源的に問われてくる。日常があって、個人の物語から社会の物語まで。社会の物語のなかには汚いものも含まれていて復興過程において見えてくる。個人の物語の自由に生きることができる物語だけではなく、地域にいけばいくほどそのしがらみのなかでの物語になる。原発立地地域を財政的に優遇してきた措置のなかで、賛否両論のなかを生きることが強いてきたともいえる。つらい生き方を押しつけているともいえます。だから、その幅もふくめて理解をする、

どんな具合に復興が進むのか、清濁かきまぜていく復興の渦があります。歴史にその都度決着をつけてこずに、引きずるものを持ちながら日本社会の無責任の体系があり、今をかたどっています。731部隊のことも引いたけど、医学の歴史はクリアに戦後と戦前にわかれません。3.11前後でそんなに切れ目ができる原発政策ではありません。連続していきます。ますます矛盾を深めるのでしょうか。汚染がれきの処理については地域のエゴもでてきます。証人になる時間が十年は長く、攪拌された清濁あわせたものの証人になるのは決意が要ります。

6. 個人の物語を 起点にする

村本：南京のプロジェクトをやってきて思うのは、パーソナル・ヒストリーを束ねた歴史が必要。遠くから東北の復興を見ても、マスコミを通じて大きな物語は見えてくるかもしれないけど、パーソナルな多様な物語は見えてこない。年に1回であっても、現地に身を運び、そこでパーソナルな出会いをすることで、それをつなげて見える歴史があるように思う。

中村：トレーラー・ハウスの保育園の話、それを牽引した園長の、それはおそらく震災以前からあったその人のパーソナル・ヒ

ストーリーの展開形態だと思う。もちろん3.11でその人のパーソナル・ヒストリーも大いに変化したのだろうけど、強化された面もあるように思いますよ。生きてきたように復興の物語をつくるんだと思います。そこには渦ができて、パーソナルなんだけど、社会的な物語も生じてくるし、賛同する人も広がっていく。いろんなことが重なっているよね。

村本：去年は、その園長先生にインタビューさせてもらったんだけど、そうすると、1人の女性のキャリアの物語が見えてきた。保育園経営という計画の進行を震災が早めたにすぎないということ。そこまで詳細を追えないかもしれないけど、たとえば、プログラムを通じて継続的に出会った親子の話から、断片でしかないけれど、ひとつの家族の物語が見える。被災の影響が大きく見えていた1年目から、だんだんと日常の家族の問題になっていく。病気や老い、そして子どもの成長。震災が負荷を与えて、時間が早まっているだけ。池に投げられた複数の大きな石の波紋の話だけど、何か所かで波紋を拾うことで、少し全体像が見えてくるかもしれない。中に埋め込まれていると、目の前のものはよく見えても、自分を含みこんでいる大きなものは見えにくい。日本の外にいる方が、日本全体がよく見えるように。時々、中に入ることで小さなものを拾いつつ大きくとらえることができたら。

一環した視点で見続けることほど支援になることはないなという信念みたいなものもある。それは、トラウマを生き延びた人たちのカウンセリングで感じてきたことだ

けど、支援者には本当のところできることなんてなくて、とにかくしっかり見ているということに尽きる。ストレートな支援ではないかもしれないけど、十年、私たちは見えていますよということがサポートになるかと。

中村：アメリカで活躍する、犯罪者の社会復帰支援団体の「アミティ」のワークショップにでたことがあります。京都の法然院でした。団体の主宰者のナヤ・アビータさんが講師でした。ワークショップの最後に、こんなワークをしました。一年後の自分に宛てた手紙を書いてくださいと。封をして、自分宛のアドレスを書いたのです。それが一年後に届きました。アミティのメッセージ・カードと一緒に。そういうことを実際に何年か年単位でやってるんだと。受刑者たちがそこを通過するんだけど、何通か書いてもらっておいて未来の自分宛てに、その時々のアミティのメッセージと共に送り続けるんだって。それだけ、人の回復には時間がかかるという取り組みでした。私たちはずっといいますと。さっきの村本さんの性犯罪への取り組みとも重なりますよね。いい取組だなと思って。

村本：そうそう、ずっとそこにいるということの意味は感じる。二十数年、研究所を維持してきたけど、カウンセリングを卒業した人たちが、密かに、時々、研究所の存在を確認して安心するということがあるんだよね。「灯台のよう」と言ってくれた方がありました。

中村：この間、一緒にイギリスにもいった

けど、例の「からのゆりかご」（映画「オレンジを太陽」の原作名）のこと。あれも同じで、何十年たってからの気づきですよ。しかもすごい歴史的事実をひとりのソーシャルワーカーが発掘していくのです。そこで児童移民基金のいうライフストーリーワークがいるんですよ。移民たちのように。自分がある根拠がわからないから。

団：そやからこそな、会場を転々として展覧会に何人参加者が来ましたということよりも、人数少なくとも、去年も来ましたよという人がある方が、その人にとって、それはサポーターで、すごく幸せなことやんか。去年があって今年もある、そして来年もあるということの意味。

中村：そうした視点こそが十年続けて、復興の証人になるということの意味ですし、間接支援として定点の地域で協働していくということかと。だから地域でのパートナーを見つけるということも大きいよね。むつはそうした点では安定しているけど、他の地域はどう？

7. 協働する 支援の形をつくる

村本：福島はそう。多賀城はそうなるというのと今、思っているけど、岩手はまだこ

れからというところ。そこが、私の予測を越えていたところで、津波の破壊力のすごさを改めて感じた。

団：それは何を破壊されたと思ってるの？

村本：何といっても建物、ハード面と、人々のネットワークというソフト面。海岸線さえすっかり変っちゃったから。

団：う〜ん。俺は、その状況に入る人たちの援助の落ち着きのなさやと思ってるけど。場所はあるやないか。そんな大層な会場を求めているわけではなく。

村本：でもね、やっぱり沿岸部はね、物も持っていかれたし、人も持っていかれた。マガジンにも書いたけど、半年後の岩手で、宿泊施設がないから、沿岸部に車で一時間という遠野に全国からボランティアが集まり、毎日、日帰り通ってた。混沌とした状態だけど、機動力があって機能していたよね。良くも悪くも、誰がリーダーかさっぱりわからなかったの。無秩序だったけど動いていた。そこでは、明日のアポさえ実現しない。目の前のことで一杯いっぱい。私たちがやろうとしているのは、あってもなくても生きていくのに必ずしも不可欠というわけではないもの。それを受け取る余力はない。もちろん、年々、時間経過とともに変化しているけれど、変化しないままのものもある。福島はまた、別のものを抱えているけど。

団：そらな、もちろん、そういう側面もあるやろけれど、わかりやすい被災はわかり

やすい援助がずっと入るで。福島なんかそこですごく屈折するわけや。むつだって、もっとそうや。

中村：以前、朱雀で映画と対談を企画しました。お二人にも対談してもらいました。その時『傍-かたわら 3月11日からの旅-』（2013年2月16日（土））を上映しました。それは地元のFMラジオ局の記録です。印象的なシーンは、ひたすら、無くなった方の名前を読む場面でした。ラジオでその名前を聞きながら、避難所で地元のお年寄りたちがその人の思い出を語るのです。そんな具合に生きていたリアルな姿が浮かんだのです。そこで日常が回復していくことに安心していく。コミュニティがそこで見えてくるのです。

村本：そこで「心のケア」が邪魔をする。「何ができるんですか？お絵かきボランティアですか、心のケアですか？傾聴ボランティアですか？何か言ってくれたら、それを求めているところにつなげます」と。わかりやすい概念を人々も欲している。

中村：どんなボランティアであれ、じわじわとそこに日常が戻ってくることが大事だと思う。仮設住宅はそうした意味で地域が根こそぎ移動しているし、原発被害での立ち入り禁止区域というのもつらいです。生きた場所で死にたいという思いは強い。

団：宮古の街では、おじさん、お婆さんやらが漫画展の会場に来て、被災のこと

をあれこれ話すようになっていた。そこに外部から支援に入っている人たちの話を聞いていて、今の街の状態とずれているのではないかなと思ったもん。

村本：立ち寄って話をしていけるおじいさん、お婆さんたちは、自然な流れのなかで日常を取り戻していける人たちだけど、たとえば3年目の仮設住宅で見たのは、時間が経過しても先が見えない層とそれを支援している人たち。

団：地域社会はもともといろいろな問題を抱えていて、貧しい地域もあれば、過疎もあり、被災のせいで早まってしまった絶望とかもある。俺らはさ、めったに行けへんと覚悟決めて、こんなことしかできませんけどという前提で、お役に立つかどうかはお宅らが決めてくださいと言ってるからさ。

中村：ボランティアも定点みたいにして関係ができることもあるけど、どちらかといえば落下傘部隊みたいに来る人たちのようなでもある。このプロジェクトはできればパートナーを組んでやっていきたい。むつで言うと、民生委員が動員されてくるとか、課題はあるんだけど、ローカルになればそういうのもありかなと割り切れてきます。パートナーを組んでもらっている方々との関係性なので、「間接支援の理論」が必要かなと思い始めました。これは私のなかでは新しい発見なのです。間接支援はその地域によって違うのです。どんなスーパーバイズをすればよいのかという論とも重なります。こ

ちらも技術を高めていかないといけないところだね。

団：やってる二人は、どう構成したらいいかといろいろ工夫を凝らしているにしても、向こうにしたら、そんなことはわからんでも、とにかく、大学から先生が毎年来てくれるという、これはありがたいという気持ちが素朴にあるよ。そういう意味で、ピントのはずれた感謝もあるかもしれないし、それに市町村行政と県行政との意識の差というものもある。

中村：そう、なんか了解しなければいけないものがあるんですよ。

団：あと7年とか、そういうふう to 実現するイベントは、仕事として想像できない。役所の仕事ではできない。いつまで私がいるかわかりませんからということになる。そういう意味では、地元の小さな民間企業なんかの方がしやすい。でも、そういう習慣がないからね。

中村：変わらずそこにあり続けるというのがいいよね。

村本：個別にはいい人がいても、組織力がないとできないからね、このプロジェクトのミソは地域の人との協働なんだけど、そこが難しいところだったね。

中村：パートナーシップも大事だけど、こちらが何を持ち込んでいるのかということを実感することも大事だね。とにかく、毎年、出発点は下北で、最終点は福島という

地図が重要だね。あの地図があることがね。

8. 「復興で学ぶ」活動でもある

団：きのうの研究会で、院生たちの思いを聞いて、これまで行く機会がなかった奴らをいっぺん連れてってやるのはええことやと思った。やっぱり、遠いとか、どこ行ったらいいのかわからんとか。行って何を感じるかはそれぞれやけど、少なくとも、行ってみたという立場でものを語らせたり考えさせたりすることは、教育的にすごくええことやと思う。

村本：そう、教育的な観点は最初なくて、途中から見えてきたものだけど、やっぱり、今、動いている人たちの原点が阪神淡路大震災だとすると、今、関わっている院生たちが、何らかの形で来るべき災害に貢献してくれることにつながると思う。それって、いいことだね。

団：そして、できれば、同じことがまた起こったりしないために、何を市民社会ができるのかということを考えられるようになったらもっとええじゃないですか。

中村：サービ斯拉ーニングの評価でもっと

詰めないかんところなんだけどね。

団：そのプランで、行ったやつに何か負荷をかけるか。

中村：その方がいいかもしれない。学習の転移が起こることを、個別に丁寧に見る必要がある。サービ斯拉ーニングという言葉もわかりにくいので開発したんだけど、とにかくどんな学びになったのという評価論が要る。

村本：教員主導でなく、院生それぞれがテーマを見つけて発展させていって欲しいと思って、今年は、だいぶ工夫を凝らした方向づけをしてきたんだけど、それなりに手ごたえはあるかなと。院生同士で語り合うとか自発的な動きにつなげて欲しい。大学院のサービ斯拉ーニングなんで、教員がひとつの方向に引っ張るのでなく、おのおのが学びを作っていく。

中村：そうならいいよね。そういう意味では、前後、教員と一緒にいない方がいいんじゃない。

村本：それがそうでもなくて、ある程度まで、やっぱり話してやることも重要なんだよね。私は放任主義のところあるから、もう少し親切にした方がいいんだなということを学んでいる。今の若い人たちの弱さなのかもしれないけど、どのくらいまで援助して、どのくらいで手を引くかという兼ね合いが難しい。

中村さんが、最初のシンポジウムで、ニーズはどこにあるのかって言ったけど、結

局、ニーズはこちらにあったんだよね。むつの漫画展だけは、むこうにニーズがあったわけだけど。

中村：でも、ニーズは作っていったらいいんだから。支援者支援とか、お父さん支援だって、外から持ち込まなければ見えてこない。

村本：ニーズって、世の中の流行によって作られてるところもあるでしょ。

団：それに、被害者、被災者になって初めてニーズが生まれるというのものもある。自分が知らなかったところに一歩目が開かれるのはいいことだと思う。

中村：そうなのよ。学会なんかでも、異分野の人を呼んで話を聞くことがある。私も異分野の人として呼ばれて話すとき、それはそれで面白い出会いになって、それを楽しめるようでないとね。なんで漫画展なのかということを問いながらです。

村本：それは重要だよ。外から異質性を持ち込むことがひとつの意味だよ。災害復興に関するある本に書いてあったんだけど、発展途上国に大きな災害があって初めて世界中からボランティアが訪れ、新しい価値観の組み換えが起こると。東北でも、良い意味も悪い意味もあると思うけど、震災をひとつの契機にして、わっ〜と外から風が吹き込んだ。その時に、対人援助職者としては、思想というか、バックボーンがいるよね。そうでないと異質の出会いを楽しめない。上から眼線の押しつけ、余計な

お世話になってしまう。

中村：そう、ミッションがいる。ただ、その外からの風をどんなふうに取り受けるのか。それはまだ課題があるよね。哀しいものもあるよね、自衛隊だったり、原発だったり、外から来るものはネガティブなもの、論争的なものだったりということもあるからね。

団：たまたま夜、TVドラマ観てたら、大昔やってた「若者たち」っていうのを配役変えてやってたけど、怒るは泣くはわめくわで、こんなドラマ、今、もうTVではやらへんなと思った。勸善懲惡の水戸黄門のヴァリエーションみたいなわかりやすいもののしかやらない。

村本：ほら、遠野物語の三陸大津波の話、一年目に遠野に行った時、たまたま林隆三が第99話を朗読したんだけど、その話たるや、定番のプロットが全然見えない。津波で死んだ奥さんがあの世で以前、好きだった人と一緒にいるという。私たちにまったく馴染みのないわかりにくいプロットなんだけど、そういうのを許容するというね。その後の話もおもしろくてね、たまたまNHKでやってたのを見たんだけど、その子孫にあたる男性が出てきてね、母親からその話を聞かされて、ずっと受け入れられずに憤慨していたんだけど、このたび、その母親が津波に流されて、だんだん受け入れていくと言う。

団：遠野物語って、みんなそんな話やったやろ。

9. むつから始まる

村本：今年もまた、むつから始まるね。むつに絞って振り返るとするなら、あらためてどうでしょう？

団：俺なんか、むつに何回も行くなかで、外側にある大きな力が、土地とか地域社会を好きなように触って、好きなように放ったらかしてというようなことをやるんやなあと思った。やられ放題の下北半島というのは、原発関連よりあの市役所行った時、一番思った。自治体規模に似合わない立派な市庁舎を立てて、住民が文句言ってるころは日本中あちこちにあったけど、撤退したショッピングセンターの建物の有効活用ですと、市庁舎に使っている。この現実にはショッピングじゃなくてショッキングだったなあ。それに2011年9月に、誰も入場者のない原子力PRセンターの受付で、おそらく地元の娘さんが、「いらっしゃいませ」と働いているのを見たときはやっぱり切なかったね。

そうそう、この本が面白かったんや。岡絵里っていう人の福島の話。壊れた第一原発、第二原発の近くまで行ってるんや。ジャーナリストに外から告発するというようなスタンスではなくて、そこに暮らしている人たちについて回って書いているから、なかなか面白かった。そう考えると、人間ってなかなかしたたかやし、事

故は起こってしまったんやから仕方ないと、後始末に引き続いて働いてる元の原発関連労働者。イレズミのあるような人たちなんだけど、意外とその人達がまともなことを言っている。

われわれもいろんなエリアを回ってるから、ちょっとずつ違う現実が動いているのが見えて、仙台なんかはある意味、支援先として関東の人たちには恰好なのかもしれない。被災もあったけど新幹線は早々に動いたし、東京から近いし。もちろん仙台でも沿岸部は大変だったけど、岩手とはまた違うね。

中村：ニーズの裏表なんだけど、家族支援なんで、その中にはいろんなものが含まれていますよね。私にもまだ十分には見えてない。介護の話とか、後から自衛隊とかわかってはくるんだけど、パートナーシップの相方ともこうした意図での対談をしたらどうかな。もっと話して共有したらいいよね。べたっと十年というより、リフレクションしながら。

村本：出版に向けて、今年、むつに行くときに、インタビューというのか座談会のようなものができたらなと思ってるんだけどね、何を聞くのがいいんだろ。

中村：むこうには何が見えているのか。あれやこれや。

村本：まずSさん、それから可能であれば、続けて参加してくれている若い人たちとかね。

団：図書館の人とかね。

中村：家族研究のなかではね、東日本と西日本では家族の文化がまったく違うというのが定説になってる。文化が違うらしいので、東北の家族の研究をちょっと見てみようかと思ってるんだけど。

団：家族療法ってどうも関西風というか、西日本の方が入りやすいという説がある。家族療法でワッといろいろ言うやつは関西から出てくることが多いというのが業界定説なんだけど。それは同和問題の影響がものすごく大きくて、家族援助とかのベースの認識に違いを与えているというのを最近どこかで聞いた。

中村：ジェンダーもそう。西日本発なんですよ。東日本は海外から直に入ってくる。同和地区の存在が違うからね。在日とも関係してるかもしれない。ちょっと理論的には調べなアカンけど。ミニューチンにしても、やっぱり家族文化が強いところで家族療法がでてくる。

団：東の方は契約的ファミリーなんじゃない。約束のことを重んじる気風があるかもしれない。知らんで。

10. やはり理論が欲しい

中村：最初に戻るけど、セオリーのこと。

村本さんが責任を持って、この辺で整理しておかないと。十年というインパクト。

団：十年と言っても、最初には不確定要素しかないなかで、やるなかでだんだんとできていくもの、それこそが支援的であるというそれにはまったく賛成で、医療モデルの治療やら回復やらとは違うもので。どんなふうに回復していくかは相手が決めることで、だからと言って、好きにしてというのでもない。向こうは十年後のことなんか考えられへん、こちらにも計画があるわけではないけど、あなたたちにも十年後がありますから、その時によい今を生きてくださいと。泥かきしてるときには、そんなこと言われへん。

村本：トラウマの臨床していると、十年単

位で見れば、少しずつ人は変わっていく。今、この人どうなるんだろうと途方に暮れても、十年経つと人は案外しっかり生きていたりする。今は大変でも、十年というスパンで見たら希望が見えるかもしれない。

中村：トラウマ後成長（PTG）というのもあるし。十年経てば、誰しも賢くなるし、十年生きてたってことが重要なんじゃない。いろいろ拾えたらいいけどね。対人援助の進化を。おもちゃ美術館の支援の仕方とか、被災地の居場所づくりで紙コップではなく陶器のコーヒーカップがやはり暖かい印象になるとかの微細さとかね。他にも掘り起こせるものがあれば。

周辺からの記憶 5

～2011年 むつ・遠野・福島～

村本邦子（立命館大学）

2014年11月6～7日、日本平和学会2014年秋季研究集会分科会企画で、「原発に立ち向かう水俣病当事者と支援者」と題する水俣フィールドワークに参加した。水俣と福島がある意味で相似形であること、水俣のもやい直し、土地の自然や文化を軸にした地域復興を東北に活かせないのだろうかと思いながら、自分なりに勉強してきたものの、もうひとつよくわからない感じがあった。今回、先人たちの導きを得て、相思社を訪れ、当事者や支援者の方のお話を聞き、参加者と語り合うなかで、頭がすっきりと整理され、水俣と福島のことを考えていく軸ができたような気がする。

相思社は、1974年の落成から、水俣病未認定患者運動の拠点として活動してきたが、時代に伴う紆余曲折を経て、現在は、検討を重ねつつ、①患者とのつきあいの深化・拡大、②水俣病事件を伝える活動の拡充、③地域との主体的な関係の構築へとその役割をシフトしているようだ。お話を聞いた一人ひとりが個性的で、それぞれが自分なりに感じたこと、考えたことを「私」として語っていたことが印象的だった。たとえば、もやい直しに対する評価もそれぞれで、リアリティがあった。

政府は、ロジックの立て方、分断のテクニックなど、水俣から「悪い教訓」を福島へ持って行っているのではないかという。実際、登場人物たちは同じだ。何とかそれを逆手に取れないものか。福島について、「水俣病は終わらない。被害に遇ったことをきちんと受けとめて責任をとってもらうことが大切。水俣病は公害の原点であると言われているが、利用されないよう闘っていきたい」とおっしゃっていた。

11月7日、鹿児島県議会は川内原発再稼働推進を求める陳情を採択した。フィールドワーク参加メンバーのなかには、早朝に議会に向けて出発した者もいた。私の故郷は川内原発から30キロである。これから日本はどのような方向へ向かっていくのだろうか。予断を許さない。

2011年9月22～24日 むつ

<下北むつへ>

時は、2011年9月22日に遡る。陸路で、東京、仙台、遠野と営業回りに出ていた平田さなえさんと私は、花巻、盛岡、野辺地を經由して、夕刻、はるばるむつまでたどり着く。三沢経由で京都からやってきたプロジェクトチームと合流するが、彼らは空港からの途中、六ヶ所村と東通村を案内してもらったという。原燃PRセンターは、人っ子ひとりいなかったそうだ。

2011年6月1日の朝日新聞には、「原発不安、口重く現場から～下北半島」という記事が出ている。東通村の女性は、自宅で東通原発と大間原発から半径20キロの円を下北半島の地図に描いてみたそうである。「逃げ場がない。海に逃げるしかない」「村では、いま反対も賛成も言うことはタブー」。

「周辺からの記憶3」に詳しく書いたが、下北は原子力船むつや六ヶ所村に代表されるように原発との関係が深く、日本原燃が本社を置く。陸海空の自衛隊基地が配備され、アメリカ空軍の三沢基地もあって、人口6万人ほどのむつには、災害復興のために被災地に赴く自衛隊や原発関連の仕事に従事する人が多く、その子どもや家族もさまざまな影響を受けているということだった。むつでも、原発への不安がかすかに聞こえてくる。

<むつでのプログラム>

9月23日10時、むつ市立図書館会議室にスタッフが全員集合する。児童相談所職員と立命館からのメンバーで合わせて20名ほど。打ち合わせ、リハーサルを経て、

13時開会。いささか物々しく、緊張した空気が漂う。企画者として私が最初に挨拶した後、関谷道夫児童相談所所長が挨拶され、団士郎さんの講演、村本の支援者支援セミナーと続き、この間、院生2人は児童相談所職員と一緒に子どもたちの託児を担当してくれた。24日は10時から、中村正さんの「父と子の絵本ワークショップ」、村本の「ママたちのいどばた会議」を並行した。ちらしと報告は、

<http://www.ritsumei.ac.jp/acd/gr/gsshs/tirasu/mutsu.pdf>

<http://www.ritsumei.ac.jp/acd/gr/gsshs/sinsai/project/sinsaiproject-mutsu.html>



むつ市立図書館

団さんは、漫画展を見た方々から、それぞれの物語を聞くことになったようだ。年齢、性別や境遇によって思いを重ねる作品は違うが、自身が内面に抱える物語が生きるエネルギーになり、「なにかを見て、投影できるなにかを抱えつつ生きている自分を実感できることが、他者と自分の繋がりを感じ取れる一方法ではないかと思う」と報告している。



家族漫画展

中村さんの「父と子の絵本ワークショップ」についても、HPで詳細に紹介されているが、お父さんが我が子に絵本を読んでやるという最後の場面は何とも暖かくて微笑ましく、父子のよい思い出になるだろうなと思った。

支援者支援セミナーは、子育て支援に焦点をあてることにし、子育て支援大変、子

育て大変、子ども大変…という循環を逆に回して、子育て支援楽しい、子育て楽しい、子ども楽しい…という循環にするようにと組み立ててみた。ケア役割の質をあげるためには、自己犠牲でなく、主体的な人生を充実させる必要があるし、上手に援助できるようにするためには、上手に援助される体験を重ねることも重要だ。

いくらかのバズセッションの後、むつの支援者の課題を挙げてもらうと、他職種の連携がうまく取れていないという声があがってきた。「来年は、多職種で小さなグループになって事例検討をするとよいかもしれませんね」と言ってみたが、さっそくこれを取り入れてもらって、翌年からは、この形のセミナーをすることになった。継続してやれることの利点は、土地のアセスメントをしながらプログラムを工夫していけることだ。

「ママたちのいどばた会議」では子育ての大変さを分かち合うグループをファシリテートしたが、「子育ては大変だけど」という導入に違和感の声があがった。

私が子育て支援を始めた 1990 年代前半、子育て支援という言葉さえなかった時代だが、母親たちは子育てを大変だと感じることを恥じており、世の中は、「昔のお母さんは電化製品もなく、子どもも多いなかで普通にやっていたのに、こんな楽な時代になって、子どもも満足に自分で育てられないなんて！」という批判の声に満ちていた。社会に向けて「今、子育ては大変なんですよ」と訴えつつ、母親たちに「子育てを大変だと感じて当たり前なんですよ。みんなの助けを借りましょう」と伝えることが、母親たちの安心につながっていた。



支援者支援セミナー

ところが、十年も経つと、少子化対策から、「子育ては大変だから、子育て支援」というのが当たり前になり、まるで子どもがお荷物のような扱いになって、それではあんまりだと思えるようになった。子育ては大変なところもあるが、本当のところ、楽しく素敵なことがたくさんある。「母性神話」が批判され、「子育て大変」と語り尽くされた都会では、一周回って、「子育て、楽しいことがたくさんあるよね！」という方が新鮮である。地方都市へ行っても、あまり違いを感じない。

でも、ここでは暖かい支え合いや地域での子育てがまだ生きていて、祖父母や親戚、近所の人たちが一緒になって子育てしていた。移動層もあり、個別の状況はさまざまだったが、必ずしも母親が孤立して一人で子どもの責任を背負っているわけではなさそう。そもそも、「ママたちのいどばた会議」というタイトルに多世代の母親たちが集まったというのも興味深いことだった。これは、この土地の力のひとつと記憶して、来年につなげよう。

もうひとつ感心したことがある。震災の話題のなかで、直接的被害は聞かなかったが、被害の大きかった八戸に家族や知人が

いるという方は多かった。震災後3日は停電だったが、テレビがついてから、あまりの惨状にショックで泣いたという女性たちがいた。彼女たちは、後日、子どもを八戸まで連れて行き、被災後の光景を見せたという。「歴史に残る大きな出来事だから、見せておかねばなるまい」と感じたそう。陸に上がった船や破壊の様子に、テレビではバーチャルなものと感じていたらしい子どもも、実物を見てびっくりしていたらしい。あるがままの現実子どもと共に向き合うという姿勢は、なんともかっこよいではないか。近年とみに弱くなっている部分だ。



2011 in むつ スタッフ

<プログラム後に>

一日目の夜、児童相談所のスタッフたちと一緒に懇親会をした。その日が誕生日という方がいらっしゃって、サプライズで大間のマグロが登場した。大間の漁師たちは、100~200 キロのマグロを年間 2~3 匹獲ると、悠々と生活ができてしまうという。しかし、その2~3匹が容易ではない。獲られなければ無一文である。運良く漁に成功した者はよいが、そうでなければ生活保護を受けることになる。ギャンブル性の高い仕事である。そこに原発がきたわけだ。むつ

から帰った翌月、下北半島 7 市町村長連絡会議のニュースを目にした。会議は、福島第一原発事故を受け、原子力防災について協議する目的で、6 月、むつ、東通、大間、六ヶ所、横浜、佐井、風間浦の首長をメンバーに発足していた（毎日新聞、2011 年 10 月 12 日）。

プログラム終了後、空港への途上、関谷所長が、田んぼのなかにたくさんの風力発電が並ぶ美しい場所を経由してくださった。下北の地理はさっぱりわからなかったが、後から思うに、横浜町だったようだ。お天気がよく、青い空、緑の田んぼ、沸き立つ白い雲、そして、力強く回る風力発電の光景は、以来、私にとって下北の原光景となっている。



下北の風景

「周辺からの記憶 2」に書いたが、仙台は復興支援イベントラッシュで、現地の人々はお疲れの様子、残念ながらご縁がなかったこともあり、2011 年度、宮城でのプロジェクトは見送ることにした。

2011 年 11 月 3～6 日 遠野

<遠野のこと>

遠野は、柳田國男の『遠野物語』の舞台であり、座敷わらしや河童の伝承で知られる小さな街である。人口は約 3 万。増えてはいないが、世帯数が増えて核家族化が進み、共働き家庭が多い。沿岸と内陸を結ぶ交易拠点として発展した経緯から、相互扶助の意識が強く、大槌から陸前高田まで沿岸部に半径 50 キロに位置し、車で 1 時間という条件にある。震災直後から後方支援の中核地となり、官民一体となった「災害救援のモデルケース」として注目を集めていた。

皆より 1 日早く出発し、遠野図書館・博物館の向かいにあるホテル「あえりあ遠野」にチェックインして、平田さなえさんと合流する。ちょうど文化の日、「あえりあ遠野」と隣接する市民ホールで「遠野文化フォーラム～文化の力で元気な町を」が開催されることを知り、せっかくなのでのぞいてみることにした。『遠野物語』誕生百年を迎え、2011 年 4 月に設立されたばかりの遠野文化研究センターの主催である。子ども語り部、林隆三の朗読ステージ、「遠野文化賞」表彰式、山折哲雄講演「災害と文化」の四部構成になっていた。これが予想以上に面白く、この後、繰り返し振り返って参照することになる重要な基点となる。

第一部「子ども語り部」では、小友小学校と土淵小学校の小学六年生の女の子 6 名の語り部が、順番に「むがす、あったずもな」と語り出し、座敷童やオシラサマなど、ひとつずつ物語を語って、「どんどはれ」と閉じていった。遠野弁が耳に心地よい。

第二部で朗読を披露した林隆三も、子どもたちの語りに気後れを示したほどだ。

第二部の朗読は、『遠野物語』第 99 話だった。明治 29 年の三陸大津波にまつわる話で、月夜の晩、福二という男が、田の浜（山田町）で、津波で亡くした妻が男と歩いているのを見かける。実は、昔、妻と相思相愛の仲にあった男で、今はあの世で夫婦になっているのだという。「おまえ、子どもが可愛くないのか」と声をかけると、妻は悲しそうな顔をして、泣きながら足早に去って行ったという話だ。「これは、いったいどういう物語として理解したらいいのだろう!？」と軽く衝撃を受け、面喰ったというのが正直なところだ。しかし、考えてみると、『遠野物語』とは、そもそもそういう物語である。むしろ、すぐにわかりやすいプロットに落としこもうとすること自体に問題を感じるべきなのだと考えるきっかけになった。

トークの部分では、山形出身だった母親が子どもの頃にしてくれた捕鯨の話の思い出が語られた。繰り返し母を真似て語る林隆三の表現には迫力があり、ラジオしかなかった時代、想像力を刺激する方言の力と、感情が先に動くので知識への好奇心と感動があったという話が強調された。

第三部は「遠野文化賞」の表彰式で、遠野小学校の全校表現活動「遠野の里の物語」が表彰された。イメージとしては、全校生徒が出演するミュージカルのようなものだが、30 年に渡って受け継がれ、親子二代にわたって共有され定着している。この秋、東京の国立劇場で開催された「文化による復興支援」シンポジウムにも出演そうだ。30 年続けてきたという事実はたいしたもの

だし、自分の言葉で、堂々と伝承の責任を語った児童会長の男の子の受賞スピーチには、これがその教育成果かと感心した。

第四部、山折哲雄の講演では、遠野の自然の豊かさが文化の原点であること、東の三大詩人は美しい自然と盆地の閉鎖性の葛藤を昇華するように生まれた。他方、峠によってつなぐという発想は古来からあったのではないかと。死者との関係性は不確かなもの。地震学者寺田寅彦が、日本には地震が多く、自然は予測不可能なものであるから「無常観」が形成されたとした話などを紹介し、科学は自然を制御できるのかと問いかけた。

「あえりあ遠野」では、「昔話のタベ」として、毎夜、語り部の話を聴くことができ、ホテルの各部屋には、聖書の代わりにと言おうか、水木しげるの漫画『遠野物語』が備えつけてある。なかか乙なもてなしではないか。

翌日は、遠野市市役所・福祉の里を訪問してご挨拶をし、遠野の現状について伺った。長期的支援の申し出はありがたいと、今後の展開について助言をしてくださった。難しいのは、たくさんの支援オファーがあり、オプションとして提示したら、沿岸部の管理職が翌日から仕事に来なくなったということがあったそう。現地のプレッシャーになってしまうのでは元も子もない。

傾聴ボランティアは役に立っているようで、「意外と専門家より学部生のボランティアがよいのかもしれない。答の出ないこの時期、ただ聴くだけが有効のように思う。ただし、ニーズは刻一刻と変わる。他のニーズもあるはず」ということだった。

また、前日の文化フォーラムでも挨拶を

されていた本田敏秋市長のことが話題に挙がった。2002 年よりずっと遠野市長として地域復興政策を次々と展開されてきたアイディアンとして有名だ。立命館としてどんどんアイディアを出したらいいのではないかということだった。

今回会場となった「蔵の道ギャラリー」もそうだが、遠野を歩くと、公衆便所まで白くかわいらしい蔵造りになっていて、「民話のまち遠野」としてお洒落に売り出していることがわかる。また、あちこちにイベントのポスターを見かけ、文化復興を大きく打ち出していた。私たちが目指しているのは、どちらかと言えばもっと地味なもののだが。



オシラサマ



カッパ淵



伝承園

<遠野でのプログラム>

11 月 5 日、蔵の道ギャラリーで、午後のプログラムの準備をする。遠野のチラシと報告は

<http://www.ritsumei.ac.jp/acd/gr/gsshs/sinsaiproject/tono.pdf>

<http://www.ritsumei.ac.jp/acd/gr/gsshs/sinsaiproject/sinsaiproject-tono.html>。

蔵の道ギャラリーは、蔵を活用してつくられた木造の建物。1 階にギャラリーと多目的室、2 階に子どもの広場、屋根裏には昭和の懐かしいおもちゃやキャラクターグッズが展示されている。

漫画展にもそれなりに人が入る。今回、お世話になった遠野市の方々が覗きに来てくださる。立ち話程度に子どもたちの状況を聞かせてもらう。遠野の仮設住宅には 49 世帯中、10 世帯に子どもがあるが、親戚の家に身を寄せている家族も少なくないという。尾上さんが「あえりあ遠野」の「昔話のタベ」でお話したという語り部のおばあさんも、りんごを持ってきてくださった。よくよく聞くと、この方は私たちも知っている臨床心理士のおばさんだった。りんごを届けてくださった校友会の方もあった。

駅前の商業施設トピアにあったチラシを

見て来てくださったご夫婦は、長く傾聴ボランティアに関わっておられるという。十年前から著書を通じて私のことを知っていて、南京のプロジェクトのことまで知っておられた。さまざまなご縁があるものだ。みなさん応援に来てくださったのだろう。互いに応援しながら、応援されている。

6人連れの女性たちは、宮城の亘理で被災して、ようやく少ししゃんとしたので仲良しグループで旅行に来たのだという。何人かはじっくりと見て回られ、あれこれ語ってくださった。家を流され、避難所から来た方もあるという。おひとりは、「少しは忘れられるかと思って来たのに、私、無理。」と立ち去られた。それぞれなりの回復のペースがあるのだろう。



蔵の道ギャラリー



午前から近くで遊んでいる子どもたちにチラシを配り、午後も二階スペースでゲームをしている子どもたちに声かけしたので、入れ替り立ち替わり、30名ほどの子どもたちが来てくれた。チラシを見て来てくれた一人をのぞけば、皆、遠野小学校の子どもたちだという。文化フォーラムで聞いたばかりの表現活動のことを聞くと、誇らしそうに披露してくれた。学年ごとに演じる題目が決まっており、1年生は河童踊り、2年生は雪女、3、4年生は遠野三山、5、6年生はオシラサマであり、1つ上の学年が次の学年に教えていくのだそうだ。そんなやりとりをしながら、尾上明代さんによる「みんなで楽しく劇遊び」と渡邊佳代さんによる「風船で遊ぼう」のプログラムを行う。



みんなで楽しく劇遊び



風船で遊ぼう

翌日午前は、村本の支援者支援セミナー。グループ形式でそれぞれの思いや考えを語り合った。地元の支援者たちからは、東北の文化の素晴らしさとともに、懸念も含め、東北のコミュニケーションが閉鎖的で、暴力が当たり前、自殺者が多いという話題が出ていた。「傾聴は、ただ聴くこと、ただ語られることにその人のすばらしさがあり、うなづきのテクニックなどいらない」という。被災地支援というだけでなく、対人援助や人間そのものについて考えさせられることが多かった。

午後は、会場を遠野市図書館に移して、団さんの漫画トーク。図書館に隣接する博物館は、遠野物語発刊百周年を迎えた昨年、リニューアルされたとのこと。遠野物語を中心に観光向けの建物としても力を入れて

いるそうだ。学芸員の前川さおりさんのお話によれば、スタッフたちは、沿岸部へ行って、文化財レスキューの活動をされている。また、博物館は、遠野で親戚の家や仮設で避難生活をされている人たちの居場所にもなっているようで、毎日来る人、何をすることもなくボーッと同じ場所にいる人がいるという。それを受けて、特別展開催時には、避難者は無料で入れるようにする予定であるということだった。図書館や博物館は、あの世とこの世の境目、共同体から離れて1人で体を休められる場所なのではないかという。細やかで鋭い人間観察だ。

漫画展や私たちの小さなプロジェクトも、歴史や文化の豊かなこの遠野の街に根付いていけたらいいなと願う。



<沿岸部へ>

短い時間ではあったが、2 日目の夕方、レンタカーで陸前高田へと向かった。薄暗く寂しい国道を山間、川沿いに走り、沿岸部に出ると、広大な空き地に山のような瓦礫、見るも無残な建物の廃墟、自動車のスクラップ。人家が並んでいたろうと思われるところには、瓦礫の端から、片方だけの運動靴やつぶれたカセットテープ、子どものおもちゃがはみ出て散乱していた。

車のナビを見ていると、そこはつい最近まで郵便局や散髪屋やコンビニが並ぶ街だったはずで、あたかも目の前に生きた街や子どもたちの姿が浮かぶようだった。陸前高田は、市民会館や市民体育館など指定避難所の多くが天井まで水没し、市街地全域が壊滅的被害を受けたところだ。

「奇跡の一本松」を見て、大船渡の方へ車を走らせた。地理的な情報をまったく持ち合わせておらず、どこがどこかさっぱりわからなかったが、行けども行けども茫漠と広がる空虚に、ただただ立ちすんでしまう思いだった。写真を見返してみると、翌年、泊まることになる場所に行っていたようだし、駅舎の土台とホーム、線路しか残っていなかった駅はどうやら大船渡の駅だった。

地盤沈下で沼のようになってしまった街跡には、あちこちに小さな花々が哀しげに咲いていた。まるで廃墟となった未来都市の SF 映画の中に入ってしまったよう。言葉を失う。これが日本海岸沿いに延々と続いているのだ。いったいここからどうやって復興していったらいいのだろうと思うと、気が遠くなる。そして、あっという間に暗闇が訪れた。





2011年12月2～4日 福島

<福島>

福島県は、沖合の全域が震源域となり、大熊町にある福島第一原子力発電所付近で15m、隣接する富岡町で20mと高い津波が観測され、福島県災害対策本部発表（2011年6月30日現在）によれば、死者1709人、行方不明者245人、重軽傷者236人に上っている。死者の内訳は、南相馬市588人、相馬市447人、いわき市307人、浪江町112人、新地町100人であり、沿岸部の浪江町以北の4市町の死者・行方不明者は県全体の73.0%に達し、人的被害が集中した。

福島の被害は地震、津波に留まらなかった。3月11日14時47分、大きな揺れによって福島第一原発1号機、2号機、3号機の原子炉が緊急停止。地震と津波による電源喪失で、原子炉の内部や核燃料プールへの送水がストップし、3月12日15時36分、1号機水素爆発、3月14日11時1分、3号機水素爆発、3月15日6時10分、2号機爆発、格納容器損傷、同日6時頃、4号機原子炉建屋5階屋根付近損傷。「5/23・25 東京電力より原子力安全保安院に対する報告」によれば、1号機は3月12日、3号機は3月14日、2号機は3月15日に、それぞれ炉心溶融（メルトダウン）を起こした。

放射性物質は広範囲に広がった。とくに、3月15日、2号機の圧力抑制室の損傷によって最大量の放射性物質が放出された。これが南東からの風に乗って北西へ流れ、40キロ離れた飯舘村や60キロ離れた福島市で急上昇したところに、雨や雪が降り、土壌に沈着した。4月12日、国は、国際的な基準に基づく事故の評価を旧ソ連のチェル

ノブイリ原発事故と同じ最悪の「レベル7」に引き上げたと発表した。しかし、政府の避難指示には問題があった。

まず、2011年3月11日20時50分、半径2km以内の住人に、3月12日18時25分には、半径20km以内に避難指示が出された。次に、3月15日11時、半径20kmから30km圏内の住人に屋内退避が指示され、3月25日には自主避難が要請された。そして、4月22日、半径20km圏内が災害対策基本法に基づく警戒区域と設定され、民間人は強制退去、立ち入り禁止となった。

半径20～30キロ圏内の住民10万人以上が避難する混乱のなか、大熊町では、双葉病院に入院中していた認知症患者と隣接の老人介護施設の高齢者のうち227人が一時取り残された。入院患者132人は観光バスで200キロの移動を強いられ、介護施設に残っていた95人は、5日後、自衛隊に救助されたが、最終的に50人が衰弱死したとされる。なお、これは後に訴訟にもなっているが、数値はWikipediaによるもので、正確ではない。双葉町のHPには、死者119人（直接死11人、関連死108人）、行方不明1人とあり、「関連死」とされているもののなかに、避難に関わるものが含まれていると推測される。避難にまつわる混乱について、フィクションではあるが、園子温監督による『希望の国』によく描かれている(<http://www.kibounokuni.jp/>)。

4月22日に「警戒区域」「計画的避難区域」「緊急時避難準備区域」が指定されたわけだが、局地的に高い放射線量が観測されるホットスポットが問題となり、6月30日、伊達市が「特定避難勧奨地点」に指定され、その後、南相馬市や川内村にも拡大

された。これは、局所的に年間被ばく量が 20 ミリシーベルトを超える恐れのあるホットスポットについて、世帯単位で指定されるものである。避難の判断は住民に委ねられ、避難する場合には国が支援する。

「避難対象区域」と「緊急時避難準備区域」内に行政区域の全部または一部がある自治体は 2 市 7 町 3 村、人口としては合計約 15 万人に上る。なお、政府による避難指示は、年間被ばく量 20 ミリシーベルトを目安にしているが、チェルノブイリ原発事故では、年間被ばく量 5 ミリシーベルトを超えるとされるところで強制・義務移住、1～5 ミリシーベルトで希望移住の対象となったものである（大島・除本、2012）。

6 月 30 日現在、県内の地震、津波、原発事故による避難者の合計は 83,353 人に上る。避難先は福島県内の各市町村や県外各地へ広範囲に分散し、県外避難者は全国の 2014 カ所、35,892 人とされている。役場機能も、双葉町が埼玉県加須市へ移転し、その他の町村も、福島市をはじめ県内の他市町村への移転を余儀なくされている。

これらに対する東京電力による補償金の状況であるが、東京電力HPプレリリース（<http://www.tepco.co.jp/cc/press/index1112-j.html>）で確認することができる。東京電力は、4 月 15 日に福島第一原発事故の避難者に対して「仮払補償金」の支払いを決定し、5 月 31 日に取組状況を報告している。対象は、避難、屋内退避となった地域で、1 世帯当たり 100 万円（単身世帯は 75 万円）を約 5 万世帯に支払った。7 月 5 日、「追加仮払補償金」を約 16 万人を対象に 1 人 10 万円から 30 万円支払うと発表した。この他、中小企業者や農林漁業者に対

する仮払開始についても触れられている。

＜福島での漫画展＞

福島市は、阿武隈高地と奥羽山脈にはさまれた「中通り」に位置し、人口は約 30 万、いわき、郡山次いで県内 3 位である。地震、津波による被害は大きくなかったが、放射線被害は大きく、多くの避難者を受け入れている一方で、少なからぬ自主避難者をも出している。

初年度は、福島市中央児童相談所との共催、福島市の協力で、「チェンバおおまち」市民運動サポートセンターでプログラムを開催した。福島のちらしと報告は、<http://www.ritsumei.ac.jp/acd/gr/gsshs/sinsaiproject/fukushima.pdf>
<http://www.ritsumei.ac.jp/acd/gr/gsshs/sinsaiproject/sinsaiproject-fukushima.html>。

一階の展示会場はオープンスペースとなっており、向かい側には、ブースを仕切って、手作り商品、ネイルサロン、地元の物産などの小売店が並んでいる。地元ベンチャー支援策として、1 年限定でスペースの貸し出しをしているそうだ。団さんはそこで店主たちの物語を聞いたそうだが、お客さんたちの応援もあって、それぞれなりに頑張っていこうと一歩を踏み出されていた。





漫画展の感想ノートにメッセージを書かれる方は、いつもそれほど多いわけではないが、今回の福島では、メッセージを書いてくださった方が多く、とりわけ思いがあふれ出ているように感じられた。この時期、福島の人々は気持ちを固くし、思いを抑え込んでいたからなのかもしれない。いくらか紹介したい。

「拝見した作品は時間が経つ程に心に染み入る感じがします。余韻の残るものと思います。真に人の歴史ありですね。なにげない人生のように見えても人それぞれ喜びもあり悲しみもある。”戦い”の最中にある時はなぜ?どうして?と何かをうらみたいなる事もあるでしょう。でも、振り返ってみれば逆境にあったからこそ得たものの大きさ、重さもあります。このたびの悲劇もきっとそうなる時が来ると信じます。そんな事を感じさせていただいたひとときでした。ありがとうございました。」

「あたたかい話、ほっとさせられます。自分の歴史を振り返させられます。ありがとうございました。」

「日々の何気ない出来事の中にも人生の一步が刻まれる。負けずに一步、前へ進まなくてはならない。”生きることの大切さ”と”強さ”を考えさせられました。ありが

とうございました。」

「平和・平穏の中で暮らしてきました。いま心はキズついていると思います。福島県民よ歌いましょう♪」

「何が良かったか、何が悪かったかはその人自身しか決められないし感じる事ができないと思いますが、そういうことを少しでも安心して考えることができたらいいなと思いました。どうもありがとうございました。」

「各々の家族のあり方の中でふとどこにでもありそうな漫画の中に心が動かされます。どう生きてゆくか考えなくては・・・と思いました。」

「仕事の帰りにホーッとして涙です。それも笑い、笑顔と涙。私という自分、家族、親、子供、そして・・・老後の・・・『親になり』自分も親になりやっとなる親心。両親へのありがとう、の今晚電話します。『年をとり』自分も年をとりやっとなる老後。(なのでしょうね)。もう少々時間はありそう。絵の中に自分を置き読ませて頂く。絵とストーリー、言葉一句一句とても心暖かく・・・なりました。仕事疲れにやっぱ笑いのある絵、ストーリーは心のビタミン栄養ですね。ありがとうございます。さあ、明日も頑張ろう。楽しい人生に向けて。」

「死を迎えるその時、あーあ私の人生は楽しかったと云える様に」。感動でした。

「団先生の絵を見るのは初めてでしたが、こんなにスート心に入るものかと感動しました。今、人として大事なものを思い出させていただきました。」

「漫画展というタイトルから気楽な気持ちで見始めましたが、そこに描かれている

絵と言葉を読み重ねていくうちにどんどんとひきこまれていきました。誰も正しい答えをもっていない、答えがわかりづらい時代の中で、家族や自分を考え、見つめ直すよい時間をいただきました。」

<福島でのプログラム>

三階では、支援者支援ワークショップや子どもの遊びワークショップ、講演会を行った。プログラムを通じて、福島の人々が大変な負荷を抱えながらも、互いに思いやり合って、必死に頑張っている状況がひしひしと伝わってきた。

子どもワークショップには、20名ほどの子どもたちとその保護者たちが集まってくれた。父母だけでなく、祖父母もいて、総勢50名は超えただろう。福島の子ども連れは、多くが週末ごとに県外へ出て、子どもたちを外で遊ばせているのだという。市内に安全な公園があっても、行く途中にホットスポットが散在しているので、子どもだけで外に出すことができない。そんななかで、子どもを持つ親たちは、屋根のある無料の遊び場情報に敏感なのだろうという話だった。

私自身は、「クリスマスカレンダーを作ろう」のプログラムをやったが、かわいい子どもたちが、それぞれに迷いながら工夫を凝らして個性的なツリーを飾り、お菓子を貼りつけていく様子は何とも愛おしかった。楽しいクリスマスがやってきたらいいなと願う。

東京おもちゃ美術館から頂いたおもちゃは、子どもにも大人にも好評で、とくに、崩れた時に世界で一番美しい音がするという積み木カプラは大人気だった。



来てくださった家族を見ていると、保護者の暖かい眼差しに見守られて、子どもたちは、どちらかと言えばお行儀よく遊んでいた。危機を感じるからこそ家族の一体感が高まり、統制された状況下にあるだろうことを感じて切なくなった。養護施設でも、ふだん連絡を取ってこない親たちが、「子どもは安全なのか？」と聞いてくるという。不安な状況だからこそ、人は自分にとって本当に大切なものは何なのかという原点に立ち戻るのだろう。それが生きていくうえでの大きな力になる一方で、このような状況のなかで、どのように日常性を取り戻していくことができるのか。

支援者たちも、日々悩みながら、精一杯、踏ん張っておられた。子どもや保護者の前では笑顔で対応し、陰で泣くのだという。心のなかに黒い思いが渦巻いているが、おいそれと不用意な発言はできないし、吐き出すところがなく「放射線に対処していいのか」といった相談が多く持ち込まれる。放射線についての研修などもあるが、結局、「帰ったら手を洗うことや、規則正しい生活を送ることを心がけてください」くらいしか言えない。保護者や利用者から「本当に大丈夫なんですね？」と問われ、「安全だと言われています」と答えながらも、自分自身だって確信を持ってない。この状況のなかで、確信を持てる人などいるだろうか。

放射能の専門家が完全防備で検査に来て、「大丈夫です。これで病気になることは絶対にありません」と言いながら、逃げるように帰っていくのを見ると、「さっき安全だと言いましたよね？」と言いたくなる。基準が不明確なので、避難するかしないか、

何を食べるか食べないか、それぞれが判断するしかない。危機意識の違いが、友達同士、家族同士に溝を作り出している。家族の食卓も別々になったという話もあった。

支援者支援セミナーで、支援者として、あるいは親としての役割からしばし離れて、「私」のことを考えたり、語ってみてはどうだろうかと思ってみると、「本当にそれが許されるなら、王様の耳はロバの耳じゃないけど、穴を掘って叫びたい。真黒いものが心にいっぱいたまっている」とおっしゃった。それから、皆で、ささやかな楽しみや変わらずあるものについて分かち合った。趣味のサークル活動が続いていること、今年はクリスマスツリーを早めに出して、子どもたちに「今年もサンタさんが来るよ～」と伝えたという話も出てきた。

毎年、2千個の干柿を作って、友人知人に配ってきたという男性が、12月8日の検査でOKが出たら今年も作るのだと話してくれたのを聞いて、眼の前に、青空を背景に干柿が吊るされているのどかな光景が浮かんだ。「検査がうまく行って、干柿作れたらいいですね…」と言うと、「できたら少し送りますよ」と言ってくれた。「どうか、無事に干柿ができますように」と祈りながら年越しをしたら、年明け、大きく輝くような干柿が届いた。それまで食べたことがないような甘くておいしい干柿だった。

<文献>

一般財団法人とうほう地域総合研究所『福島への道』2011年8月参照。

大島堅一・除本理史(2011)『原発事故の被害と補償～フクシマと“人間の復興”』大月書店

周辺からの記憶6

～2012 年度のプロジェクトに向けて～

村本邦子（立命館大学）

2015 年 3 月 5～11 日、ニューヨークにて家族漫画展を開催、3 月 8 日には、NY「ほくほく会」（東北・北海道の合同県人会）による 3.11 追悼式にて、プロジェクトの紹介をさせて頂き、3 月 10 日には、漫画展会場にて、プロジェクト報告会を行った。考えてみれば、不思議なご縁が連なっている。

そもそも、2011 年 3 月 11 日の大震災直後、私は今回とまったく同じ経路で、伊丹から成田へ、成田から JFK へと飛んだ。その時は、NY を素通りして、鉄道でニューヘブロンへ行ったのだが、あれから 4 年も経ったとは信じられない。こんな形でプロジェクトが始まり、NY にまで来ることになるとは思ひもしなかった。

さらに遡れば、その十年前、私は NY へ行く計画を立てていたのだが、出発前に 9.11 が起こり、周囲に猛反対されてキャンセルした。そんなわけで、NY 市内に入るのは、今回が初めてだった。もちろん、グランドゼロや 9.11 メモリアルの見学もした。

もうひとつの偶然は、去年のむつプロジェクトには、むつ市長が顔を出してくれたのだが、彼は昨年 5 月に父親である前市長の急逝で帰郷するまで、NY の領事館に勤めていたという。プロジェクトとは別の話であるが、私と中村正さんは、今回、その領事館でプレゼンを行い、現地の在米邦人を支援している方々との交流会を持った。これは、2013 年に台湾で南京プロジェクトの報告をした時に御一緒した NY 市立大学の先生を通じて知り合った方のアレンジによる。何がどんなふうにつながるかわからないものだ。

腐れ縁というものもあるが、少なくとも自分に関して言えば、不思議なご縁が縁起していくのは、よいことが起きている証拠である。どこへ辿りついていくのやら、楽しみながら、素直に流れに身を任せよう。



南京プロジェクトから震災プロジェクトへ

災害復興は平和構築である。トラウマが人々をバラバラにしてしまうのだとすれば、復興も平和構築も人々をつなげていくものでなければならない。インドネシア、パキスタン、ソロモン諸島、ケニア、ミャンマーでの自然災害における人々の行動を調査した研究によれば (Ride & Bretherton, 2011)、レジリエンスの根源は、生き延びるために、人々が身を守り、互いに助け合い、団結することにあるという。外部からの支援団体はこれを認識し、尊重することから始めるべきで、「命令と統制」による中央集権的な支援はコミュニティの絆を破壊し、格差や差異による構造的暴力を進行させる。

すでに書いたように、東日本大震災が起きた翌日、立命館大学で日本集団精神療学会が開催され、歴史のトラウマをテーマにした招待ワークショップを担当した。

＊周辺からの記憶 1 :

<http://humanservices.jp/magazine/vol15/37.pdf>

歴史のトラウマが世代間連鎖によって家族や社会に否定的影響を及ぼしていくことに対して修復を試みようというもので、その小さな取り組みのひとつとして、日本の若者を南京に連れて行き、中国の若者と一緒にワークショップを行うことをやってきた。ホロコースト・サバイバー2世であるユダヤ系アメリカ人、アルマンド・ボルカスは、戦後世代のドイツ人とユダヤ人の和

解のために HWH (Healing the Wound of History : 歴史の傷を癒す) という手法を開発し、葛藤を抱えるさまざまな文化集団に応用してきた。

ファシリテーターとしてボルカスを招き、南京にて4日間の集中ワークショップを2009年、2011年と実施し、2012年4月28日には、その成果を踏まえ、立命館の平和ミュージアムで、国際シンポジウム「人間科学と平和教育」を開催した。これらの取り組みについては、ネット上に報告書がある。そこから得られた知見が、そのまま震災プロジェクトに活かされてきた。

＊戦争によるトラウマの世代間連鎖と和解修復の可能性～国際セミナー「南京を想い起こす 2009」の記録 :

http://www.ritsumeihuman.com/hsrc/resource/19/open_research19.html

＊歴史のトラウマの世代間連鎖と和解修復の試み～国際セミナー「南京を想い起こす 2011」の記録 :

<http://www.ritsumeihuman.com/cpsic/model3.html>

＊人間科学と平和教育～体験的心理学を基盤とした歴史・平和教育プログラム開発の視点から :

<http://www.ritsumeihuman.com/publications/read/id/78>

今も昔も人生とは苦悩の連続である。人類の長い歴史において、災害や戦争の発生とその影響はすでに織り込み済みのものであり、宗教や芸術などの力に依りながら

人々は苦悩を超えて生き延びてきた。それに対して、トラウマ・モデルは、苦悩を因果論的科学思考で捉えようとするものであり、原因と結果が一对一对応するようなシンプルな問題である場合は見えやすいが、苦悩が長期化し複雑化した場合にはそう簡単にいかない。Root (1992) は、女性が置かれた構造的暴力に対して「潜在性トラウマ」という概念を発展させたが、歴史のトラウマが普遍的な問題であるとすれば、病理モデルを脱し、これを文化と社会の再構築という視点から捉え直す方がふさわしいかもしれない。

国際的・学際的協働によって展開されてきた南京プロジェクトを通じて得てきたことは、

①具体的な顔と名前を伴った出会いによって犠牲を記憶する、すなわち「記憶の人間化」(小田、2011)によって分断を修復していくこと

②社会的・歴史的苦悩を自らの生と繋がる現実の延長として捉えることのできる「社会的身体」(村川、2011)を育むこと

③出来事の悲惨さだけでなく、しなやかに生き延びていく力(レジリエンス)や抵抗にも焦点を当て、そこから学び、それを強化していくこと

④ひとつの大きな物語としてではなく、矛盾を含む可能性にも開かれた多様で豊かな小さな物語を束ねたポリフォニック(多声的)な歴史を共有することによって、共通の歴史を紡ぎ出していくこと

⑤このようなことが起こるための舞台設定が必要であり、図(介入手法)と地(介入に付随して起こること、「縁」)の両方に着目する必要があること

⑥結果的に形成・強化されていく「縁」のネットワークが来るべき未来の苦悩のセイフティ・ネットとなっていくこと

であった。

東日本・大震災の始まりは天災であったが、そこから引き起こされた甚大な被害には人災の側面が大きく、これを戦後日本の復興の帰結とみるならば、東日本の復興はこれを繰り返すものであってはならず、私たちに反省と修正を求めるものである。過ちを繰り返したくはない。

サービス・ラーニングとして

初年度は、このような舞台設定を行うためにエネルギーを取られた1年だった。確かな前進はあったものの、宮城はゼロからのスタートだったし、岩手もまだ確定的ではなかった。それでも、2年目は1年目より良くなるだろうという楽観主義に基づいて、2012年6月26日に院生向け説明会を兼ねた第1回目の研究会を開いて、初年度の状況を報告するとともに、メンバーを呼びかけた。

前年に引き続き研究推進、支援活動補助の助成金申請を行うと同時に、これを新たに研究科のサービス・ラーニングとして位置づけることで、教育の質向上予算に応募

試してみることにした。十年続けるうえで、単年度ごとの助成金応募は辛い。助成金の有無に関わらずプロジェクトは続けると決めているにせよ、どの程度の規模で実施できるか計画を立てにくいからだ。

結果的に言えば、プロジェクトを院生教育の一環として位置づけたものが、この後のもっとも安定した資金源となることになった。長期的に続けられるものにしていくには、やはり、本来の仕事の延長線上に乗せることが重要なのだと思う。この原則は、他の機関における取材でも確認できている。これは、危機を日常化し、統合するということを意味するのだろう。

サービス・ラーニングとしての観点から初年度のプロジェクトを振り返っておくなら、参加メンバーは、院生 6 名、教員 7 名、職員（心理教育相談センター・カウンセラー 2 名を含む）3 名が参加し、現地にいる修了生 1 名も部分的に加わってくれた。実施に先立って、7 月にはシンポジウムを開催し、震災後初期段階の現状を学ぶと同時に、大学の役割について議論した。

宮城での実施は実現せず、9 月青森、11 月岩手、12 月福島でプロジェクトを実施し、10 月と 2 月に報告会を実施した。11 月には、被災地で活動をしている支援者たちとともに、アメリカ、中国、ベトナムからもゲストを招き、対人援助とコミュニティ介入や中長期に向けての支援のあり方について議論した。シンポジウムの報告は、震災プロジェクトの HP に見ることができる。

＊11 月 13 日 東日本大震災復興支援シンポジウム：

[http://www.ritsumei.ac.jp/acd/gr/gsshs/si](http://www.ritsumei.ac.jp/acd/gr/gsshs/sinsaiproject/sasshi2014.pdf)

[nsaiproject/sinsaiproject-sympo.html](http://www.ritsumei.ac.jp/acd/gr/gsshs/sinsaiproject/sinsaiproject-sympo.html)

現地でのプロジェクト参加院生には、事前レポート、フィールドノート、活動報告書、HP 用原稿の提出を義務づけたので、活動報告書から院生の学びが読み取れる部分をピックアップして分析した。詳細は報告書『大学院におけるサービス・ラーニングを取り入れたプロジェクト型教育の試み「東日本・家族応援プロジェクト」2011～2014 年の成果と課題』にあり、これも HP で見ることができる。

＊大学院におけるサービス・ラーニングを取り入れたプロジェクト型教育の試み「東日本・家族応援プロジェクト」2011～2014 年の成果と課題：

<http://www.ritsumei.ac.jp/acd/gr/gsshs/sinsaiproject/sasshi2014.pdf>

院生たちの学びのなかでも、マスメディアを通じてはわからない五感を通じた被災地の状況理解が、初年度の大きな特徴だった。院生たちはこれを「肌感覚」と表現したが、「被災地で迎える夜の暗さ」「石柱が川に落ちていたり、柵が途中でなくなってしまっていたり、マンションらしきものの基礎の鉄骨が折れているだけでなく、流れるように曲がっていた。津波の引きの強さを実感した」「今なお民家が少なく、復興が追いついていない現状を再確認した」「新聞やテレビからは見えないそこにある悲しさ・淋しさ・怒り…そのようなものを肌で感じた」など、「被災のインパクト」を指摘すると同時に、「工場がすでに稼働しているなどのような力」「帰路会った女

子高校生の笑顔、夜の道路で渋滞している車、真っ暗な空に力強く上がる工場の煙突からの煙、11月中旬オープンのお店看板…から復興の息吹・人間の力強さも感じる事ができた」など、「復興への兆し」に着目していた。

私自身も、阪神淡路大震災の1週間後、被災地に入った時の身体感覚は生々しく残っているが、被災地に身を置いて感じることは、上述したような「社会的身体」を育むことにつながるだろう。

初年度は、東日本大震災がもたらしたものに圧倒されながらも、できることを考え、それを実現するために膨大なエネルギーを要したが、2年目は、もう少し余裕をもって、院生たちの教育としても充実させるよう、研究会・報告会の機会を増やし、学んだことについて共有したり、省察するための時間を設けることにした。合わせて、年度末に成果を振り返るための記述式アンケートを取ることにした。

2012年度のプロジェクトへ

こうした準備を経て、2012年度後半期より、2巡目の東北巡回が始まることになる。2年目からは、初年度より連携し、経済的支援も頂いていたきょうとNPOセンターからの提案があつて、京都の避難者に向けたプログラムが追加された。2012年は6回の研究会・報告会を実施することになったが、第2回目の研究会では、きょうとNPOセンターの方を招いて、避難者の様子について事前学習することにした。

つづく

<文献>

小田博志(2011)「南京と『和解』～歴史の深淵に橋をかける」村本邦子編『歴史のトラウマの世代間連鎖と和解修復の試み』立命館大学人間科学研究所

村川治彦(2011)「一人称から歩み直す『戦争体験』～体験心理学に基づく歴史・平和教育の構築に向けて」村本邦子編『歴史のトラウマの世代間連鎖と和解修復の試み』立命館大学人間科学研究所

Ride, A. & Bretherton, D., (2011)

"Community Resilience in Natural Disasters", Palgrave Macmillan.

Root, M. P. (1992) Reconstructing the Impact of Trauma on Personality.

In Brown, L. and Ballou, M. (Eds.).

"Personality and Psychopathology: Feminist Reappraisals". pp.229-265.

New York: Guilford.



セントラルパークの回転木馬（1871年設置）

周辺からの記憶7

～2012年度 京都、みつ～

村本邦子（立命館大学）

J R西日本あんしん社会財団助成募集に、通勤客や観光客が多く足を運ぶ京都周辺の駅で漫画展をやってはどうかと思いついて応募したところ、採択され、3月下旬、授賞式に出席した。正直なところ、たぶん儀式的な集まりだろうと思って行ったのだが、これがなかなか感動的な集まりだった。

この財団は、2005年4月25日の福知山線事故の反省に基づき、「安全で安心できる社会づくり」の一端を担おうと設立され、被害者ケアや地域の安全構築に関わる活動の支援、安全への啓発活動等を行ってきたという。活動助成、研究助成合わせ、今年度は70件が採択され、それぞれの団体の決意表明があった。被災地と交流する高校生のグループやスポーツ少年団、川遊びの安全マップづくり、グリーフケアや防災教育の試みなど、社会で活動するありとあらゆる世代のユニークな取り組みが紹介され、知らないところでこうして多くの人々が社会のためにあれこれ考え、試行錯誤しながら頑張っているのだなあと思った。聞いているだけでも、信頼や希望、安心が感じられるような気がした。福知山線事故の被害者や遺族を中心にしたグループも複数あった。詳しいことはわからないが、おそらくは、こうして応募し助成を受ける関係ができていくまでには双方の長い道のりがあったことだろう。どこかの電力会社や国にも見習って欲しいものだ。

この助成による取り組みは、東日本・家族応援プロジェクト番外編の「こころの防災プロジェクト」として、6月27日～7月5日、京阪三条駅の構内で開催準備中である。合わせて、プロジェクトの途中経過をまとめた本を出版準備中である。7月には出せると思うが、なかなか面白いものになったのではないかなと思う。いろんなことが面白く動いていく。よい兆しと言えるだろう。

準備

2 年目のプロジェクトが始まる。まずは予算確保。初年度不採択だった大学復興支援室の震災関連研究助成の総額を小さくして再度申請、昨年採用された復興支援助成にも申請して、今年は両方採択された。まずはひと安心だ。

それから院生たちへの説明会を兼ね、6 月に第 1 回目の研究会を開催した。プロジェクトに関心を持っている院生たちが集ってくれたが、昨年に引き続き参加してくれる院生のほか、新入生の中には、「プロジェクト HP に十年行くとあるのを見て、必ずしも復興支援に関心があったわけではないが、コミットメントという点で対人援助に大切なことではないかと共感し、プロジェクトに参加したいと思って研究科への入学を決めた」という者もいて、驚くとともに、届く人には届くのだと嬉しかった。

2012 年 8 月 17~21 日 京都

<京都の避難者たちのこと>

きょうと NPO センターからの呼びかけで、2012 年度からは京都でのプロジェクトをスタートさせることになった。7 月開催の第 2 回研究会では、きょうと NPO センターから野池雅人さんと藤野正弘さんを招いて、まずは、京都の避難者の現状について学ぶことにした。事務局長である野池さんは研究科の 1 期生で、昨年からプロジェクトを通じて修了生と在学生を繋ぐ協働ができるようになったことも嬉しいことのひとつである。

きょうと NPO センターは、京都市と京都府の社会福祉協議会とともに、2011 年 3 月 13 日、時限的に京都災害ボランティア支援センターを立ち上げ、2012 年 3 月まで活動した。センター長を務めた藤野さんによれば、多くが行政単位で災害ボランティアセンターを立ち上げたのに対して、京都は市・府・NPO が一元でやったため、よく機能し、高く評価されたという。おもに、①情報収集と発信 ②被災地支援 ③京都のできる支援 ④物品サービス提供・仲介・マッチングという 4 つをやってきた。

京都にいる避難者は、行政が把握しているだけで 800 人。7 割近くが福島からで、幼い子どもを連れた若い母親が大半で、茨城も 3 桁。京都の受け入れは暖かいとの口コミや京都の支援情報を載せた「ほっこり通信」の影響か、京都の避難者は増えている。経済的な理由や自営、公務員や学校の先生など仕事上、避難したくてもできない人たちがいて、「避難できる人はいいいね」と言っている。避難してきた人たちは、向こうで歯を食いしばって生きている人がいるのに、自分だけ逃げてきたという負い目があったり、逃げたと責められ、家族・友人関係にもひびが入って孤立したりしている。二重生活を強いられ、経済的にいつまでもつのか、なかなか家族に会えず育児ストレスもたまる、子どものためにこっちに来たけれども、この選択が正しかったのかどうか毎日悩んでいる・・・などさまざまな声がある。

最近では、支援したい人のミスマッチが顕著。物資やサービスを提供したいという人たちがいるが、その段階は過ぎた。枚方パークや USJ に招待しますといったサー

ビスは、初期には良かったかもしれないが、避難者たちは、いつまでも施される立場でなく自分たちも役立ちたいと思っている。支援を受けながら生きるという生きづらさは何とも言えない。それでいて、そろそろ自立しなさいと言われる。避難した選択が正しかったのか毎日悩む人、罪悪感、京都に骨を埋めて暮らすつもりで、被災者・避難者ではなく一市民として生きたいと思うという人、思いはさまざまである。

話を聞きながら、過去の災害や事件の被害者たちのことを思い、時間経過とともにその存在は見えにくくなっていくこと、関わりのない人々にとっては見えなければいけないことになっていくこと、それだけに当事者は孤立して問題を抱え込むしかなくなることを考え合わせた。だからこそ、このプロジェクトでは、直接的な形で被災に焦点を当てるのではなく、「忘れてはいませんよ」というメッセージを発しながら、被災のことを話してもいいし、話さなくてもいいという形をとっている。

<京都でのプロジェクト>

「東日本・家族応援プロジェクト in きょうと 2012」は、8月17～21日、ウィングス京都にて開催した。内容は、漫画展、漫画トーク、子育て中の避難者向け「こころとからだお話サロン」「遊びワークショップ」で、報告は研究科 HP。

<http://www.ritsumeai.ac.jp/acd/gr/gsshs/sinsaiproject/sinsaiproject-kyoto.html>

今回は、地元でのプロジェクトだったため、プログラム開催日以外も院生スタッフが漫画展にアテンドしてくれた。ウィングス京都では、毎日さまざまな企画が開催さ

れており、漫画展は通路にあったことから、200名近くの人が眼にしたようだ。もちろん、全員が展示を見たわけではないが、足を止めて見てくれたり、スタッフと言葉を交わしたり、直接災害のことを話すわけでもなく、「東日本・家族応援プロジェクト」を開催していることから、何らかのメッセージ性はあったはずだ。

サロン以外は避難者に限定しておらず、避難者と名乗って参加してくださった方は多くはなかったが、案内を出したのは避難者に対してのみだったので、子連れで遊びワークショップに来てくださった方などは、案内を見て来てくださったのだと思う。京都にはたくさんの支援組織があり、日程の重なったイベントも複数あったと聞く。

支援機関とすでにつながりを持っている人もいるが、さまざまな事情や思いから、どこにも所属していない人たちが不確かさを抱えておられるようだ。とくに自主避難の場合、「自分の選択は正解なのか、間違いなのか？」という迷いが日々ある。避難によって失ったものが大きければ大きいほど後悔は強くなるだろう。放射能に関する正確な情報が得られないまま、自分の判断による選択の責任をすべて背負わなければならない厳しさをあらためて感じた。

2012年度の京都でのプロジェクトでは、日程の関係上、支援者支援セミナーのみ、12月11日10～14時、Nagomi（七條大宮）で開催した。支援者たちが抱えている現実には重かった。支援者のなかに住職などお寺の関係者たちが複数含まれており、当事者でもある支援者は、一人の人生はちっぽけだが、お寺は時代を超えて継承してくれるものがあり、お坊さんたちが関わってくれ

ることがありがたいとおっしゃっていた。
京都らしい側面かもしれない。



京都でのプロジェクト



2012年9月3～10日 むつ

<フィールドワーク>

むつのプロジェクト期間は夏休みということもあり、一足早く青森に入り、フィールドワークをした。ロープウェイで八甲田に上り、樹海を見下ろしながら、日本にもまだまだ未踏の地があることをあらためて思った。荒々しく、そして謙虚な気持ちになる。温泉巡りを楽しみ、美術館や博物館に立ち寄り、六ヶ所村、原燃PRセンター、東通村を經由して、恐山、そしてむつ入りした。

運転していると、走るのに骨が折れる生活道や山道が、六ヶ所村周辺になると途端に広くまっすぐ快適に走れる道路になるということも体感した。気候の良いこの時期でさえそうなのだから、雪が降り始めたら、

その落差は甚だしいものだろう。原燃施設、六ヶ所村再処理工場には近づくことができず、原発関連会社と思われる看板の掛かった小さな建物や、ものものしい柵で囲われた大企業の周辺を走った。

原燃PRセンターには見学者が数人おり、韓国からの訪問客らしき男性がいた。接待されている感じだったが、いったいどういう人なのだろう？週末ごとのキャラクター・ショー、原燃カレンダー写真展では応募作品からなる美しい青森の自然の写真展示があり、ゲームやクイズを使った一見科学的に見える展示や体験型学習機があった。展示から流れるメッセージは、「原発は温暖化の原因となる二酸化炭素を出さず、リサイクル可能な自然にやさしい燃料」というもので、現実には起こっていることを思うとやりきれず、すっかり気分が悪くなった。



八甲田







原燃PRセンター

周囲には風車がやけにたくさんある。六ヶ所村は春から夏にかけてヤマセ（北東風）が吹き、陸奥湾を超えて津軽半島平野からの西風も吹くという年間を通じて安定した風力発電を行える環境にある。現在 3 社で 77 基の風車を運転しているという。それなのに、他所の電力のために原発関連施設をたくさん抱えているなんて。そのまま 338 号線を上って東通村を通るが、一風変わった形をした体育館、官舎、消防署、小学校が並ぶテーマパークのような不思議な光景だった。本当に何も知らなかったと恥じ入る。

初めて訪れた恐山。これまでそういう名前の山があるのだと思っていたが、そうではなく、恐山とはカルデラ湖である宇曽利

湖を中心とした外輪山の総称だそう。地獄は一面、カラカラと乾いた白い岩場に石を積んだ小さな山が散在しており、ところどころ、硫黄のガスが噴き出し、周辺が黄色くなっている。おどろおどしい。地獄を通して宇曽利湖の方へ抜けると極楽浜。真っ白な砂浜と透明度の高い湖は異様に美しく、思わず入っていきそうになる。浜辺に 1 羽の黒いカラスがいて、何やら苦しそうに話しているので、じっと耳を傾けてみたが、結局、聴き取れなかった。

2012 年 7 月にできた鎮魂の鐘と希望の鐘のある記念碑が設置されており、参拝に訪れた人々が鐘をならしていた。境内にある温泉で身を清めて下山したが、相当な異文化体験となったフィールドワークだった。



＜むつでのプロジェクト＞

むつでのプロジェクトは、下北地域県民局、むつ市、むつ市教育委員会との共催で、9月3～10日、むつ市立図書館で漫画展、7・8日、むつ市中央公民館で各種プログラムを実施した。

<http://www.ritsumeai.ac.jp/acd/gr/gsshs/sinsaiproject/sinsaiproject-mutsu2.html>

プログラムは団さんの漫画トーク、中村さんと私がファシリテートする支援者支援セミナーの他、中村さんの「お父さんのコミュニケーション教室」と並行して、地元の方々が「キッズセミナー（パンづくり）」を準備してくださり、子どもの焼いたパンをお父さんと一緒におみやげに持って帰るというものだった。

むつのスタッフがチラシを作ってくれたが、サブタイトルには「本州のてっぺん下北半島から家族の笑顔を」とあり、「立命館大学と本州最北の地元自治体の協働により、実現したこの企画は、『家族支援』という視点から地域の家族力向上及び被災地や被災者に対する復興の一助とすることを願い、サブタイトルには少しでも元気のある地域から被災家族を応援しようという思いを込めました」と記載された。プロジェクト実施にあたり、現地共催機関のスタッフたちが6回も会議を重ね、昨年の振り返りに基づいて、さらによりプログラムをと工夫してくれたことが随所に感じられ、こちらのモチベーションも上がる。

私は中村さんと支援者支援セミナーを担当したが、初めに自己紹介と知識編としてそれぞれ短い話題提供を行い、後半は実践編としてワークショップ形式で事例検討を行った。中村さんの話題提供は、男性に焦

点をあてて暴力や虐待をなくす取り組みをしていること、家族をシステムとして見ること、父親役割が家族システムを健康的に機能させる際にどんな役割を発揮するかについてだった。私からは、女性問題、ジェンダーの問題に取り組んできたが、西洋型の個人主義をモデルにすることに無理があること、かと言って伝統的な役割分担が孕む暴力や抑圧が肯定されるものではないことを話した。

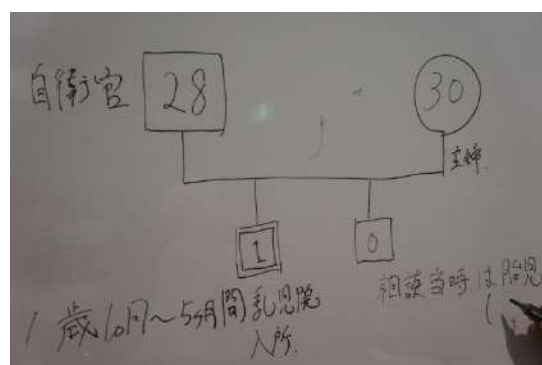
紹介したのは、エリザベス・ボット(1955)の「都市の家族～夫婦役割と社会的ネットワーク」という研究で、性別役割を前提としたカップルは、男には男の世界が、女には女の世界があると考えており、家族外で、男同士、女同士の密接な関係を結ぶ。友人・近隣・親類・同僚といった複数の役割が一人の人に重複しており、母と娘の絆は強く、女性同士の関係は濃密でサポートを提供しあっていた。逆に、性別役割を超えた夫婦では、近隣や親族とのネットワークは希薄で、夫婦共通の趣味や友人関係を持ち、ともに時間を共有し、夫婦の絆が強いという結果が出ていた。

昨年から気づいていることであるが、たとえば、会場となった公民館がある大湊では自衛隊が6割、ひとつの小学校に6年間留まる子どもはほとんどいないという現状のなかで、どのようにジェンダーの問題を扱うことができるのか。関係性に生きるとは望ましいことだと思うが、しがらみや望まない役割を担わされることを避けようと、都市部では関係性を希薄にしたのだった。力の格差、とくに現代社会では貨幣価値によって選択肢が決まってしまう。ケア役割は、家庭でも職場でも圧倒的に女性の

肩にかかること、役割が固定化し関係が閉鎖すると暴力の温床となるリスクがあること、ネットワークからはずれた人は居場所がないことなど、答えのない問題提起である。閉鎖させず変化の風を吹き込むこと、ネットワークからこぼれた人との結び目をどう作るのが課題だろう。

実践編では、児相と学校から地域の事例を提供してもらい、ジェノグラムを用いて事例検討をした。50名ほどの参加者だったが、なるべく所属をバラバラにして6名程度のグループに分かれてもらった。最初の事例は、妊娠6ヶ月の母親が流産の危険があって入院したいが、1歳の子を乳児院に預けるという判断をした事例、二番目は中学で不登校からひきこもり傾向のある少年の事例だった。背景となる家族事情を考えながら、家族の見立て、母親の成育歴、地域との関連などの視点から家族の強みを見つけて伸ばしていくための支援を考える。初めは緊張の高かった参加メンバーも、グループで話すうちに少しずつほぐれていった。最初は事例の難しさにばかり眼がいていたが、グループで協力し、自衛隊経験者を含め多様な背景の方々がそれぞれの立場や視点の違いを活かして知恵を出し合い、事例像を膨らまし、少しずつ家族の肯定的な力を見つけ、見立てを変えていくプロセスは感動的でもあった。

初年度の支援者支援セミナーのバズセッションで、むつの支援者の課題として多職種連携ができていないという声があって、「来年は、多職種混合の小グループで事例検討を行うワークショップをやるとよいかもしれませんね」と言ったのだが、それを理想的な形で実現してもらった形だった。



打ち合わせや反省会、懇親会の場で、各機関のスタッフたちから肯定的なフィードバックを多く聞いたが、なかでも、「このようなイベントを教育委員会、児童相談所、公民館、図書館が一緒になってやるのは初めてだった。むつの支援者たちが、このようにネットワークし、むつの家族のために力を合わせることができれば、十年後にはむつの家族が幸せになっているのではないか」という言葉を聞き、このプロジェクトをきっかけに、むつのコミュニティがエンパワメントされていくとしたら素晴らしい

と思った。私たちの役割は、何はともあれ外から定期的にやってくるというところにあるのかもしれない。

懇親会では、どちらかと言えば面白おかしく下北の人々の生活について教えてもらったが、熊やカモシカが現れて畑を荒らし困っているという話、青森は何でも国際とつけ研修生の外人たちが「地吹雪」まで観光にしてしまったという逞しさを見習わなければいけないという話のほか、海上自衛隊が誤って鉄砲を撃った話（車に当たった）や訓練機が頭上 50 メートルを飛んだ話、上から物が落ちてくる話など笑い話のように

話されたが、胸の痛む話だった。タクシーの運転手さんも、釜伏山にたくさんのレーダーがあって怖いという話をしていた。沖縄の話は聞いていたが、下北の話は知らなかった。

厳しく美しい大自然に抱かれて培われてきた下北の暖かさをもっともっと知りたいし、苦難と抵抗の歴史について学びたい。お父さんのためにパンを焼いていた子どもたちの笑顔が、本州のてっぺん下北から京都までどんな形で届いてくるのか楽しみに待とう。



毎年恒例になった反省会と記念撮影

周辺からの記憶8

～2012年度 宮城（仙台・多賀城）～

村本邦子（立命館大学）

2015年6月27日～7月5日、JR 西日本あんしん社会財団の助成を受け、京阪三条駅にて、「未来のための思い出 ココロかさなるプロジェクト：団士郎 家族漫画展」を開催した。「心の防災」をテーマに街頭インタビューを試みたが、たくさんの方が足を留めてくださり、20名の院生・修了生たちの協力も得て、なんと250もの声が集まった。分析作業は大変だが、なかなか興味深い結果が出るのではないと思う。少しずつ紹介していきたい。引き続きWeb展をやっているので（2016年5月30日まで）、是非、訪問してください（<http://www.cocoro-kasanaru.jp/>）。



あわせて、『臨地の対人援助学～東日本大震災と復興の物語』（晃洋書房）も刊行された。是非ご一読ください。

いよいよ、今年もむつから、5年目のプロジェクトが始まる。いろいろな形でお力添え頂いている皆さんに感謝するとともに、新たな出会いと展開を楽しみにしている。



準備

初年度は開催を見送った宮城だったが、今年は何とか実現したかった。さまざまなルートから色々な可能性を検討していたが、7月に入って、宮城で災害子ども支援窓口を受託している「災害子ども支援ネットワークみやぎ」「特定非営利活動法人チャイルドラインみやぎ」が受け皿となってくれることになった（2012年度、政府は被災三県に災害子ども支援窓口を指定した）。

チャイルドラインの方が動いてくださって、8月には、「せんだい男女共同参画センター」の共催で、「エル・ソーラ仙台」を会場に使わせてもらえることが決まった。「エル・ソーラ仙台」は、仙台駅に隣接した31階建の再開発ビル「アエル」の28・29階に入居する仙台市の男女共同参画施設で、「エル・パーク仙台」とともに、子育て、女性、家族支援の機能を担っている。実は、昨年9月の営業回りでは、「エル・パーク仙台」に立ち寄って話をし、「エル・ソーラ仙台」の方にもつなげてもらったが、すでに企画が一杯だと断られた経緯があった。「アエル」は、1998年の完成時点では東北最高層だったそうで、仙台のランドマークとなっている。

さらに、仙台市内よりも沿岸部に支援ニーズがあるということから、多賀城市でも小さなプロジェクトを試みってみることになった。仙台では、10月1日～6日の漫画展、6日（土）のプログラム、多賀城では、7日（日）の漫画展とプログラム。企画内容に

ついて相談する中でわかってきたのは、どうやら、ニーズはスタッフの養成と個別相談（スーパーバイズあるいはコンサルテーション）にあるらしい。相手方のニーズに応えることは重要だし、柔軟であるべきだが、バックボーンは必要である。私たちのプロジェクトの趣旨は、個別対応よりコミュニティへの働きかけにウェイトがあり、ひとりひとりと出会いながらも、そこから視点を社会へと広げていくこと、心理主義的介入の枠を破っていくことにある。そうでないと十年続かないだろうと思うからだ。

時期的には、現地で被災者支援にあたっている人々に疲れが出ていること、時間経過とともに表れてきた被災者の「心の荒れ」をどう受け止め、静めていくかに苦慮しているということだった。仮設住宅の子どもたちの不機嫌や暴力が増えてきたのだという。その一方で、支援にあたっている人たちの研修疲れの声があがっており、貧困、離婚、発達障害など、ハイリスクへの対応が課題になっているという話も聞いた。全体が日常の再構成に向かおうとすればそれだけ、もともと負荷を抱えていた人々の負荷がさらに大きくなって取りこぼされていくことになるだろう。個別対応や支援者への研修で解決できない問題である。とりあえず、今回は、外部にも開いた支援者支援セミナーとプラスアルファで個別質問コーナーを設けることにした。

9月に入って、ようやくチラシもできあがり、今年は宮城でのプロジェクトの開催が実現することになった。

10月5日、多賀城市の仮設住宅へ

新幹線で仙台へ。駅近くの宿にチェックインして荷物を置いてから、漫画展会場のエル・ソーラに立ち寄る。なかなか立派な建物で、活気ある駅前の様子からはもはや震災の痕跡は見えない。とは言え、仙台市のHPによれば、死者・行方不明者は700人を越え、津波による住宅被害は全壊2.5万件以上、大規模半壊・半壊10.5万件以上というのだから、被災状況による差は大きいはずである。実際、いざJR仙石線で多賀城へ移動しようとする、沿岸部の線路はまだ復旧されていないことがわかる。



多賀城駅からタクシーを拾い、多賀城公園野球仮設住宅へ向かう。チャイルドライン代表の小林純子さんのはからいで、仮設住宅の様子を見せて頂くことになったのだ。宮城県HP(2012年8月31日現在)によれば、多賀城市の死者は200人を越え、住宅被害は全壊・半壊合わせて約5500件、仮設住宅が6ヶ所あるとのこと。短い道中ではあったが、タクシーの運転手さんは、車を走らせながら、あたかも実況中継をするかのように被災状況を話してくださる。JR

多賀城駅周辺は津波が1.8mの高さまで上昇、津波が引くのに丸2日かかり、橋のあたりにはボートが木の葉のように積み重なっていたという。

2台のタクシーに分乗したが、もう1台の方でも同様に被災状況を聞かせてもらっていた。1年半経った今、過去を振り返って外から来た人に話したい時期になっているのだろうか。私の乗った車の運転さんの家は、津波は入ったものの住める状況だということだったが、もう1台の方の運転手さんは仮設に住んでいるとのことだった。地震が来た瞬間は浜に向かって車を走らせていたが、「豆腐に乗ったような」揺れに慌てて方向転換し、神社のある丘へと向かって命拾いされたそうだ。生々しい話に鳥肌が立つ思いだが、このあたりの人々は、多かれ少なかれ、そういう体験をされているのだろう。



仮設住宅は緑に囲まれた小高い丘の上にあった。入口付近に黄色い図書館バスが止まっていた、NGO「幼い難民を支える会」のスタッフが子どもの遊び相手をしていた。100軒ほどが暮らしているそうだ。個人情

報をもらえないので、どのくらいの世帯に子どもがいるのか不明だが、学童前の子どもが 10 人は確認できている。中高生を入れるともっと多い。



集会所の中に 4 畳半くらいの小さなキッズスペースがあるが、子育て中のお母さんたちはチャイルドラインが入る金曜しか来ない。子どもがうるさいと苦情が出ることを恐れているらしい。外で遊べる日はまだ良いが、寒くなってくると屋内での遊びのスペースが限られているので、問題が顕著になるだろう。せめて 1 日 2 時間だけでも集会場を子育て中の親子が使えるようにと提案しているが、話し合いはなかなか前に進まないそうである。

棟続きの仮設住宅では、隣の声がうるさい、子どもがうるさいなど、本来なら問題にならないようなことが問題になる。子連れが迷惑がられるため、親が子どもを必要以上に叱る、普通なら許容できることができなくなっている。多賀城中心部では核家族が多いが、沿岸部では 2 世帯、3 世帯住宅が多く、広い敷地にそれぞれの世代が

各々家を建てて住んでいたもので、6 畳+4.5 畳の仮設住まいは大きな負担を強いている。若い人たちはローンを組んで仮設住宅を出て行くが、年金生活の高齢者は収入源がないので取り残される傾向にある。仮設住宅が閉鎖されて公営住宅に移行するとき、その家賃に補助が出るのかなど、今後の課題は多い。震災から 1 年半になるが、風呂の追い炊き機能が設備されたのは、ようやく最近だという。

そんななか、15 市町村に通って支援を行っているチャイルドラインは、多賀城公園球場仮設住宅をモデル事業として位置づけている。子どもの権利を言いすぎると大人たちが嫌がるので、バランスを取りながら、しかし子どもにとっての遊びの重要性を代弁してゆかなければならない。災害直後は市の役員に「子どものことどころじゃないんですよ」と言われたそうである。どうしても子どもは後回しになる。みんな自分のことに必死で、許容力が落ちる。障害児を持つお母さんが一旦は仮設住宅に入ったが、周囲の目線に耐えかねて半壊した家に帰ってしまったこともあったという。厳しい現実である。

おおぞら保育園

その後、チャイルドラインの車で、多賀城でのプロジェクトを共催してくださるこ

とになったおおぞら保育園へ向かう。小林さんに「コンテナの保育園で、小さな小さなスペースに 20 人もの子どもたちがすし詰め状態になって、見たら涙が出ますよ」と聞き、胸が痛む。しかし、いざ到着してみると、コンテナに大きく描かれたパンダに出迎えられ、へちまが巻きつく階段をトントンと登って小さな入り口からなかに入ると、そこには暖かく明るいスペースが広がっていて、なんだか秘密基地のようなワクワク感がある。夜になっていたのに、小さな1室に子ども3人と先生2人がいらして、子どもたちはおとなしく折り紙などしていた。すし詰め状態を見ていないから言えることかもしれないが、私はこの小さなコンテナ保育園がすっかり気に入ってしまった。とは言っても、園庭もなく、小さな象の滑り台が砂利の上に置いてるだけだった。雨の日は辛かろう。



黒川恵子園長にお話をうかがう。被災当時、黒川先生は、多賀城市八幡、砂押川のほとりにあったクローバー保育園に勤めていた。地震が襲ったとき、先生方は、小さい子どもたちをトランクの中に、大きい子どもたちを机の下に入れ、建物が倒れないように皆で柱を支えた。たまたま配達に来た郵便屋さんと一緒に柱を支えてくれたそう。2日前に起きたM7.3の地震を受け、いざという時のために市役所に避難先を確認し、八幡小学校に避難することを保護者に伝えただけだった。

大きな揺れに耐えた後、どの道に行くべきか不確かではあったが、小雪の降るなか散歩車を押し、手をつないで、いつもの散歩道である砂押川沿いを歩いた。誰からというでなく、いつも散歩の時に歌っているトトロの歌を歌いながら歩いた。途中、逃げ惑う人々と何度か交差したが、道一本違うと被災状況がまったく違い、川沿いも本当は危なかった。考えればぞっとするが、まったくの偶然が生死を左右した。



▲藤原佳世さん撮影

避難先の小学校に着いた時には、すでに大勢の人たちが詰め掛けていて、校門の中に入れてもらえなかった。そこで初めて後を振り返ると、さっき歩いた散歩道に津波が押し寄せていて、「津波だあ！」と慌てて中に駆け入った。小学校の中に入れなかったのが校庭で、園児たちにブルーシートを被せて雪をしのいだという。

クローバー保育園の経営者は、本業が被災したこともあり、同じく被災した保育園を廃園にした。子どもたちの保育と解雇された保育士さんたちの雇用のために、黒川先生は、2011年9月、障害児施設、太陽の家に間借りをして保育園を再開させた。被災後は物件も少なく、たまたまネットでトレーラーハウスの診療所を見かけ問い合わせていたが、12月、いよいよ借りていた部屋を明け渡さなければならなくなり、2012年1月27日、高崎にコンテナハウスの保育園を開園した。被災したときに経営者だった人には市から補助金がおりが、黒川さんは経営者ではなかったため補助金が出ず、それでも何とか協力を求め、市から土地を借りて、自費でコンテナを買ったという。黒川先生のアパートも被災し、現在のアパートに引っ越すまでは、避難所からおおぞら保育園に通っていた。

コンテナの立つ駐車場は砂利が敷いてあるので、そこで園児を遊ばせるわけにはいかない。テラスを広げる案を模索していたところへ、駐車場を保育園にするのは建築

法違反ではないかと県の土木課に近所の人から通報があったという。駐車場の周りにフェンスを建てたら、また通報。何かするごとに通報されるので、テラス拡張に踏み切れずにいる。以来、なるべく近隣の理解を得られるようにと、草むしりなど町内会のイベントに参加するように心がけているそうだ。お金があったら新しい園舎を建てられるから、「思わず宝くじを買っちゃいました」と黒川先生は笑うが、何ともやりきれない。



▲廃園となったクローバー保育園

仙台でのプログラム

10月6日（土）、仙台市エル・ソーラにてプログラムを実施。女性センターにはさまざまなチラシやポスターが貼ってあって、

活発に女性支援が行われていることが感じられる。昨年、エル・パークを訪れた時には、「まだ女性の問題が十分に見えてこない」と言っていたが、その後、「仙台の女性たちは頑張っているよ」と耳にしていた。

午前中は、団さんの漫画トーク。人は記憶（物語）の塊であり、過去はもちろん、未来はまだ始まっていない物語の時間。大きな被災物語に小さな物語は打ちのめされがちであるが、未来に向けてどのような物語を紡ぎ出すか、復興した未来はそこにあるのではということで、家族漫画を通して多様な「家族の物語」に触れてもらう。「あなたはどのような人ですか？」と尋ねることで、家族についてのナラティブが変化していくことに、支援や問題解決のヒントもあるという趣旨だったと思う。



お昼をはさんで、午後は私が支援者支援セミナーを担当する。まずは、自己紹介を兼ねて、プロジェクトをスタートさせた経緯について話したうえで、レジリエンスという概念について話した。紹介したのは、Mullender(2000)の DV シェルターで行われた子どもたちへのインタビュー調査である。危機的状況において、子どもたちに重要だったことは、①当事者として自分の声に耳を傾けてもらい、真剣に取り扱ってもらうこと ②解決法をさがし、意志決定の援助に積極的に関わること のふたつだった。子どもたちは本来、力を持っており、自分の人生の物語の主人公であることを保

証されることによって、その力を存分に発揮することができるのだ。3人組でレジリエンスを感じたエピソードについてシェアしてもらった後、支援者は自分のケアが後回しになってしまいがちなので、互いにサポートしあおうという話をして、もう一度、シェアの時間をとった。



全貌はわからないが、テーマについてよりも、そこを入口にしてそれぞれ被災体験が語られたようである。15分の予定だったが、ひとたび話し出すとなかなか終えられない様子で、後で参加者から「自分たち支援者たちは、まだ十分に被災体験が語れていないのです。こんな時間がもっと必要なんだと思います」と言われた。物語るためのきっかけや枠組が求められているのかもしれない。被災状況も支援状況もあまりに多様だったようだが、互いの声に耳を傾け互いの力を引き出す小さなきっかけになったらいいと思った。



上山真知子さん&モリスさんとの交流

プログラム終了後、漫画パネルの撤収をすませてから多賀城市へ移動、上山真知子さんとお連れ合いのモリスさんと落ち合う。上山さんとの出会いは、9月の心理臨床学会だった。上山さんのことはすでに聞いていたが、災害のシンポジウムに参加し、フロアから質問した上山さんに気づき、遠くから服の色や形を目に焼き付けておいて、終了後、たくさんの人のなかから探し出して、声をかけた。我ながら目的があればわき目も振らずまっしぐらという性格を可笑しく思うが、それでもこの性格ゆえにさまざまなことが動いてきたのだ。上山さんは山形大学の心理学者だが、自宅が多賀城にあって、震災後、現地で活躍されていた。

終了後、個別質問コーナーを設けたが、仮設住宅での見守り支援ボランティアをされている方たちから、引きこもり、飲酒、ギャンブル、暴力などの事例を聞いた。専門家たちは拒否され、辛うじてつながっているのがボランティアたちなのだろう。貴重な仕事だが、個別に抱えるには重すぎる話である。主催者を通じて地元の支援機関につながが、ボランティアを中心としたコミュニティワーカーと専門家のつながが必要かもしれない。とは言っても、簡単に解決する問題ではないだろう。

今回のプロジェクトに合わせて約束を取りつけていた。

モリスさんはオーストラリア人の歴史学者で、途中、被災の状況を説明しながら、夜の街を案内してくださる。この交差点には 7m の津波が押し寄せ、この左手では火の手が上がった。JR 多賀城駅沿いの川は決壊し、川原には死体の山があがった。ご夫妻の住まいはそこからほんの少し上流で辛うじて無事だったが、通りすがりの人々や近隣の方々と助け合って日々をしのぎながら、とにかくできることをと支援を展開されてきた話には感心するばかりだった。

「食いしん坊」というお魚料理屋さんで夕飯を御一緒しながら、お話を聴く。2011 年 3 月の段階で、避難所に子どもの遊び場を作ったり、4 月には地元の教師たちのワークショップを開催したりと、非常に早い時期から活動されていた。ストレス対処法を話してもらったら、とても盛り上がり、同職種が集まるとこんなに力になるのだと知ったそうだ。震災直後からたくさんの団体から多種多様な支援の申し出が相次ぎ、なかには怪しげなものもあったが、国際 NGO プランジャパンの申し出をさまざまな支援をつなげていった。WHO による PFA を翻訳し、子どもたちが撮った子ども眼線の写真を使った冊子を作成した。また、途中、「食いしん坊」のお嬢さん、土井真理さんが合流したが、実はこの方、ドラムカフェ・ジャパンという会社を立ち上げてビジネスを展開されていたが、震災後、これを使ったコミュニティ支援に力を入れておられた。このドラムカフェというのがなか

なか面白く、後に私も経験することになる。この活動とプランジャパンをつなげたのも上山さんだったが、本当に地域には力強い人々がおられるものだ。



多賀城でのプログラム

10 月 7 日（日）は多賀城でプログラム開催である。仙台のホテルをチェックアウト

して、再び、多賀城市へ向かう。会場となった多賀城文化センターは、新しい立派な建物だが、当初は避難所になり、人々が折り重なるようにして寝ていたそうだ。

部屋の壁に椅子を並べ、椅子にパネルを立て掛ける形で手作りの簡易版ギャラリーとし、その中でプログラムを実施する。メニューは仙台と同じで、団さんの漫画トークと私の支援者支援セミナーであるが、対象が異なることからどのような内容が良いものかギリギリまで迷っていた。実は、早朝に起きて新しいパワーポイントを準備したのだが、開始時のメンバーは保育園の先生方のみだったので、予定変更してパワーポイントは使わず、グループ形式で話すことにした。簡単な自己紹介と、今、気になることをあげてもらうが、仙台と同様、被災体験を語られる方が多かった。そうこうするうちに、遅れて次々と新たなメンバーが加わり（15人ほど）、進行がとても難しい構成になってしまった。

それぞれの参加者のニーズに少しずつ応答できるよう臨機応変に進行したつもりだが、難しさは、あらかじめ参加者の状況を把握することができなかったこと、狭いコミュニティでの参加者同士の関係性が見えないなかで一緒にやらなければならないことによるものが大きかったと思う。通常のグループであれば、遅れた参加者を受け入れられないものであるが、今回はそういうわけにもいかず、今後の反省として、目的と対象を絞る方が良かったと思った。とは言え、年々、変化するなかで、目的をどこに置き、どのような内容にするのか難しい課題だ。時間

経過とともに被災のことより、一般論に持っていく方がよいのだろうか。一年に一度、立ち止まって振り返ってもらう機会になればという思いもあるが。もうひとつ感じたことは、被災地の状況は予想以上に厳しく、意識レベルのニーズと本来のニーズにズレがあること、両方を理解する必要があると思った。





今後に向けて

仙台と多賀城、1日ずつというスケジュールはやはり忙しい。じっくり地域の方々と出会うという意味では1ヶ所に絞る方がよいような気もする。仙台は規模が大きく、支援もたくさんあるということから、多賀城に絞ろうかなとも思う。

岩手に関しても、沿岸部である大船渡でやってはどうかという話が出て、その方向で準備を始めている。同じ地点で十年と思って始めたものであるが、十年続けられそうな開催地を特定するのはなかなか難しい。

つづく

周辺からの記憶9

～2012年度 岩手（遠野・大船渡）～

村本邦子（立命館大学）

2015年11月20・21日、今度は台北で英語版「未来のための思い出 ココロかさなるプロジェクト：団士郎 家族漫画展」を開催した。アジア災害後心理援助国際会議という催しで、漫画展の報告と福島への報告、ふたつの口頭発表も行った。



これまでやった漫画展のなかで、短期間のうちに一番たくさんの方が見てくれたのではないかなと思う。インタビュー代わりのアンケートへの協力者も多かった。

京阪三条の「ココロかさねるプロジェクト」では、漫画の感想とともに「困難を乗り越えるコツ」について250人にインタビューをした。その結果を9月初めの仙台の質的心理学会、10月終わりの対人援助学会で、ポスター発表やワークショップの形で公開した。助成頂いたJR西日本に対する報告も兼ねているが、それにしても、このプロジェクト、想定をはるかに上回る面白い展開を見せてくれたものだ。本当はまだまだいろいろやれそうな気がするが、この半年、あまりに忙しくなりすぎたので、このあたりでちょっとブレーキをかけることにする。

震災プロジェクトも着実に5年目の実りを得ている。12月12日のシンポジウムには、現地の協力者をお招きして交流と知恵の交換をする。楽しみだ。

準備

現地の状況は厳しく、プロジェクトを共催で担ってくれる機関が見つからず、岩手の拠点を再検討する。立命館が協定を結んでいる大船渡市が候補地となるが、今回も共催してくれる機関が見つからず、広報の協力のみのお願いとなる。ハードもシフトも沿岸部はまだ大変な状況だ。

十年計画と伝えてあったため、遠野の方々に申し訳なく（それに遠野の魅力は筆舌に尽くしがたく）、今回は沿岸部で試行してみるが、合わせて遠野でも開催することができるということを伝えると、去年お世話になった遠野市子育て総合支援センターの主任、立花正行さんが中心になって、社会福祉法人遠野市保育協会と一緒に子育て支援セミナーを企画してくださった。

大船渡の方は、大学の復興支援室とも相談し、カメラアホールという市の施設を借りて、漫画展と各種プログラムを実施することにした。今年は単独開催でも、次から共催してくれる相手が見つければいいがと願いながら。詳細まで詰められたのは結局十月も後半で、十分な広報期間もなく現地へ行くということになってしまった。不本意ではあるが、やむを得ない。

再び遠野へ

2012年10月31日、院生と一緒に、1日早くJALで花巻空港へ飛ぶ。今回、遠野の企画を作ってくださった立花さんが空港まで迎えに来てくれて、道中、遠野の様子を聞かせてもらう。現在、遠野の仮設住宅には35世帯が残っており、7世帯が子育て中。

阪神淡路大震災の時の反省を活かし、住民同士が交流できるような設計にしたためか、トラブルは聞かないという。そう言えば、遠野にある仮設住宅「希望の郷」は、住民同士が交流しやすいように各部屋の玄関前に屋根付きのウッドデッキを設ける工夫が施されているということで、昨年、通りすがりに見たことを思い出す。



15時、遠野市役所子育て総合支援センターへ立ち寄り、所長、課長、係長らにご挨拶をして、宿にチェックイン。昨年同様、遠野博物館前にある「あえりあ遠野」である。懐かしい。去年はちょうど文化の日で、遠野文化フォーラムをやっていた。少し早いですが、宿の人に教えてもらって、近くの小さなお店に軽い夕飯に行く。

宿がやっている18時からの「昔話の夕べ」

に出たくて急いでいたのだが、ギリギリになって慌てていると、わずか1分の距離と言うのに、店長自ら自分の車で宿まで送ってくれた。その1分の間に、実に濃厚な体験を聴かせてもらうことになった。店長は釜石出身で、子どもの頃からの友達が流されてまだ「あがらない」、去年の暮れには市役所に勤めていた友達がくも膜下出血で亡くなったそう。「この歳になるまであんなに泣いたことはありませんでした」と言う。もしかすると、偶然できた小さな枠組みの中で外部の人間にだけ話せることだったのかもしれない。外からは見えなくても、こんな思いを胸に秘めた人々がどれほどたくさんいるのだろうかと思う。

「あえりあ遠野」では、毎夕6時から30分、「昔話の夕べ」という語り部によるお話をやっている。3階の「語り部ホール」には囲炉裏があって、昨年、漫画展にも来てくださった奥寺恭子さんがお話しされていた。お客さんも多く、声をかけなかったが、ひょんなことからある方のおばさんであることがわかったという人だ。「むが〜し、あったずもな」と遠野物語を語り、「物語を語るときは、物語そのままを語ります。修飾を加えたり、意味づけをしたりはしません。物語の筋だけをそのまま語るようにします」と説明していた。遠野物語にはわかりやすいプロットがないのが特徴だ（<http://humanservices.jp/magazine/vol19/34.pdf>）。今やそんな文化に少しずつ馴染みつつある。



遠野のフィールドワーク

11月1日、朝から急に冷え込んで、霧がかかる。9時半にピックアップしてもらい、セミナー会場となる白岩児童館訪問して、園長と打ち合わせ。「今日からストーブを炊いています」とのこと。遠野には小学校が11校あり、小学校の数だけ児童館・児童クラブがある。白岩児童館は小学校併設で、両開きの扉で遠野北小学校と繋がっている。全国でも珍しく、1年生から6年生までを預かっており、16時半までは誰でも利用できる。生徒間に溝が出来にくいのだそう。最近の子どもの問題としては、虐待などより、転びそうになった時に手を着くという体のコーディネーションがなく、すぐ骨折する、子どもたちが疲れていて児童館に休みに来る、どこまでなら怪我をさせないかなど、けんかの加減がわからない・・・など、都会と同じ問題を抱えているようだ。他方、都会では少なくなった先生方の懐の深さを感じる。

院生は遠野が初めてだったこともあり、曲家、オシラ堂、カップパ掬を見て、美しく色づいた山上にある風力発電を見学する。土淵町の国有林内にあり、水芭蕉群生地入り口標識から1キロほどのところに、たくさん風車が並んでいた。霧の合間に太陽が顔を出すと、うっすら虹の橋がかかる。



夜は、立花さんと遠野名物ジンギスカンを食べに行く。仕事への思いなど個人的なことも少し聞かせて頂き、立花さんがぐっと身近に感じられる。レストランでは、店の人もお客さんもほとんどが顔見知りのようで、暖かさと同時に難しさをもあらためて感じることになる。

遠野駅周辺もリニューアル工事も終わり、全国からやってくるボランティアの波も落ち着いて、遠野の人々の生活は少しずつ日常を取り戻しつつあるように見えた。

午後は、遠野市役所子育て総合支援センターにある福祉課で、家庭相談員さん、婦人相談員さんから遠野の現状をお聴きする。家族のトラブルは相談に上がってこず、性的虐待はずっとゼロ、遠方に助けを求めて送り返されたケースもあるなど、コミュニティが生きているだけに、問題が表面化しにくいことをあらためて感じた。



遠野から大船渡へ

11月2日、9時半にピックアップしてもらい、白岩児童館へ、10時から11時半まで「子育て支援者応援セミナー」。学童保育の指導員、保育士、家庭相談員、保健師など35名ほどが集まってくれる。要望に合わせて、子どもの発達課題やレジリエンスについて簡単に話した後、ネットワークを兼ねた交流の場とした。



終了後、道の駅「風の丘」で遠野ラーメンを食べ、リンゴを買って立花さんと別れる。遠野駅で友人の笠井綾さんと合流。今回、大船渡のプログラムと一緒にやってくれることになっているアメリカのアートセラピストだ。研究科が提携している California Institute of Integral Studies

(CIIS) との協働の一環でもある。笠井さんは、昨年も東北に来て、遠野のまごころネットでボランティアをしたが、今回、遠野のボランティアセンターに立ち寄ったところ、現在、瓦礫撤去ボランティアはほぼ終わり、生活困難に対する支援、以前から続けられている仮設での「お茶会」などを通してのコミュニティ作りなどに活動がシフトしていると聞いたそうだ。

長いトンネルをいくつも越えると、まったく別世界が広がっていた。大船渡は1メートル程も地盤沈下したとのこと、道路のかさ上げ工事中で、道路両脇に土嚢が並んでいたり、池のような水たまりがあちこちに残っていたりする。大船渡駅周辺は市街地だったそうだが、見渡す限りの空地になっていて、線路は途中で引きちぎられたように切れていた。大船渡の屋台村を見て、私たちの宿となる大船渡プラザホテルへ。ここも4階まで水が来たそうで、半分はまだ工事中。満潮なのかすぐ近くまで冠水している。





だんだんと日も暮れてきて、心細く物悲しい思いが胸に満ちてくるが、京都からやってきた仲間たちと合流して、少し賑やかになる。彼らは、気仙沼の市街地に打ち上げられた第十八共徳丸を見てきたらしい。それを残すか残さないかで遺族・被災者の間でも意見が分かれ、議論されているものだ（結局、残さないことが決まり、2013年10月に解体作業が終了している）。

大船渡でのプログラム

11月3日、朝早く目覚め、良いお天気で気持ちよいので、港周辺を散歩する。青く輝く海。大きな船や小さな船が並んでいて、一見、のどかで平和な光景だが、あちこちに津波の威力を感じさせる傷跡が残ってい

る。歪んで折れた鉄のポール、上からはぎ取られたようなコンクリート。よく見ると、海には花束が浮かんでいる。持っていかれたままになった方々に手向けられているのだろうか。





会場は、JR 盛駅の隣にあるカメラホールである。津波は盛駅まで来たそう。大船渡や気仙沼までは不通で、振替バスが出ていた。反対隣の三陸鉄道盛駅も不通となっているが、待合室がコミュニティスペースになっていて、小物やお弁当が置かれていた。カメラホールの入口には、「暖かい御支援に感謝します!」「心ふるい立たせて頑張ろう!」と手書きで書かれた二枚の紙が貼られている。「そうか、彼らは心を奮い立たせて頑張っているんだ」とあらためて思う。1 年半。



午前、支援者支援セミナー。仮設住宅での支援をされている方々が参加してくれたが、自己紹介時、お一人が、すざましい被災時の体験とその後の経過について話してくれた。ただただ驚きながら聞かせて頂いたが、後で振り返ると、大船渡の支援者たちの状況を紹介してくださったような気がする。大船渡市は、仮設住宅の支援を大阪

に本社にある人材派遣会社に委託し、地元で求人をかけて、37 か所の仮設を対象に100 名強の支援員を配置して、あらゆる支援をしてきたのだという。それまで支援の仕事をしてきた人々ではないので、なかなか難しい側面があったが、少しずつ信頼関係を築いてきた。「支援者たちも辛い状況なので、今日は立命館さんが来るということで、来てみた」とおっしゃっていた。立命館は大船渡と協定を結んでいることから、全体でひとつの組織として見られていることを実感した。一人一人は頻繁に来ることができなくても、組織から誰か彼かが入れ替り立ち代わりやってくれば、地元の人たちには、継続的な支援をしているという信頼につながることになる。

もうお一人は家が高台にあって被害はなかったとのことで、「被害比べ」も起こってしまうようだった。あちこちで起きている支援者たちの現状だろう。心を込めて支援しようとするほど圧倒される無力感についても語られた。

笠井綾さんに手伝ってもらって、最後の20分は体を動かすワークをすることに。まずは、①体のモニタリング（力を抜いて椅子に座っている感じ、足が床についている感じを感じながら、体の様子に気づいてみる）をしてシェアリング。次に、②一人ずつ「こんなふうにしたら体が気持ちいいな、こんなふうにしてみたいな」と思う動きをやってみて、皆でまねる（おなかを「の」の字でマッサージ、肩回し、腰回し、のびなど）。③動いた後は、体の変化を感じてみる。④名前と動き（名前を言いながら、体を動かす）⑤音と動き（音を出しながら、体を動かす）。空気が緩んで、皆の顔から笑

顔がこぼれるようにして終わることができた。まだまだ大変な状況だ。長丁場の支援が必要だろう。



並行して渡邊佳代さんによる遊びワークショップ「ふうせんで遊ぼう」、午後には笠井綾さんが「アートで遊ぼう」をやった。私は「アートで遊ぼう」に参加したが、ミ

ニハープの音色でリラックスしながら、タッチドローイングという表現アーツの手法を使った版画のようなものである。数秒で描けてしまうので、1 時間もするとたくさん絵ができる。これをペアになってシェアし、物語にした。私とペアになってくれた女の子は、「ハートの天使が降りてきて、ひまわりの芽が出て、新しいお友達と出会いました」というお話を作ってくれた。まるで自分が「新しいお友達」と言ってもらったような気がして、何だか嬉しくなった。そして、まるで子どものように、「また会えたらいいな〜」と思った。

前日の「漫画トーク」は、参加者 1 名に記者 2 名、関係者 2 名だったそうで、全体的に小さなプロジェクトだったが、大船渡の方々と良い出会いができたように思う。

ついでながら、お昼食べるものを買おうと近くのスーパーに行く途中、イタリアンがあったので入ってみると、ここがとてもおいしくて、そのまま夜の食事の予約をして皆でディナーを楽しんだ。後でわかったことだが、ボランティアたちの口コミで評判になっているポルコ・ロッソという店だった。店長の山崎純さんは地元の方で、津波は店の前まできたが、幸い浸水は免れたそう。



陸前高田から花巻空港へ

今日も良いお天気である。朝 9 時半にチェックアウトし、マイクロバスで陸前高田を經由して花巻空港へ向かう。



瓦礫が片づけられ、瓦礫の山に草花が生えて、まるで大きな丘のようにになっている。



5 階建てのマンションの 4 階までは窓が割れ筒抜けになっているが 5 階はそのまま残っているなど、そのまま津波の状況を物語る建造物が残っている。あちこちでボランティア団体と思われる人々が片付けや花を植えるボランティア活動をしていた。息長い活動を継続している人々の姿に、頭が下がると同時に、「私たちの市民社会もまんざら捨てたもんじゃないな」と心強く思った。



陸前高田を通ると、高田第一中学校仮設グラウンドに「陸前高田市産業まつり」の旗がひらめき、賑わっていた。震災後、2年ぶりの開催だということで、何だか人々の顔も心持ち輝いているように見えた。「まあ、元気だったのね!」と喜び合い、知り合いの安否情報を交換する会話も耳に入ってきた。被災後、避難してバラバラになってしまい、消息もわからなかったのだろう。

小さなブースでは、農産物や海鮮などの特産物や復興を象徴するようなグッズも売っていた。珍しい物としては、食べるほおづき。陸前高田で作っているという。甘酸っぱいフルーツのような感じだった。その他、「ぶどうサイダー」やりんご、「奇跡の一本松」の絵葉書など売っていた。復興への一步を象徴する産業まつりだったと思うが、被災して出店できなかった方々もあったに違いない。

駐車場につながる地面は、地盤沈下のためところどころぬかるんでおり、靴底はドロドロになってしまった。

岩手の風景には、あちらにもこちらにも哀しみ、悼みと希望が散りばめられているように見えた。震災から1年半、影があつて光があるという光景をそのままに胸に刻みたいと思った。来年も同じ場所でご縁ができることを願いながら。

つづく



周辺からの記憶 10

～2012 年度 福島～

村本邦子（立命館大学）

毎年、年度終わりにシンポジウムをやっているが、今年は 2015 年 12 月 12 日、『東日本・家族応援プロジェクト 2015』から見た被災地の今」と題するシンポジウムを開催した。5 年目というプロジェクトの折り返し地点を過ぎたところで、現地の受け入れ窓口となってくれている方々を招いて、それぞれに見えている風景を共有し、これまでも振り返りながら、これからを考えていくことができたらと思ったのだ。そこから新たなネットワークが生まれることも期待した。

午前の部では、現地協力者の方々を中心に連携に焦点を絞って現地の状況を報告してもらった。あらためて感じたことは、私たちの曖昧模糊とした企画持ち込みに対する戸惑いと、それに何とか応えようとする先方の努力だった。それが良かったか悪かったかを言うことはできない。もともと互いに何ら義務のないところで、やるかやらないかの選択があり、やるのなら良いものにしようという意志があるというだけのことだ。何が良いかは、それぞれが決めることだろう。戸惑いつつも、プロジェクト実施のための体制や新しい企画を作ってきたことが現地の力になっていることを聞き、私たちの呼びかけに応答してくださった現地の皆さんにあらためて感謝と敬意の念を抱く。

午後は、各地でのプロジェクトの院生報告だったが、去年に引き続き東北各地の状況を横断的に聴く貴重な機会となった。少し前、「他者を介して聴く」という言葉に出会ったが、自らの感覚を根拠に語るだけでは、自らの枠組みを超え出ることにはできない。プロジェクトを通じてそんな積み重ねが実現していったらいいし、そのための場を開くこともまた大学が果たすべき役割だろう。



2012年度 福島準備

<実施体制>

2年目の福島。年度初め、昨年、共催してもらった福島県中央児童相談所にコンタクトしたところ、今年度、国が「東日本大震災中央子ども支援センター」という組織を設立し（実質は恩賜財団母子愛育会に委託）、被災3県にそれぞれ現地窓口を設置したという。福島県では、NPO法人ビーンズふくしまに委託され、子ども関係の支援者研修もその業務となるため、ここを中心に企画を運ぶということになる。時間経過とともに支援体制が組織化されてきたのだ。

幸い、ビーンズふくしまは、昨年、二本松で本プロジェクトに関わってくれていたということで（二本松チームは荒木穂積先生が運営）、話は早い。ということで、今年度は、東日本大震災中央子ども支援センター福島窓口（NPO法人ビーンズふくしま）とNPO法人きょうとNPOセンターの共催、福島県と福島県中央児童相談所の後援を頂いての実施となった。

<事前学習>

10月17日の研究会に、ビーンズふくしまの中鉢博之さんを招き、皆で「福島の子育て支援の復旧・復興の現状とその後のあり方」について話を聞いた。

福島県は、浜通り、中通り、会津の3つの地区に分けられるが、浜通りは震度6弱がほとんどで、余震もたびたび起き被害が大きく、とくに海沿いは甚大な被害を被った。原発から半径20キロ圏内では避難生活を余儀なくされ、いつ自宅に戻れるか見通しが立たない。20～30キロの避難指示解除

準備区域は自宅に戻ることはできるが、放射線のこと、事故が本当に収束したのかなど不安がある

避難状況としては、全町避難・全村避難で現在も一時帰宅しかできない町村、一時は全村避難していたが帰村した村、1つの市の中で避難地域が区分され、避難が分断されている地域がある。家や家族を流された、原発事故によって職を失った、今後の生活の見通しが立たないなかで、子どもと関わる余裕のない家庭もある。地震・津波によるPTSD、長期避難生活によるストレス、避難による家族との分離、家族分離による育児ストレスの増大が課題である。

中通り、会津は震度4から6強で、家屋にほとんど被害がなかった地域もあれば、建物が倒壊し、行政の庁舎や公共の施設等も使用不能になって庁舎移転を余儀なくされた地域もある。津波被害はなかったが、浜通りから避難してきた子どもに、津波被害を目撃した子どもたちがいる。原発から離れていても20キロ圏内より線量が高く、自主避難者が多い地域もある。福島市・郡山市・伊達市・二本松市など主に中通りの都市部で、山形県・新潟県などへの県外避難があり、放射線量がそれほど高くない地域でも、自主避難者が増え、母子避難が多くなっている。

その一方で、浜通りからの避難者が仮設住宅・みなし仮設住宅で避難生活を送り、放射線という目に見えないものにつきあいながら生活している現状がある。子どもは1日3時間までしか外に出さない、食べ物の選択、外遊びができないなど、日常生活がすっかり変わってしまっていて、体重や運動能力など、発達にも影響が出てきている。

放射線についての考え方・捉え方が異なることによるストレス、自主避難に伴うストレス、母子避難による家族間におこる問題でのストレスや対立が課題となっている。

このような状況下で、福島県は、平成 24 年 10 月より子どもの医療補助を 18 歳まで拡大し、心のケアの取り組みとして『お子さんとパパ・ママのための心のサポートブック』を発行した。屋内遊び場確保事業、地域の寺子屋設置支援事業（仮設でのコミュニティ再生支援）、そして東日本大震災中央子ども支援センター事業が施策として取り組まれ、中央子ども支援センター事業をビーンズ福島が運営している。その事業は、ビーンズこころの相談室「まめの木プロジェクト」と、うつくしまふくしま子ども未来応援プロジェクトから成る。

相談室事業から見てきたことは、震災後の PTSD に対処するような相談は当初の想定よりも少なく、震災前からあった課題が、震災を機に顕在化したケースが多いということ、被災者にとっての心のケアの取り組みは、カウンセリングという手法だけで解決できるものではなく、その生活や被災によって起こった課題に対して丁寧に寄り添っていくことが大事ということだった。

うつくしまふくしま子ども未来応援プロジェクトの方は、2011 年 9 月から土曜の午後、仮設住宅での子ども向けの遊び・学習支援を通じた支援活動から始まり、教育委員会からの依頼や保護者からの要望もあって、平日の夕方も実施するようになり、徐々に実施地域も拡大した。さらに、保護者会やイベント実施によって、地域で子どもを支えていく力を取り戻すことも視野に入れるようになった。子どもたちが落ち着きを

取り戻し、地域の評判も良く、避難生活が続く限り必要な活動であると考えているが、ボランティアやマンパワーの不足や資金的な見通しが立たないことが問題。その他、県外避難している母子の支援にも大きな課題があるということだった。

院生たちは、さらに、それぞれの視点から事前学習をして現地に臨んだ。

11 月 30 日（金）福島入り

2 年目の福島。今回は、教職員 7 名、院生 5 名という大所帯である。遅れてくる人もあったので、教職員 6 名と院生 1 名で会場の下見。プログラムの材料の買い出しに行き、皆で袋詰めや見本作りなどの作業をした。今回からのパートナーであるビーンズ福島のスタッフも 3 人参加してくれ、わいわいおしゃべりしながら一緒に準備するプロセスは、互いに知り合い、一緒にプロジェクトを実施するチームとしてのウォームアップになった。





準備終了後は、場所を移して、食事会。ビーンズのスタッフになった経緯を聞かせてもらうことで、若い人たちの動きを知った。HP 作成をしているスタッフによれば、「立命館×福島」で検索してビーンズふくしまに辿り着く福島市民が結構あるとのこと。大きな組織の強みでもあろう。プログラムの申し込み状況はひと桁代だが、昨年、一緒にプログラムをやった児童相談所の職員も申し込んでくれているということで、年を重ねるごとに定着していったらいいなと願う。

福島の現状としては、まず学校が除染され、グラウンドも使用されているが、プールは親の許可がいるとのこと。親の判断や基準の違いは、子どもたちの人間関係にも影響を及ぼしていることだろう。福島市内の除染はまだ1割しか進んでおらず、放射性物質が含まれる物の処理ができないことが、除染作業をさらに遅らせている。場所によって放射線濃度は異なり、山の裾の地域には放射線が溜まりやすいということだった。

2012年12月1日(土)

<支援者支援セミナー>

朝起きると雪だった。ホテルロビーで待ち合わせて会場へ行き、会場の設営をする。10時半から12時は支援者支援セミナー。ビーンズ福島や会場となっている市民活動サポートセンターで支援活動をされている方々が集まってくれるが、朝から初雪が降り、スノータイヤに替えなければならないので、出足が悪いということだった。東北だ。今回、共催となってくれたきょうとNPOセンターからも野池くんが駆けつけてくれる。





まずは自己紹介と現状。最初に、支援の難しさが語られた。子育て支援をしていますが、若者の就労支援をしていますが、心の相談室にもあまり人が来ない。福島から子どもや若者がそもそも少なくなっているということなのだろうか。仮設住宅の支援でも、イベントが多いためなのか、何かやってもボランティアの方が多い状況だという。

福島は、目に見える被害は少なくとも、気持ちの上で影響を受けている。これまでは近くに職場があって、ほとんどの人と気があわなくても、その中で3人と気があえばそれでよかったが、その3人がバラバラになったら行動できなくなる。また、放射線のことで、外から「こんな（放射線の）高いところにいて」と言われる。「私たちはここで暮らしているのに」と思う。外の人には心配しているつもりでも、心理的に圧迫される。元気に働けば解決していくことも多いと思うが、補償金のことある。個人的な苦難ならば、ここを乗り越えればと思

うが、公的な責任でこうなったのだし、仮住まいということもあり、前向きに立ち上がると言ってもなかなか難しい。微妙な立場だと思う。

他方、震災以前からの課題として、人との関わりのなかで援助を求めにくくなっていて、たとえば同居している祖父母に手助けしてもらえるはずの環境で、まず支援機関の方に言ってくる。大家族であっても、子育ては母の責任という意識が強く、祖父母の眼が気になる。被災ゆえの問題というより、元々あったものが表面化している。支援者が解決してしまうのではなく、家族を巻き込む支援が必要。

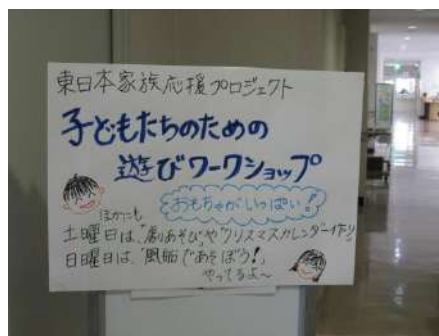
それから、支援されるばかりでなく、自分たちで動き出せることが重要だという話に移っていった。「支援対象者の自分」となると動けなくても、誰かのためなら動ける。やってあげるのではなく、これまで応援してくれた皆さんに感謝祭をやろうとか、彼らが自分たちでやっていくっていうことを支援していけばいいんじゃないかなと思う。仮設に引きこもっている人たちに向けて、焼き物や農園など仮設にいても自分たちでできることを立ち上げられないか企画中という方もあった。

子育て支援にしても、子ども達をどう育てていくのか、どう育てていきたいのかを一緒に考えることで、コミュニティとしてまとまっていけるといい。親自身、人とのつながりが薄くなってきているので、これを機会につながりを作っていけたら。旧体制ではなく、仮設であたにできたコミュニティを主体的につくっていくことで、人とつながるのは面倒だけど良いものだというのを体験し、そのノウハウを持つと、た

とえ移動しても、次のところでまた作って
いけるだろう。

昨年は、先が見えずどうしようもない状
況で無力感に圧倒されている印象が強かっ
たが、今回は、そのなかでやれることをや
っていこう、人と人とがつながって、知恵
と工夫を重ねていけば、きっと何かできる
はずという希望を感じた。「福島を新しい
ステージにして大きなビジョンと小さな行
動で、情報交換をしながら進んでいきたい」
と最後にまとめてくださった声を聴き、遠
くにいる私たちも彼らとつながりながらで
きることを続け、福島の人々の力を伝えたい
とあらためて思った。

午後にあった尾上さんの「支援者のため
のドラマ表現ワークショップ」でも、「被災
者（被支援者）は支援者になれる」とい
うテーマが浮上したということだった。



＜遊びワークショップ＞

14 時から 15 時半は、クリスマスのアド
ベント・カレンダーを作る遊びワークショ
ップ。今年も親子での参加が多かったが、
昨年に比べて、子どもたちが自由に伸び伸
びしているのが感じられた。去年は、子ど
もの数より多い大人たちが見守るなか、子
どもたちは統制された範囲で安心して遊ぶ
ことができた。それだけ不安が高く、親子
の結びつきは緊迫していた。もちろん 1 年
経って不安が減ったわけではなく、根底には
さまざまな思いを抱えておられるだろうが、
それでも、自分たちはここで生きているの
だ、その中で精いっぱいやっていこうとい
う大人たちの覚悟があり、子どもたちの安
心と日常が取り戻されつつあるのだと感じ
られた。

昨年も来てくれた親子もあり、昨年来て
くれた子どもが、今年は自分でチラシの情
報を見つけ、友達を誘って参加してくれた
という例もあった。子どもがカレンダー作
りをしている間、同じフロアのラウンジで
お母さん同士がお茶を飲みながらおしゃべ
りをしている姿も見られ、親子が離れて楽
しめるようになって良かったと思った。プ
ログラム終了後、子どもたちがかわいい文
字でアンケートを書いてくれ、「また来年、
会おうね〜！」と手を振ってくれた。



プログラムと並行して、東京おもちゃ美術館から頂いたおもちゃを使った遊びコーナーを設置していたが、そちらでも子どもたちが楽しげに遊んでいた。今年もカプラは大人気で、協力しあって高く積み上げる子どもたちがいたり、たくさんのおもちゃと一緒に壮大な街を作る子どももいた。

プログラムの前後、チラシを見た学校の先生や保護者から相談したいと話しかけられる場面もあった。できる範囲のアドバイ

スをしたが、やはり、震災による負荷によってもともとあった問題が浮き上がってきた印象を受けた。プログラムの付き添いで来てくれていた保護者たちと立ち話すチャンスもいくらかあり、被災の状況や子どもの様子を聞かせてもらった。「良かったこともいろいろある」、「このように応援してもらっていることがありがたい。子どもたちもしっかり大きくなって、お返しできるようになってくれたら」とおしゃっていた。去年、参加して、仮設での支援にクリスマスカレンダー作りをやってみたという方もあった。クリスマスカレンダーを作ることが直接支援につながるわけではないが、「クリスマスカレンダーづくり」という場を開くことで起こってくる出会いや関係の展開が意味を持つのだと思っている。漫画展も同様である。

夜は懇親会。会場に向かう道はクリスマス用にライトアップされ、広場でイベントをやっており、夜の街はにぎわっていた。



2012年12月2日（日）

＜漫画トーク+遊びプログラム＞

去年の漫画展は1階の入り口を入ったスペースでの開催で、センターに入ってくる人が必ず眼にする場所が確保されていたが、今回は場所が取れなかったということで、3階のひと部屋だった。わざわざ入ってきてくれる人しか見ることができないのが難点。せっかく準備した今年の冊子がないというハプニングもあった。残念だが、体制が変わったこともあり、やむを得ない。

私の最初の思惑としては、漫画展が開く偶然の出会いや会話がもたらすものを大事にしたいというものだった。受付でのさりげないやり取りや立ち話、お茶を飲みながら交わされる言葉、ノートに記されたメッセージを見ることなどが互いを力づけるだろうと思った。漫画展にアテンドすることになった清武くんや団さんは見事にこれを実現してくれていた。





並行して行われた「風船で遊ぼう」に集まってくれた子どもたちも、楽しい時間を過ごしたようだ。昨日のプログラムに参加して、「今日も絶対に参加する！」と言って来てくれた子もいた。「来年も絶対に来てね！僕も絶対来るから！」と何度も約束して帰った子もいたという。来年があるってわかっていることのありがたみを思う。また、子どもがプログラムに参加している間、漫画トークに参加した保護者もあり、良い表

情で戻ってきたということだった。こんなささやかな積み重ねが応援のメッセージとして届くと嬉しい。



プログラム終了後、片付けをして、昼食を食べながら来年に向けての反省会をした。現地の声としては、福島はイベントが多く、放射能に関する講演やこの状況をどう乗り越えていくかという研修が多く、今後は、何かを教えてもらうのではなく、「答えが出ないことを一緒に考え、寄り添ってもらえる存在」が欲しいということだった。どんな

形でそれができるのかわかっているわけではないが、現地の人たちの声に耳を傾けること、声にならない声に耳を澄ますこと、その一方で情報を求め学び、批判的に考える力をつけることが重要なのだと思う。



2012年度 シンポジウム

2年目のプロジェクトも無事終了し、2013年2月10日にまとめのシンポジウム「東日本大震災と対人援助」を開催した。午前は、「復興支援と対人援助～サービスラーニングの視点から」と題して、院生たちの報告、午後は被災地からのゲストを招いての報告とディスカッションだった。一日を通して、専門性と人間性、日常と非日常はつながっているということがテーマとして上がっていたように思う。

初年度より参加している臨床心理領域の院生西木多賀子さんは、サービスラーニングとしての学びについて、「技法を身に着けることも大事だが、それだけでは一方通行の支援になってしまう。…まずは現地のことを理解しようと努めること、そのうえで必要なことを考え、最大限できる準備を丁寧にして現地に赴き、できないことは他の人と協力していく、現地の様子に合わせて柔軟に対応していく。当たり前だが、支援

者中心であってはならないということを経験したことはとても大きなことだった。」と言います。「プロジェクトへは社会人院生の参加が多かったが、現役生は特に目先のことに忙しいのもあって、直線的な学び、最短距離での学びに関心が向きがちだと感じた。社会に出ていると、社会と自分の繋がりを考え、社会の中での位置づけを捉えるということが学びとして身につけているのかもしれない。その感覚を大学院で身につけるには、クローズな学びだけではなかなか難しい。臨床領域の院生にはぜひ参加してほしいプロジェクトだと思う。長く関わり続け、今年の学びが、来年の学びに繋がり、それが毎年毎年積み重なっていく。そのようなゆっくりとした関わりや学びも知っておくことが必要だと感じた」と報告してくれた。スタートした当時には考えてもいなかった副産物だった。

合わせて、この時期、1ヵ月にわたり、朱雀キャンパスで漫画展をやった。通りすがりに偶然眼にする状況下、一定期間継続して開催したことで、立命館大学の関係者、外部からわざわざ足を運んでくれた人、たまたま通った人が見てくれ、予想を上回る反響をもらった。

一定の想定のもとにスタートさせたことが、想定を超えて発展していく。これは物事がうまく行っている良い兆しである。

つづく

周辺からの記憶 11

～2013 年度 むつ・多賀城・宮古～

村本邦子（立命館大学）

買ったばかりの『16歳の語り部』（雁部那由多・津田穂乃果・相澤朱音著、ポプラ社、2016）を読みながら、被災地熊本へ向かった。帯には、「16歳の今しか、伝えられない言葉がある。東日本大震災から5年。あの日、小学5年生だった子どもたちが見据える3.11後の未来」というコピーがある。3人の16歳が被災とその後の体験を語った記録だが、大人として恥ずかしくなるような深い洞察に満ちた子どもたちの眼差しを体感した。阪神淡路大震災から15年経って初めて語られた子どもたちの声をテーマにした『その街のこども』という映画があったが、今回、5年で子どもたちの言葉が私たちの耳に届けられたという事実、日本社会にもある意味で進歩があったと言えるのかもしれないと思った。

熊本では、十年来おつきあいをしている支援者たちを訪ね、それぞれの被災状況や支援現場の話を聞いた。知り合いをつてに、被災者した方々のご自宅を見せてもらったり、避難所の生活を見せてもらったりもした。阪神淡路大震災を経験し、東日本大震災後の東北に通うなかで、自分自身が知らず知らずのうちに身につけている知恵があることに気づいた。また、一般化された知恵がうまく活かされている例、知恵があったはずなのに受け継がれていない例、逆にマイナスに働いている例を見た。たとえば、東日本大震災後に発案された段ボールベッドというのがある。もともと仕切りもダンボールで、ある避難所は、それを使用していたが、別の避難所では、仕切りにカーテンを採用していた。

対人援助に関わる知恵というものもある。それをわかりやすく体系化したうえで、トップダウンに下ろすのではなく、それぞれが自分の状況に合わせ工夫して展開できるボトムアップの発想が求められるのだと思う。東北へ通うなかで学ばせてもらってきたことを九州にもつなげていきたい。まずは、16歳の語り部たちの声を熊本に届けたいと思う。



◀熊本駅構内おもてやん通り（地下通路）には宇土張り子が展示されている。

作者の坂本紀美子さんは長年の大切な相談員仲間だったが、突然逝ってしまった。通るたびに虎にご挨拶するのだが、今回、被災された方のお宅で、偶然宇土張り子と出会った。すべては延々とつながっていくのだ。

2013年9月 むつ

<準備>

新しい年度が始まると、むつからスケジュールと内容の確認メールが入る。今年は、これまで中心に動いてくれていた杉浦さんが移動になり、担当が変わるという。新しい窓口は、昨年、新人職員としてプロジェクトに参加してくれていた若手男性だ。院生と同年ということで話がはずんでいた。杉浦さんも非公式にバックアップしてくれるというし、まあ何とかなるだろう。現地では、実行委員会が予定どおり開催され、こまめに報告が届く。

今年も教員は一足早く青森に入り、フィールドワークを兼ねた夏休みの小旅行を楽しむ。そもそも温泉好きというのがあるが、現地の自然や文化に馴染むことは、人間理解に不可欠だ。今年は、岩木山で「嶽きみ」というあまりにおいしいトウモロコシに出会う。

去年に引き続き、恐山をお参りする。地元の人たちにとって、今もイタコは生きていくようだ。と言っても、イタコは、お祭りの時にしかいないらしい。だんだんと、青森に「帰ってきた」という気分が高まる。

プロジェクト前夜は、打ち合わせと恒例のレセプション。漫画展は1週間前に始まっており、9月6日（金）午後から支援者支援セミナー、お父さん応援セミナー、9月7日（土）漫画トークとプログラムを実施する。これまで杉浦さん個人に頼っていたところが大きく、互いに戸惑いもあるが、あらためてセミナーの趣旨と現地の事情とのすり合わせを行う。公的機関と十年協働する

ということのなかに含まれる人の移動の影響を感じるとともに、たとえ人が変わっても同じようにプロジェクトを実施できるのは、システムの力あればこそだと思う。



<むつでのプログラム>

支援者支援セミナーは例年、中村さんと一緒にやっているが、今年は時間が短くなり、対象者層も少し変わって、60人ほどの参加者の半分が民生委員、そこに保育所、児童館、保健師、児相スタッフが加わる形になった。4~5人グループに分け、前半は漫画冊子のなかの「贖罪」を事例に、後半は児相から提供された精神障害を抱える母子虐待事例をもとに、グループ・ディスカッションを交えながら進行していく。

事例提供者は、地域の人たちに児相の仕

事を理解してもらいたいという希望があったことから、家族の持つ力や地域のリソースに着目し、さまざまなバックグラウンドを持つ地域の人々が力を合わせて困難を抱える家族を支える視点を共有できるよう議論を進めていった。

「私たちはどうしても公的支援を考えがちですが、ケースによるものの、地域の力に頼ることも相談への層を厚くすること、拡大できることを学んだ」「児童相談所の方々がプロとしてどんなに大変な仕事をしているか具体的にわかり、自分にできることは何かを考えることが大事であることを知った」「地域・近所の力も大きな力になる。応援することの大切さがよくわかった」など肯定的フィードバックを得て、とりあえずの目標は達成できたかと思う。

一方で、地域の実情に合わせた協働支援システムを構築するプロセス自体を、もっとむつの支援者たちと協働できる様式を考えていけたらと思った。



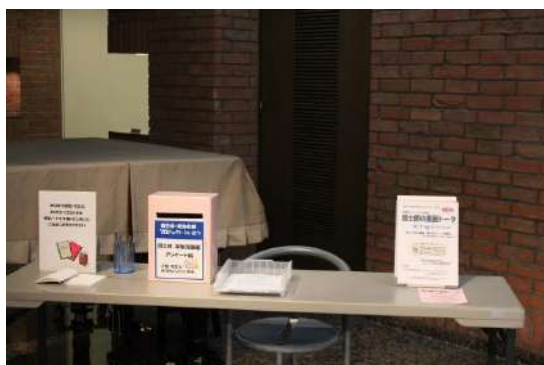
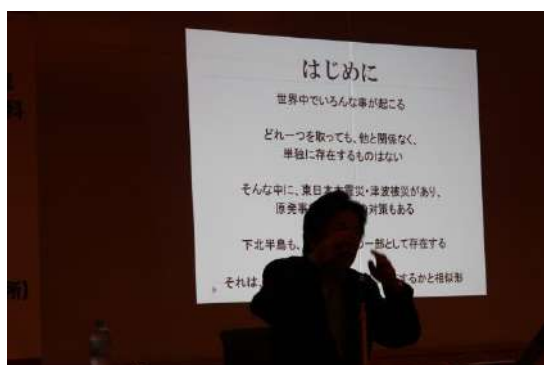
中村さんによる「お父さん応援セミナー」は、地元の学校の PTA の協力を得て、20 名の父親たちが参加してくれた。結果的に動員されての参加者が大半を占めることになったが、いかめしい顔をして入っていった男性たちが、帰りには、柔らかにこやかな表情で出ていくのが印象的だった。

3 年目になると、漫画展のアンケートや感想ノートに「毎年、楽しみにしています」と書く人が出てきたり、偶然図書館に立ち寄ったという人から意外なメッセージを受け取ったりするようになる。たとえば、20 代男性がアンケートに書いてくれたのは次のような内容だった。「2011 年 3 月 11 日、私は大学 4 年生で、卒業式を控えていました。この震災で卒業式は中止、私はすぐに災害ボランティアの一員として 8 月まで活動しました。初めて現地に入ったとき、いつものまったりとした景色は消え失せ、この世の地獄のような惨状でした。このなかには、夫を亡くした人、逆に旦那さん以外、全員亡くなった人、子どもを亡くした人、さまざまな話を耳にし、毎日現場に入って話を聞くたびに涙していたのを思い出します。震災から 2 年、今も心を病み、悲しみに暮れる家族がたくさんいます。どうかこれからも活動を続けてください。きっと救われる人たちがいるはずです」。

阪神淡路大震災の経験から震災直後に考えたことのひとつに、被災の影響を受けた人々は時間経過とともに拡散して、その存在は見えなくなり、孤立していく傾向が生まれるということだった。だからこそ、長期的に、被災地だけでなく、あちこちに、「一緒に考えましょう」というメッセージがちりばめられている必要があると思った。い

わゆる被災地以外でも、団さんの漫画展に「東日本・家族応援プロジェクト」の看板がついていることの意味である。

この男性のような経験と抱えている人々が、実は他にもたくさんいることだろう。間接的であっても、漫画展を介してこうした人々と出会えることは、お互いにとって力を得られる経験である。偶然出会った絆の向こうに、まだ出会っていないたくさんの人たちの思いが連なっているということを知ることができるからだ。



＜次年度に向けて＞

週末のプログラムには、職場を移動になった昨年のスタッフたちも顔を出してくれて、同窓会のような盛り上がりだった。

毎年、終了後に反省会をするが、みな率直で建設的である。3年目に入り、少しずつこれまで見えにくかった双方の文化の違いも理解するようになった。むつと京都、公的機関と私立大学という違いもあるだろう。たとえば、私たちにとってはやや堅苦しいレセプションがプロジェクトの継続にどんなふうに必要なのかとか、動員という形で参加者が集められることへの違和感も、先方の熱意の表れであるというような類のことである。「むつの人は引っ込み思案で、一人で行こうとなかなか思わない。動員であっても、とにかく来て貰わなければ何も始まらない。来て貰ったら良い内容なのだから、渋々であっても、まずは、一人でも多くの人たちに足を運んでもらうようにするのが自分たちの責任だと考えている」と言うのである。

最後には、担当者が涙したことにみな驚いたが、温かい拍手とともに、充実感と一体感を得て、今年のプロジェクトを無事終了することができた。



2013年10月 多賀城

<準備>

昨年度は、仙台市と多賀城市と1日ずつプロジェクトを実施したが、仙台はボランティアもイベントも多く、また移動してのプロジェクトでは慌ただしいこともあり、今回から多賀城に絞って開催することにした。昨年お世話になった上山真知子さん(山形大学)が声をかけてくれて、多賀城図書館で漫画展ができることになる。しかも1ヵ月間だ。

また、今年から研究科に来た増田梨花さんがこれまでやってきた被災地での絵本とジャズのコラボのイベントをプロジェクトの一環としてやりたいということで、企画がさらに広がった。こちらは図書館での開催が難しいので、文化センターを借りることにする。

<フィールドワーク>

私は一足早く現地入りし、昨年プロジェクトを共催してくれた「おおぞら保育園」を訪ねた。ちょうど、昨年、話題になっていた園庭がわりのデッキ工事中で、子どもたちは散歩に出るところだった。園長の黒川恵子さんによると、仮の園舎であるトレーラーハウスから正式な園舎に移り、認可を得るための準備を始めているとのことである。相変わらずのバイタリティに驚嘆させられるが、お話を聴くうちに、それが、前を向いて着実に歩みを重ねてこられた一人の女性であり経営者でもある黒川さんの自然な道なのだと納得させられる。被災によって急に別の人が現われるのではなく、それまで生きてきた人が被災の影響を受けて大

きく前進するのだ。話をしながらも、子どもたちへの対応や近隣の人々とのやり取りを眼にするにつけ、納得は深まる。昼食を御一緒し、国府跡や多賀城の港を案内してもらおう。「被災前は保育園から車に分乗して港に来ていたものだが、ずっと来れなかったんです。こんなふうになったんだ…」とつぶやいておられる。



その後、上山真知子さんを訪ねる。被災後の状況や活動についても聞かせてもらうが、「レジリエンスは、まず自分の身边から」とおっしゃったのが印象的だった。上山さんは沿岸部で育ったので、防災は十二分にあって、自分に余裕があったためにいろいろなことができたという。その意識の高さと寛容さには我が身を恥じるしかない。外からの支援がどんなふうに迷惑になったり役に立ったりするかについても話してくれたが、やはり、地域の人々が中心になって立ち上がるということが重要なのだと思う。3年目を迎えた支援者たちの疲弊についても考えさせられる。

翌日午後の空き時間には、塩釜から東松島へ行ってみる。知人が、自分の経験を語りながら、現地を案内してくれた。友人の家があったあたりも今や果てしなく広がる野原で、すすきやコスモスが咲き乱れ、墓石だけが残っている。お寺も住職さんも流されてしまったそう。新しい墓に花や供え物があるものもあれば、ひっくり返ったままの墓もある。

近くには大きなトレーラーやトラックが出入りし、プレハブが並んでいる。おそらくたくさんの人たちが動員されて復興作業にかかっているのだろう。鉄筋を組んでいる作業員に何をしているのか尋ねてみても、ベルトコンベヤーになるということしかわからないという返事だった。

少し陸地に入ると、1階はがらんどで2階に人が暮らしている様子がうかがえる家がある。わずかながら、海岸近くに建てられた新しい家もある。水が入って避難者たちが亡くなったという小学校も解体工事に入っており、立ち入り禁止だった。



復興の陰で、大きな喪失を抱えたままの人たちが取り残され、ますます見えにくくなっていくのだろう。具体的なエピソードを聞きながら、以前、ここにたくさんの人々の生活があり、それが、人々の夢と一緒にすべて消えてしまったということに思いを巡らす。「このへんの人を捕まえれば、そんな話はみんないくらでも持っているのよ」と知人が言う。

＜多賀城でのプログラム＞

10月5日(土)午前は、多賀城図書館で、団さんの漫画トーク。漫画パネルは図書館の入り口から階段に添ってきれいに並べられ、読みながら自然に2階の会場へと導かれていく。図書館の方々が工夫しながら大切に展示してくださっていることが感じられる。福島からビーンズ福島の中鉢さんと村上さんも駆けつけてくれた。図書館長と立ち話をするが、前は土木・水道課にいたとのこと、表面的には復興しているが、むしろ下、つまり下水がまだダメなのだという。また、水に浸かった人と浸からなかった人との差が大きいとも言う。バックグラウンドが違ふと目のつけ所が違っていて、興味深い。

夜は支援者交流会。集まった方々のそれぞれの近況を共有するなかで、現地の支援者たちが被災後、どんなふうに支援を続けてきたのか、立場上、個人的なことは後回しにしなければならないことも少なくなく、そんななかで頑張ってきたことも少し具体的に理解することができた。何も力になれないことを申し訳なく感じるが、それでも、私たちが継続的に来ることを喜んでくれていることが伝わってきて、ありがたいと思う。私たちにはこの経験を何かにつなげていく責任があると思う。



6日(日)午前は、多賀城文化センターにて増田さんの企画。文化センターにはたくさんさんのポスターが貼られ、カラオケ大会に大勢の高齢者が集まっていて、賑やかで楽しそうだった。残念ながら参加者は多くなかったが、来てくださった方々には喜んでもらえたと思う。

昨年・今年と、私たちは、たまたまこの避難所の様子を聞き知っているが、もしも何も知らなければ、2年前にここが避難所で、当時は大変な状況にあったということなど思いも及ばないことだろう。こんなふうに復興は作られていくのだ。見えないからと言って、ないわけではない。多賀城にできたご縁に感謝しつつ、来年はどんな形で発展させていけるか工夫が必要だ。

代と美しい自然のなかであの豊かな思想が育まれたことを感じる。



2013年11月 宮古

<遠野から大船渡へ>

1年目は遠野、2年目は遠野と大船渡でプロジェクトを開催した。もとより同じ土地に十年間通い続けることを希望していたが、なかなか継続的に共催してもらえそうどころが見つからず、立命館大学として多層に取り組みを展開している宮古で可能性を探してみるようになった。とは言え、「また来ますね!」と言って別れた人々の顔を思い浮かべると心苦しく、個人的に1日早く現地へ行って、遠野や大船渡の街の様子を見て回ることにした。

花巻空港でレンタカーを借り、まず宮沢賢治記念館に寄ってみる。賢治は津波の年に生まれ、戦争と関東大震災を経て、津波の年に37歳で死んだことを知った。厳しい時



遠野は、紅葉が美しい季節。田んぼでは、時折、農作業をしている老人たちの姿を見かけるが、街中に人影はない。沿岸部へのボランティアが全国から波のように押し寄せていた一昨年とはうって変わって、のんびりと静かで平和な日常に戻っているように

見えた。遠野は、この夏、『3.11 東日本大震災：遠野市後方支援活動検証記録誌』を発行している。3.11 が少し過去になったということなのだろう。それでも、仮設住宅はまだひとつ残っているそうだ。

一昨年の会場に立ち寄ってみるが、遠野博物館は休館で、蔵の道ミュージアムも閉まっている。伝承園とかっぱ淵を通り過ぎ、五百羅漢とデンドラ野へ足を延ばしてみる。五百羅漢は、江戸時代、度重なる飢餓で餓死者が続出し、その弔いのために、大慈寺の義山和尚が花崗岩に大小約 500 の阿諛修羅漢像を刻印したもの。



デンドラ野は、遠野物語の話者・佐々木喜善の生家の裏手に広がる。60 歳になると村人たちはここに捨てられ、自給自足の生活をしながら死を迎えたのだそうだ。近くにダンノハナと呼ばれる墓地があって、現世と来世の間の地と考えられていた。人里離れたところにあるわけではなく、まだ元気な老人たちは、昼間は村に降りてきて農作業を手伝っていたと説明があった。姥捨て山ともちょっと違うようだ。遠野物語にも感じられるが、このあたりの死生観は興味深い。



遠野から釜石を通過して大船渡に出たが、小学生や中学生が集まって、楽しみに下校中だった。ほとんどの子たちが大変な体験を持っていることだろう。昨年の会場だったカメラアホールまで行ってみる。「心を奮い立たせて頑張ろう」のスローガンはなくなっていて、残る 7 ヶ所の仮設住宅の地図が貼ってあった。1 階の寄せ書きはそのまま、むしろ増えている。

隣の盛駅へ行ってみると、4 月 3 日に三陸鉄道南リアス線吉浜駅までが復旧したということで、待合室はにぎやかだった。2011 年 3 月 11 日、ここにも津波は押し寄せ、10 月に駅舎を利用して「ふれあい待合室」が営業開始した。昨年、80 冊ほど漫画冊子を置かせてもらい、その後、駅舎は改装されたが、3 冊だけ大切にラックに立てられていた。

昨年泊まった大船渡プラザホテルの改装も終わり、街中には新しい門構えの食事処が並ぶ。街は少しずつ活気を取り戻しつつあるように見えた。主要道路は復旧が進み、前より便利になっている。現実には、地盤沈下のかさ上げ、区画整理地域の土地交渉、二重ローン、人口減少、高齢化と難しい課題が残っている。こうして格差は広がっていくのだろう。あちこちに、「津波浸水地ここまで」の標識が設置されている。

<宮古へ>

翌朝、羅須地人協会（県立農業高校）に寄り、賢治が晩年暮らした家や火鉢を囲む教室用の部屋を見学した。黒板とオルガン。「賢治先生の家」というサインがあちこちにあり、賢治が人々に慕われている様子が伝わってくる。



レンタカーを返して、プロジェクト一行と合流し、ジャンボタクシーで宮古へ向かった。宮古は、三陸リアス式海岸の北端にある。震度 5 で、津波被害が大きかった。気象庁の推定による津波の高さは 7.3m、避難対象者は 5,227 世帯 12,843 人とされている。

宮古に着くと、さっそく、会場となる「おでんせプラザ」で漫画展の設営をする。市役所から駅まで繋がる道の途中に中央商店街にある建物だ。この辺りも津波が押し寄せたところで、ところどころに空き地があり、草が茂っていた。新しい家や修理中の家もあった。今年、研究科に新任でやってきた鶴野祐介さんがプロジェクトメンバーに加わってくれたので、皆でにぎやかに、わいわいがやがやと工夫しながら設営。自分たちで一から設営したのは初めてだった。なかなか悪くない。後は人が来て

くれるかどうかだ。

設営が終わったので、夕方、希望者でタクシーを乗り合わせて、景勝地として有名な浄土ヶ浜へ行ってみる。台風の影響で大木が倒れ、サイドウォークが通行止めになっている。だんだん暗くなってきて、どうやって帰ったらいいのだろうと心細くなっていたところに、たまたまバスが来てくれたので、バスに飛び乗って駅前まで戻る。



JR 宮古駅と三陸鉄道宮古駅が隣り合わせに並んでいる。三陸鉄道の駅舎には、全国各地から宮古を訪れた人々の寄せ書きを集めたボードがあり、「頑張れ」、「負けんよ」、「一人じゃないよ。みんな一緒だよ」といった応援メッセージがたくさんあった。ホームにある列車を覗いていると、駅員が2人出てきて、「どうぞ」と暖かく声をかけてくれ、説明してくれる。「怪傑ぞろり」を描いた2車両の列車が止まっていた。「手をつなごうプロジェクト」というのをやっているそうだ。「あまちゃん」ブームで三陸鉄道は大人気だそうで、「皆さんの応援で復旧できて」と二人とも眼を潤ませていた。ここまでくるのに、いったいどれほどの道のりを越えてこられたのだろうか。三陸鉄道に対する誇りが伝わってくる。後で名刺を見ると、総務部長と旅客サービス部運転課長だった。



JR 駅の待合室には、「おでんせ みやこ」という冊子があった。宮古市の小学六年生が宮古市社会福祉協議会の協力のもと作成したもので、宮古の観光や特産物の情報とともに津波が発生した時の避難ルートや避難場所が書かれていた。裏面には「五つの提言」として「一つ 地震が来たら、迷わず高台へにげるべし!!」、「二つ 命を優先し、何

があっても戻らぬべし!!」、「三つ 助け合い、人とのつながりを大切にするべし!!」、「四つ 万に備え、防災グッズを準備しておくべし!!」、「五つ 未来に向けて、一步一步、進むべし!!」と書かれていた。小学生たちが被災者にインタビューしてまとめたものという。

6時半から駅前キャトル 2F の FM826 宮古ハーバーラジオに団さんと清武くんが出演することになっている。宣伝になるという。

＜宮古でのプログラム＞

11月2日午前、今回、協力頂いた社会福祉協議会を訪れ、宮古の状況について話を伺う。社協の前にはプレハブのボランティアセンターがあって、中をのぞくと立命館のうちのわがあった。プロジェクトのメンバーは、ボランティアの一人と話したらしいが、「立命館の学生たちとは一緒にやっていて、いつもよくやってくれる」と言ってもらったらしい。嬉しく感じるとともに、大きな組織の強みだと思う。



その後、海鮮丼を食べて、タクシーで30分ほど山奥に入ったところにある宿にチェックイン。信じられないが、そんなところしか宿がなかったのだ。宮古市内は宿が少なく、宿泊所がいつも問題なのだという。



宮古では、支援者の連絡協議会が組織されており、支援ボランティア（個人が多く、保健師や傾聴ボランティア、薬局の健康・食事相談など）と相談機関（公的機関が中心、警察、市役所、福祉、民生委員など）から成る。1〜2 ヶ月に 1 度集まるが、学校や子育て支援、女性支援の関係の動きは見えていないという。15 名の生活支援相談員が、宮古の仮設を回っている。話を聞いても解決できないことがほとんどで、怒りをぶつけられることも少なくないが、それで発散できるなと思うようにしている。訪問して扉を開けてもらえなくても、チラシに一筆メッセージを入れたり、季節ごとに花の写真を入れたりしている。相談員同士でよく話すので、メンタルな問題はなく定着がいいということだった。

外部からの支援が何かをするきっかけになればいいが、地元で NPO が立ち上がる気配はなく、経済基盤がなくて商売も立ち上がらない。「先が見えない。来年のことはまったくわからない」。できるだけ外部からの支援の希望は受け入れるように努めているが、今はもう支援が欲しいという気持ちはないということだった。こんなふうに時間を割いてもらうこと自体、負担をかけているということだろう。困難ななか支援者同士が支え合って、工夫しながら活動されていることに頭が下がる。

午後のプログラムを行う仮設住宅の集会所に移動。おばあさんたち 6 人が外のベンチで待っている。プロジェクトのメンバーが田んぼの中の観音堂で知り合って声をかけたという。地元の方々と、仮設の人たちとは交流がなく、集会所やイベントは仮設の人たちのためのものだからと遠慮している

らしかった。鶴野さんによる「歌と遊びのワークショップ」を始めたところで、子どもたち 4 人が入ってくる。その後 2 人。おばあさんたちと関われたらと近くに誘ったが、どちらにも遠慮とはにかみがあるようで、二手に分かれたままだった。それでも、子どもたちが加わったことで、おばあさんたちの表情が変わったように思う。みなで手遊びや歌を楽しんで終えた。





次のプログラムは、私が準備した「アートで遊ぼう」で、タッチドローイングへ誘うが、おばあさんたちは帰り、子どもたちが参加してくれる。1 時間は楽しげにやっていたが、途中で外遊びに行った子どもたちもあった。終了後、外のベンチで子どもたちを見守りながら、一緒に時間を過ごす。少しずつ状況が見えてくるが、子どもたちは、仮設に暮らす子、仮設の前にある新しい大きな家に暮らす子（別の場所で被災）、地元の子らが混じっているらしい。大人たちは、地元と仮設の交流がないと言っていたが、子どもたちは立場に関わらず、固く結束しているようだ。そのうちボールが植木にあたって、叱られてしまう。仕方なく、子どもたちは集会所戻ってゲームを始めた。「走って30分」かかる学校か、もっと遠い公園まで行かなければ遊び場はないということで、なかなか厳しい状況での結束だと思った。それでも、こうして結束できることが子どもたちの力であることは間違いない。「また来てね!」と言ってくれた子どもに、「また会えるといいね!」と返しながら、悲しくなった。ポスターを見て、楽しみにしていたと言ってくれた子どもだった。

漫画展をやっている「おでんせ」に戻ると、昨日のラジオを聞いて知ったという知

人のスクールカウンセラーが来てくれる。久しぶりに出会ったが、今は宮古の住人になって働いているのだという。一緒に夕飯を食べ、学校の状況を聞く。社協では学校関係の状況がわからないということだったが、そこをつなげられるといいのかなと思った。駅前に戻り、タクシーで宿へ。不便なことをのぞけば、自然のなかの素敵な場所で、その夜、私たちは、満天の星と大きな流れ星を見た。

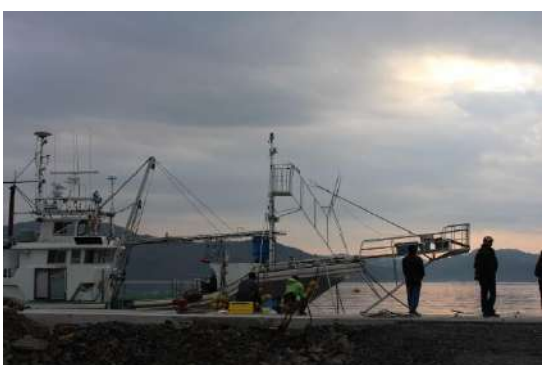
翌朝、「おでんせ」へ。漫画トークの設営をしてから、周辺を歩いてみる。港では男性たちが釣りをしていた。かわいいハゼが釣れるそう。愛想の良い男性もいたし、硬い表情の男性もいた。

「おでんせ」は、町の寄り合い場のようなものらしく、近所の人たちが立ち寄って話していくが、漫画展を見えるという感じでもなく、顔見知りと一緒にになると立ち話をしている。漫画トークには近所の商店街の年配の方々がきてくれた。場の構成も面白く、漫画パネルに囲まれて漫画トークがあるのも悪くないなと思った。



終了後はパネルの撤収作業と後片付けをして、近所の魚市場に寄り、大槌町を歩いて花巻空港へ向かった。大槌町役場は間もな

く取り壊されるという。来年はどんなふうになっているのだろう。花巻に着く頃にはすっかり夜になっていて、銀河鉄道のメガネ橋が美しくライトアップされていた。



つづく

周辺からの記憶 12

座談会：災害とコミュニティ ～物語、記憶、レジリエンス～

村本邦子（立命館大学）

十年プロジェクトも5年がすぎ、いよいよ後半期に入る。このあたりで、再度、プロジェクト理論化に向けた座談会をしようということで、2016年7月11日、一緒にプロジェクトを進めてきた団士郎、中村正、鶴野祐介と4人で語り合った。仕事の合間の3時間ほどだったが、テーブル起こしをし、少しだけ編集を加えたものを提示する。

この後、7月15日、再び熊本へ行った。今回は、厚労省からの派遣で、熊本県の婦人相談員研修と熊本地震に関するヒアリングを行うという役割だった。熊本には十年来、研修を続けてきた婦人相談員のグループがあって、前回、訪問した時に、彼女たちから、「災害に際して婦人相談がどんな影響を受け、どうしたらいいのか、記録を探したが、見つからなかった。自分たちのためにも、是非、振り返りをして、今後のために記録を残したい」という声が上がった。私には、これが格別に嬉しく、誇らしく、自分にも何かお手伝いができたらと思ったことが実現したものである。

研修に際して、自分自身が阪神淡路大震災の時に経験したことをどんなふうに記録したのだろうかと、二十年以上前に発行した『女性ライフサイクル研究第5号：阪神大震災～女の視点から捉え直す』（女性ライフサイクル研究所）を書棚の奥から引っ張り出した。自分が書いた『『こころのケア』と人権と・・・』という序文には、

この時、初めて「こころのケア」という言葉が生まれたが、「こころの」は心を対象にするという意味ではなく、「心のこもった」「真心からでた」「心に響く」などの意味でなければならない。「こころのケア」は相互的なものであり、ボランティアに馳せ参じた者たちは、自らの疼きを癒しに行っただと考えれば合点がいく。かくして、心のケアを専門とするものは、その存在自体が矛盾を孕んでいることを自覚しつつ、それでもなおかつそこに留まろうとする意味を考え続けなければならない。

などと書いている。「震災と女たち」の章では、震災を生き抜く女たち、震災と女性の人権、

震災と性に関する論考が集められている。「震災と子どもたち」「コミュニティと救援サービス」という章もある。コラムも合わせると 50 人以上もの執筆者が原稿を寄せてくれていて、全体として多声的な記録となっている。20 年経った今なお新鮮で、これを震災発生後、半年間で発行したとは、なんてすごかったんだと感嘆した。逆に言えば、二十年以上経って、自分はいったいどれだけ賢くなったのだろうと考えた時、もしかするとたいして変わっていないのかもしれないとちょっとがっかりもした。(この冊子、若干の残部があったので、関心のある方はお問合せください。)

あらためて記録を残すことの重要性を再認識する機会になった。この冊子がなかったら、ここに集められたたくさんの声はなかったことになっていただろう。現在、熊本での婦人相談員ヒアリング結果をまとめているところである。そんな作業をしながら、座談会の記録を読み返していると、また新たに見えてくることもある。

さらに、その後、7 月 24 日～8 月 25 日、台湾に滞在した。小さな島に津波のように繰り返しやってくる外部からの侵入と災難。その記憶と歴史の残し方は時代とともに刻一刻と変化してきたこと、今なお変化しつつあることが感じられる。



レジリエンスは物語を生み出す力のなかにあるが、生み出された物語によってもまた、レジリエンスが生み出される。コミュニティを支える力を持つ物語を束ね、ボトムアップに多声的歴史を構築していく力が、今、求められているような気がする。別の言い方をすれば、それによってコミュニティが新たに浮き彫りにされ、記憶されていくのである。それには、それを可能とする仕組みが必要だ。私たちのプロジェクトが、ささやかながらもそんな仕組みを生み出すことに寄与していれば嬉しい。

そして、もちろん、このマガジンもそんな役割を果たしているのだろう。

1. 災害とコミュニティ

村本：東日本大震災によってコミュニティが受けた影響とレジリエンス、復興のプロセスを記述するというのが私たちの研究テーマなのだけど、コミュニティをどんなふうに定義して、レジリエンスの発動を語るといいのかな。

アルドリッチは、レジリエンスを「連携した働きかけと協力し合って行う活動を通じて、災害などの危機を切り抜け、効果的で効率的な復興に取り組むための地域が持つ潜在力」と定義し、行政区で区切って、ソーシャル・キャピタルをボランティア組織の数、投票率、地域のイベントへの参加などで測り、その変化を比較している（アルドリッチ, D. P. 『災害復興におけるソーシャル・キャピタルの役割とは何か〜地域再建とレジリエンスの構築』ミネルヴァ書房, 2015）。

私たちの研究では、おそらくそんな切り取り方にはならないよね。

中村：社会学的関心から言うと、場としてのコミュニティと関心としてのコミュニティがある。後者の方は、場がなくてもあっても、関心があればつながるので、ネット社会もそうだし、関係性ですよ。場というのは、もっと土着的なものも含むというか。

村本：コミュニティ心理学の言葉で言うと、地域コミュニティと機能的コミュニティとなる。

中村：それに近いかもしれない。言葉の話だけど。また別に、関心としてのコミュニテ

ィ、機能的コミュニティはアソシエーションという言い方もあって、契約的というか近代的というか、土着的なコミュニティをコミュニティと、あえて分けることもあります。二元的な対置という感じはしますけどね。哲学的というか、現象学的社会的に言うと、生活世界は私たちの感情とか身体とか集合的記憶とかいうものを取り込んで、かならずしも分節化されずに前言語的なものと混然一体となってそこにあるという把握も大切です。機能的コミュニティに近い概念は、システムといい、それが分化・分業しあって近代社会になっていく。

村本：現代社会はどちらかと言えば機能的コミュニティに力点が移っていったけど、災害となると、あらためて原初的というか、地域コミュニティというものにもう一度立ち返る。とくに直後。時間経過とともに、ネットなどを通じて機能的コミュニティも活性化していくのだけど。私たちが「臨地」と置いたように、地域というか、古めかしい土着のコミュニティの話に戻りたくなる。

中村：災害ユートピア論もそうですよね。48 時間以内のつながりで賦活させられていくものは、そういう感じがしますよね。二項対立的なものでなくていいんだけど。東北はやっぱり広がったからね。

村本：とくに東北の人たちにとって、「地」との結びつきがどんなに重要か。身体をそこに置く土地があって、土地と共に生きてきた。

中村：そうだよね。防波堤なんか作って、近

代社会の防災システムっぽく入り込んでくるときに、ものすごく批判があったものね。

村本：気仙沼の復興計画は「海とともに生きる」。熊本もそうかもしれないけど、人々が土地と結びついて生きてきた場所。

中村：新潟中越地震の時もそうかもしれない。都市型とはまた違った問題。高い防波堤だと海が見えないから、アクリル板で真ん中に穴開けたり。

村本：岩手では、アクリル板の窓をつけた防波堤がひとつあったんだけど、それは抜けたらいい。そういう意味では、コミュニティが受けた影響って、その「地」に住めなくなった。放射線被害を受けた地域や沿岸部。土地を離れざるをなくなったというのは大きな痛手だったと思う。

2. 土地の物語と言葉

鵜野：ひとつ思い出したのは、今、スコットランドで、それぞれの地方にストーリーテラー、語り部を育てるっていう活動をしている。別にプロの語り部を養成するというわけではなくて、月1回の日曜日とか定期的に子どもたちを集めてやっている。そこで重視しているのは、場所と関係する話。ここでこんなことがあったんだよとか、この石にはこんないわれがあるんだよとか、ここに河童が住んでいたとか、武将がここで討ち死にしたんだとかいった話を、その場所に行って、語って聞かせる。

そこには、子どもたちだけでなく、いろんな世代の人たちに集ってもらう。そうすると、20代、30代の人たちが最初は聞き手として、それから今度は語り手として参加していく。そうしていくと、そこに伝承ができていく。最初は都会から呼ばれた歴史家とかプロとして活躍しているストーリーテラーが話したとしても、二回目、三回目からは、その地域の人たちに主導権を手渡していく。それによって、地域独自のレジリエンスみたいなものを引き出すことができる。

震災プロジェクトに参加して考えていたのは、最初はこちらでアレンジして伝説や昔話を語っていただく場を設けて、こういう活動に関心を持っていただく。次に地元の方が主体となって語りの場を作ってもらおう。それも一年に一回ではなく、月一回とかに移行していく。そういうノウハウを地元の方と一緒に構築していけたらいいなど。

村本：そうなんだよね。そういうことになればいいなと思ってやっているけど、多賀城にしても福島にしても、参加者が多くないんだよね。その人たちがやっている集まりの方が一定の固定客が集まっているというか。外部者が関わることで、新しい結びつきが生まれたらいいなと思うけど、まだそういうふうの実現していない。

鵜野：それと、昔話や伝説よりも、方言やその土地の言葉の方がもっととつつきやすい。子どもたちにとっても、自分は使わないけど、ばあちゃんが使っている食べ物の名前なんかを教わると、自分の住んでいる土地に愛着が出てくる。そしてそれが物語につ

ながっていく。そういう方言、ダイアレクトにもっと注目してもいい。

村本：そういう意味でも、全国に散り散りになってしまった人たちは、土地とともに言葉も失ってしまっている。

鵜野：だからこそ、今は住んでないけど、生活と密着していた言葉として、それぞれの土地の言葉を大事にする必要がある。



3. 危機に瀕して覚醒するものと外からのまなざし

村本：外から仕掛けるというより、内側から生み出されていくものに注目したいなと思

うのだけど、宮城民話の会の小野和子さんたちの活動はその後、どんなふうに展開しているのかな。

鵜野：震災前と後とではずいぶん違って、市民の関心が強まったと。

村本：それはプラスの面だよね。どんな要因がその変化を引き出したのかな。

鵜野：今まで当たり前だと思っていたことが、そうじゃないんだと気づかされたことが大きい。

団：そやけど、地域社会はずっとじわじわと意識しないで、失われ続けていたということがあるじゃないですか。それが、今回みたいに被災によって大きく失われた、奪われたと思うと、覚醒するところがあるよね。

鵜野：そう、実感した。それまでもずっと失われていくものはあった。ローカリティというか、地域のつながりみたいなもの。それが震災によってあからさまに劇的に失われたことで、その大切さにいや応なく気づかされた。大事にしようという意識の覚醒が起きた。

村本：そうだねえ。一緒に丸森の民話の学校に行って、たくさん被災の話を聞いたけど、何もかも失くしたところで、自分には民話があったという原点に戻って、それを大事にしたいと思い、立ち上がっていく。生きていく力になったという物語があった。それを東北のレジリエンス、資源だとすると、外部にできることは何だったんだろう。たと

えば、関心を持って耳を傾ける、訪ねるということをしごく喜んでくれた方々がいましたね。

中村：ナラティブの力だね、関心持つ方も何か別のベクトルを持っている。

団：スポットライトって、よそからあたるから意識されるのであって、そこにいる人がそこに照準してライトあてるっていうのはやりにくいと思う。外の声とかいうのは、ある意味、そのことを目覚めさせるのに有効に働く。今回のことだけでなく、そういうことって一般的にありますやろ。歴史でもそうやな、そこにいる人はなんとも思わんけど、ちょっと離れた人、遠くの人が「それは大事なもんですよ」という、そういうことがあることやと思う。

中村：小野さんは、聞く立場で民話の採取を始められた。外からのまなざし。小野さんに重ねてさらに思い出したんだけど、鶴見俊輔さんが熊本時代に絵本の会をやっていた時の話があって、私、感銘を受けたんだけど、女性の方が嫁いでいく。で、自分を変えていく、名字を替えることが女性に多い。そのことの良し悪しは別として、自分を変えていかなければならない。そこで培われていく力強さがあって、それは、生まれた町と、子どもの手をひいて歩いた町、つまり子育てした町、自分が死んでいく町を転々としながら、自分の身をメタモルフォーゼさせていく、男のレジリエンスと違う。いじめがあったり、差別があったりしても、子どもの手を引いて歩くことによって愛着がわいていく。嫁いびりも含めて。絵本の会でそう

いうことを女性たちが語り始めて、女性たちの力を鶴見俊輔さんが感じたっていう本を書いていらっしゃった。外から入ったのかな、だから我々にもよく伝わるようなものに（鶴見俊輔『神話的時間』熊本子どもの本研究会、1995年）。

4. 子育てした町で紡がれてい

＜物語＞

村本：そう言えば、飯館村で聞いたんだけど、女性たちは「ここに戻るのは無理」ときっぱりあきらめたのに、男性たちが未練たらたであきらめきれない。土地に根差す力について話題が出たけど、それを奪われても、女性の方が新しくまた根差していけるってことなんだよね。

団：そやけど、その時に、生活の糧をどのように確保するかということを、思い込みも含めて考えたときに、女の方は強いなと思うんだけど、男の方は何にもないところで一から自分で始めることって少ないと思うんやな。転勤族だって、行った所で迎えてくれる人がある。それがあるのとないのと大きく違う。飯館村から出て新しいところで始めるっていうのは、難しいと思う。単身赴任がこんだけおるけれども、単身赴任先で花開かせてるのではなくて、男はまた戻ってきたいと思っている。そういうのはおもしろいなと聞いてて今、思った。

中村：私は娘連れて、単身赴任したんです。

サンフランシスコ。そして子育てしたところは京都の御室（おむろ）。子育てした町っていうのは独特の愛着がある。

村本：子育てした町ってどういう意味を持つのかな？

中村：子ども目線。

団：速度が違うでしょ。

中村：速度も違うし、高さも違う。子どもの手をひいて歩くと時間かかるからね。いろんなものに眼が留まるの。

村本：そういう意味では、東北で生まれ育った人と、嫁いでとか、仕事とかで大人になってから東北に行った人とで何か違いがあるのかな。

鵜野：おもしろいなと思っているのは、小学校の元先生が語り部になっていることが多い。地元で生まれ育って、そこの話という方もあるけど、外から入って話を聞いて、それでおもしろいなあっていうので、最初は聞き手で、退職と同時にトレーニングを受けて、語り手になっていく。ほぼ全員女性だけど。それは東北だけじゃなくて、一昨日も日本昔話学会で秋田と喜界島と栃木出身の人に民話の語りをしていただいたんだけど、三人とも先生だった。

団：それな、教え子がおるということが関係あると思うわ。自分の行動や行為へのフィードバックだけでなく、自分の行為の目の前に、そこで生まれたり育ったりしている

人があるというのは、どんな物語であるかは別にして、それぞれに物語があって、それを束ねているのが学校だから、そのことがこの人の中にもたらしめていることは大きいと思う。この前もちょっと書いたんだけど、退職した地域の公務員や教員がその後、どんなふうに関わるのかなと思ったときに、今の話はなるほどなと。

鵜野：教え子の親とかおばあちゃんとか、コミュニティの人とかとのつきあいがあるんですよ。聞き手としていろんな相談の窓口として何十年も話を聞いてきて、そのなかに世間話もあれば昔話もあるっていうのか。それを今度は地域の人に返していきたいというのかな。

村本：やっぱりつなげていきたいと思うんだよね。歴史とともにある時間軸をつなげていくことで、そこに自分も含みこまれていくというか。もらった感じ、受け取った感じがあるんだよね、きっと。でも、それって女性の発想じゃない？男たちはどうなの？

団：基本的にサラリーマンやってたら、自分の家に寝に帰るっていう感じがやから。

5. 共同体によって生み出される文化と歴史

鵜野：セカンドライフとしては、文化財や自然の保護活動とかのボランティアやったりしている男性が多い。女の人は昔話が好き

で、男の人は伝説が好きだと言われている。

村本：伝説？

鵜野：男の人は、実際にあったとされる話が好きなの。昔話は、昔々あるところに、という架空の話なんですよ。それに対して伝説は、昔、明智光秀がここで殺されたとか。

中村：歴史愛好家になっていく。

村本：ふ〜ん。やっぱり人類が達成してきたことに誇りを持ってるんだよね。故郷をあきらめきれない話みたいに、土地や家、先祖が守ってきたものを捨てられない。沿岸部の漁師たちがふんばっている話をたくさん聞いたけど、仕事を通じてつながった話だった。

団：そやけど、漁師なんかは、一人で海に出て自分の腕ひとつという仕事の仕方してるやろ。

村本：長い時間経過のなかで、さまざまな協働の知恵が文化として成立していることがあるらしい。漁村には、「水揚げは個人のもの」という平時の論理と、「水揚げはみんなのもの」という災禍の論理が共存することで、その土地で暮らすことを可能にしてきた。金菱さんは、「内なるショック・ドクトリン」を活性化させることで、新自由主義の台頭という外からのショック・ドクトリンを未然に防いでいる漁村の例を4つ紹介している（金菱清『震災メメントモリ〜第二の津波に抗して』新曜社）。

中村：私の父方の家系は網元なんですよ。伊勢志摩鳥羽の。浜辺は農地改革されなかった。漁場は農地じゃないってことで。それで古いタイプの共同体が残っていて、網元はその浜を支配するから、責任を持って、誰かが海で亡くなると、残された家族の面倒を見る。良し悪しなんだけど。支配する・されるという関係があって。

そういう男たちと、あと海女さんというのがいて、海女さんは海女さんでまた力を持っていて、網元も口出しできないような組織があるんですよ。

村本：水俣でもそんな話聞いた。網元を中心とした共同体。そういう共同体が残っていたところでは、それを手掛かりに前に進めたっていうのがあったのかな。民話の会の話は、外からの関心が引き出したということだったけど。

鵜野：みやぎ民話の会の場合は、震災後20代、30代が関心を向けてくれた。メディアテークとかがつなぎ役になって。

中村：きれいな映画でしたね、三部作。だから、それは、関心としてのコミュニティとして存在感をもっていました。そしてなんといっても場としてのコミュニティが生き活きとしています。場と関心は重なり合うんですよ。震災をいくつか社会が体験してきた（東北記録映画三部作濱口竜介監督『なみのおと』『なみのこえ』『うたうひと』）。

アイルランドのダブリンのから2時間程のところに、タラの丘というのがあって、記念碑があるんです。そこに古本屋があって、書物がたくさん乱雑につまれた小屋のなか

で読書会を開いている。その店主である小説家がありました。アイルランドの古い基層にある土着の文化とキリスト教との出会いの葛藤が文化を産んでいる様子でした。



タラの丘（中村提供）



小説家が営むテリング・キャビン（中村提供）

6. 多声的な物語と記憶の継承

村本：どんな形で成果を表現していけばいいのかな。

中村：いろいろなコンテンツを並べたら、それぞれに関心を持ってもらえると思う。レジリエンスというのをあえて日本語で言ってみるとか。水俣の「もやい」「もやいなお

し」みたいな。

ハンセン病のことをやってる院生がいて、あちこち話を聞きまわっているんだけど、裁判で得た賠償金をどう使うか。人生残り少ないし、家族とも関係切られているから。

「社会復帰」って言っても、「社会復帰」できるか。そもそも「復帰」って概念自体を再考すべきではないのかということをインタビューから感じ取っていくのです。やって欲しいことは記憶だと。忘れないで欲しいということが共通にできます。国立の記念館を作ろうとしてる。記憶が社会復帰であって、そのためにお金を使って欲しい。そうした語りをする。それを聞く人がいる。ひめゆりみたいに語り部がいればいいけど、また別のカタチでの記憶の継承が課題です。どういうふうに語ったらいいのか。聞く人をどんな具合に増やしていけばいいのか。そんな話を聞いた院生が感銘を受けて帰ってきた。

小野さんなんか、聴く力があるなって思う。外からできることっていうのは聴くこと。

村本：東北には、語り継がなければ、語り継ぎたいという強い意志を持つてる人たちがたくさんいるけど、需要と供給から言うとどうなんだろう。

鶴野：今、聴くことへの関心が強くなっているのも確かだと思う。「みやぎ民話の会」もそうだし、東京で野村敬子さんが主宰している「聴き耳の会」もそう。どちらの会も、昔話や伝説といったいわゆる民話だけではなくて、戦争体験や子育て体験なども含めた「自分史」や「一人称語り」も積極的に聴

いていこうとしている。

中村：風化させないというのはみんなの願いでしょう。行けば相互作用が出てくる。

団：あのさ、今、話題になって割合おもしろいなと思っているのが、「ファミリーヒストリー」っていう NHK の番組なのよ。これは、たとえば中村正さんという人について、ルーツを探るっていうんで、自分の親のもうひとつ上くらい、つまりおじいさんとかおばあさんまではわかっているんだけど、そのもうひとつ上になると、圧倒的多数の人がほとんど情報を持っていない。番組の調査隊が掘り返してくると、日本という国がどのくらい、侵略だけでなく、交易であったり、災害であったり、災害で村の人がそのままどっかに移動したり、江戸時代だったら人材を他の大名のところへやったりとか、移動は基本的に家族が単位で、中国も出てくるし、台湾も出てくるし、もちろん韓国も出てくるし、南洋諸島も出てくるしで、語り継ぐで言うなら、実は我々の持っている語り継がれるべき個人や家族の歴史について、ずっとフェードアウトを基本にしてきたところがあるなと思うと、それは何でやったんやろなというのと、今、そのことをやっぱり語り継ぐべきじゃないかというのは何でやろなと。

水に流す、なかったことにして次にという日本的意識は、やはり辛く苦しいことも多かった人々の知恵なのではなかったのかな。

何年か前にイギリスの公文書館に行ったら、たくさんの人たちがルーツ探しをしていて、ブームなんですって言ってたやん。あ

ういうことって、被災問題に関わってというより、我々の社会の時代とかがそういうことに向かわせるのは何なんやろなって最近思ってることがあって。

我々はたまたまこういうことやってるから、被災地に行って、漫画展やって、漫画展の場には、そこにいる人たちではない人たちの家族の物語があふれているわけやんか。それを見て感想を言う人はただの読者なわけやけど、あれを見て、自分のことを語りたくなる人がおるわけやんか。実際に語るわけや。そこで何が行われているんかっていうことはそう簡単に定義できへんけど、でも、そういうことを普通、人は突然語ったりはしないからさ。東北でやってるあの漫画展の場では、それによって、そこに来る人たちが自分の持ってる家族というものの歴史や記憶を言葉にするってことがちょっと促進されることがあるわけでしょ。ってことは、その人が意識しているかどうかに関わらず、そうしたくなるってことは何か目的があるよね。そうすることは、さっきから言っているように、自分の力で自分を回復させていったり、今いるところから次に向けてスタートさせるってことかなと思ったときに、そういうことを促進させることができてるってことは、やっぱり資源なのよね。それがあっちこちでちょこちょこエピソードとして見えてきてるよね。

村本：ひとつ確認しておきたいんだけど、漫画展で語られたエピソードについてデータとして使用するということの倫理的問題についてはどう整理したらいいかな？京阪でやった時は、あえてそれを統制して、インフォームドコンセントとともにエピソードを

集めたわけだけど、東北の漫画展では偶発的に語られたエピソードだから、そんなことはやっていない。もちろん、名前とか年齢とかそういった個人的なことは何ひとつ聞いてないわけなんだけど。それはエピソードとして公表してもいいものだろうか。

中村：いいんじゃないの。必要だから、それは社会に役立つんだから堂々と。NHK がね、「クローズアップ現代」とか、E テレで、ものすごくステレオタイプ化した切り口で物語化していくじゃない。物語構造が画一的で、主流の物語として、公認されてインプリンティングされてしまう。たとえばこの前、E テレが介護殺人の番組やったんだけど、あれすごく反響あったそうです。でも、決定的に足りない視点がある。それは男性介護者問題です。死亡事例の加害となっている息子や夫介護者、介護殺人の場合。そのことがオミットされていく。それで、「母さん悪かった」というお涙頂戴式の物語になっていく。構造変わっちゃうわけ。減刑理由にもなっています。これは共犯関係といいます。そうした生きている者の罪を軽くする物語となっていく危険もあります。もうひとつは、殺めたくて踏みとどまった人たちが圧倒的に多いことをきちんと把握すべきことです。つまり殺人になってない。そのことの報道が何もないところで、衝撃的な殺人という報道がある。自殺もそうだけど。そうすると、結局、介護殺人は懲役つけるけど、執行猶予ですよっていう、一種の社会の共犯関係を強めている点を見逃すことができません。福祉に向かわずに。そういうふうに、違うストーリーテリングになっていく。我々の頭も洗脳されていく。語られていないことを

きちんと見つめる力がメディアリテラシーです。沈黙という語りがある。だから、多声的にナラティブを再構築していかないとね。ポリフォニーです。小さくて個別的だし何も力は持っていないように見えるけど、日常生活的には大事な声としてあるという。こういう文脈がいいんじゃないかな。それをスピリチュアルと名付けるかどうかは別だけど、その複数の声を採取していく。

7. 復興の陰で

団：阪神淡路の時に、労働の場の喪失、破壊みたいな理解っていうか自覚っていうのはどのくらいあったの？客観的にはもちろんあるわけだけど。

村本：東北とは違うんじゃないかな。もちろん会社が壊れたり仕事がなくなったりはしてるわけだけど、漁業とか農業とか自然とか土地との結びつきとかとは違う。

中村：第一次産業だよな。

団：そうすると、ずいぶん意味の違う被災やんか。基本的な産業構造のダイレクトなダメージと、会社なんかは約束事やからな。建物がつぶれたら、別のビル借りるとか。仕事として働いている人にとってはどちらも第一義的なことなんやけど。さっき男と女の違いが出てたけど、労働の場所が被災地であるってことによって、そこに男の人が前面に出ざるを得ない状況があるのかと。

村本：逆に言うと、福島なんかでは、男の人が働かないといけないから、家族だけ避難させるということもあった。

中村：それを周辺と中心と考えれば、周辺がものすごく力を持ってるわけだよね。第一次産業だからさ、そしてそこに原発を持って行ったわけだから、そこが破壊されたっていうのは大きいよね。

村本：一方で原発労働には全国からいっぱい行ってるわけだよね。

中村：そうそう、いびつな形で。そこはまた周辺化された労働で。

団：安全を考える家族は子どもを連れて避難しているわけだよね。被災は被災だけど、それを家族がどう意味づけて、次の一步を作るかっていうと、それは個別というのか。

村本：福島の優秀な若手フリー・ジャーナリスト藍原寛子さんが自主避難のことで論文を書かれた。また、立命館にお招きして話を聞けたらと思っているんだけど、難民の話。インタビューできた人の特徴ともいえるだろうけど、そうやって全国にバラバラになってしまったけど、それぞれが何らかの社会活動につながって行って、新しい公共圏が生まれているという。面白かったのは、戊辰戦争でサンフランシスコに避難した人たちがいたらしい。さっきの団さんの話じゃないけど、長く葬り去られていたけれど、ある時に日本名の書かれた墓石が見つかって何だろうと掘り起こして行って明らかになったとか。

団：ものすごくおおざっぱなことを言うけど、自然に置いておけば消えていくようなものを、何か大きな力で揺さぶって復活させたりするとか、そういうメカニズムなんじゃないのか。

中村：原発は新しいことだからね。

団：原発って扱いに困るよな。誰にもどうにもできてへんや。片づけてもいないし、福井も古なったのまた動かしたりしてるやんか。函館が揺れてたな。ちょうど大間の向かい側やんか。

村本：漫画展が呼び起こすものもあるけど、それだけじゃなくて、支援にいつてるっていう名目で作る文脈もあるよね。ただ単に来たというだけじゃなくて。一年目はあふれ出る話っていうか、外から来て、関係性がないからあふれ出るように話すということが起こった。タクシーでもレストランでも。時間経過とともに、関係性が深まる中で生み出される語りになっていったかな。

それから、東北でも福島でも、いろんな人が行くということ自体がレジリエンスを引き出してるって側面がある。とにかく、全国からボランティアが来てくれたということで、自分たちも頑張ろうと。みな口々に言うことのひとつ。応援されているということで引き出される力がある。一方で、自衛隊の株が上がったという側面もあるんだけど。

中村：他方、安保法案で自衛隊が世界でもものすごく実地練習してるよね。同時に進行してる。

村本：鎌田慧・斉藤光政『ルポ下北核半島～原発と基地と人々』（岩波）の中に出てくるけど、トモダチ作戦は有事の動きの予行練習だった。

団：風化させないというのがベースでしょ。

中村：いろんな人が行くのがいいんだろね。院生たちも毎年変わって。

村本：学生が行くと喜ぶよね。人生の先輩として教えてあげるポジションになる。

団：逆に、訳知りそうな人に視察に来られるのってなんだかちょっと嫌な感じがあるんじゃない。反発とか自動的に出てきそうだよな。

中村：むつの支援者支援でも、我々がやることに院生たちが黒板書いてっていうのがセットとしてあるのがいいんだよね。

鵜野：さっき紹介した仙台のメディアテークでやっている「てつがくカフェ」の面白いところは、いろいろな発言をボードに板書する役の若いスタッフがいること。この板書がイラスト入りで実に分かりやすい。小難しい「哲学」を、柔らかい、ひらがなの「てつがく」に変えてくれる。うちでもこういうのを取り入れるといい。

村本：あと多声的なものとしてどんなものがあるかな。物語、漫画展、院生の存在。周辺にあるエピソードをもう少し聞き集めたらいいのかな。民話の会の人たちとか、頑張

ってる NPO とか。

団：亘理町の保育園に花火大会をし続けている人がいて、BS で紹介されてたけどな。

村本：外から行った人たちより、そのことが中の人たちにどんな影響を与えたのかみたいなことが知りたいな。中で芽生えつつあるものを外からどんなふうに支えられたのか。そういう意味では、民話の会の話では、メディアテークの映像化がそれを支えたんだよね。

鵜野：民話の会の活動でもうひとつ特筆すべきなのは、2～3年に1回開いている「民話の学校」。宮城県内のある会場に、全国から大勢の人が集まってくる。そして昼間は宮城の民話を聴くんだけど、夜はそれぞれ自分の知っている民話を語ったりわらべうたを歌ったりする。語り手と聴き手に分かれてしまうのではなくて、語りの場を共有する。この間イギリスでインタビューしたスコティッシュ・ストーリーテリング・センターの所長さんが、「ナチュラル・シェアリング」、語りを自然な形で共有することの大切さを話しておられたけど、「民話の学校」にはこれがある。そういう、シェアリングというところから対話が生まれ、新たな絆やつながりが育っていくんじゃないか。

団：東北大学の長谷川啓三が地元やから、結構いろんなことやってるな。川柳とかペットとか。細かいことは知らんけど。

村本：コミュニティが破壊されただけでなく、揺れたことで生まれた波動がつないで

いくわけだよね。阪大の渥美さんがボランティア論で最近、出版したけど（渥美公秀『災害ボランティア』東京大学出版）、災害ボランティアによってつながれていく人間関係がある。私たちもそうだよね。これをきっかけに出会った大事な関係がある。

中村：やっぱり「レジリエンス」って言葉を日本語にしていけることが必要だね。その「てつがく」みたいに。

村本：今のところ日本語としてあるのは、しなやかな力、逆境を跳ね飛ばす力、回復力、復元力。

団：割合に表通りに行く言葉ばかりがよく出てくるからあえて聞いてみるけど、たとえばさ、ずる賢さとか、たくらみとかさ、戦略的なことで、被災地で活性化したことってないのかな。

村本：復興風俗嬢だったっけ。本出たよね（小野一光『復興風俗嬢』太田出版）。読んだよ。それは本当にしたたかさっていうのか。被災直後からすごく流行っていたらしい。そこに人間的な出会いが描かれていて。

中村：欲望産業に眼をつければそうなる。復興産業に手を出す。でもハイエナみたいにたかってという面もある。肯定するかどうか別にして、日本社会の縮図のようにして復興もかたどられていくのでしょうか。復興過程の災害っていう本がある。阪神淡路と東北について。一部の権力者たちだけが利益を得ていく（塩崎賢明、『復興〈災害〉—阪神・淡路大震災と東日本大震災』岩波新書、

2014年）。

村本：防潮堤とか復興道路なんていうのも、そういう面があるかもしれない。便利になる一方で失うものがある。遠野は一年目私たちがプロジェクトをやったけど、沿岸部のどの町にも遠野を通って行かなければならなかったために、歴史的に遠野が後方支援する伝統があった。でもバイパスができて、遠野を通らなくても行けるようになったことが未来に何をもたらすのかとか。

8. 共同体感覚と時間の蓄積

団：コミュニティなんていうのも具体的な形をもたないもんやんか。形を持たないものが失われたり壊されたりした時に、それを復旧するっていうには、そこにどんなものがあればいいのかな。形あるものが復活、復旧するには、コストやなんかもわかりやすいやんか。ある種、加速度つくよな。防潮堤やらなんやらにしても。そやけど、機能としてあったものを回復、復元するっていうときに、何が大事で、何が気遣われていなかったりするんやろ。

村本：少し話が変わるけど、コミュニティってことで言えば、昔から京都文教の集中講義でずっとグループワークやりながら、コミュニティを考えることをやってる。そうすると、最初は、コミュニティって言葉を知らなかった、自分はコミュニティなんて関係ないと言っていた学生たちが、仲間たちと一緒に活動するなかで、意識してなかつ

たけど実は自分にもコミュニティがあったんだと目覚めていく。そんななかで、コミュニティの一員として貢献したいという気持ちが生まれていくんだよね。それは感動的でもあるんだけど、昔の人たちは強くコミュニティ感覚を持っていた。復元というより、意識していくプロセスというか。

団：それで言ったら、昔、まさにそういう世代間のギャップを考えさせられることに直面したことがある。私の住んでた地域に公民館を建てるという話が出てきて、建設費がいくらかかるって分かるから、負担額について住民みんなで民主的に話し合いをした。そして、賃貸の人と持ち家の人とは差をつけて、一世帯いくらずつ分担しましょうと、延々と議論を続けたのよ。そして結論が出たところで蓋を開けてみたら、昔の庄屋さんの〇〇さんが、「ほなワシは100万円出すわ」という話しになって、そしたら、△△さんも、「なら私も100万」って。結局、賃貸住まいの私たちは最初1万円って話にまとまっていたのだけれど、千円でいいっていうことになった。

その時に、地域住民が皆で話し合いをしたけど、ずっと農業をやってきた、ここを自分たちの土地だと思っている地域の人には、面白いことが起こるんやなと思った。そして実際、あれから30年以上経って、あの地域に、当時賃貸住まいだった人が引き続き住んでいるのは希。100万円出した人達の家や畑や、家族は今もいる。地域ということ、余り今の人だけのネットワークに限ってしまうと、10年もたないものになる。

それと同じことが、今、自分の住んでる新興住宅で起こったときに、まったく別の話

になる。同じように集会所の新築問題では、全戸平等負担で実行したのだけれど、昔ながらの氏神さん(神社)の屋根の葺き替え寄付金を町内会で出すって提案に、そんな宗教的活動に、なんで均等に町内会で金を出すのか！ってめめる。有志でやればよいと意見が出る。昔から・・・でやってきたことが、民主主義の議論で否決された。その結果、うちの町内には今、おみこしが巡回してこない。氏子の町内ではないということ。だからうちの町内の子どもたちは、お祭りって言っても御輿がかつげないし、御輿は隣の町内でUターンしてしまう。もともと、最近では、担ぎ手の絶対不足で、軽トラックの荷台に積んで回ったりしているけど。

鵜野：この間、イランの民俗学を研究している大阪大学の30代の先生が話していたことだけど、イランでは1970年代のイスラム革命によって、伝統的な祭りや年中行事がことごとく廃止されて、もう残っていない。それに引き替え日本では、都会でも田舎でも祭りは今も盛んだ。こんなに祭りの好きな国は珍しいんじゃないかと。

先日、奥三河の「花祭」を紹介するテレビ番組をやってたけど、都会から移り住んできた若い親子や和太鼓集団の人たちが、地元在住のお年寄りに技能を仕込まれて頑張っていた。これと同じようなことは東北の被災地でも起こっていると思う。

村本：お祭りっていうのは、地域の力を凝集させる力だよね。気仙沼かどこかで獅子舞が50年くらい前いったん廃れかけたんだけど、これではいけないと頑張る人たちがいて、女はダメとか子どもは入れないとい

うものだったのを、みんな入れて保存会を作った。その時の子どもたちが、今回、何とかつなごうと、みんなで移った仮設で手作りの獅子を作って祭りをしたんだって。違うところに避難した人のところにも呼ばれて行ったり。

そういう意味では、東北で訪れる町のことを院生が事前に調べるでしょ。そうすると市町村合併があって、文化圏の違うものが同じまとまりで括られる。うちの田舎でも、この前、帰ったら、これまで聞いたこともなかった祭りが地元の祭りとして宣伝されてて、へえ知らなかったなあって驚いた。それと、ほら、昔の藩が生きてるなと思った。戊辰戦争の影響が語られたりって。

団：それはさっき言ってたような歴史好きのおっさんなんじゃないんか。

村本：それでも文化というのか、受け継がれて人々が共有している風土ってあるんじゃないの。私の田舎だったら、薩摩なんだけどさ、小学校でも中学校でも、先生たちからいつも「泣こかい、跳ばかい、泣こよか、ひっ跳べ」って教育されてきて、染みついていたものがある。男女関係なく。目の前に大きな水たまりがあって道をふさいでいたら、泣いてないで勇気をもって跳べっていう意味で、そうやって子どもの頃から叩き込まれてるからさ。関ヶ原の合戦で敵に背を向けないで敵陣を突き抜けた勇気をたたえる祭りがあったり。

私の友人が遠く離れたところで私と同じ郷里の人と出会って、私から聞いたこの話を話題にしたところ、相手がものすごく喜んで盛り上がったって。直接会ったことが

なくても、ちょっと共同体を感じるよ。

団：いつも跳んでるわ。

村本：ずっとひとつのところに暮らしている人と、転々としてきた人とでも違うよね。

団：自分の選択で飛び出した人と、せざるを得ない状況のなかで出た人とでも違うでしょ。状況によって出ざるを得なかった人っていうのは、その場所への思いが強いんじゃない。

村本：たしかに、自主避難の人たちの福島アイデンティティは強い。故郷は遠くにありて思うもの。離れることで美化される側面もあるしね。

9. 記憶の継承と社会

中村：あと何年あるんだっけ。6年目だからあと5年か。長いよね。

村本：そう、それでも、まだ継続のための苦労があるんだよな。

団：外から行く人間が意識的に風化させない、イベントに終わらせないという戒めをも持って十年と言っているのとは別に、それぞれの被災地にも温度差や状況差があって、時間経過とともでも違いがあって、それぞれの地域の時間経過のなかで変わっていくものがあるからさ、現地のモチベーショ

ンが変化したり、そろそろ気分展開したいという気持ちもあるよね。漫画展はモノやから、大きく変わるわけじゃないけど、形として見えないものとしてやっていることに、今を反映してしまおうという意見も出てくることもある。

村本：十年もやっていれば、社会変化は当然あるよね。

団：危機感が回復を促すって側面あるから、今回の震災で危機感を煽られて復活したのもあるのかってという視点もあるんか。

村本：復活かどうかかわからないけど、南三陸のホテル観洋、一年目、ただでさえ過疎化していたところに被災で、本当に町がなくなってしまうっていう危機感から必死に努力していた。老体に鞭打って、お客に来てもらおうと、語り部になって、今も毎日語り部バスが出ている。

中村：そういうナラティブを追加的に集めてみたらいいじゃない。我々の証人になるということに応答するようなナラティブを調査してみるとか。

鵜野：去年、宮古からの帰りに寄った大槌町の「風の電話」、今年2月にNHKが特番で取り上げて、6月のはじめにもその拡大版をBSでやっていた。その中で紹介されていたのは、「風の電話」にやってくるのは確か6割から7割が男性だと。そして訪問者の多くが、一度だけでなく何度もやってくるという。

返事がないことは分かっているけど、電話

ボックスの中に入って、ダイヤルを回して受話器を耳に当てながら、亡き人に向けて語りかける。そこには「人はなぜ語るのか、ナラティブとは何か」という根源的な問いに対する答えのヒントが隠されているような気がする。

村本：田老の語り部の話も面白かったよね。去年出会った女の人。義父が津波の話を繰り返すのを、いつもまたかと思いながら聞いていたのを、義父なき今は、語り伝えなければと180度転換して頑張っている。

中村：大川小学校の傾いた慰霊碑とか。形としてどう残すかっていうのも語り部とともにおもしろいよね。

団：それで言えば、残したくないって強く主張する人がおるやないか、あれってなんでなんやろ。気仙沼の陸に上がったあの船。

中村：ダブリンなんて、それこそ、大飢饉の記憶を残そうとする。形がないから、再現するのよ。街中にいっぱいモニュメントがあって、死んでいく姿とか、物乞いしてる姿とか、あちこちに彫像で残ってるのよ。それはなんだろうね。

村本：でも、何を残すかはきっとポリティカルだよ。

団：ポリティカルということは普遍的なことではなくて、その時の為政者というか権力者の話やんか。それとは別に、何党が勝とうが負けようが、その土地にずっと生きる人の欲望としてさ、残したいっていうのが

ないのかな。たとえば、あの陸に打ち上げられた船、あれは、被災の結果やけど、観光資源としたって、あんだけインパクトあるものないよな。絶対あの前で写真撮りたくなるよね。すごいな、自然の力って。あれ、買い取って、残しておきたいって発想にならへんのかな。

村本：そんな議論もいろいろあったけど、それに勝る反対があったわけだよね。見たくない、思い出したくないっていう。

中村：記憶にかかわるダークツーリズムと、このプロジェクトの証人になるということの関係でも論点はいっぱいある。たとえば水俣等の公害の歴史の記憶と現在の町の再生のバランスのこと。水俣を象徴化して記憶したり、社会運動的に扱うこともあり、地元ではしかし再生した面もあり、画一的な語りだけでみないで欲しいという地元の人もある。ダークツーリズムという呼称も含めて議論していければいいかな。地元のレジリエンスに無関心でないほうがいいと思う。

村本：福島第一原発観光地化計画っていうのもあったよね。

中村：それもダークツーリズムの話だけど、負のイメージだけで語られると地元の人には辛いよね。

団：それに比べると、あの船は罪がない。結構でかいし、ちゃんと船の形してたし。あれを見て、ストックホルムのヴァーサ号博物館を思い出した。まだ帆船の時代(1628年)

にものすごく豪華なフル装備の戦艦を作って、処女航海で沈んだ。豪華にしすぎて浮力不足だったのだったかな。沈んだところが北極海の深いところだったから、腐食しなかったのよ。それをずいぶん経ってから(1961年)、見つけたのよ。

当時の人は、国王がやったことだからかん口令引いて誰も話さなかった。それでみんな忘れてたんやったかなあ。300年以上経ってから見つけて、引き上げて、船をそのまますっぽり収容できる博物館を作った。そやからその博物館は、7階建て、地下二階のフロアにして、どこからでも船体を見れる。気仙沼の地上であの船を見た時、それを思い出した。すごいなって、だからもったいないなあと思う。

村本：何を残し、何を語るか、それはどこかでトップダウンにコントロールされていく側面もある。コミュニティの物語と記憶がボトムアップに紡がれていくプロセスにコミュニティの外側から緩やかに連なっていく、そんなことがポイントになるのかもしれないね。結論出ませんが、今日はこのあたりで。



周辺からの記憶 13

～2013 年度福島・シンポジウム～

村本邦子（立命館大学）

2016 年 10 月 21 日、東京で全国婦人相談員連絡協議会があり、「熊本地震と婦人相談の記録～相談員へのヒアリングから」の報告をした。被災状況によって状況は違うが、全般的傾向として、震災直後は相談数が一時的に減り、1 ヶ月後から急増、とくに離婚相談と DV 相談、アルコール・ギャンブル依存が増えたようだ。被災による経済的困窮や住居問題も多く、今後も増えるだろうと予測されている。子どもへの影響も大きく、精神不調や不登校などの問題が増えている。失業や生活困窮によるストレスの予先が相談員に向かうこともあった。他方、地震による避難をきっかけに問題の解決へ一歩踏み出すケースがあったり、被災による仕事の変化によって新たな連携が生まれたりなど肯定的変化も報告された。災害時だからこそ行うべき特別な支援アプローチがある。日常からの備えが重要であり、災害時の相談マニュアルと体制作りが必要だということで、全国婦人相談員連絡協議会では、それにこれから取り組むそうだ。11 月 14 日現在、熊本では、震度 4 以上の地震が 140 回も続いている。「今後に備え、知見を蓄積していきましょう」と報告をした直後、鳥取地震の速報が飛び込んできた。

11 月の岩手でのプロジェクトでは、台風 10 号の爪痕をあちこちに見ることになった。水に浸かったのは大震災の時と同じで、フラッシュバックする人がいたり、「ようやくここまで立ち上がってやってきたのに、また降り出しに戻るのか」と、大震災の時より精神的ダメージが大きいとおっしゃる方もあった。そして、今度はまた福島で地震だ。いったいいつになったら安心できるのだろう。

12 月には福島に行く。今年は、「クリスマスカレンダーを作ろう」のプログラムの事前申し込みがあつという間に 80 人を超え、満員御礼となった。来年の全国婦人相談員連絡協議会は福島だが、時期大会長は、福島での 2011 年のこのプログラムに子連れで参加してくれていたのだと言う。何というご縁だろう。まさに、禍福は糾える縄のごとしだ。



3 年目福島

<福島入り>

2013 年年 12 月 1 日から、福島市市民活動支援センター「チェンバおおまち」にて 1 週間の漫画展、そして、12 月 7・8 日の週末を使って、支援者支援セミナー、みんなで楽しく劇遊び、クリスマスカレンダーをつくろう、風船で遊ぼう、団士郎の漫画トークを実施する。毎年、同じ流れである。

金曜に福島入りし、夕方、ロビー集合。教職員 6 人、院生 3 名、修了生 2 名の総勢 11 名。チェンバおおまちへ行って、皆で会場設営とプログラムの準備をし、中華料理屋に行き、珈琲専門店へ行く、これも例年の流れ。福島駅前には、クリスマスの点灯式イベントをやっていたが、閑散としていて何だか寂しい夜だった。

土曜の朝、会場へ向かうと、駐車場に「除染中」の看板がかかっており、除染作業をしていた。どんなふうに除染がなされるのだろうと見てみたが、アスファルトの表面を機械で水洗いし、小さな芝生の草むしりをしているだけである。こんな原始的な作業で本当に除染できるのだろうか。地元の人たちに聞くと、家の瓦なども手作業でふき取っているそうだ。機械だと放射能が舞い上がって空中に拡散するが、手でやると確かに線量は下がるという。それにしても、手で放射線をふき取って大丈夫なのだろうか。除染作業員と話したメンバーによれば、水圧で放射線を浮かして吸い取り、安全なアルミでくるんで土に戻しているという。「放射能の体への影響は 30 年後くらいに出るそうだが、60 代の自分には関係ないが、20 代

の若者も働いている」と言っていたそうだ。何ともやりきれない。



<支援者支援セミナー>

支援者支援セミナーは 9 人のグループだったが、子育てや介護など、家族が日常的に抱える問題が話題になった。震災や放射線による負荷の下で、たとえば、認知症の進行が早くなったり、癌の発見や治療が遅れたり、本来は日常の問題だったものが大変になっているようだった。先の見通しが持てないなかで家族は揺れており、自主避難

をしたが、結局は離婚になったりする。離婚は日常にもあるが、震災の影響で増えている。家族同士でも言葉にしない、できないつらさがある。そこをどう支えていけるかと、支援者たちも悩んでいた。

仮設住宅では、最初は賠償問題がメインだったが、今ではご近所問題。出ていく人もいれば、取り残されていく人の気持ちもある。避難してきたひとつの家族のなかでも、街の生活にすっかり慣れて戻りたくないという子ども世代と、早く元の家に戻りたい祖父母世代。街に馴染めず不登校になる子どももいる。大人も同じで、街中で孤立する人もいれば、しがらみから解放されてのびのびしている人もいる。

「おかげで子どもが楽しめる企画がたくさんある。子どもには経過を話している。子どももそれをよく理解し、感謝して生き生きとしている」「失ったからこそ大切さに気づくことがある」という声とともに、「私たちは、いつまで支援されなければならないの？これまで支援する側だったのに」「支援される側になるとはどういうことなのか。話さなければならないが、誰を信頼して、どこまで話せばいいのか」という声もあった。誰からとなく、前提を共有していない人たちにイチから説明しなければならないことのストレスが話された。先の見えないなかで、支援者たちも揺れていた。

確かにその通りだ。毎年、福島に来ると、テレビや新聞にたくさんの情報が出ているが、関西にいと、ほとんど福島の情報が入らない。事前に皆で勉強してから現地入るものの、やはり現地に来て教えてもらわなければわからないことがたくさんある。それでは支援されているのか、教えている

のかわからないという気分にもなるだろう。このプロジェクトには、「支援」という言葉を使いたくなくて、「応援」プロジェクトと名づけたが、「支援者支援」という言葉は、対人援助学のひとつのキーワードとして以前から使っていたので、違和感なく使っていた。福島の閉塞感や苛立ちをひしひしと感じるとともに、今後のあり方を考える必要があると思った。



<クリスマスカレンダーを作ろう>

カレンダーづくりには、9人の子どもと6人のお母さんが来てくれた。「材料をたくさん用意しましたので、よろしければ一緒にどうぞ」「子どもさんにはスタッフがきますので大丈夫ですよ」と言うと、お母さんたちも楽しそうに参加してくれた。子どもより数の多い大人たちが、片時も目を離さず、子どもたちを守るように囲むなかで、カレンダーづくりが行われた初年度の光景を思い出しながら、お母さんたちもほんの少し気を緩めて自分のことができるようになったのだと思った。日常の子育て支援の場のようなだった。子どもも大人も、それぞれに工夫を凝らした素敵なカレンダーを作り上げ、互いに褒め合った後、修了生のアイディアで、その場で写真を撮ってプレゼントした。

実は、子どもたちの5人は、昨年も参加してくれていて、「今年はいつかな？いつかな？」と楽しみにして、チラシを待っていていたということだった。1年経って、みんな少しずつ成長していた。昨年、相談にのったお母さんにも、その後の経過を聴くことができた。継続するからこそ喜びだ。



＜交流会で＞

夜はビーンズ福島との交流会で、福島の話聞かせて頂いた。3月まで保育士をされていたスタッフの話では、原発事故以後、

保育を再開させるまで、自分たちでしなければならなかったことがたくさんあって、本当に大変だったそうだ。園庭や建物の外側の除染は公的に行われたが、遊具や玄関については、自分たちですべて削らねばならなかった。エアコンも外気が入るタイプのものは使えないので、すべて入れ替えた。園庭の木も、枝分かれしたところは線量が高いので、線量が下がらない木は伐採した。先生方は、放射線についての知識を得るために、保育の合間に交代で研修に出かけたそうだ。今でも、毎日の放射線はもちろん、給食に使う材料も線量を測って保護者に知らせ、窓の近くは線量が高いので、子どもが近づかないように気をつけるなど、多くの配慮をしながら保育をしている。

保護者にもいろいろな考えがあり、父親と母親とで放射線に対する意見が違う家庭もある。学校の給食についても、以前はご飯を持ってきて下さいと言っていた学校でも、最近はお飯を持参するか給食を食べるかを親の判断にゆだねたり、自宅からご飯を持ってくることを禁止したりしているところもある。プールも学校の管理職判断に任せられており、実施するところ、しないところがある。実施する場合には、今度は親の判断によって、子どもを入れるか入れないか決めなければならない。心配で学校に相談したことがわかると、噂話の対象になったり、親の考えでご飯を持参した子どもが、給食を食べている子どもたちから変な目で見られたりすることもあるという。

ビーンズ福島では、自主避難者を対象に、「ママカフェ」を行っている。東京でのママカフェは人数が少なかった。東京に転居した人たちが、福島のことを忘れない、福島出

身だということを内緒にしているなどの要因が考えられたという。活動をしていくなかで、少しずつニーズも変わってきて、母子のケアだけでなく、父たちが思いを語り合える「パパカフェ」も始めた。長期に渡り、週末に母子の元に通うしんどさ、母が避難先で定着してしまい（仕事を始めてしまうなど）、「もう妻と子どもは戻ってこないのではないか」と不安になってしまうこと、母子からの疎外感など。男性スタッフが入り、木曜の晩に行っている（金曜の晩から母子の元に行く父親が多い）。

家の庭でとれた柿を祖父は孫に食べさせたいが、食べさせたくない親と、間にはさまれる孫。同じ家族の食卓で、県内産のものを食べる父と、食べない母子。聞けば聞くほど悲しい気持ちになったが、それは紛れもない福島の今だ。



＜反省会＞

日曜は10時半から12時まで、漫画トークと風船で遊ぼうのプログラム。子どもは風船プログラムへ、親はトークへという家族もあった。皆で片づけをして来年に向けた反省会をする。ビーンズ福島の中鉢さんから、「盛りだくさんで、こちらの意図が福島の人に届かないのではないか。支援者たちは支援されるより、むしろ状況を伝えたいと思っている。福島を支援するというより、福島のことを学び、一緒に考えて欲しい

い。院生たちは一日早く来て、支援機関を事前に見学してはどうか」との提案がある。支援者支援セミナーで聞いた声と合わせて、来年はそんなふうにしようと思う。

＜福島街角で＞

プログラムを終え、福島駅に向かうと、クリスマスのイルミネーションの光景とは打って変わって、駅前通りが封鎖され、電気自動車のモーターショーが繰り広げられていた。たくさんの人だかりで、派手な格好をしたキャンペーンガールたちがにこやかに人々を誘い、どこか昔描かれていた未来都市に似た雰囲気が漂っていた。

さらに行くと、駅前で、黒ずくめの服を着た若い男が拡声器を手に、声をあげて演説していた。「誰も戦争に行きたい人はいない。それでも行かなければならないのだ。大東亜戦争においても、アメリカや中国や韓国がずるいことをするから・・・」何を主張しているのだろうかと耳を傾けてみたが、どう聞いても奇妙な論理だった。後には、サンタのドレスを着たきれいな若い女が大きな日の丸を持って立っていた。男の演説が終わると、女も「私たちのおじいちゃん、おばあちゃんの苦勞を思ってください。それで今の日本があります」と演説を始めた。道行く人々は、怪訝そうな顔つきで眺めては通り去っていたが、モーターショーと街宣の組み合わせが何ともシュールに感じられた。

帰ってから検索してみると、この日は12月8日で、1941年、日本が真珠湾攻撃をして、アメリカとイギリスに宣戦布告をした日だった。街宣の若者たちは、朝、靖国神社を参拝してきたらしい。この日は、他にも、1953年、アイゼンハワー米大統領が国連総

会で原子力の平和利用を提言した日、ジョン・レノンが射殺された日、1995年、福井県の高速増殖炉「もんじゅ」でナトリウム漏洩事故発生した日だったことを知る。暗澹たる気分になった。街宣の若者たちの気持ち少しわかったような気がした。

2014年シンポジウム

＜サービスラーニングの観点から3年を振り返る＞

毎年、1年のまとめとしてシンポジウムを企画しているが、2014年2月18日、「災害後コミュニティのレジリエンスを引き出す支援とは？～東日本大震災から3年の支援を振り返る」というタイトルでシンポジウムを開催した。午前の部では「サービスラーニングの観点から」として、3名の院生、木下大輔さん（臨床心理領域M1）、奥野景子さん（対人援助領域M2）、清武愛流さん（対人援助領域M2）がそれぞれの体験と学びを報告し、山口洋典さん（立命館大学サービスラーニングセンター副センター長）からコメントをもらった。

山口さんは、ディビッド・コルブの体験学習の循環過程、すなわち、「積極的な挑戦（する）→確かな経験（感じる）→省察的な所見（見つめる）→抽象的な概念（考える）→積極的な挑戦（する）・・・」という循環過程に照らし合わせながら、院生たちの報告を位置づけ、本プロジェクトがどのようにサービスラーニングとして機能しているかを評してくれた。院生たちが、それぞれのスタートラインから始めて、経

験、省察、抽象化を経て、また新しいスタートラインに立っていることがよく見えたように思う。



午後の部では、「東日本大震災から3年の支援を振り返る」として、被災地で支援

活動が続けてこられたゲストを招き、それぞれの活動について紹介してもらうとともに、現地では、どの時期にどのような支援が求められてきたのか、今後のニーズはどう変化していくのかなどについて話題提供してもらった。以下、メモ風に記述していく。

＜女性支援の現場から＞

最初のゲストは八幡悦子さん（NPO法人ハーティ仙台・代表理事）で、「宮城における女性支援の視点から」というテーマで報告してもらった。八幡さんは助産師で、みやぎジョネット代表として被災地女性支援に関わっていた。ハーティ仙台は、DVや性暴力など被害女性をサポートする団体だが、震災直後、各地避難所を訪問したという。避難所には更衣室や授乳室もなく、プライバシーが保護されていないこと、避難所運営において少数派の意見が無視されることが際立っていた。民主的に意見を出せるシステムが必要だし、無料電話相談の広報が大事。確実に女性に渡り必要があるが、女性の下着配布に広報カードを同封する配り方が有効だったそう。避難所で女性対象の女性による面接調査が必要だが、面接員は直接生活支援者とは別人にすべきであるということだった。

現在、宮城県のDVや性暴力の問題は深刻化している。2012年、宮城県警へのストーカー相談は985件と過去最多。DV相談も前年比33%増で1856件。2013年1～6月のストーカーとDVの相談件数は、過去最多を更新した。ストーカーの相談は前年同期より35件多い508件。DV相談は76件増の941件。相談が増えるのはよいこと

だと思う、広報の効果が出ている、電話相談員の対応が的を射ているから警察まで届けるのだと考える。DV の殺人事件は、2011 年に 2 件、2012 年に 1 件と連続して起きてしまった。DV 相談等の活動増加に対応するため、被災地支援は代表を交替してもらい、2012 年度よりハーティ仙台は、後方支援に回った。

仙台市・宮城県と連携し、相談、啓発、研修を行ってきたが、2013 年からは、県の委託で、被災地における DV 被害者等のサポート講座を県内 7 カ所で開催している。ハーティのスタッフ 4~5 人で週に 1~2 回遠出することで、地方の相談担当者と顔が見える関係ができ、参加した当事者の劇的な展開も次々に起きているようだ。足を運べば、何かが変わることをつかんだ。

もともとDVはあった。そこに震災が影響して激化している。性暴力は、震災など関係なく、常に起きている。発覚するのは氷山の一角。弔慰金が世帯主に一括で支払われるから、離婚に際し、女性の貧困問題を起こしている。失業、一時的なお金が入る、しかし先に希望がまだ見えない、生活環境の激変で孤立・・・などの理由で、アルコール依存、買い物依存、パチンコやギャンブル依存が増加している。失業保険も切れ、弔慰金などの手持ち金も枯渇して、経済状態が悪化、DVはより深刻化している。仮設暮らしの過酷さから頑張って新築したが、収入の減少、ローンの重さに疲弊してくる。女性の雇用状況は厳しく、セクシュアル・ハラスメントが起こる。震災で家族を亡くした女性の一人暮らしや、心細い母子家庭に対して、セクシュアル・ハラスメントやストーカー事件が起きている。

ボランティア、NPO活動者による性暴力、被災者間の性暴力もある。

地方に根強い男尊女卑、家父長制の強烈な弊害。行政や福祉分野の人にも、人権教育がまだまだ浸透していないし、公的相談や支援の広報が不足している。それに対して、民間の商業主義の情報は強力である。

「ピンチをチャンスに！今後も災害をバネに、人権教育の普及を推し進めたい」と締めくくられた。『女たちが動く～東日本大震災と男女共同参画視点の支援』（みやぎの女性支援を記録する会編著 生活思想社）を参照のこと。



<子ども・若者支援の現場から>

福島での受け入れ窓口にもなってくれている中鉢博之さん(NPO 法人ビーンズふく

しま)からは、「福島における子ども・若者支援の視点から」というテーマで話題提供してもらった。中鉢さんは、2001年より福島市でフリースクールの設立に関わり、震災後は仮設住宅における子ども支援や「子どものこころのケア」事業担当として、支援者支援や専門職派遣なども行っている。

震災から3年近く経過した現在でも、14万人を超える福島県民が避難生活を余儀なくされている(2013年10月現在)。そのうち子ども(18歳未満)は、福島県内13,332人、福島県外15,816人、計29,148人であり、ふるさとを離れて仮設住宅やみなし仮設住宅で生活をせざるをえない子どもはかなりの数に上る。自主避難の多い市町村は、福島、郡山、いわき市の順で、県外避難は母子の割合が高い。震災から2年目は、もともと復興ステージの踊り場となる時期(変化があまりなく、避難生活が続くとの意味)だったが、福島の場合は、帰還の見通しの無さ、避難区域再編の遅れ、除染の遅れなどによって、2013年度も同じ状況が続いている。復興公営住宅の建設も遅れ、帰還のためのインフラ整備も進んでいないことから、来年度以降も、仮設住宅での生活はさらに長引く見込みである。

避難して仮設住宅で暮らす子どもたちは、度重なる避難生活、転校、交友関係の断絶、親の失業、同居家族の分断などの環境変化を受け、ストレスや問題行動が増えている。母親たちは、依然として高い放射線量と二重生活による経済的負担を抱え、「この生活がいつまで続くのか」「自分の選択が果たして正しかったのか」と、長期化する避難生活の中で自分の判断に自信が

持てず、自己肯定感が持てなくなっている。

支援者や親から上がってきた声をまとめると、①安心して存分に遊べる機会が少なくなったことによる子どもたちの体力低下や肥満 ②子どもたちの落ち着きの無さや言葉の荒れ ③チャイルドラインに寄せられる子どもからの電話相談で、人間関係による悩みの比率が被災地で高く、とくに福島は岩手や宮城より高い ④県外避難世帯への支援不足、自主避難者には経済的負担の問題が大きい ⑤母子(父子)のみの避難による家族の分断と別居の長期化、放射能に対する考え方の違いから家族間での軋轢が生じてきている ⑥ひとり親世帯の急増 ⑦子育て支援事業の不足 ⑧移動手段を持たない親は、子どもの遊び場や支援の場まで行けない ⑨避難生活の中での生じる大人同士の人間関係の悪化(両親の不仲、DV、近隣住民同士の諍い等)が子ども同士の関係にも影響する ⑩慣れない土地で生活再建に追われる保護者によるネグレクト ⑪親の経済的困窮による子どもへの影響 ⑫放射線への不安から子どもの行動を管理せざるを得ない状況にある保護者の負担 ⑬イベント型の支援による遊びの提供等が多く行われることにより、子どもが与えられることに馴れ、主体となって行動するという自主性が損なわれてしまう心配がある ⑭支援が入りやすい地域と入りにくい地域の格差 ⑮原発事故に伴い発生した「被災者」「被災地」に対する差別の問題がある。

ビーンズ福島では、県外避難者への支援として、避難生活へのストレスケア、母親同士の交流会、子育て支援の情報提供を目

なネットワークを現地の支援につなげるという役目を果たすことにした。後で紹介するギンガネットもそのひとつ。ユニセフやセーブザチルドレンなど多くの国際 NGO が入ってくれたが、メリット、デメリットがある。資金もあり、それぞれのノウハウで一気に活動を展開するが、避難所のなかにシートを払って、「子どものための遊びをやるから、ここには入らないでね」とか、「何だよ、時期的には早いんじゃないかな」とか正直あったりして、言い方を変えれば、頃合いを見て、地域の文化とのすり合わせをして、地域の子ども支援団体との調整や準備などもあった上で動くべきだと思う。

イーパッチが考える被災地支援とは、十年後の大人である子どもをエンパワーして、地域の復興の力をつくること。学校の空教室、仮設住宅の空き場所や公民館などを借りて、沿岸部約 20 ヶ所で、「学びの部屋」という形で居場所機能を持つ学習支援も行っている。自分たちの企画を持ちこむのではなく、ちょっと困ったなというニーズがあったら、出かけて行って、話を聞いて、その場所の支援を作るようにしている。今は、支援されるばかりでなく、自分たちも役に立ちたいという声に応え、少年野球チームが内陸部の雪かきを手伝いに行ったり、被災して再建したパン屋さんに子どもたちのパン焼き教室を提供してもらったりということも行っているということだった。

八重樫さんは当時、岩手県立大学の学生で、学生ボランティアセンターで活動していた。ちょうど 4 年生になる前の春休みだったが、被災地ボランティアに行くことは前提で、仲間たちと、いつ、どのような形で被災地に入るのがいいのかと構想を始めて、



1 週間後に被災地に行った。初期、全国の学生ボランティアセンターは、被災地支援に行きたいが、現地の状況がわからず躊躇していた。でも、被災地にはたくさんのボランティアが必要。それで、受け入れ機能が果たせたらと、最初の夏休み、千人の大学生を受け入れた。住田の公民館を借り、大学生のベースキャンプにして、寝泊まりなど生活のお世話をし、沿岸部へのボランティアバスを運行させた。以後、冬休み、春休み、夏休みと、学生の長期休暇期間の受け入れをやってきた。

最初の 1 ヶ月、釜石のボランティアセンターの窓口で、学生ボランティアたちと、全国各地から来たボランティアの受付、避難所と炊き出しボランティアのマッチングなどしていた。その頃、毎朝欠かさずボランテ

ィアに関わってくれていた子どもたちの姿があった。学校がずっと休みで、公衆トイレの掃除をやってくれていた高校野球部の子どもたちの姿。その後、姿が見えなくなっていったが、本当は、そうした姿を地域に見てもらい、お疲れさまと声掛けがあるような地域のつながりができていたらよかったなと振り返って思う。4月になると、県外の学生ボランティアたちも動き出し、ユニセフのイベントを手伝った。遊びだけでなく、子どもや親が顔を合わせ、交流する機会にもなった。

5月になると、大学が始まり、週末を利用した活動となった。生活支援が中心になり、応急仮設住宅でのコミュニティ形成支援として、サロン活動を始めた。支援物資が多く集められたなかに、おむつや子どもたちのものも多くあった。おむつが欲しいという声に、他にも必要な人がいるだろうから届けたいが、自分たちだけでは届け先がわからないという時に、子どもたちに相談したら、子どもたちが学生ボランティアの手をひいて、「あそこに赤ちゃんいるよ」「おじいちゃんいるよ」と連れて行ってくれるようになった。子どもたちはよく見ていて、よく知っている。ちょっと仕掛けで、子どもたちの力を引き出すことも体験から学んだ。

「お茶っこ」と呼ばれるサロン活動も、初めは持ち込み型で、ボランティアが「ようこそおいでください」というスタンスだったが、その場を住民の場にするということで、子どもたちの力を借りた。子どもたちがちらしを配り、声をかけてくれると、少しずつ地域の人が集まってくれる。子どもの人をつなぐ力をみきわめること大事だなと学ん

だ。子どもたちの力が発揮されることが未来を作ることになる。未来に想像力を持つこと、先を読む力を今後も活かしていきたいということだった。

＜臨床心理士としての活動を振り返る＞

次は、臨床心理士の河野暁子さんの報告だった。河野さんは昔からの私の友人で、2005年から2011年まで国境なき医師団で活動し、パレスチナ、イエメンに派遣されていた。東日本大震災時、帰国していたこともあって、直後より東北に派遣され、2011年3月から6月まで、宮城県南三陸町と岩手県宮古市田老で活動し、そのまま東北に残ることを決め、2011年10月から2012年3月まで、千葉大学こころのケアチームとして一関市で活動した。

震災発生からの1年、臨床心理士だからできたこと、臨床心理士でないとできないこと、臨床心理士に期待されたことを考えてみた。震災直後は、海外からの心理専門家が「被災地でのケアの方法を教えてください」、あるいは、カルト集団が「カウンセラーです。こころのケアを行います」と入り込んだ地域もあった。災害直後のディブリーフィングが有害だということや自殺のリスクのアセスメントなど専門知識が必要なこともあるし、被災地に一人ボランティアで入って「こころのケア」をやるわけにはいかない。少なくとも臨床心理士という資格があることで、組織に所属することができた。活動の中で、臨床心理士としての視点で関わることができたと思う。避難所で被災地、被災者を元気づけようというイベントが多かった中、無理に元気づける関わり方をせず、被災者がくつろげる場、被災者同士が語



れる場を用意した。話をしたい方には耳を傾けた。

とは言え、臨床心理士でないとできないことはないのではないかとも思う。実際、震災直後は誰でも「こころのケア」を名乗って、被災地に入っていくことができた。ていねいに傾聴することを心掛けたが、傾聴ボランティアとの違いは何だろうと思ったこともある。傾聴する際に専門知識を持っているかどうかだろうか。

臨床心理士に期待されたことは、震災関連以外の課題も手伝ってほしいということだった。2つの考え方があり、①被災地・被災者のための支援なのだから、それ以外の相談は断ってよい ②地域から信頼されるには、最初から震災関連以外の相談は受け付けませんという態度ではよくない。本来は地域の社会資源が担っていた役割なのだと思うが、「こころの専門家」が来たから、あれもこれもお願いしようと、様々な相談が持ち込まれた。大切だったことは、被災地・被災者に「今」必要なことは何かを考えること、現地の自治体の思いを尊重すること。地域のメンタルヘルスについて取り組

んでいる自治体保健師との連携はとても大事なことだった。活動終了の際、現地が必要としている物は現地に引き継いでいかなければならない。

2012年4月からは、大船渡地域こころのケアセンターに勤務し、大船渡、陸前高田、住田で活動している。外部から来た臨床心理士だった自分が、地域に暮らす人となった。地域のある保健師が、「5年後には住民同士が自由に語って、互いに支え合っていけるようになってほしい」ということで、地域の傾聴ボランティアやゲートキーパーの養成研修を始めた。元々の社会資源が被害を受けているので、そこをサポートする。例としては、講師を担当できる人材不足を補い、徐々に地域の者が講師をやっているように。

研修に参加する方々の喪失体験が大きいので、「大変な状況の中、地域のためにがんばってくださっている」とねぎらうと、涙を流す方々もいる。被災者や遺族のために拓かれるサロンのような場には人が集まらないが、研修等でグループになると、必ず震災の話題になる。「故人を知っている人と話したい」「同じ境遇の人と話したい」「誰とも話したくない」「他の遺族の話は聞きたくない」「見知らぬ第三者と話したい」「口寄せで気持ちが楽になった」など、誰と話したいかは人それぞれ。

個別訪問で、自治体が実施するスクリーニングや健康調査のための個別訪問を続けている。「家族を亡くした辛さは、同じ立場の者でないとわかりません」と、玄関先で拒否する方もあれば、招き入れてくれて、「初めて話せます。来てもらってよかったです」と言ってくれる方もある。「話

を聴いてもらえてよかった」「あんたたちのおかげだ」と言ってもらうと、支援者として少しは役に立てているのかなと思うが、「あなたたちに話しても、この気持ちはわかりません」と言われると、申し訳ないと、こちらの感情が揺さぶられることの繰り返し。ペアで活動することの大切さを感じる。

震災以来、自分の時計が止まってしまったような感覚があった。これまで経験した海外での活動は一定期間活動すれば、自分の世界に帰れた。今はまだまだ帰れないと感じる。かなり意識して休暇を取るようになった。最近、地域での連絡会議の回数が減り、参加者も減ってきた。「こうやって復興していくんだよね」と言った人もあるが、「本当に復興なのか、風化ではないのか」と思った。実際、被災地以外との隔たりをますます感じる。テレビでは東京オリンピック開催が決まりましたと盛り上がっていたが、自分が暮らすアパートの外は、高台移転のための土をようやく切り崩しているところで、建築業者も足りないし、人も足りない。今後のことが心配になる。

＜京都における支援＞

最後は、野池雅人さん（特定非営利活動法人きょうと NPO センター常務理事・事務局長）から「避難者支援、支援者支援の経験から」というテーマで話題提供してもらった。きょうと NPO センターでは、まず、京都からボランティアを送った。災害ボラン

ティアセンターを京都駅に設置し、そこを拠点に 1 年間ボランティアバスを出し続け、500 人のボランティアを送った。その後は、本来の NPO の支援センターとして、現地と専門機関をつなぐ役割を果たし、支援団体の悩みに対する講座を開催した。

次に、民間のお金を必要なところにうまく届けたいということで、京都でやっていた地域創造基金を宮城に持っていき、地域創造基金宮城を作った。これは、民間の資金循環の仕組みとして、3 年間で 9 億円が集まった。つなぶろ基金というのを作り、京都の市民から集められた資金を現地で活動している機関に届けた。それから、京都の避難者のための雇用創出を行っている。多くが母子での生活のため、フルタイムでない形で働きたいという希望が多く、当センターでも 3 名雇用して働いてもらっている。最近では、支援される場所をたくさん作っても、来る人が減っている。いかに日常生活の場面につなぎ手を増やしくかが今後の課題だと思っている。



これで 3 年目の活動が無事終了した。

周辺からの記憶 14

～2014 年度 日本コミュニティ心理学会・むつ～

村本邦子（立命館大学）

2017 年 2 月 11～12 日、熊本へ行ってきた。全国婦人相談員連絡協議会で、災害時緊急相談マニュアルを作成しようとしている。もともと熊本は私のフィールドで、十年来通ってきた場所だ。熊本地震を受けて、昨年 5 月、7 月と訪ね、5 月に行くことになっているが、時間を見つけて、間にもう一度行っておきたいと思っていたものだ。

馴染みの相談員 4 人が集まってくれた。相談現場は日常を取り戻しているが、新規受付ケースが増えている。地震の影響で住民票が移動していることも関係しているだろう。アルコールと暴力問題が増えている。夫による DV だけでなく、息子など成人した家族の暴力で、避難する場がないというケースが多い。東日本大震災 1 年後の仮設住宅で、成人した息子の暴力で警察が呼ばれても、手の施しようがないという悩みを聞いたことを思い出す。なぜか妊娠が増えているという話もあった。年齢、婚姻の有無などに関わらずということのようだが、相談現場に上がってくるという意味では、今後のフォローが必要になるケースだろう。

親子支援に関わっておられる方々の話も聞きたいと、人を介して、NPO 法人くまもとスローワーク・スクール代表の入江真之さんと、NPO 法人子育て応援おおきな木代表の木村由美子さんを益城に訪ねた。早く着いて周辺の様子を見ながらブラブラしていると、「益城四賢婦人生誕地」の看板が眼に入った。調べてみると、益城の矢嶋家は、「熊本の猛婦」「四賢婦人」と称され、近代日本における女子教育や婦人解放運動に尽力し、今日の男女共同参画社会の礎を築いた女性 4 人を輩出しているのだという。矢嶋楫子は、日本基督教婦人矯風会を設立し、婦人参政権、廃娼、禁酒の運動に尽力し、東京女子学院を創立した馴染みのある女性だ。記念館まで行ってみたが、被災して休館中だったが、偶然の出会いだ。入江さんと木村さんからは、被災直後の親子の様子や外部支援者の問題などについて聞くが、彼女たちは今、益城に民間の女性センターを建てるべく計画中ということで、一緒に構想を練る。四賢婦人の益城に女性センターなんてとワクワクするではないか。今後の展開が楽しみである。

日本コミュニティ心理学会

第17回大会シンポジウム

2014年、日本コミュニティ心理学会第17回大会長を引き受けることになり、6月6日～8日、立命館大学にて大会を開催した。ちょうど十年前にも立命館で引き受け、被害者支援とコミュニティをテーマにしたが、今回は、コミュニティ・エンパワメントをテーマに、「東日本大震災後のコミュニティ・エンパワメント」のシンポジウムを企画した。シンポジストは、上山真知子さん（山形大学）、吉浜美恵子さん（ミシガン大学）、団士郎さん（立命館大学）、コメンテーターは、学会長の久田満さん（上智大学）。鞍馬山に写真を撮りに行って、ポスターも作った。



<ソーシャル・キャピトルを活用した心理社会的支援>

上山さんは、「ソーシャル・キャピトルを活用した心理社会的支援について」と題し、被災地に暮らし、支援される側として経験したことから考え学んできたことを語ってくれた。上山さん自身も、避難所に子どもの遊びコーナーを作り、「ケア宮城」という組織を立ち上げ、教員の支援などされている。東日本大震災発生直後から、心理の専門家が被災地に入り、いわゆる「心のケア」が開始されたが、PTSDモデルに偏りがちであることに違和感があった。被災者のほとんどすべては健康な人なのである。そんな折、プランジャパンという国際NGOとつながり、「心理社会的な支援」という考え方を知った。被災者の尊厳を守りながら、ニーズを聞き取り、地域の社会資源を活用して、被災者自らの力で困難を克服することができるように支援することを理念とする。

また、政治・社会学者である米国パデュー大学のダニエル・アルドリッチ氏との交流から、復興過程におけるSocial Capital (SC: 社会的関係資本) の有効性について学んだ。SCには、それぞれのコミュニティで維持されていた結束型、コミュニティ外からのボランティアなどによる橋渡し型、行政によるまちづくり政策にみられるような連結型があるが、SCを利用し地域を活性化することが復興の力になる。被災した直後はそれまでのコミュニティがすぐには機能できない状態にあって、結束によって乗り越えたとしても、その結束が強すぎる場合には、時として、支援を拒んだり、内部で対立が生じたりすることもある。橋渡し型は、一部欠損

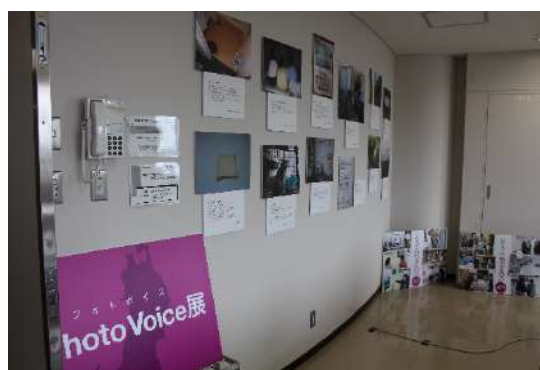
したビルに足場を組み、補修工事をしながら復旧させる働きをするようなものである。コミュニティの持ち味を生かしながら、人とコミュニティを支えるために、そこに暮らす人たちに違和感のない場や装置を持ち込んで支援することの有効性を実感したということだった。

<女性たちのフォトボイス>

吉浜さんは、社会福祉の立場から、「被災した女性たちのフォトボイス」というタイトルで話してくれた。フォトボイスとは、社会や地域の課題を掘り起こし、その解決のために広く用いられている参加型の手法で、とくに社会の中で脆弱な立場にある者の権利や福祉の向上をめざした調査研究や社会的アクションに多用されている。実は、学会プレ企画として、前日には、吉浜さんによるフォトボイスのワークショップをやり、これがかなり面白かった。

フォトボイス・プロジェクトは、2011年6月にスタートした。地元NGOとの協働で、郡山、仙台、宮古、福島にグループが立ち上がった。参加者を募集し、十分なオリエンテーションの後、それぞれが撮った写真をもとに語り合うことを繰り返すなかで、声（メッセージ）が浮かび上がってくる。たとえば、避難所での「偏った食事」「命をつないだ食パン」「街がごみ置き場になってしまった」「開けられない冷蔵庫」「猫の孤独」「鎮魂の浜」などなど。復興の意味について問いかける写真、復興によって作られるものや壊されるものの写真、オリンピック招致に対しての問いかけや怒りも表現された。

エコロジー・レベルを通して、フォトボイス・プロジェクトで撮られ語られた写真や声を見ると、これまで社会より大きなnature（自然）というレベルをあまり考えていなかったということに気づいたという。発足から3年がたち、フォトボイス・プロジェクトをNPO法人化したところだそうだ。学会場でフォトボイスの展示も行った。



<家族漫画>

団さんからは、「東日本・家族応援プロジェクト」と家族漫画展。詳細はすでに書いてきた話だから詳細は省略するが、どんなふうに家族漫画展が始まり、続いてきたかということ話を話した。

私達は皆、沢山の物語の束として今を生きている。多くの人々と共有する物語から、誰にも明かすことなく胸に秘めた物語まで、様々な記憶と共に人生を過ごす。ところが、余りにも大きな厄災に見舞われると、ささやかに大切にしてきた物語は吹き飛ばされてしまう。回復しがたいとも思われる深い悲劇で私達が一色に染められてしまう。

だから回復の一つは、共通の大きな物語に絡め取られた人達が、何処かに押しやら

れてしまった個人の物語を取り戻すことではないか。被災した街々もまた、被災地という一括りのカテゴリーから、固有名詞を取り戻す事なのではないか。その一助に、誰かの小さな物語が役目を果たすのではないかと考えた。

シンポでは「花嫁の父」をスライドショーにして見せ、学会会場にも、家族漫画パネルを設置した。



<コメント>

学会長の久田さんは、「御用聞き」として福島に出向いている自身の活動ともからめながら、それぞれの企画すべてがどこか楽しそうで持続的であること、現地の地理と歴史が大事であること、エコロジカルな視点から、時間の変化に伴って個人がどう変わるのか、家族がどう変わるのか、コミュニティがどう変わるのか、さらにそれを取り巻く文化、社会、イデオロギーがどう変わるのかということを観察し、できる範囲の小さなことをひとつひとつ付け加えながら細く長くやっていくところに何か新しい価値が見出せるのではないか。

漫画展は、コミュニケーション・アクション

(対話というアクション)であり、来場した人が漫画を見ても見なくても、そこにコミュニケーション・スペース(対話する場)を作り出している。漫画と来場者、来場者同志に対話が生まれ、そこから何かが生まれるのだろうとコメントしてくれた。



<星野命先生の遺言>

懇親会において、名誉会員だった故星野命先生が挨拶のなかで、このシンポジウムについて言及し、期待を語ってくださった。

三人の話題提供者がそれぞれユニークで、また蘊蓄を傾けた内容を語ってくださったことに、大会長の「人選の妙」を感じ取りました。・・・

・・・これからの第二世代、第三世代にあたる会員の方々に私が期待し、お願いしたいことは、現代心理学、社会福祉学、教育学等の分野に所属しておられるとしても、「コミュニティ・アプローチ」と「エコロジカル・アプローチ」の重要性と実効性を活かして、大自然をバックにしつつ、個人・家族・組織・地域社会のすべてを包括した実践と

研究を推進して頂きたいことです。

本大会のシンポジウム、ワークショップでは、新らしく創造的な研究法がいくつも紹介され、「フォトボイス」、「ソーシャル・キャピトル、とくに橋渡し法」、「物語始める人の発見と聴き取り」、「家族漫画パネル」など、私にとって活用をはかることは、ゾクゾクする体験になりそうですが、残念なことに「時間」がありません。不可能なこととして「あきら」めています。

星野命先生からは、後日、この時の挨拶原稿メモを手書きで清書したものを送って頂いた。学会には金沢から駆けつけ、老体で弱っているのだとソファに横になって休みながらも、熱心に参加して下さった。高齢になって頭は冴えて仕方がないのだが体がついてこず、飲み込むことが難しいとおっしゃっていた。翌年の学会にはもう姿を見せることなく2015年11月7日肺炎のため88歳でご逝去された。これを星野先生の遺言として、私たちの方向が違っていないことを確認しつつ、精進したいと思う。



星野命先生と 2014. 6. 7

4年目のむつ

<準備>

早4年目のプロジェクトである。昨年、弘前に移動になってしまった杉浦裕子さんが、4月1日付で、むつ児童相談所の課長として戻ってきたと知らされた。公民館長が図書館長になり、新しい公民館長はむつ市長とも親しいということで、地元のプロジェクト理解者が着実に増えている。5月には第1回プロジェクト実行委員会が開催され、初回は少々参加していた人たちも、継続されて4回目になることから10年企画の意味を理解し、「今から次年度のことも踏まえたPRせねば」「内容が良いのはアンケートの結果から明らかで、こんな良いものを殆どの市民が知らないことを何とかせねば」との声が挙がっていたと知らせてもらった。

第2回実行委員会は6月ということで、立命館の方でもM1に向けてプレゼンし、説明会を含めた準備のための第1回研究会を6月に設定した。5月20日、事前準備の

ため、むつ市の HP を覗いていたら、前日、むつ市長が急逝したというニュースが目飛び込んできた。驚いて HP を繰ってみたが、その前の市長も若くに急逝していた。合わせて、市長らの苦闘と重圧をうかがわせるむつの歴史を知った。何とも言葉が出ない。

杉浦さんからは、「むつ市長が5月19日、会合中に倒れて逝去。62歳でした。そんなこんなで、市長選でもめています。元気であれば、今年はプロジェクトに顔を出していただける予定でしたが」とメールがあった。残念だ。結果として、宮下順一郎前市長の息子である宮下宗一郎氏が市長を引き継いだ。当時、宗一郎氏は外務省へ出向、在ニューヨーク日本国総領事館で政務部・経済部領事をされていた。このことがまた後のご縁へとつながることになる。

<フィールドワーク>

院生たちは陸路で下北へ。教員3名はいつものように夏休みを利用して、前乗りで青森巡り。昨年出会った感動の「嶽きみ」（トウモロコシ）を求めて岩木山へ。立て続けに何本も食べすぎて、お腹をこわした人もいた。



南八甲田山麓に広がる鳶の森で鳶沼巡りをして、開湯 400 年を誇る日本三秘湯「谷地温泉」へ。古びた木造の山の中の一軒宿。





き、「どうせ薬飲んでも血圧高いんだし、80年生きたらもうけもんだと思って、そんなに一所懸命薬飲まなくてもいいよ」と言ったそうだ。ナイスな先生だ。



温泉はもちろん豊かなフィールドワークの場だ。谷内温泉にて一緒になった青森市の年配女性とあれこれ話す。この女性、2011年から先月まで、毎月、岩手の避難所に慰問に行っていたとのこと。婦人会とか町内会とか組織立った慰問のようだったが、はっきりとはわからず。瓶や紙パックで花器を作って持って行ったり、作り方を教えたりしたらしい。

高齢者対象で、顔なじみになると、行くたびにとても喜んでくれた。花器にあまりにたくさんの花を入れるので、「入れすぎでしょう」と言うと、一本ずつこれは誰々の花・・と名前を言っていく。亡くなった方なのか。

弘前医大の先生も一緒に行ったことがあった。健康教室を開いて、「薬飲んでいる人？」と尋ね、手を挙げた男性に詳細を聞



彼女は、下風呂温泉の話題になると、「下北には核燃料貯蔵があるからね」と声を潜めたが、翌日は大間まで足を延ばした後、下風呂に向かう。内湯もあるが、せっかくなので、公衆浴場、大湯と新湯に行く。大湯の方は、ぬるいお湯と熱いお湯の二つの湯船がある。ぬるい方もかなり熱いが、こちらは水を入れていいのだと地元の方が気遣ってくれる。

湯船からふと眼を上げると、30代くらいの女性の背中に大きく見事な龍の刺青があった。こんなものを見るのは、映画を除けば生まれて初めてだ。このあたりの浴場では禁じられていないのだろうか。刺青の女性が連れらしき女性の背中を流していたが、何だかごく自然な光景に見えた。

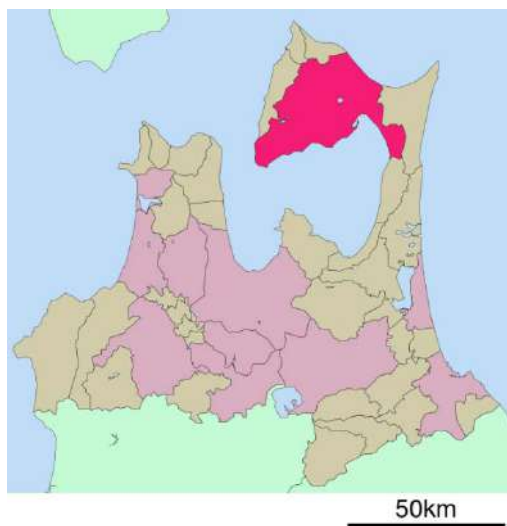
後で聞いた話では、このあたりには大間原発労働者用の宿があり、やくざ関係の人数が増えたのだそうだ。『ヤクザと原発』（鈴木智彦著、文春文庫）は興味深かったが、同じ地平の話なのだろう。

<9月4日レセプション>

例年通り恐山で身を清め、レセプションに向かう。むつグランドホテルのレセプションでは、児童相談所所長を筆頭にスタッフの皆さん、青森県PTA連合会会長やむつ市中央公民館館長なども来てくださっていた。今年はどういうわけか（下風呂の話をしたからか？）、原発関連の話がはずんだ。

名刺にある下北半島の地図を見ながら、むつ市でないところ、つまり下北郡が飛び地になっている理由を教えてもらおう。右から東通村、風間浦村（下風呂温泉のあるところ）

ろ)、大間町(おおままち)、佐井村。ちなみに、下の方(上北郡)には、野辺地町(のへじまち)、七戸町(しちのへまち)、六戸町(ろくのへまち)、横浜町(よこはままち)、東北町(とうほくまち)、六ヶ所村(ろっかしょむら)、おいらせ町(おいらせちょう)がある。むつ市に統合されなかったところというのは、原発関連のお金が入るところである。郡として残すために、下風呂はじめ原発関連労働の宿を作ってお金を落とすということのようだ。



子どもの頃に見聞きした六ヶ所村の話も出る。「私たちみんなの問題ですよね・・・」と言うと、「心の中でいろいろ思っていると言えないし、結局はしょうがない。若い人たちは何も考えていないかもしれない」「うちの息子、考えてんのかな?」という声も上がっていた。タクシーの運転手さんも、「暮らしていると、考えても仕方ないし、考えてられない」と言っていたが、それをテーマの中心に置くことは困難なのだろう。

その後、むつ新市長とむちゅらんの話で盛り上がる。まだ若い市長は希望の星のようだ。地熱発電にも力を入れていると言っていた。PTA連合会会長とも話すが、ワークショップ形式のものは珍しいので、皆に経験して欲しい。このあたりでは、都会と違って、PTAと言えば男の会で、母親会というのが別にある。男たちが一緒にお酒を飲む。男尊女卑というのか、男女分離の傾向がまだ強く残っているという話だった。なるほど。

<9月5日 支援者支援セミナー・お父さん応援セミナー>

今年の支援者支援セミナーは市役所で。天気が良く、移動の際に釜臥山のレーダーがよく見えた。市役所は想像を絶する大きな平屋で、駐車場一角には僻地医療のヘリポートがある。それまで地震で壊れた3階を取り壊した役所を使ってきたが、老朽化で建て替えができず、東北電力が買い取ったダイエー跡なのだそうです。

中には、ジオパーク構想や下北の自然を推し出すパンフレットとともに、「原子力の安定確保に向けた現場力向上のための人材育成(青森原燃テクノロジーセンター)」、「原子力発電施設等研修(青森原燃テクノロジーセンター)」といったポスターや「原子力文化」「ひろば」といった原子力に関する雑誌が置いてあった。



いつものように、中村さんと一緒に、ワークショップ形式で事例検討を行った。60名の参加者を小グループに分け、むつの方から提供してもらった事例をもとに、家族の強みに着目した支援、専門家に頼るだけでなく地域の力を活かす支援を考えてみた。

最初は事例のあら捜しをしていた参加者も、グループで話し合うなかで、視野が広がり、全体で知恵を共有するとさらに大きな力になっていった。また、「虐待は児相や専門家の仕事」と言っていた人たちも、地域でできることがたくさんあるということに眼を向けることができたように思う。

毎年、セミナー参加者の半分は民生委員なので、その人たちがエンパワーされたら地域はもっとパワフルになるはずである。



夜は、中央公民館に移動して、中村さんによる「お父さん応援セミナー」。「女人禁制」なので、私たちは中に入れないが、どんな様子か気になってガラス越しに覗いてみる。30名の参加者で、そのうち10名がリピーターだったとのこと、少しずつ定着してきたかなと思う。





今回は、『臨地の対人援助学』出版企画のために、プロジェクトについて地元の方々の声を聴くということもやってみたが、むつみなさんが、忙しい日常のなかで、少しでも多くの人たちに届けるにはどうしたらいいのかと知恵を絞りながら、1年かけて準備をしてくださっていることが具体的によくわかり、大変ありがたく、大きな力をもらった。

<9月6日 漫画展・マンガトーク>

最終日はむつ市立図書館で、漫画トーク。きのうは漫画展に大間の議員を名乗る人がやってきて、大々的に原発PRをして、「明日もまた来る」と言って帰ったという報告を受けていたので、少し緊張するが、結局、その人は現れなかった。どんなことをしているか見に来たのだろうか。原発のことは考えるが、反対運動や賛成運動を目的にしているわけではない。

漫画展の感想ノートやアンケートを見ると、4年かけて蓄積してきた力を感じる。今年初めて出会ったという人もいれば、3回目、4回目という人もいる。「今年も来てくれた」と思いながら足を運びました。10年の

プロジェクトですが、毎年自分の1年と思いつつ漫画展を見ている」という声もあれば、「はじめて参加し、色々な意見を聞き合えたことは大変勉強になりました。私が先生のご本と出会ったのは、2011年初冬に岩手県遠野市にあるボランティアセンターに何度か足を運んだ時、『木陰の物語—3.11への記憶—』でした。そこから避難所を訪ねていた折に冊子の中のことがジワジワと染み込んできて少しずつ、そこからあったかいものが広がっていく不思議な状況を体感したのを覚えています」という声もあった。いろんな形で漫画展や冊子の力が広がっているのだ。





むつ市長も駆けつけ、反省会にまで参加してくれた。これからの展開が楽しみである。

続く



周辺からの記憶 15

～2014 年度：宮城・岩手、民話との出会い～

村本邦子（立命館大学）

2017 年 5 月 19・20 日と熊本へ行った。19 日の方は、県の婦人相談員研修で、宇城市役所が会場だった。宇城市の駅で降り、タクシーで会場へ向かう途中、青いビニールシートをかけたままの家が目立つ。運転手さんに聞くと、この辺りは古い家が多く、被害は大きかった。この状態で住んでおられる方もあれば、住んでおられない方もあるだろう。オリンピックや何やで、資材もなければ人手もなく、なかなか修復工事は進まないという。まだまだ大変だ。

研修は、昨年度に引き続き、震災後の振り返りをして、緊急時対応マニュアル作成に結びつけるというもの。経験を繰り返し振り返り、互いに学びあうという形式で十年来続けてきた研修の延長線上にあると思っている。昨年の 7 月、震災後三ヶ月に同様の研修をやった時は、まだまだその影響が生々しかったが、1 年経った今回は、少し時間が流れ、被災状況によってはまだ大変そうな方もあるものの、全般的には振り返ることができるようになっていた。

多くの相談員さんが、一定期間してから体調不良を経験していた。余震は止まず、つい最近も比較的大きな地震があったが、何度も何度も揺れるので、家のたんすが少しずつ壊れていくということを言われる方があった。「揺れるたびに壊れていくたんすを見て、まるで自分自身を見ているようだった。結局、思い切って捨ててしまい、新しいたんすを買って、すっきりした」とおっしゃられた。

震災が自分自身にどのような影響を及ぼしてきたかと同時に、相談者にどんな影響を及ぼしてきたか、次の災害で活かせる工夫について語り合ったが、女性のための相談員だからこそ見えること、言えることがたくさん出てきた。大きな課題は性暴力の問題である。阪神淡路大震災の時も東日本大震災の時も問題になったので、熊本でも当初から声を掛け合って注意して見てきたが、なかなか実態は明らかにならなかった。それが一年を経て、徐々に明かされてきた事実があった。もう少し深めて、マニュアルに反映させていけたらと思う。

2014年8月

「みやぎ民話の会」との出会い

2014年4月、鶴野祐介さんが応用人間科学研究科に赴任してきた。実は、大学時代の同級生で、驚きの再開だったが、彼も大震災以後、細々と東北に通ってきたという。それでは是非一緒にプロジェクトをやりたいということで、メンバーに加わってもらった。彼は教育人類学や伝承児童文学のあたりが専門で、分野は違うが、私も学生時代は妖精や子守歌、児童文学の研究をやっていたので接点があった。

8月末に宮城県伊具郡丸森町で「第8回 みやぎ民話の学校〜土地に息づく語りの声を3.11後のあなたへ」があるよと誘ってもらい、院生たちと一緒に2泊3日の合宿に参加した。百人を超す参加者で、小さな部屋に分かれて、丸森に語り継がれる物語や福島での被災体験に耳を傾け、夜は寝物語を聴きながら幸せな気分で眠りについた。

「ああ、ここに東北の力がある」と思った。民話をやってきた人たちの物語りはパワフルだ。一般的に、恐怖体験は断片的な記憶のまま物語を成さず、他者と共有されないで孤立感が深まる。民話をやっている人たちは、物語る力が鍛えられているからだろうか、大変な体験を語っているのに、ぐいぐいと引き込む力があり、時にユーモラスでもある。家ごと津波に流され、街中を移動して、ベランダで一夜を明かしたという80歳になる庄司アイさんは、死に直面して、語り継がれてきた先輩たちの物語を思い出し、生き残って、「民話が命綱」と活動を続けている。たとえすべてを失ったとしても、

身ひとつあれば、物語は残る。民話は祖先から手渡される遺産であり、それを語り継ぐことは、時間を超えた大きな流れのなかに自分を含み込んでいくプロセスとも言えるのだろう。





9月10日の震災プロジェクト第4回研究会には、「みやぎ民話の会」のリーダーである小野和子さんをお招きし、『語る』『聞く』という営みについて～東日本大震災の波をくぐって」と題する講演をお願いした。「みやぎ民話の会」は1975年に結成され、採訪の成果を500冊近い出版物に残すと同時に、直接「声」で民話を聴く醍醐味をと合宿形式の「みやぎ民話の学校」を開催してきた。

東日本大震災の5ヵ月後、2011年8月には、宮城県南三陸町のホテル観洋で「第7回みやぎ民話の学校」を開催したが、全国から200名が参加して、6名の被災者が自らの被災体験を語ったという。その語り口は本当に面白く、自分が伝承してきたものを語ろうとする人は、聞く人の様子を見ながら、「自分の語る話がどういうふうに皆の心に入るだろう、あまりびっくりさせちゃいけないぞ、でもここだけは言いたい」と考えながら語っていたような気がする」と小野さんはおっしゃっていた。

お連れ合いを亡くした鈴木善雄さん（大正15年生まれ）は、まるで、朝「行ってらっしゃい」という時のように、水の中で手を振りながら、静かな顔で海の向こうに流れていってしまったと語られた。それが非常

に淡々としていて、誰もが忘れられないシーンになったという。語るとはこういうことか、自分の感情を丸ごと投げつけるのではなく、いったん自分の心に呑み込んで、聞いてくれる人の前に披露して再構成していく。民話の語りによって、そういう力を養っていたのではないか。鈴木さんは、「あそこへ行って話すの、気が重かったんだよ。でも話して良かった。皆がおまえの悲しみを半分こっちへよこせというような顔で聞いてくれていた。それで、行って話してオレも元気が出た」とおっしゃったそうだ。

震災を契機に、それまでなかなか顧みられなかった民話の力が見直され、広がっているという。「震災による大きな地割れが起きて、たくさんの人が海の向こうに行かれた時に、その命の再生のようにして、新しい光がさし始めたのです。これを生かすべく頑張るのが、私どもの復興ではないかと思っています。復興の一番根っこに横たわるものは、復興に携わる人がそれまでの日常の中で何を形成してきたかということと深くかかわってくるのだと思います」と小野さんは締めくくられた。

2014年10月

メディアテーク「声の図書館」

多賀城でのプロジェクトに先立って、宮古に足を延ばし、来月のプロジェクトを共催してくれることになった社会福祉法人若竹会にご挨拶と打ち合わせに行った後、仙台に戻り、1年目、宮城でのプロジェクト開催地を探して訪れたメディアテークを訪れ

る。メディアテーク2Fの図書館メディアライブラリーには、「声の図書館」があって、「みやぎ民話の会」の語りを聴くことができる。2本ほど聴いてみる。夏の民話の学校でも流していたものだが、静かで美しい語りの場面が収録されている。



7階の「3月11日をわすれないセンター」では、ちょうど「始まりの朝ごはん」という企画をやっていた。震災後に食べたごはんの写真を展示し、何か思ったことのある人が付箋にコメント書いて貼り付けていくというもの。写真から体験や思いを共有するなかなかおもしろい企画だ。

合わせて、2011年にお世話になった甲斐賢治さん(せんだいメディアテーク企画・活動支援室室長)に話を伺った。甲斐さんは、

メディアテークが十周年を迎える2010年に、縁あって大阪からやって来た。デジタルデータをアーカイブするという計画を立てていたところで震災が起きたが、方向性は決まっていたので5月にオープンさせ、2013年までかけて、データベースを作り直し、著作権の整理などしてきたという。

預かったデータにはジャケットがつけられ、DVDとしてライブラリーに保管される。空襲で焼けてしまった大正・昭和の町並みなどの写真をアーカイブして、ライブラリーに並べたり、イベントをやったりもしている。その一環として、みやぎ民話の会の記録もアーカイブしていった。2011年に南三陸であった「みやぎ民話の学校」で出会って、主要メンバーが自宅に持っていた千本以上の民話を録音したカセットテープを整理するところから始め、2012年から2013年にかけてデジタルデータにしていっていった。三部作『なみのおと』『なみのこえ』『うたうひと』もここから生まれている。

ここでは、市民活動よりももう少し堅牢な形で、保管することができる。最初の頃は、「作品でなく記録を」と考えていたが、少しずつ作品であることの意味を考えるようになった。たとえば、映画という形式の作品になると、経済の中に配給システムがあって、そこに入る方が伝承はスムーズになる。頭に浮かんだのは、ゴヤの「マドリード」という絵。スペインの農民が攻めてきたフランス軍に銃を向けられて手を挙げている。アートは記録してきたのだと思った。現代アートでは歴史を扱うということが目減りしてきている。伝承という意味でも、作品という形式が重要なんだと考え方が変わった。

この施設自体を含め、首都圏と宮城、被災

地の外と被災地を行き来するための回路になるようなイメージで考えてきた。「回路をつなぐ」。スタッフ間では、自分たちのためにあえてそんな風に言語化していた。

甲斐さんの話を聞きながら、震災があったから特別なことをするのでなく、通常業務のなかに震災を含み込んでいくということが重要なのだと思った。災害も日常の一部なのだ。私たちのプロジェクトも、教育の一環という位置づけで定着しつつある。また、「回路をつなぐ」という言葉は、私たちのプロジェクトについても言えるかもしれない。定期的に同じところを訪ねるという関係のある中で、東日本の各地と京都の立命館大学に出会いの回路を作る。民話との出会いもまた、その回路がもたらしてくれたものだ。

「みやぎ民話の会」例会に参加する

プロジェクトの前日、10月4日には、仙台市黒松市民センターで行われた「みやぎ民話の会」の例会に1日参加させて頂いた。午前中は初めての試みである12月のお話発表会の打ち合わせと練習だった。

加藤恵子さんは、「へびとみみず」を語った後に、いくつかの問題提起をされた。作品を変えて良いのか。「めくらめっぽう」や「ざどうばし」「めっこ」など差別語をどうするのか。一生懸命、丁寧に語れば何を語ってもよいのではないかと、解説をつけて使う、やはりダメだと思うなど、いろんな意見が飛びかう。

観音様の安置の話をしたい、丸森の「おじいさんとキツネ」の話をする、「ぶっかけお

わんこと五郎」、名取の「訪印さんとなとりのなんばんねずみっこ」、福岡の「ひこ山とごんざ虫」、「こめつき三太郎」、「つばくらからもらったたね」など、なぜそれを語りたかという思いとともに次々に内容が決まっていく。

合わせて、「双葉の話や原発の話を聴きたい」、「8 か所移動した自分の体験を語って欲しい」などメンバーへの期待も語られた。

「月1回、役所を通して双葉に関する新聞のコピーが送られてくるが、それ以上のことはわからない。自分の言葉は不足している。新聞に出ていた子どもたちの作文など紹介しようかと思う」という方もあった。また、「東電は津波でダメになったところは保証しない。自分も意見を求められたので、自分の体験を話す自分の声には力があることを感じた」、その人がいつ何をどのように語るか決断がいること、周囲が強いることはできないこと、でも背中を押してもらうことで可能になることもあることなどたくさんのやり取りがあり、8月同じようなことを話すことになる。なんと質の高い議論が行われていることか。

お昼はみなさんが持ち寄った食べ物を分け合って食べる。栗ごはんやきゅうり、枝豆、かぼちゃ、柿など、土地の季節のもの。



午後は小野和子さんも加わり、『民話の再発見』（吉沢和夫、1974年）の読書会。メンバーから報告があって、昔話と民話の区別が語られる。3段階あって、最初の段階は神話。次がもう信じていないが、そのままに記録。三段階目が昔話で、人々は最初から信じていないのだそうだ。民話は民間信仰、世間話。大学の教室よりも熱気にあふれた知的水準の高い勉強会なのではないかと恐れ入った。さすがというしかない。

「おおぞら保育園」の物語

夕方、9月29日からいよいよ新しい園舎に移られた「おおぞら保育園」を訪れ、先生方に話を聞かせて頂く機会を持った。詳細は『臨地の対人援助学』に譲るが、震災からここまでのプロセスについて聞きながら、限られた条件のなか、先生方の子どもたちへの思い、知恵と工夫によって子どもたちを保護する空間を創出してきた歩みそのものが、子どもたちやその家族、地域に与えたであろう力の大きさを思わずにはいられなかった。

新しい園舎は大きく明るくて、子どもたちも年齢集団に分かれてのびのびと過ごせるようになったとのこと。ワクワク楽しいトレイラーハウスの旧園舎も集まりの場として維持するとのこと、これも伝承されていくべき物語だと思った。



多賀城でのプロジェクト

多賀城で三回目となるプロジェクトは、多賀城図書館、多賀城民話の会との共催で、10月いっぱいの家族漫画展、10月5日、団士郎さんの漫画トークと宮城民話の会による「ふるさとの民話をみんなで味わおう!」、支援者交流会を実施した。「多賀城民話の会」は、午前中、東北歴史博物館今野家住宅で「民話を聞く会」をやった後、総勢十数名で駆けつけ、語り手を一話ずつ交代しながら「桃太郎」「納豆の由来」「七ヶ浜の民話」「宝てぬぐい」などたくさんの昔話や伝説を語ってくださった。

後半のやり取りの中で語られた「こさじ伝説」は、多賀城市にある「猩々ヶ池」にまつわる話である。様々なバリエーションがあるが、基本的には、酒屋に酒を飲みに来て来た猩々を殺す計画をこさじという娘が知り、それを猩々に伝えると、猩々は自分が殺されると津波が起こるので、「末の松山」に逃げるように言う。猩々が殺されると本当に津波が起こり、こさじは「末の松山」に逃れて助かるという話だ。

多賀城民話の会の方が、民話では津波が地震とともに語られていないので、今後子どもたちに語る時には、地震についても一緒に語っていきたいとおっしゃった。土地に伝わる民話は、こんなふうに時代時代の思いを受けて変化しながら次世代へと語り継がれていくのだろう。地元のおばあさんたちが、プロのアナウンサーのようにではなく、それぞれ个性的に語ってくださる雰囲気は暖かく、今後、若い子育て世代と民話の会を繋ぐ架け橋になれると良いなと思った。





来年は図書館運営上の変化と引っ越しがあるので時期は未定のままだが、図書館のみなさんからは、「息長く一緒にやっていきましょう」と言って頂き、今後の新しい展開を楽しみにしたい。



▲支援者交流会



▲末の松山

2014年11月

遠野物語 福二さんのこと

今年は出版企画もあり、宮古でのプロジェクトに入る前に、私だけ一足先に岩手に入り、これまでにプロジェクトをやったことのある遠野や大船渡を訪ねて回った。10月29日（水）には、遠野市子育て支援センターで、お世話になってきた立花正行さんや職員の方々から2011年以降の遠野の状況について聞かせて頂いた。仮設はまだあるが、全般的に言えば、遠野は日常に戻っている感じだった。

それから、遠野文化研究センターの前川さおりさんに会った。詳細は『臨地の対人援助学』に掲載したが、2011年、遠野でのプロジェクトでお世話になった前川さんが、「岩手は自殺率の高い県だが、自殺する人々が最後に来るのが図書館、図書館にどんなメッセージがあれば、思い留まってもらうことができるのだろうか」と考える。図書館・博物館は、あの世とこの世の境目、共同体から離れて1人で体を休められる場所なのではないか」と話されたことが強烈な印象として残っていた。



文化財レスキューや献本活動、祭りの話も面白かったが、遠野物語第99夜に登場する福二の子孫の話も不思議な後味を残すものだった。遠野物語第99話は明治29年三陸大津波にまつわる話だ。月夜の晩、福二という男が、田の浜（山田町）で、津波で亡くなった妻が、昔、恋仲にあった男と歩いているのを見かける。二人はあの世で夫婦になっていると聞いて、「おまえ、子どもが可愛くないのか」と声をかけると、妻は悲しそうな顔をして、泣きながら去って行ったという話である。2011年11月、プロジェクトの前日がちょうど文化の日で、ホテルに隣接する市民ホールでやっていた「遠野文化フォーラム」を覗いてみたところ、『遠野物語』誕生百年を迎える企画で、林隆三がこの話を朗読した。

この福二の子孫にあたる男性の話は、私も、その後、たまたまNHKで取り上げられたのを見たが、前川さんによれば、2012年1月、遠野博物館を訪ねて来たそうだ。福二は心の病らしきものを抱えていたようで、妻の幻を見たのも今でいうPTSDだったのかもしれない。親戚は福二のことを語りたがらず、唯一その方の母が義母から聞いて、「遠野物語を読んでおきなさい」と教えたのだという。当時は、「なぜ、自分のところの恥だけが晒されなければならないのか」と腹立たしく、無視していたが、今回の震災でも田之浜にあった自宅が流され、その母親も津波で行方知れずのままだった。パソコンも流されて、家系図やら何やらもなくなってしまったので、この機会にきちんと向き合おうと思ったそうだ。

実は、福二は遠野物語の佐々木喜善の親戚にあたり、たまたま遠野図書館に佐々木

喜善の曾孫にあたる男性がいたので、前川さんがつないで、家系図の聞き取りなどその後、何度か行き来があった。その人は釜石に勤めていたが、これをきっかけにふるさとの復興の仕事をしたいと、山田の町役場に移られたそう。前川さんは、震災を経験して、遠野という場所は、死者への思い出を長く抱え続けていけるところ、長いスパンで記憶を保管しておくような役割を担っているらしいと考えるようになったという。



遠野の古民家で民話を聴く

夜は、夏の民話の学校で知り合った日本民話の会の大平悦子さんのご自宅、遠野市青笹にある藁ぶき屋根の古民家に泊めて頂く。



囲炉裏を囲んで大平さんが民話を語ってくださったが、ひとつはこの遠野物語 99 話だった。藁ぶき屋根の古民家で、遠野弁の遠野物語を聴く贅沢に胸が震えた。大平さん宅の魂入れをした神主さんは福二の兄の曾孫にあたり、その妻と交流があるのだそう。大平さんは、最初の頃、妻が波にのまれてしまい、忘れがたい恋しい妻にやっと会えたと思ったら、他の男性といたという福二の切ない情けない気持ちを思いながら語っていたそうだが、何度も何度も語るうちに、福二は、この幻を見る必要があるんだと

思うようになったという。

被災された方の話を多く聴くうちに、大切な身内がいまだ行方不明だが、どうしてもあきらめきれず、死亡届を出せずにいたところ、夢の中に出てきて、ようやく気持ちに区切りが付いたという人がいた。もうひとつ、やはり身内が行方不明で、イタッコ（祈祷師）に口寄せをしてもらったら、「俺は今、海の底にいる。穏やかな気持ちでいるから探さなくていいよ」と言った。それを聞いて、やっと気持ちに区切りがついたという。そういう話をいくつか聞いているうちに、福二も同じだったのではないかと思うようになった。忘れがたい、愛おしい妻ではあるけれども、でもどこかで気持ちに区切りをつけて、自分も前に進まなければいけない。そんな思いがその幻を見せたのではないか。「もしかして、もしかしたら、奥さんの方が、あなたががんばってという気持ちで幻を見せてくれたんじゃないか」と、そんな風にも考えるようになったのだそうだ。

佐々木喜善は『奥州の座敷わらし』という本を書いていて、そのなかに、福二が実家に帰って、仏壇のある部屋に寝ていたところ、座敷の戸がちょこっと開いて、手が出てきておいでおいでしているのを見たのだそうで、座敷童子ではなかったか。津波があったのはそれからまもなくしてからだったので、座敷童子が福二に知らせたのではないかというような話も載っている。それを発見した時、大平さんは、「本当に脳天から突き抜けるような思いをした」そうだ。



それからもうひとつ、「娘としゃれこうべ」という話を語ってくださった。長者の娘が3年前、花摘みに出かけたまま行方知れずになっていた。たまたま隣村のおじいさんが、野原を通りかかり、娘のしゃれこうべと一緒に酒盛りをしたことから、ようやく長者が娘の遺骨を見つけることができたという話で、震災後、去年あたりから意識して語るようになったという。被災された方には、「うちは良かったんですよ、見つかっただけでも」という方がたくさんいて、3年半経った9月でも2,601名が行方不明で、今なお折々に探されている。南三陸の語りの会で、ずっと見つからなかった友達の夫がちょっと前に見つかって、変だけど「良かったね」と言ったという話を聞き、「遺骨というのは、身内にとってみればその人そのものだと思えるようになったとき、この話がしみじみといい話だなと思うようになって聞いて頂くようになった」ということだった。

この話は、佐々木喜善が書いた『老嫗夜譚（ろうおうやたん）』という本に出ている。辻石谷江（はねいしたにえ）さんという方の話を1冊の本にまとめたもので、喜善が谷江さんからこの話を聞いたときには谷江さんは70を超えたぐらいで、谷江さんは1850年頃に生まれ、「みよお祖母ちゃん」から話を聞いているので、1700年代の終わりの頃からこの話は語られていたのだらうと推測される。かつても遺骨が見つからず悲しい思いをしていたのだらう。

民話の会では、福島、岩手、宮城とそれぞれ震災の体験を聴き、体験談としてまとめているそうだ。

今回は、宮城や岩手で民話と出会い、民話が語り継がれるなかで、時代時代の思いや知恵をのせて変化していったり、新しく生まれていく現場を目撃すると同時に、時代の変化によってその流れがかき消されようとしていたところに震災があってまた燃え上がり、受け渡されていること、また、現代の技術を駆使したアーカイブ、作品という形でも保存されていくことを垣間見た思いだった。それが文化であり、復興を支えるのだ。

続く

周辺からの記憶 16

～2014 年度：岩手～

村本邦子（立命館大学）

2017 年度、7 年目のプロジェクトがスタートした。今年も夏休みを利用して、「東日本・家族応援プロジェクト in むつ 2017」の前乗りでフィールドワーク。今回は、中村正さんのアレンジで、人と動物をテーマに福島を回った。

8 月 29 日郡山駅前でレンタカーを借り、双葉郡川内村高田島地区の「感がえる知ろう館」を訪ね、西巻裕さんの話を聞いた。福島第一原発 30 キロ圏の境界に接した地区だ。その後、フラガールのいわきスパリゾートを見学し、いわき湯本温泉古滝屋に宿泊。部屋には 300 年を越えるという宿の歴史をまとめた冊子が置いてあって、現社長が震災の危機を「歴史があるから乗り越えることができた」と実感したことから冊子を作成したことが書かれており、興味深かった。

30 日は、富岡町の松村直登さんを訪ねた。12 キロ圏内で、この 4 月 1 日に避難指示が解除されたところだが、無人地帯となったその町に住み続けた人だ。その後、南相馬の復興ツアーに参加、ボランティアガイドの長谷川義信さんに 3 時間ほどかけて南相馬を案内してもらった。31 日は浪江町の豊田動物病院を訪れ、豊田先生と赤間さんの話を聞いた。ここも「帰還困難区域」を除き、4 月 1 日に避難指示が解除されたばかりだ。

詳細はまた後を書くことになるが、原発に近く避難指示区域となっていたところに住み続けたり、活動が続けたりしてきた人たちの尽きることのない話を聞きながら、自分の価値観に添って自分の人生の決断を行い、生きている人は魅力的だと思った。

20 キロ圏内でも、田んぼには青々と稲が育っていた。食べられないので、家畜の餌になるそうだ。こんなに美しい土地を汚し、生態系を崩してきた人間の欲望と愚かさを悔やむばかりだ。



2014年10月30日(木)

大船渡の仮設住宅支援員のこと

宮古でのプロジェクトに入る前、一足先に岩手に入った。2年目のプロジェクトを実施した大船渡を訪ね、その時、お世話になった大船渡市仮設住宅支援事業コールセンター・マネージャーXさんに話を伺った。

大船渡市は、仮設住宅の支援を大阪に本社のある人材派遣会社に委託した。被災者を雇用して、37か所の仮設に100名の支援員を配置し、支援を展開してきた。支援員は71名。皆、素人同然で、2011年8月31日に集まって、9月1日にスタートするという、場当たりの、何もわからない中でのスタートだったという。

プロジェクトを実施した時も、支援員の方々は大変そうだったが、みなさん精一杯やっておられ、その後どうされているのか、ずっと気になっていた。



支援員の仕事

どこにもないシステムだった。大船渡市が最初で、半年後ぐらいに大槌でも同様のものが立ち上がった。人材派遣会社は人事や労務管理のノウハウはあっても、支援事業のノウハウはないので、時間をかけ、いろんな形で他所と連携しながらやってきた。当初は、仮設の集会所に常駐していた。最初から受け入れられたわけではなく、軋轢もあった。それでも、3年半かけてコミュニケーションをとるうちに、「支援員さんがいる方が安心」と言ってもらえるようになった。

現在は、月曜から金曜の8時半から夕方5時半まで常駐して、何かあった場合に対応する。他の自治体は巡回で訪問しているが、完全常駐でやっているのは強みだと思う。例えばイベントがあるとすれば、事務局に連絡をもらおうと下の方に落とし込んで、イベント開催側がそこに行けば鍵も開いているし、準備も万端整っている。常駐のないところでは、約束した日時に行ったら、鍵も開いていないし、人もいないということもある。システムティックにやれる。毎日集会所に行けば支援員がいるから話ができるということで、やはり最終的にはコミュニケーションだ。

困りごと相談、自治会の手伝い、市と連携したイベントの手伝いや広報、各仮設で新聞も作ってきた。大船渡市全体でも「はまらい新聞」というのを作っている。「はまらい」というのは、「寄っておいで」という意味。困り事相談の統計も取ってきたが、時間経過とともに相談内容は変わってきた。一般的には、「仮設に入れて良かった良かった」となるが、少し時間が経過すると、鍵の回りが良くない、建付が気になるなど家のハード面に関する相談が多くなった。2年目、3年目に入ると、隣の物音がうるさい、犬の鳴き声が気になるなどプライバシーに関わることで、あとはアル中とうつ病等が増えた。家族からの相談もあれば、本人からの相談もある。一人暮らしの男性が、アルコールの影響もあって持病が悪くなり、不安で救急車を呼ぶとか、高齢者の徘徊もある。すごく多いわけではないが、長期にわたる問題だと思う。具体的な問題については我々が解決

するものではないので、適切な機関や市の方に連絡する。

イベントで出てこられる人はいいが、出てこない人もある。安否確認のために日々声かけをしているが、訪問拒否とまではいかないものの、「大丈夫だから来なくていい」と言われる方もいらっしゃる。そういう場合は、時々、手紙を入れる。そういった方々も毎日の買い物には出るので、集会所から気をつけて見ていて、一日中姿が見えず、翌日も見えないとなったら、市役所に報告して鍵を借り、一緒に開けるようなこともある。市町村によっては孤独死が発生しているが、幸い今のところそれはない。

これからの課題

今後、公営住宅が立ち上がり、高台移転が進むが、方向性が決まらない人たちもいる。大船渡では、もともと 1,800 世帯が仮設住宅だったが、現在は 1,500 世帯を切っている。この秋から来年にかけてそういう移動が顕著になってくるだろう。ある仮設では、もともと 90 あったところが今は 70、1 年後には 10 になると予想されている。そうなってくると、残っているのは一人暮らしのおばあさんなどで、取り残され感や不安も出てくるだろう。そこが学校のグラウンドだと、移動してくださいとなる。ここの仮設は 300 で一番大きく、最後まで残ると予想されているので、引っ越してくることになるかもしれないが、いくら引っ越し費用を出すと言われても、なかなか大変だろう。お別れして出て行った人たちが、一軒家の立派な家が建って皆に羨ましがられるけれど、朝、息子たち家族を送り出すと昼から夕方まで山の中でひとりテレビとにらめっこ、仮設の集会所で皆と話していた方が楽しかったという人も中にはいらっしゃる。支援員も契約なので、更新更新で次の 3 月まで。後は市の判断。神戸の大震災の時も、仮設がゼロになって、全部公営住宅になってから孤独死が増えたと聞く。それを踏まえて、同じ思いはさせないという形で大船渡市は考えていかないといけないと思う。

被災者が支援員をしている。支援員も 3、4 割はまだ仮設住まい。X さんもまだ仮設

に住んでいて、身近な人を亡くしていた。当時、会社が津波に流されたわけではないが、解雇という形になり、支援員の募集が大々的であったので応募した。「仮設住宅の支援員って何だろう」と思いつつ、仮設でのお手伝いと言われ、「自分も被災したが、被災した人同士わかり合えるかもしれない、何かお手伝いできるかな」と思った。同じように考えて応募した人も結構いるのではないかなと思う。もしかすると、それがマイナスに働いた方もあるかもしれない。余りにも近くて。被災のことは四六時中頭の中にある。それが一日何回か、絶対離れることはないだろうし、皆、それで生きていると思う。それでも、支援員の多くが仕事を続けており、やりがいを感じていると思う。1 年以上経ってからだったかもしれないが、会社が臨床心理士の先生と契約して、毎月、傾聴研修や交代で支援員のカウンセリングをお願いするようになった。

外部からの支援について

外部の人が来てくれて、おばちゃんたちもお茶のみとかに来て、最初の頃は気が紛れるというのはあった。ある程度継続して来て頂けるのはありがたかった。何をするかということよりも、継続して来るということが。例えば一人で歌を歌いに来てくれる方にしても、5 回目、6 回目となると、何ていうか、お互いこの場所にはこの人がいてというのをわかりあっているの、全然他人みたいでなく、垣根を越えた話ができるようになる。岩手県立大学の先生や学生さんたちも PC 関係の講習に来てくれている。顕著だったのは、NPO にしろ、各自治体にしろ、個人にしろ、高速道路の料金がゼロだった時があったが、それが打ち切りになって 1 年後ぐらいかな、ある時点を境に、「予算の関係で、申し訳ないですけど、様子を見させていただきます」というのがあった。年度末の予算縮小とか。それは当然、仕方ないことだが。

私たちのプロジェクトが来た 2 年前のことも尋ねてみたが、「立命館大学さんってメジャーで、いろいろサポートして頂いたので、あの時も何の疑問もなく。ただ、あ

そこは立地条件がよくないので、どれぐらい人が行くかなという思いもあって、部下や家族を誘って行ってみた」ということだった。そんなふうに気遣われていたのだということを初めて知った。その後は、プロジェクトに来てくれたご家族のその後の様子を伺い、お土産を言づけた。

マネジメントに長けた人材派遣会社が、仮設住宅の支援員として被災者を雇用し、業務展開するシステムはユニークだと思う。その評価がどんな形でなされているのかわからないが、初期段階からメンタルヘルスに関するノウハウを持つ会社と提携することもできるだろう。「被災のことは四六時中頭の中にあるなかで、皆、生きている」との言葉は胸に突き刺さる。大人も子どもも生傷を抱えながらも、精一杯、生きている。「今、3年半。神戸で仮設が完全になるまで6年だったか、もしかしたら仮設がなくなるまで10年かかるかもしれない」とのこと。どんなに遠くからだとしても関心を寄せ続けたい。



2014年10月31日(金)

ベルガーディア鯨山「風の電話」へ

遠野の大平さん(前号参照)に勧められ、大槌にある「風の電話」を訪れることにした。亡くなった人に思いを伝えられるということで有名になり、マスコミでも大きく取り上げられていた。「風の電話」は岩手県上閉伊郡大槌町浪板にあるベルガーディア鯨山にある。海岸沿いの45号線はわかりやすいが、大槌の町に入っていくと、あちこちが復興の作業中で道がさっぱりわからない。工事の人たちに尋ねながら何とかたどり着く。



誕生パーティー

この日も NHK の撮影が入っていた。「一緒にどうぞ」と招かれ、ティーハウスに入ると、テーブルの上に素敵なティーセットが並べられていて、お皿には花と一緒に焼き芋とチーズケーキが乗っていた。来られていたのは、陸全高田の佐々木一義さんとそのおばさん。今日は、津波の犠牲となった佐々木さんの妻の 61 歳の誕生日で、これからパーティーが始まるころだった。テーブルに、52 歳の誕生日の時の写真を立てる。

一義さんは、妻とのなれそめを語ってくれた。中学の時から同級生で片思い、ラブレターを 3 回書いたがダメだった。高校を卒業する時、恨みがましい気持ちを持っている自分をやめる決意をして、「これだけ思ってもつながらなかったのだから、縁がなかったのだろう。恨みは捨てて、これからは友達として」と手紙を書いた。その後、何度かふつうにやりとりがあったが、20 代半ば、遠方から突然の電話があり、何か特別なことがあったのだろうと車を走らせ、それからおつきあいするようになった。4 人の子どもをもうけ、孫も 2 人いる。あの日、妻は母親を探しに行ったのだと思う。母親に「助けることができず申し訳ない」と謝ったら、「結婚して幸せだったと思う」と言ってくれた。

一義さんに電話のことを尋ねると、アメリカ人のボランティアからこのベルガーディアにある森の図書館のことを聞き、去年の 11 月に初めて来た。電話のことは知らなかった。「電話して声が聴こえたわけではないが、そこにいることを感じ、想いを伝え、伝わったと思った」と涙ぐまれる。以来、何度か足を運んできた。娘や甥なども誘って連れてきたが、今回、一緒に来たおばさんは小さなマリア様の人形を作っているとのことで、ひとつ頂いた。作ってみたら、妻の母親がとても喜んでくれた。「それならできる」とたくさん作るようになり、「2000 人ものご縁を頂きました」とおっしゃった。

一義さんは、当時、ホテルに勤めていたが、消防団だったこともあるし、皆の顔を知っているので、最初の頃は、自衛隊が印をつけた遺体を見て、それが誰かを明らかにするボランティアをしていた。「どろぼうと間違えるからやめとけ」と言われ、それからは遺体運びを手伝うようになった。29 歳の娘さんも、当時は遺体探し

のボランティアをしたそうだ。「遠くから来た人たちが一生懸命やってくれているのに、自分たち町の者がやらないのはよくない」と考えていたので、それは良いことだと思った。おばさんも、「若い娘にとっては厳しい作業だったろうと思ったが、全国からたくさんの方が来て頂いて、本当に感謝している、そのエネルギーをもらって私たちも動けた」と何度も強調される。自分たちが復興して、それを見て頂くことが恩返しだと思っているそう。

一義さんは、復興のためにと立候補して、市議員になった。今も仮設住宅に暮らしている。仮設の集会所に鍵がかかって人が集まれないことを問題だと思い、名古屋の喫茶のような店を入れ、モーニングを 300 円くらいで提供してはどうかと考えている。神戸では、家賃が 6 千円から 6 万円になってから、外出もままならず孤独になったと聞いた。おばさんのアイディアは、高田にある、そして多くは捨ててしまうわかめのはしっこや大根の皮などあるものを薬味にして、おかゆを朝食にして安く提供してはどうかというものだ。震災前、冷凍で働いていた中国人たちは、高田の人が捨てていたキャベツの外の葉で餃子を作っていた。大阪の人でも大根の皮できんぴらを作る。見習うべきだと思う。お金が少なくても工夫すればできることはたくさんある。住めるところがあってありがたい。「仮設におかゆバーできたらいいですね！」と夢が広がる。



風の電話

主宰者である佐々木格さんは、釜石市で生まれ育ち、地元で鉄鋼マンをやっていたが、1999年に54歳で会社を辞め、大槌町に移り住んだ。約6600平方メートルの敷地を整備し、草花を植え、庭園を造った。仙人のように山のなかで時折来る動物とだけ会う生活だった。見えないものを見る、聴こえないものを聞くという自分の基礎はその時できたと思う。妻の方は釜石の保育園園長で、そこから通勤したそう。ロックガーデン、イングリッシュガーデン、石造りの小屋と心赴くままに増やしていき、電話ボックスを置いたところで震災に見舞われた。

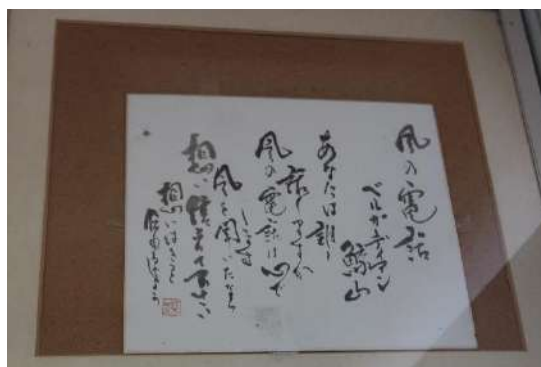
電話ボックスは、もともとオブジェとして設置しようと思って探していた。NTTは譲ってくれなかったが、思いが届いたのか、大船渡の喫茶店のなかにあったボックスをもらえることになった。屋根はなく、あとで作った。

ちょうどその頃、いとこが肺がんになり、書道家でもあったので、病床で「風の電話」の文字を毛筆で書いてもらった。元気になってくれなにかと思っただが、亡くなった。自分のために電話を置きたいと思っていたら、震災がおきて、押し寄せた津波がホテルや民家を次々とのみ込む姿を高台から目撃し、「被災者の癒しの場」として、2011年4月に電話を設置したのだという。あまりの惨事に、アイディアとしてあった「風の電話」を急ぎ完成させ、ガーデン・カフェを始め、森の図書館が完成したところだった。庭園内には、夫婦の自宅のほか、現在は、絵本や児童書を集めた「森の図書館」や来訪者の憩いの場として建てた「ツリーハウス」もある。精神科医や臨床心理士、子どものグリーフケアのNPOなどが応援してくれて、いろいろな催しが持ち込まれているとのことだった。

パーティーが終わった後、私も電話ボックスに入ってみた。遠くで青く輝く海を眼前に犠牲になった人々のことを思いながら受話器をとると、突然、カタカタとボックスが揺れ始めた。電話ボックスの外の草木もさわさわと揺れていた。2分ほどして収まったが、不思議な体験だった。後で聞いたところ地震だったらしいが、何か特別なエネルギーを感じた。「汽水域」という言葉が浮かんだ。汽水域とは、淡水と海水が混じ

り合う水域を指す。きっと、ここは、あの世とこの世が混じり合う汽水域になっていて、「風の電話」は、そのシンボルなのだ。東北には、あちこちに、あの世とこの世が混じり合う時空間がある。被災地では、新たに多くの怪談が生まれ、語られているとも聞いた。復興は、土地土地と深く結びつき育まれてきた文化の再発見とともにあって欲しい。

気仙沼の漁師・畠山重篤さんの「汽水」という概念に出会ったのは、その後のことだった。河川水が注ぐ海、汽水域は海藻や魚介類の宝庫であり、河口は、人間と生き物たちが交錯する十字路なのだという。畠山さんたちは、2009年に「NPO 法人森は海の恋人」を設立し、川がその養分を運びだす森の再生活動を行ってきた。東日本大震災以降、生き物は消え、海は死んだものと皆が思ったが、森づくりや環境教育を続けるなかで、実際、定期的な潜水調査で海の生き物の回復が確認されているそうだ。





吉里吉里国との出会い

国道 45 号線を走っている途中、大槌町で「吉里吉里」という案内板を見かけた。実は、遠野で「きりきり善兵衛」というレストランに入り、「きりきり」とは何だろうと気になっていた。どうやらこのあたりの地名らしい。そして、井上ひさしの『吉里吉里人』のことを知った。吉里吉里村が日本から独立するというこの小説は 30 年以上前に書かれ、話題を呼んで日本 SF 大賞を取ったらしい。ちなみに、「きりきり善兵衛」とは、江戸時代の海の豪商・前川善兵衛のことなのだそう。地元の人誰でも知っているのだろう。なんだか面白くなってきて、『吉里吉里人』を読んでみることにした。分厚い三巻本らしいが、Kindle で買ったため、厚さは感じられない。それでも、通勤時間に少しずつ読んで、ひと月近くかかった。

吉里吉里の駅は、震災の影響で運休している JR 山田線にあるが、小説に出てくる吉里吉里村は、宮城県と岩手県の県境、東北本線沿線にあることになっている。物語は、主人公古橋を含む乗客 808 名を乗せた夜行列車「十和田 3 号」が一関手前で急停車し、旅券がない者は出入国管理令違反であると、子どもたちからなる入国警備官が銃を構えて乗り込んでくるところから始まる。全体的にドタバタ劇の体裁を取っているが、その内容は、まったく時代を先取りしている。やれ増産しろ、減反しろ、合併しろと国益のことしか言わない日本政府に愛想を尽かした吉里吉里人たちが、この日の朝、日本国から独立をはかったというのだ。吉里吉里国の人口は 4200 人、公用語は吉里吉里語（ズーズー弁）、金本位制を取り、食

料自給率百パーセント、地熱発電まである。国民一人一人を大切にする農業・医療・平和立国として入念に独立の準備をしてきた。

読み進むにつれ吉里吉里人たちへの思い入れが強くなっていくので、最後の最後に独立が失敗に終わったことを知って残念でたまらず、がっかりしている。今の日本の状況を思えば、どうしても吉里吉里国独立を果たして欲しかった。そうして調べているうちに、実は、吉里吉里人たちの独立精神はいまだ健在であることを知った。

大槌は大震災で大きな犠牲を受けたところのひとつだが、吉里吉里の住民はどの地区よりも早く復興対策を行ったようだ。

2011 年 4 月 14 日の毎日新聞によれば、住民たちは、「行政を待っていたら、いつまでたっても復旧しない」と、吉里吉里小学校の避難所に自分たちで災害対策本部を立ち上げ、食料班、医療班などを組織して活動を開始した。住民自ら行方不明者の捜索をしつつ、重機を使って国道や町道の瓦礫を撤去し、コンビニ在庫のパンや飲料水を救援物資として配った。防災用に準備した発電機を使い、医療用の電源を確保。重傷者や透析患者を運び出すため、吉里吉里中学校の校庭にヘリポートを示す“H”のマークを書き、自衛隊のヘリが患者を搬送した。震災 5 日後にこの地区に入った自衛隊員は、片づけられた瓦礫の様子をみて、「ここまで自力で復旧させるとは」と感嘆したという。

そして、NPO 法人「吉里吉里国」が誕生した(<http://kirikirikoku.main.jp/index.html>)。

「先人の知恵に学び復興計画策定には、スピードが必要で、仮にこのまま国や県の決定を一方的に押し付けるようなことがあっては、被災者のあきらめ感を助長しかねない。我々が忘れていた先人達のこの知恵を再び取り戻し、我々住民自らリスクを管理できるような街づくりを目指し、次世代に残す事業を行わなければならない」と思い、吉里吉里の住民有志自らが立ち上がって、その協力者達と NPO 法人化にいたった」という。「復活の森」プロジェクト、自伐林業の普及、薪文化の復活・継承、森林教室の開催を事業とすることで、津波災害復興に向けて新たな雇用の創出と、経済復興に関わる地域主体の取り組みを地元住民と一体となって地域再生に取り組んでいる。いつ

か訪ねることができたらいいなと思っている。

2014年11月1日(土)

宮古でのプロジェクト

今年は、社会福祉法人若竹会、宮古市社会福祉協議会の共催を得て、2014年10月27日(月)～31日(金)は「おでんせプラザ」にて、11月3日(月)～7日(金)は「りあす亭」にて家族漫画展、11月1日(土)には、宮古市総合福祉センターにて、「団士郎漫画トーク」「うたと遊びのワークショップ」「アートで遊ぼう」のプログラムを実施した。



このプロジェクトは、もともと現地の支援機関と十年間協働するというアイデアでスタートしたものの、岩手では共催してもらええる機関と出会えず、現地のご協力を頂きながら、1年目は遠野、2年目は遠野&大船渡、3年目は宮古で開催したのだが、今年は、古くからの友人である東京おもちゃ美術館館長多田千尋さんを介して、宮古の社会福祉法人若竹会との出会いがあり、今後、パートナーとして、このプロジェクトを一緒にやってもらえることになった。先月の多賀城でのプロジェクトの前、打合せを兼ねて、ご挨拶に伺ったが、この法人では、4人のスタッフが東京おもちゃ美術館のアクティビティ・ディレクターの資格を取っているという。「それならば」と、これまでやっていた「アートで遊ぼう」のプログラムをお任せし、私たちが方がお手伝いさせて頂くという形をとることにした。

社会福祉法人若竹会は1975年に設立され、障がい福祉サービスと高齢者福祉サービスを幅広く展開してきた。今回、お世話になったのは、おもに就労移行支援・生活介護をされている「多機能事業所すきっぷ」のみなさんだったが、アイデアあふれる企画を準備してくださった。並行して、会場を飾るためのフラワーアレンジメント講座まであった。

「うたと遊びのワークショップ」では、鵜野先生のリードのもと、参加者、若竹会と立命館のスタッフが一緒になって、歌や手遊びを楽しんだ。「アートで遊ぼう」は若竹会の主導で、参加者みんなで白いシートにフィンガーペイントをしてひとつの大きな作品を作り上げた。誰がスタッフで誰が参加者かという枠を超え、それぞれ自由に交流

しながら、一体となってひとつのものを仕上げたことで、一同、大きな喜びと達成感を体験した。できた作品は秋の福祉祭りに展示して紹介してくれるという。また、大きな街の細かな塗り絵も準備されていたが、これは途中までしか仕上がらず、「続きは来年に」ということになった。皆で大笑いしながら、来年の再会への期待を膨ませた。

「おでんせ」の漫画展では、若竹会の利用者さんたちがお手伝いしてくれたということで、障がいのある利用者さんと漫画展に来てくださった地域の人たちとの交流も繰り広げられたと聞いた。私たちの想像を大きく超えて、このプロジェクトを地域の力を活性化するきっかけに活用してくれる若竹会スタッフの力には感嘆させられる。夜はスタッフの交流会、宮古の様子を聞かせてもらうとともに、それぞれ親睦を深めた。驚いたことに、翌朝早くフィールドワークに出発する私たちを見送りに皆さんが宿まで来てくださった。





2014年11月2日(日)

フィールドワーク

まず、宮古市田老地区を訪れた。「万里の長城」と呼ばれた高さ 10 メートルの防潮堤があったにも関わらず、津波で壊滅的な被害を受けたところだ。3 階まで浸水した「たろう観光ホテル」の 6 階から社長が防潮堤を越えて押し寄せる津波をビデオ撮影していた。今回、宮古観光文化交流協会「学ぶ防災」に申込み、ガイドとともに現地を歩き、メディアでは公開されていない部分を含むこのビデオ映像を観るというプログラムに参加した。



昭和 8 年の大津波の後、建造された巨大防潮堤の上に立ち、四方を見渡す。ガイドがパンフレットの写真と照らし合わせながら説明してくれる。防潮堤の内側に広がっていたはずの住宅地は巨大な空地となっていた。遠くに三陸鉄道が走っているのが見える。現在、14.7m の防潮堤建造の工事が始まったところだという。



防潮堤から下り、海辺の製氷工場を見に行く。壁面に津波到達点が記されていて、東日本大震災では 17.3 メートルの表示になっていた。2 番目は明治 29 年の 15 メートル、3 番目が昭和 8 年の 10 メートル、昭和 35 年にはチリ地震もあった。今回、田老では 181 名が犠牲になった。うち 41 名が行方不明。当時の人口は 4400 人、4%が犠牲になった。





それから「たろう観光ホテル」へ。階まで鉄骨が剥き出し、3階は窓のない建物を見上げ、一同、息を飲む。総合庁舎横の施設に移動し、社長がホテルの6階から撮っていたという映像をみせてもらった。ガイドがある種の実況中継をしてくれるのだが、映像が衝撃的すぎて、十分には理解できない。

最初の波は3メートルだったが、10メートルの第二波が入ってくると、岩場にぶつかって水柱が上がり、製氷機の建物の倍、35.6メートルのしぶきがあがる。避難場所になっていた田老の第一中学校には当時122名の生徒がいて、いったん校庭に集まったが、用務員が「これはもう学校が危ない」というので、左にある赤沼山に避難誘導した。住民や介護施設、グループホーム、保育園からも山に避難した。結局、学校は1階が浸水し、校庭には建物が4軒押し流されてきた。用務員は過去の被害を聞き知っていたから判断できたが、先生方は通勤族で昔の地元の話に詳しい人はいない。ざっと320人くらいが避難して助かった。生徒たちが高齢者の手を引き、園児をおぶって藪の中を駆け上がった。ただ、実際には181人が犠牲になった。意外と逃げない人が多く、極端な例だと防潮堤に上がって海を見ていた人もいた。ビデオにも、屋根にあがっている人、窓から出てきた人、それを助けにいく人も映っている。

たろう観光ホテルは、震災遺構として残すことが決まり、国から2億円の予算がついた。土地は市が買い上げて、ホテルは寄付、来年4月以降、改装して公開する。改装と言っても、外観はそのままだ、柱に錆び止めしたり、内部の安全対策をする。5階と6階を資料館にして、6階でビデオを見ても

らう。窓から実際の風景を見ながら映像と比べてもらえば、実感がわく。テレビ局やネットにも一部しか出していないのは、実際に田老に来て見てもらいたいという社長の思いがある。最近は学校から生徒たちが来るが増えた。修学旅行でも来るし、多い時は一日300人以上。とにかく避難すること、命を守ることを伝えたくてガイドをしている。



その後、山裾の小高い位置にある田老小学校の校庭横に立つ昭和8年大津波の翌9年3月に建立された記念碑へと案内された。高さ約2メートル、幅約1メートルの石で、海に向かう側には「大海嘯記念」の表題の下に5つの教訓が刻まれ、裏にはこの時の被害状況と記念碑建立の経緯が、当時の村長関口松太郎氏の名とともに刻まれていた。

- 一 大地震の後には津浪が来る
- 一 地震があったら此處へ来て一時間我慢せ
- 一 津浪に襲れたら何處でも此の位い高所へ逃げろ
- 一 遠くへ逃げては津浪に追付かる
- 一 常に近くの高い所を用意して置け



うか。今回、17.3メートルの津波が来たところに、新たに14.3メートルの防潮堤を作ることになったのだろうか。映像のなかでも強く印象に残ったのは、巨大な津波が押し寄せてくるのに、防潮堤があるために何も見えず、防潮堤を越えて津波が襲ってくるまで、その下を何事もないかのように普通に走っている車の様子だった。複雑な思いを抱えつつ、大槌、釜石の様子を見ながら空港へ向かった。

つづく



昭和8年の大津波の犠牲者は911名、生存者はわずか36名と石碑に刻まれていた。この惨状を受けて、高さ10メートルの防潮堤が建造された。同時に、高台にある小学校横に記念碑を建立し、「5つの教訓」を忘れないこと、そしてこれを次の世代に伝えていくことを誓い合った。しかし、今回の地震で、「地震があったら此處へ来て一時間我慢せ」は必ずしも守られなかった。「万里の長城」に守られている安心感があったのだろ

